

Print edition : ISSN 2189-0056

Online edition : ISSN 2189-0064

福岡大学 理学部・理学研究科年報



2013 (平成25)年度

目次

contents

1. はじめに	1
2. 学部および研究科の三つのポリシー	3
3. 2013年度 理学部・理学研究科の活動年譜	5
4. 学科・専攻別教員組織	7
5. 学部・研究科の担当者	10
6. 学部学生数・卒業生数等	14
(1)入学試験形態別志願者数(2013年度入学志願者数)	
(2)学生数(2013年5月1日現在)	
(3)卒業生数(2014年3月31日現在)	
7. 研究科大学院生数・修了生数等	15
(1)入学試験形態別志願者数(2013年度入学志願者数)	
(2)大学院生数(2013年5月1日現在)	
(3)修了生数(2014年3月31日現在)	
(4)満期退学後の学位(課程博士)取得者	
8. 学部教育活動状況	16
9. 研究科教育活動状況	21
10. 研究活動概要	25
(1)学科別学術論文数および著書数	
(2)学科別国際会議等学術集会での発表回数	
(3)学科別科研費申請・採択件数	
(4)学科別外部資金導入件数(科研費を除く)	
(5)文部科学省補助金	
(6)学科別学内資金導入件数	
① 研究推進部所管	
② 2013年度大学院高度化推進事業	
③ 「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援」採択事業	
④ 「教育推進経費」採択事業	

11. 社会（貢献）活動状況	29
12. 研究員の受入れ	32
13. 学生の国際交流活動状況	33
14. 教員の国際交流活動状況	34
15. 卒業生・修了生の就職・進路状況	36
16. 研究室の活動状況	38
応用数学科	38
基礎数学研究室	(38)
微分幾何学研究室	(43)
解析・関数解析研究室	(52)
微分方程式研究室	(55)
応用数理研究室	(61)
情報数理研究室	(69)
物理科学科	78
理論核物理学研究室	(78)
理論天体物理学研究室	(81)
物理情報科学研究室	(85)
光科学研究室	(88)
結晶物性研究室	(92)
構造物性研究室	(96)
量子電子物性研究室	(102)
計算物性物理学研究室	(106)
複雑系物理学研究室	(108)
ソフトマター構造物性・科学コミュニケーション研究室	(111)
形象物理学研究室	(114)
超伝導物性研究室	(116)
生物物理研究室	(119)
超高压物性・ナノ物理学研究室	(121)

化学科 124

機能生物化学研究室 (タンパク質)	(124)
機能生物化学研究室 (細胞)	(127)
機能生物化学研究室 (RNA プロセッシング)	(130)
有機生物化学O研究室	(133)
有機生物化学P研究室 (生命分子化学)	(138)
有機生物化学P研究室 (有機金属化学)	(143)
物質機能化学A研究室 (機能性物質の分析化学)	(147)
物質機能化学I研究室 (金属錯体集積体)	(158)
物質機能化学I研究室 (単分子金属錯体)	(163)
物理化学研究室	(166)
構造化学研究室	(170)

地球圏科学科 173

地球惑星気象学研究室	(173)
地球流体力学研究室	(177)
大気微粒子動態学研究室	(179)
大気環境科学研究室	(185)
火山・有機地質学研究室	(190)
地球物質研究室	(196)
環境進化学研究室	(200)
地層・古生物研究室	(204)
行動生物学研究室	(214)
進化脳科学研究室	(218)
細胞生物学研究室	(222)
発生生物学研究室	(225)

1. はじめに

理学部長 山口 敏 男
理学研究科長 西 田 昭 彦

理学部・理学研究科では、本学部・研究科の教育・研究活動を総括するとともに学内外の人々にお知らせするために、2012年度から「理学部・理学研究科年報」を発行しています。本年報には2013年度の理学部・理学研究科の活動年譜、教員組織、学部・研究科の教育・研究活動、入学志願者の状況や就職状況、社会貢献、国際交流、各学科の研究室毎の活動状況等がまとめてあります。

理学部は1970（昭和45）年4月に応用数学科・応用物理学科・化学科の3学科で創設しました。1976年4月に理学研究科応用物理学専攻および化学専攻の各博士課程を、1990年4月に理学研究科応用数学専攻博士課程を設置しました。その後、1998年4月に地球圏科学科を、翌年4月に理学研究科地球圏科学専攻博士課程（修士課程は1997年4月）を増設しました。理学部は、「数学を含む自然科学領域の探究を通して社会の発展と福祉に貢献する」という教育理念を基に、「基礎学力を十分に修得し、自然現象を幅広い視野から理解し、自ら問題を提起し、知識の活用ができる豊かな人間性をも兼ね備えた人材を育成する」ことに努めてきました。また、国際化・情報化、グローバル化の21世紀社会に対応し、既存の学問分野を融合した思考・発想ができる人材を育成するために、2008年4月に文理融合型の人材の育成を目指す「社会数理・情報インスティテュート」と「物理」と「化学」を柱とした「ナノサイエンス・インスティテュート」を設置し、さらに同年4月には応用物理学科を物理科学科に改称する改革に努めてきました。

2013年度もさまざまな教育改善活動に精力的に取り組みました。本学の「魅力ある学士課程教育支援」を受け、リメディアル教育や学修支援活動、国際教育研究交流活動、文章表現力教育等にも取り組み、大きな成果を挙げることができました。大学院では、教育の実質化を図るために博士課程後期の指導科目の単位化を実施し、複数教員による指導体制の定着化等を進めました。

研究活動においては、国内外との共同研究や著名な外国人研究者の招聘など国際的なレベルで研究を進めています。2012年4月に国際火山噴火史情報研究所を設置して、国内外の噴火史研究のための野外調査を実施し、研究成果の集積・社会還元を目的に電子博物館を核とし、火山リスク評価の研究を進めています。また、科学研究費をはじめ外部資金の獲得も積極的に行っています。

本学部・研究科の社会貢献活動としては、スーパーサイエンスハイスクール、市民カレッジ、地域の教育支援活動、地域との交流活動を推進しました。詳細は本年報をご参照願います。

2013年10月末に三竹大寿助教（応用数学科）が広島大学准教授として転出しました。2014年3月末に柴田勝征教授（応用数学科）、村田義夫併任講師（助教）（化学科）、吉田哲夫氏（教育嘱託、

物理科学科)、有福文博氏(教育嘱託、化学科)、下東美樹氏(教育嘱託、地球圏科学科)が退職しました。柴田教授には2014年4月に福岡大学名誉教授の称号が授与されました。これらの先生方は長年にわたり理学部の教育・研究活動に携わってこられました。ここに改めて感謝をささげたいと思います。2014年4月には、2名の准教授(応用数学科、化学科)、3名の助教(物理科学科、化学科、地球圏科学科)が着任します。

国際交流事業では、2013年度には応用数学科にLi Haizhong教授(清華大学)とDiego A. Gomes教授(リスボン大学)、化学科にTurq Pierre教授(ピエール・マリー・キュリー大学)をそれぞれ招聘して大学院生の指導や教員との共同研究を遂行しました。また、国際交流事業として、ナノサイエンス・インスティテュートコース3年次生9名を上海交通大学に派遣しました。また、蔚山大學校自然科学大学化学科の4年次生・院生37名が化学科を訪問して研究発表や文化交流を行いました。

2014年度より福岡大学では自己点検・評価を毎年行います。2018年度から18歳人口の減少が予想されています。理学部・理学研究科は将来の動向を見据えて改革し更なる発展を目指して努力していきます。皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

2. 学部および研究科の三つのポリシー

理学部

■アドミッションポリシー（入学者受入れの方針）

理学部は人材養成の目的を達成するために、

1. 高等学校段階で習得しておくべき基礎学力を身につけている人
2. 数理や自然現象に興味・関心を持っている人
3. 幅広い教養、国際性、および専門分野についての高い能力を身につける意欲を持つ人の入学を求めています。

■カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

人材養成の目的を達成するために、理学部では次のカリキュラムを編成しています。

1. 1、2年次には、リメディアル授業、少人数クラスの講義、実習や演習およびゼミナール等によって、自然科学全般にわたる基礎学力と思考力を養い、また共通教育によって、幅広い教養、国際性および社会性を身につけることができるカリキュラム
2. 3、4年次には、この基礎学力に加えて、多様な専門分野から学生自ら選択した分野について学び、自然現象等を幅広い視野から理解し、未知の現象を解明する力を習得できるカリキュラム

■ディプロマポリシー（学位授与の方針）

理学部の教育課程においては、厳格な成績評価を行い、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与します。

1. 自然現象の理解とその応用に必要な論理力・分析力・創造力
2. 豊かな人間性、社会性および国際性

理学研究科

■アドミッションポリシー（入学者受入れの方針）

理学研究科では、自然科学・数理科学に関する深い学識を持ち、自立して研究活動を行い得る能力を持つ人材、及びその学術的素養を活かして社会で活躍できる専門的職業人を育成することを目的としている。

博士課程前期では、一定水準以上の学力があって、かつ自然や数理の諸現象に興味があり、問題解決に向けて積極的に取り組む人材を受け入れる。特に成績優秀な学部学生には、3年次で飛び級制度、4年次では推薦入学制度を設けている。自然科学全般に関する広い見識の重要性から、他大学・他学部の学生や社会人・外国人留学生も積極的に受け入れる。

博士課程後期では、修士論文の内容の精査と面接審査等によって、探求心と目標とする研究を遂行するための能力の有無を見極め、かつ、問題解決に向けて意欲的に取り組む姿勢を評価する。また自然現象や数理の解明に興味を持ち、新しい考え方で研究を遂行する意欲のある社会人・外国人留学生も受け入れる。

■カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

博士課程前期では、「講究」・「実験」等の授業科目を通じて専門分野に関する知識や自然科学研究の実験手法を修得して、研究能力や自己表現力を涵養するようにカリキュラムを構成している。さらに専攻ごとに配置した多くの選択科目は、専攻内の他専修だけでなく他専攻からも受講できるようになっており、専門にこだわらない多面的かつ先端的な知識を修得できるようにしている。

博士課程後期では、前期課程の教育・研究をさらに深化・発展させ、自立して研究活動を遂行し得る高度な能力を備えた人材の育成を図る。このため、学生の学位取得に向けた自主的な研究推進と指導教員のもとでのゼミナールを重視し、加えて自然科学・数理科学に関する深い学識を身につけることができるよう、専門的な特修科目を設置している。

■ディプロマポリシー（学位授与の方針）

博士課程前期では、修了に必要な授業科目の単位の取得に加えて、修士論文を提出させる。修士論文の審査にあたって、広い視野に立って深い学識を修め、専門分野についての研究能力又は専門分野にかかわる職業に従事するに必要な能力を有するか否かを判断する。

博士課程後期では、博士（理学）の学位授与には査読付き学術誌に一定基準数以上の論文が掲載されていることを基本要件としている。博士論文の審査にあたって、研究成果が新たな知見を含み、研究者として自立して研究活動を行い得る能力又は自然科学・数理科学にかかわる専門的な職業に従事するに必要な高度な能力を有するか否かを判断する。

3. 2013年度 理学部・理学研究科の活動年譜

2013年	4月	1日	入学式 【学部】 新入生・保護者懇談会 【研究科】 新入生ガイダンス
		5日	【学部】 新入生学部指導懇談会
		9日	前期授業開始
5月	17日		【応用数学科】 修学指導 【地球圏科学科】 修学指導
		18日	【物理科学科】 修学指導
		24日	【応用数学科】 修学指導 【地球圏科学科】 修学指導
		25日	【物理科学科】 修学指導
6～7月			父母懇談会（本学・各地）
7月	1・8日		【化学科】 第10回チュートリアル研究発表会
		6日	【研究科】 推薦入学試験
		12日	【物理科学科】 物理科学研究Ⅰ・Ⅱ 研究室配属説明会（3年次）
		23日	前期授業終了
		24日	【学部】 前期定期試験開始
8月	2日		【学部】 前期定期試験終了
		3日	オープンキャンパス
		4日	夏季休業開始
		19～23日	【化学科】 日中交流プログラム
		20～23日	【化学科】 日韓交流プログラム（第9回）
9月	2日		【研究科】 秋季入学試験
		13日	夏季休業終了
		14日	後期授業開始 【化学科】 研究室配属説明会（3年次）
		18・19日	【化学科】 研究室配属ラボツアー（3年次）
		28日	（前期卒業式） 学位記授与式（修士） 【化学科】 就職懇談会（ステップアッププログラム「先輩と語る－大学と社会－」）
10月	1日		秋季学位記授与式（博士）
11月～3月			【地球圏科学科】 2年次生向け分野選択希望調査
11月	1日		【化学科】 系分け説明会（2年次）
		8日	【化学科】 系分けラボツアー（2年次）
		9日	【応用数学科】 就職活動報告会
		11日	【応用数学専攻】 理学研究科説明会

		院生中間発表会
	16日	【応用数学科】ステップアッププログラム「先輩と語る－大学と社会－」 【地球圏科学科】ステップアッププログラム「先輩と語る－大学と社会－」 【地球圏科学科】「地球圏科学科研究成果交流会」
	20日～	【応用数学科】3年次生に対する進路面接
	22日	【物理科学科】就職・進路説明会（3年次） 【応用物理学専攻】就職・進路説明会 【物理科学科】ステップアッププログラム「先輩と語る－大学と社会－」
12月	26日	冬季休業開始
2014年 1月	4日	冬季休業終了
	14日	後期授業終了 【地球圏科学科】卒業論文発表会
	15日	【学部】後期定期試験開始 【地球圏科学科】卒業論文発表会
	27日	【学部】後期定期試験終了
	31日	【応用数学専攻】修士論文発表会 【化学専攻】博士論文公聴会 【地球圏科学科】修士論文発表会
2月	1日	【化学専攻】修士論文発表会（第37回）
	3日～	【学部】（2014年度）入学試験
	8日	【応用数学科（応用数学コース）】卒業研究発表会 【応用数学科（数理・情報インスティテュートコース）】卒業研究発表会
	10日	【応用物理学専攻】修士論文発表会
	13日	【物理科学科】卒業論文発表会
	14・15日	【化学科】卒業論文発表会（第41回）
	18日	【研究科】春季入学試験
3月	6日	【物理科学科】FD講演会
	18日	【地球圏科学科】履修ガイダンス（新2年次）
	19日	卒業式 学位記授与式（修士）
	25日	春季学位記授与式（博士）
	31日	【応用数学科】留年した学生に対する学科独自の修学指導

4. 学科・専攻別教員組織

2013年12月現在

理学部長 山口 敏 男

【応用数学科】

教授 秋 山 獻 之
石 黒 賢 士
井 上 淳 行
小 田 信 樹
黒 瀬 秀 征
柴 田 勝 二
白 石 修 彦
陶 山 芳 人
田 中 尚 勝
田 中 慶 明
成 瀬 幸 生
福 嶋 直 記
山 田 正 文
渡 辺 郁 夫
准 教 授 杉 万 淳
藤 木 哲
助 教 川 久 保 哲
高 倉 真 由 美
濱 田 龍 義
保 坂 亮 介
松 浦 望 行
助 手 岡 内 敏 弘 子
小 林 錦 子
中 岡 史 絵
森 和 子

【物理科学科】

教 授 香 野 淳
武 末 尚 久
田 崎 茂
寺 田 貢
永 田 潔 文
西 田 昭 彦
平 松 信 康

准 教 授

助 教

(教育嘱託)

教育技術職員

【化学科】

教 授 大 熊 健 太 郎
川 田 知
寺 田 成 之
祢 宜 田 啓 史
林 田 修
松 原 公 紀
山 口 武 夫
山 口 敏 男
准 教 授 安 藤 功
塩 路 幸 生
弟 子 丸 正 伸
仁 部 芳 則
講 師 安 東 勢 津 子

御 園 雅 俊
宮 川 賢 治
赤 星 信
伊 佐 士 郎
固 武 慶
眞 砂 卓 史
宮 原 慎
山 本 大 輔
大 槻 かおり
小 隈 龍 一 郎
坂 本 文 隆
匠 正 治
竹 内 千 寿
竹 迫 一 雄
田 尻 恭 之
椿 原 晋 介
藤 昇 一
中 村 忠 嗣
中 山 和 之
林 純 一 郎
吉 田 哲 夫
濱 田 美 和

併任講師(助教) 田 中 英 彦
 村 田 義 夫
 助 教 栗 崎 敏
 古 賀 裕 二
 塩 井 成留実
 永 留 重 実
 長 洞 記 嘉
 濱 口 智 彦
 福 田 将 虎
 山 田 勇 治
 吉 田 亨 次
 渡 辺 啓 介
 (教育嘱託) 有 福 文 博

【地球圏科学科】

教 授 上 野 勝 美
 奥 野 充
 景 浦 宏
 杵 山 哲 男
 田 口 幸 洋
 中 川 裕 之
 林 政 彦
 横 張 文 男
 准 教 授 伊 東 綱 男
 玉 木 克 美
 西 憲 敬
 講 師 高 島 久 洋
 助 教 藍 浩 之
 鮎 澤 潤
 石 原 与四郎
 岩 崎 雅 行
 乙 部 直 人
 古 賀 正 明
 白 石 浩 一
 竹 内 覚
 田 上 響
 原 圭一郎
 柚 原 雅 樹
 渡 邊 英 博
 (教育嘱託) 下 東 美 樹
 (理学部工場担当) 渡 邊 眞之助

理学研究科長 西 田 昭 彦

【応用数学専攻】

博士課程後期研究指導教員

石 黒 賢 士
 井 上 淳
 小 田 信 行
 黒 瀬 秀 樹
 柴 田 勝 征
 陶 山 芳 彦
 田 中 尚 人
 田 中 勝
 成 瀬 慶 明
 山 田 直 記

博士課程前期研究指導教員

秋 山 獻 之
 白 石 修 二
 福 嶋 幸 生
 渡 辺 正 文
 藤 木 淳

博士課程前期研究指導補助教員

杉 万 郁 夫

【応用物理学専攻】

博士課程後期研究指導教員

香 野 淳
 武 末 尚 久
 田 崎 茂
 永 田 潔 文
 西 田 昭 彦
 平 松 信 康
 御 園 雅 俊
 宮 川 賢 治

博士課程後期研究指導補助教員

伊 佐 士 郎

博士課程前期研究指導教員

寺 田 貢
 赤 星 信
 固 武 慶
 眞 砂 卓 史
 宮 原 慎
 山 本 大 輔

【化学専攻】

博士課程後期研究指導教員

大 熊 健太郎
川 田 知
寺 田 成 之
柝宜田 啓 史
林 田 修
松 原 公 紀
山 口 武 夫
山 口 敏 男

博士課程前期研究指導教員

安 藤 功
塩 路 幸 生
弟子丸 正 伸
仁 部 芳 則

【地球圏科学専攻】

博士課程後期研究指導教員

上 野 勝 美
奥 野 充
杵 山 哲 男
田 口 幸 洋
中 川 裕 之
林 政 彦
横 張 文 男

博士課程後期研究指導補助教員

景 浦 宏
伊 東 綱 男
玉 木 克 美
西 憲 敬
高 島 久 洋

博士課程前期研究指導教員

景 浦 宏
伊 東 綱 男
玉 木 克 美
西 憲 敬
高 島 久 洋

【理学部事務室】

室 長 遠 藤 信 廣
事 務 職 員 大 塚 耕 輔
中 野 早 紀
橋 口 敦 子
藤 原 僚 平
真 鍋 諒 子
(事務嘱託) 高 田 広 明
山 口 和 子

5. 学部・研究科の担当者 (2013年度)

2013年11月30日まで

【学部】

	学 部	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
学科主任	横張 文男 (学部長)	田中 勝	御園 雅俊	林田 修	林 政彦
学科副主任		山田 直記	田崎 茂	寺田 成之	景浦 宏
インスティテュート担当	—	杉万 郁夫	※香野 淳 西田 昭彦 永田 潔文 眞砂 卓史 山本 大輔	川田 知	
大学協議員	井上 淳	—	—	—	—
教務連絡員会	杵山 哲男 (教務委員)	白石 修二	武末 尚久	※仁部 芳則	※玉木 克美
				山口 敏男	奥野 充
				弟子丸正伸	中川 裕之
学生部委員	山口 武夫 (学生部委員)	—	—	—	—
FD推進委員会	杵山 哲男	杉万 郁夫	香野 淳	松原 公紀	奥野 充
経理委員会	横張 文男	白石 修二	香野 淳	川田 知	伊東 綱男
		杉万 郁夫			
図書連絡員会	川田 知 (図書委員)	秋山 獻之	赤星 信	川田 知	景浦 宏
研究推進連絡員会	大熊健太郎 (研究推進部委員)	石黒 賢士	山本 大輔	大熊健太郎	上野 勝美
キャリア教育調整員会	永田 潔文 (就職・進路支援 センター委員)	渡辺 正文	平松 信康	松原 公紀	※奥野 充
					景浦 宏
					西 憲敬
理学部将来構想検討委員会	横張 文男	田中 勝	御園 雅俊	林田 修	林 政彦
	宮川 賢治	田中 尚人	香野 淳	川田 知	上野 勝美
高大接続委員会	山田 直記	杉万 郁夫	※永田 潔文	山口 武夫	田口 幸洋
		藤木 淳	御園 雅俊	川田 知	
教育開発支援機構委員	杵山 哲男	—	—	—	—
共通教育センター委員	奥野 充	—	—	—	—
言語教育研究センター委員	小田 信行	—	—	—	—
教職課程教育センター委員	福嶋 幸生	—	—	—	—
国際センター委員	林 政彦	—	—	—	—
エクステンションセンター委員	田口 幸洋	—	—	—	—
教育職員資格審査委員	陶山 芳彦	—	—	—	—
	田崎 茂	—	—	—	—
アニマルセンター委員	山口 武夫	—	—	—	—
RIセンター委員	安藤 功	—	—	—	—
	弟子丸正伸	—	—	—	—
広報委員会	横張 文男 山田 直記	小田 信行	香野 淳	弟子丸正伸	伊東 綱男

	学 部	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
HP委員会	弟子丸正伸	濱田 龍義	香野 淳	山田 勇治	中川 裕之
総合情報処理センター 連絡員会	白石 修二 (総合情報処理 センター委員)	白石 修二	眞砂 卓史	山口 敏男	西 憲敬
X線管理小委員会	山口 敏男		武末 尚久	山口 敏男	奥野 充
環境保全委員会	松原 公紀 (環境保全セン ター委員)	松浦 望	御園 雅俊	松原 公紀	古賀 正明
遺伝子組換え実験 安全委員会委員	弟子丸正伸	—	—	—	—
動物実験委員会委員	山口 武夫	—	—	—	—
各クラス担任	1年次	山田 直記 藤木 淳	赤星 信	大熊健太郎 川田 知 【ナノ】松原 公紀	上野 勝美 伊東 綱男
	2年次	田中 尚人 陶山 芳彦	山本 大輔	山口 武夫 山口 敏男 【ナノ】塩路 幸生	景浦 宏 玉木 克美
	3年次	小田 信行 白石 修二	寺田 貢	松原 公紀 安藤 功 【ナノ】林田 修	横張 文男 田口 幸洋
	4年次	渡辺 正文 田中 勝	田崎 茂	柁宜田啓史 林田 修 【ナノ】川田 知	杵山 哲男 林 政彦
理学部懇親会幹事	杉万 郁夫 田上 響	—	—	—	—

注：※印は代表者

【研究科】

	研究科	応用数学専攻	応用物理学専攻	化学専攻	地球圏科学専攻
大学院専攻主任	宮川 賢治 (研究科長)	成瀬 慶明	香野 淳	寺田 成之	杵山 哲男
大学院専攻副主任		田中 尚人	御園 雅俊	林田 修	田口 幸洋
大学院委員	山口 敏男	—	—	—	—
大学院学務委員	西田 昭彦	—	—	—	—
大学院教育職員 資格審査委員	井上 淳 山口 敏男	—	—	—	—

2013年12月1日以降

【学部】

	学 部	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
学科主任	山口 敏男 (学部長)	田中 勝	御園 雅俊	寺田 成之	林 政彦
学科副主任		山田 直記	田崎 茂	松原 公紀	景浦 宏
インスティテュート担当	—	杉万 郁夫	※香野 淳 西田 昭彦 永田 潔文 眞砂 卓史 山本 大輔	林田 修	
大学協議員	横張 文男	—	—	—	—
教務連絡員会	川田 知 (教務委員)	白石 修二	武末 尚久	※林田 修	※玉木 克美
				大熊健太郎	奥野 充
				仁部 芳則	中川 裕之
学生部委員	林 政彦 (学生部委員)	—	—	—	—
FD推進委員会	川田 知	杉万 郁夫	香野 淳	安藤 功	奥野 充
経理委員会	山口 敏男	白石 修二	香野 淳	林田 修	伊東 綱男
		杉万 郁夫			
図書連絡員会	武末 尚久 (図書委員)	秋山 献之	赤星 信	柁宜田啓史	景浦 宏
研究推進連絡員会	松原 公紀 (研究推進部委員)	石黒 賢士	山本 大輔	松原 公紀	上野 勝美
キャリア教育調整員会	山田 直記 (就職・進路支援 センター委員)	小田 信行	永田 潔文	松原 公紀	※高島 久洋
					奥野 充
					景浦 宏
理学部将来構想検討委員会	山口 敏男 西田 昭彦	田中 勝	御園 雅俊	寺田 成之	林 政彦
		田中 尚人	香野 淳	林田 修	上野 勝美
高大接続委員会	大熊健太郎	杉万 郁夫	※永田 潔文	塩路 幸生	田口 幸洋
		藤木 淳	御園 雅俊		
教育開発支援機構委員	寺田 貢	—	—	—	—
共通教育センター委員	香野 淳	—	—	—	—
言語教育研究センター委員	小田 信行	—	—	—	—
教職課程教育センター委員	杉万 郁夫	—	—	—	—
国際センター委員	石黒 賢士	—	—	—	—
エクステンションセンター委員	田口 幸洋	—	—	—	—
教育職員資格審査委員	井上 淳	—	—	—	—
	寺田 成之	—	—	—	—
アニマルセンター委員	伊東 綱男	—	—	—	—
R Iセンター委員	川田 知 弟子丸正伸	—	—	—	—
広報委員会	山口 敏男 大熊健太郎	小田 信行	香野 淳	弟子丸正伸	伊東 綱男
HP委員会	弟子丸正伸	濱田 龍義	香野 淳	山田 勇治	中川 裕之
総合情報処理センター 連絡員会	田中 勝 (総合情報処理 センター委員)	白石 修二	眞砂 卓史	仁部 芳則	西 憲敬

	学 部	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
X線管理小委員会	山口 敏男		武末 尚久	山口 敏男	奥野 充
環境保全委員会	林田 修 (環境保全センター委員)	松浦 望	御園 雅俊	林田 修	古賀 正明
遺伝子組換え実験安全委員会委員	弟子丸正伸	—	—	—	—
動物実験委員会委員	伊東 綱男	—	—	—	—
各クラス担任	1年次	山田 直記 藤木 淳	赤星 信	弟子丸正伸 【ナノ】大熊健太郎	上野 勝美 伊東 綱男
	2年次	田中 尚人 陶山 芳彦	山本 大輔	大熊健太郎 川田 知 【ナノ】松原 公紀	景浦 宏 玉木 克美
	3年次	小田 信行 白石 修二	寺田 貢	山口 武夫 山口 敏男 【ナノ】塩路 幸生	横張 文男 田口 幸洋
	4年次	渡辺 正文 田中 勝	田崎 茂	松原 公紀 安藤 功 【ナノ】林田 修	杵山 哲男 林 政彦
理学部懇親会幹事	杉万 郁夫 田上 響	—	—	—	—

注：※印は代表者

【研究科】

	研究科	応用数学専攻	応用物理学専攻	化学専攻	地球圏科学専攻
大学院専攻主任	西田 昭彦 (研究科長)	成瀬 慶明	香野 淳	松原 公紀	杵山 哲男
大学院専攻副主任		田中 尚人	御園 雅俊	寺田 成之	田口 幸洋
大学院委員	杵山 哲男	—	—	—	—
大学院学務委員	中川 裕之	—	—	—	—
大学院教育職員資格審査委員	小田 信行 宮川 賢治	—	—	—	—

6. 学部学生数・卒業生数等

(1) 入学試験形態別志願者数(2013年度入学志願者数)

	一般入学試験				センター プラス型 入 試	センター 試験利用 入 試	推薦入試	総 数
	系統別	前期	後期	計				
応用数学科	110	431	55	596	167	107	18	888
社会数理・ 情報インスティテュート	42	139	11	192	55	23	9	279
物理科学科	105	295	21	421	96	54	10	581
ナノサイエンス・ インスティテュート(物理科)	28	37	5	70	11	8	4	93
化学科	132	501	23	656	139	160	21	976
ナノサイエンス・ インスティテュート(化)	64	95	7	166	34	35	2	237
地球圏科学科	126	340	23	489	110	94	26	719
計	607	1,838	145	2,590	612	481	90	3,773

(2) 学生数(2013年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	2009年度 以前入学者	計
応用数学科	61	78	64	65	6	274
物理科学科	63	67	64	66	19	279
化学科	66	69	72	75	8	290
地球圏科学科	63	63	72	74	8	280
計	253	277	272	280	41	1,123

(3) 卒業生数(2014年3月31日現在)

	2013年9月13日付	2014年3月19日付	計
応用数学科	0	56	56
物理科学科	0	65	65
化学科	2	66	68
地球圏科学科	0	70	70
計	2	257	259

7. 研究科大学院生数・修了生数等

(1) 入学試験形態別志願者数(2013年度入学志願者数)

	博士課程前期					博士課程後期
	推薦	秋期(一般)	春期(一般)	飛び級	計	
応用数学専攻	0	0	3	3	6	0
応用物理学専攻	3	2	3	1	9	0
化学専攻	9	8	7	1	25	1
地球圏科学専攻	1	1	1	1	4	0
計	13	11	14	6	44	1

(2) 大学院生数(2013年5月1日現在)

	博士課程前期				博士課程後期				
	1年	2年	2011年度以前入学者	計	1年	2年	3年	2010年度以前入学者	計
応用数学専攻	6	4	0	10	0	0	0	0	0
応用物理学専攻	4	6	0	10	0	1	0	0	1
化学専攻	21	18	0	39	1	0	0	1	2
地球圏科学専攻	4	3	1	8	0	1	1	0	2
計	35	31	1	67	1	2	1	1	5

(3) 修了生数(2014年3月31日現在)

	博士課程前期	博士課程後期	
		修了者(学位取得者)	満期退学者
応用数学専攻	4	0	0
応用物理学専攻	6	0	0
化学専攻	18	1	0
地球圏科学専攻	1	0	0
計	29	1	0

(4) 満期退学後の学位(課程博士)取得者

0

8. 学部教育活動状況

福岡大学では2005年度から教育改善に関する取り組みを進め、PDCAサイクルによって教育改善を図る「教育マネジメントサイクル活動」を行っている。理学部でも毎年学科別に「教育マネジメントサイクル」を策定し、組織的かつ継続的に教育効果を高める取り組みを行っている。ここでは理学部各学科が2013年度に実行した教育改善行動プログラムの内容と、その活動評価結果について報告する。

【応用数学科】

(1) 早期合格者を対象とした入学前の課題指導

応用数学コース11名、社会数理・情報インスティテュートコース5名の推薦入試合格者に対し、2014年1月上旬と下旬、2月中旬と下旬の計4回にわたり、数学Cに関する課題を与えて提出を求め、その添削指導を実施した。解答の記述方法について、数学的根拠を押さえた説明の進め方、大学教育への導入まで、答案内容に応じた指導を行った。

また、応用数学コースでは、より数学に親しめるように数学に関する読み物を読み、その概略と感想を提出させた。社会数理・情報インスティテュートコースでは、実社会の問題に対する関心をもってもらうために、新聞を読み関心をもった記事についての概要のまとめと意見や感想を提出させた。

(2) 数学におけるリメディアル教育の構築と実践

理学部応用数学科と工学部の新入生を対象とし、演習を主体とした数学リメディアル教育を、前期・後期各12回とそれぞれの期末試験を実施した。講義内容は、応用数学科については線形代数、工学部については微分積分を中心とし、大学初年次に学ぶ正規科目を補完し、大学で学ぶ数学へのスムーズな移行をサポートした。

(3) 少人数クラスによる初年次チュートリアル教育

1年次前期科目「数学総合I」において、少人数クラスを設置した。新入生を少人数のグループに分け、各グループに担当教員がつき、大学で学ぶ数学への導入教育を実施した。大学数学の基礎教育と環境の変化に起因する学生の悩みにきめ細かく対処する有効な手段として成果を挙げたと考えられる。

(4) 福大生ステップアッププログラム「先輩と語る－大学と社会－」の開催

2013年11月16日に、福大生ステップアッププログラムとして、各分野で活躍している本学科卒業生4名を招き、就職活動の体験談や現在の職場での業務について講演をいただき、質疑応答の後、学生や教員を交えた懇談会を開催した。就職活動前の学生にとって有意義なものとなった。

(5) 卒業研究発表会の開催

2014年2月8日に、応用数学コースと社会数理・情報インスティテュートコースともに、卒業研究発表会を開催した。会場を分けたために時間的にも余裕ができたことで、テーマによって複数の発表を実施するゼミが増加した。それぞれの教育の個性が発表の内容や形態にも見られ充実したものになった。

【物理科学科】

(1) カリキュラム検討委員会(随時)

物理科学コースとナノサイエンス・インスティテュートコースのカリキュラムについて、専門科目の履修登録状況の変化などを調査し、カリキュラムの問題点を分析して、学生の能力に適合して実効性のある教育になっているかどうかを検討してきた。2012年度はカリキュラムのさらなる改正の必要性について集中的に議論、検討を行い、2013年度から両コースのカリキュラムを一部改正した。また、1年度内に履修可能な単位数が削減可能かどうか、また、削減するならば、その場合のカリキュラムは如何にあるべきかという点についての検討を開始した。

(2) 「物理学基礎ゼミナール」委員会の開催(2~7月の期間随時、2014年3月随時)

大学の物理学への導入科目である「物理学基礎ゼミナール」について、物理科学コース約60名の履修登録者に対して15班体制で実施した(化学科ナノサイエンス・インスティテュートコース「ナノサイエンス基礎演習」でも同じ内容を約10名3班体制で同じ時間帯に実施)。また、物理科学科ナノサイエンス・インスティテュートコースの学生に対する導入教育として、課外で学科の教員4名が指導にあたり「物理学基礎ゼミナール」の内容を学習させた。物理学基礎ゼミナール委員会で実施状況等に随時検討を重ねてきた。また、昨年度の委員会での総括を踏まえ、本年度は授業実施方法の見直しを行った。2014年3月に物理学基礎ゼミナール委員会で本年度の総括、実施方法等の修正を検討し、来年度の実施準備を行った。

(3) 教育活動の評価(随時)

理工系基礎教育については、昨年度に続き「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援(理工系学生の基礎力パワーアッププログラム)」のプログラムB(物理学パワーアップ道場)を実施し、併せて、物理科学科の学生に対しても、「物理学と数学」および「同演習」について道場形式で学修支援を行うとともに、理工系学生全般の学力向上のための施策について検討を行った。

(4) FD講演会の開催

本年度は、「長崎大学における科学的プレゼンテーション教育」と題し、プレゼンテーションに関する先進的な取り組みを行っている講師を招いて講演会を行った。FDの一環として、プレゼンテーションについて議論する貴重な機会となった。

(5) FD研修会への参加

日本私立大学連盟などが開催する大学フォーラムなどの研修会に参加し、FDに関する他大学の取り組みや文部科学省の方針などの情報を収集した。

(6) 教育・研究環境の整備

物理科学科では、教育・研究をさらに充実させるため、未使用状態となっていた9号館屋上の天体観測用ドームを活用することを計画し、理学部他学科の了承を得て、ドーム利用のための施設整備(屋上の通路の安全確保、ドーム内の観測のための施設の整備)を行った。これを利用して、天体観望会を開催した。

【化学科】

(1) 推薦入学者に対する入学前教育

化学コースとナノサイエンス・インスティテュートコースの推薦入試合格者に対して、2012年12月から2013年3月までの間に、計3回の化学と英語に関する課題を課し、添削指導を行った。

(2) 学力到達度チェック

例年どおり、新入生に対して学力到達度チェックテストを実施した。その結果は過去5年間

に入学した学生と大きな相違はなかった。

(3) 初年次リメディアル教育

新入生に対して、学習効率を高めるために、リメディアル教育として「基礎化学演習」(「ナノサイエンス基礎演習」)を前期に実施した。化学、物理、数学の基本的な事項について、助教が中心となり個人指導を行った。

(4) 少人数での初年次テュートリアル教育

充実した学生生活を送るための助けとして1年次前期に正課外教育としてテュートリアル教育を実施した。また、この教育の一環として、第10回テュートリアル研究発表会を7月1日と8日の両日、5時限目に開催した。講演要旨集を作成し、Power Pointを用いた発表を行った。自らテーマを設定し、調査検討した結果を最新の方法で発表することは積極性、協調性、データ解析力やまとめる能力を養うのに大いに役立っている。

(5) 国際交流事業の実施

○日韓交流プログラム：蔚山大専科から教員3名と学生37名が来学し、第9回日韓交流セミナーを8月20日(火)～23日(金)の3泊4日で開催した。本学からは化学科の教職員25名と学生66名が参加した。初日は夕方からミキサーを行い、2日目は終日、口頭・ポスター発表を英語で行った。発表要旨およびポスターを英語で作成し、発表および討論を英語で行ったことで、国際交流と研究における英語の重要性を学生に再認識させることができた。3日目は(株)同仁化学研究所の見学や、阿蘇くじゅう国立公園等を共に観光するなどして、交友関係を築いた。この交流セミナーは、国際社会における英語によるコミュニケーション能力の向上や国際感覚の涵養に役立っている。なお、このセミナーに関する記事が本学ホームページのニュース欄に掲載された。

○日中交流プログラム：ナノサイエンス・インスティテュートコースの選択必修科目である『材料科学国際演習』を上海交通大学において実施した。物理科学科・化学科の教員4名の引率・指導のもと、ナノサイエンス・インスティテュートコースの3年次生9名が8月19日(月)～23日(金)の4泊5日で上海交通大学金属基複合材料国家重点実験室に赴き、上海交通大学の先生方による英語での講義を受講した。学生全員が英語でプレゼンテーションを行い、授業の最後に、学生はどこを理解し、どこが理解できなかったかを一人ずつ発表し、教員とのディスカッションを行う時間を設けた。さらに、学生の見聞を広めるため研究室見学等を実施した。

(6) 就職懇談会

福大生ステップアッププログラム「先輩と語る―大学と社会―」として、9月28日(土)に卒業生23名を招き、第12回就職懇談会を開催した。まず、化学科の卒業生である松尾修司氏(株)コベルコ科研)と藤井和彦氏(株)麻生情報システム)に就職活動について講演いただき、引き続き、講演者を囲んでのパネルディスカッションを行った。さらに、環境インフラ系、製薬、化粧品、公務員関連、教育職関連希望などにグループ分けして、進路別の懇談会を行った。大学院生を含む在学生84名(修士2年2名、修士1年14名、4年次生5名、3年次生61名、2年次生1名、1年次生1名)が参加し、活発な質問がなされた。

(7) FD講演会の開催

恒例のFD講演会として第26回、第27回の「談話会」を6月15日(土)と12月14日(土)に開催した。講演者とタイトルは次のとおりである。講演内容は理学集報に投稿・掲載されている。

山口敏男 教授「メソ多孔性物質中の液体および溶液の熱挙動、構造、ダイナミクス」

福田将虎 助教「生体内RNA修飾機構とその生理的意義の解明」

山口武夫 教授「ヒト赤血球の加圧溶血機構(2)“アクアポリンに注目した解析”」

濱口智彦 助教「外部刺激応答性錯体による機能性分子の開発」

(8) 卒業研究発表会の開催

物理科学科のナノサイエンス・インスティテュートコースの学生も含めて、第41回化学科卒業論文発表会を2014年2月14日と15日の2日間にわたって開催した。学生は1年間の研究成果をPower Pointを使い7分で口頭発表を行い、その後2分間の質疑応答を行った。学生一人ひとりに卒業論文の研究テーマが与えられており、その結果をまとめて発表した。発表後は内容を冊子にまとめて提出した。

(9) カリキュラムの改正

- ①専門科目の必修科目の単位数を18科目40単位から12科目26単位に減らした。一方、選択必修科目を6科目から12科目に増やすことにより、学生が柔軟に科目を選択できるようにした。
- ②これまで系別選択科目は、選択していない系に関しては必ずしも履修する必要はなかったが、2013年度入学生より、選択していない系から6単位以上選択することを卒業要件にすることで、2つの系からバランスよく科目を履修するようにした。
- ③韓国の蔚山大学校との交流セミナーを「化学国際演習」として開講し、数名の受講者があった。
- ④ナノサイエンス・インスティテュートコースの卒業論文の単位を、物理科学科コース、化学科コース共に4単位とした。
- ⑤物理科学科で取得できる情報の教員免許に関する教科以外は、物理科学科と化学科のナノサイエンス・インスティテュートコースのカリキュラムを同じにした。
- ⑥再履修クラスはすべて廃止した。

【地球圏科学科】

2013年度は、「地球圏科学科研究成果交流会」「先輩と語る」「卒業論文発表会」「指定校推薦入試合格者に対する入学前教育」の4事業を事業計画の柱とし、同時に、日常的に教育研究活動の改善、発展に取り組んだ。

3事業のうち「地球圏科学科研究成果交流会」では、地球圏科学科の3つの分野の教員による講演が行われた。それぞれの教員のこれまでの研究成果を紹介するとともに、今後の研究の展開についても紹介が行われた。

福大生ステップアッププログラムの一環でもある「先輩と語る」は、福岡県在住の学科卒業生を中心に社会人12名を講師として招き、1名の現役大学院生にも講師を依頼した。業種、職種別に6グループに分かれて懇談を行い、進路や就職活動に関するアドバイスを受けた。また、

「卒業論文発表会」は例年と同様2日間にわたって行われた。2013年度は、73名の4年次生が発表を行った。

「指定校推薦入試合格者に対する入学前教育」では、指定校入試推薦合格者2名に対し、地球圏科学科での学修に必要な数学の課題を4回課し、課題ごとに添削指導を行った。

上記事業以外にも、地球圏科学科では、教育活動改善のための基礎資料収集のために、毎年新入生の動向調査をアンケート形式で行っている。2013年度は、新入生に対するアンケートに加えて、在学生に対してもアンケート調査を行った。これらのアンケートの結果と学科の受験者の動向、科目履修状況、就職状況などさまざまな資料の収集を行い、将来計画の検討を行っている。

また、年度後半の11月から3月にかけて、2年次生に対する3年次進級の際の分野選択希望調査を3回実施し、分野選択の調整を行った。年度末の3月には、新2年次生に対して次年度の履修登録指導のための説明会を行った。これらの教育改善活動全般に関して後期講義終了後の運営委員会で教員としてのFD活動総括を行った。

「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援」の「理工系学生の基礎力パワーアッププログラム」における地球圏科学科の事業として実施してきた1年次生対象の「理系こそ作文力」を継続して実施した。本事業は、2014年度からは正規科目に「地球圏科学入門演習」を設置して、発展的に解消することを決めた。

9. 研究科教育活動状況

博士課程後期はこれまで単位制を採っていなかったが、大学院教育の実質化を図り博士課程後期の履修成果を明確にするため、研究指導科目を単位化、新たに設置した特修科目の履修も修了の要件に加える改正を行った（2013年度入学生から適用）。また、これに伴って博士課程前期の履修方法を変更する改正を行った。

学部のインスティテュートに対応した研究科の更なる整備の実施

応用数学専攻では、大学院生の利用する情報機器の整備を実施した。

新カリキュラム・4専修部門体制での指導体制の充実

応用物理学専攻では、物理科学科ナノサイエンス・インスティテュートコースの完成に合わせて、従来の7専修部門体制を大幅に改正し、2012年度入学生より4専修部門体制に移行した（基礎物理学、物性物理学、ナノ物理学、物理情報計測）。博士前期課程については、2013年度に新カリキュラムへの移行が完了し、4専修部門での複数教員による教育指導体制が整った。副指導教員制度を活かした組織的な指導体制の下、日常の指導を充実させ、修士論文の質の向上に努めた。また、博士課程後期については、2012年度に教育課程の改革を行い実質的な単位化を実現した。専攻内で前期課程から後期課程に進学する学生に対応するため、本年度は特修科目の早期履修制度について検討を行い、規程改正の準備を行った。

特別講義と特別講義講師による講演会の実施

応用物理学専攻：外部講師を招聘して、本専攻の専任教員だけではカバーできないより広く先端的研究内容について、物性物理学、物理情報計測の2専修部門に関連する特別講義を実施した。大学院生の学習意欲、研究意欲を高め、視野を広げるための貴重な機会となった。

化学専攻：化学専攻では4つの専修部門でそれぞれ特別講義を実施した。さらに、3名の特別講義講師による講演会も開催した。

- 有機ケイ素色素を用いた色素増感太陽電池の高性能化へのアプローチ
群馬大学 花屋 実 教授（8月9日 14時30分～15時30分、921教室）
- 次世代定量プロテオミクスで挑む癌代謝の実体解明
九州大学 松本 雅記 教授（8月29日 16時30分～17時30分、923教室）
- 高原子価ヨウ素を用いた有機合成
佐賀大学 北村 二雄 教授（9月6日 17時00分～18時00分、921教室）

これらの特別講義ならびに特別講義講師による講演会は、大学院生に馴染みの薄い分野についても学習意欲や研究意欲を促進し、幅広い視野を併せ持つ人材の育成に寄与した。

研究の中間発表会の実施

応用数学専攻：2013年11月11日に、応用数学科の教職員と学部学生を対象として、大学院在籍者による中間研究発表会を実施した。この中間研究発表会により、大学院生は様々な分野の教員から大学院生の研究に関する質問及びアドバイスを受け

た。さらに、学部学生に対しても、大学院での学習及び研究内容を知って貰う機会を与え、大変有意義な中間発表会であった。

化学専攻：2013年6月～10月に各専修部門において中間発表会を開催した。発表者は各専修部門に所属する前期、後期大学院生と学部学生で、一人あたり20分程度の発表を行った。この中間発表会により、研究の問題点や進捗状況が把握できた。

地球圏科学専攻：中間発表会は専修部門ごとに教員・院生が参加して、適時行われている。また本専攻では主指導教員が、副指導教員と共に指導する体制が採られている。これによって教員・院生ともに複数教員による指導を意識することになり、研究活動や修士論文の作成においても、その水準と評価の客観性が担保されていると考えられる。

修士論文発表会の実施

応用数学専攻：2014年1月31日(月)に最終試験として実施された。教員と大学院生・学部生の参加を得て活発な討議が行われ、研究内容の理解を深めること、発表能力を向上させることと今後の研究課題を考えるのに非常に役立った。各発表者は30分の時間内で発表を行い、すべての発表はよく準備されたものであった。発表者は質問にも適切に答え、修士の学位を与えるに十分なものと判定された。大変有意義な修士論文発表会であった。

応用物理学専攻：2014年2月10日に開催した。今年度の発表者は6名で、一人あたり20分(発表15分、質疑応答5分)の発表を行った。大学院生たちは2年間の研究成果を応用物理学専攻の全教員および大学院在生学生の前で発表し、質疑にも適切に答えた。各院生の提出した論文が修士の学位を与えるに十分なものであることを確認した。

化学専攻：恒例の修士論文発表会を2014年2月1日に開催した。発表者は18名で、一人あたり20分(発表15分、質疑応答5分)の発表を行った。大学院生たちは2年間の研究成果を化学科の全教員および大学院生・学部学生の前で発表した。すべての発表において内容が非常に充実したものであった。また、全員が国内外での学会発表を経験しており、教員の質問に対しても適切に答えた。成果内容を適切にまとめる力や発表能力を向上させる上で非常に役立っていること、公開発表により修士学位の適切性を示す観点からも大変有意義な修士論文発表会であった。

地球圏科学専攻：2014年1月31日に開催した。博士課程前期教育プログラムの集大成である修士論文の研究内容を衆目の前で口頭発表し、大学院担当の教員全員による評価が行われた。当日は教員だけでなく、大学院生、学部学生の聴講も得て活発な発表、質疑応答が行われた。大学院生は発表会を意識して研究活動に励み、発表内容の要旨(各自A4用紙2頁)を準備し、口頭発表によってプレゼンテーション技術の向上が図られた。一部だが学部学生も参加し、彼らの勉学および研究意欲への刺激となった。さらに、これらが公開で行われたことにより、修士の学位の適格性が担保された。

化学専攻・化学科「談話会」

理学研究科化学専攻と理学部化学科は、恒例のFD講演会である第26回、第27回の「談話会」を6月と12月に開催している。講演者とタイトルは次のとおりである。

山口 敏男 教授「メソ多孔性物質中の液体および溶液の熱挙動、構造、ダイナミクス」

福田 将虎 助教「生体内RNA修飾機構とその生理的意義の解明」

山口 武夫 教授「ヒト赤血球の加圧溶血機構(2)“アクアポリンに注目した解析”」

濱口 智彦 助教「外部刺激応答性錯体による機能性分子の開発」

地球圏科学専攻・地球圏科学科「研究成果交流会」

理学研究科地球圏学専攻と理学部地球圏科学科は、地球科学、地球物理学、生物学の各分野が2009年度から合同で研究成果交流会を実施しており、2013年度も11月16日に約60名の参加を得て、第5回地球圏科学研究成果交流会「地球と生物について語ろう！」を開催した。教員3名が各自の研究についてのレビューと新たな展開を紹介し、講演後には院生、学生、教員を交えて活発な議論が行われた。

外国人招聘研究者による指導

応用数学専攻：

- (1) 2013年7月10日から12日の間、ポルトガルのリスボン大学Gomes教授による連続講義が行われ、大学院生に対する研究指導も実施された。
- (2) 2013年8月19日から21日、8月28日から30日の間、中国の清华大学Li Haizhong教授による連続講義が行われ、大学院生に対する研究指導も実施された。

化学専攻：2013年12月2日から5日の間および12月11日に、フランスのピエール・マリイ・キュリー大学Turq,Pierre教授による大学院生に対する個別指導が行われた。

国際交流事業の実施

応用数学専攻：大学院生の研究能力および英語によるコミュニケーションの能力を高めるために、①2013年5月から6月までに、モスクワ州立大学のAlexander Helemski教授、アテネ大学のMaria Fragoulopoulou教授とパレルモ大学のFabio Bagarello教授を招聘し、大学院生と研究交流及び研究指導を実施した。②2013年7月10日から12日まで、ポルトガルのリスボン工科大学Gomes教授により連続講義を行い、大学院生と研究交流及び研究指導を実施した。③2013年8月19日から30日まで、中国清华大学のLi Haizhong教授と中国華南師範大学のWei Guoxin教授により連続講義を行い、大学院生と研究交流及び研究指導を実施した。④2014年2月14日から16日まで教員、大学院生および中国四川大学のZhao Guosong教授と鄭州大学のHu Zejun教授と国際研究集会を開催し、研究交流を行った。このような教育・研究活動ならびに外国人教授による講義と講演会は大学院生の学修意欲や研究意欲を促進し、幅広い視野を併せ持つ人材の育成に寄与した。さらに、英語によるコミュニケーション能力の向上や国際感覚の涵養に役立った。また、数学専攻教員の研究活動の活性化にも役立った。

化学専攻：8月23日～26日に韓国蔚山大學校との第9回日韓交流セミナー「International Symposium of Nano Science for Life Science and Green Chemistry」を実施した。毎年夏休みを利用して行っているもので、今年度は蔚山大學の職員3名および大学院生、学部生合計37名が本学を訪問し、ジョイントセミナーを開催した。ジョイントセミナーでは、本学学生66名（大学院生41名と学部生25名）と蔚山大學校の37名が参加し、英語での口頭発表（研究概要のみ、3分）およびポスター発表（1時間30分）をそれぞれ行った。研究に関する討論を行うため、本学教職員25名も参加した。発表要旨およびポスターを英語で作成し、発表および討論を英語で行ったことで、研究における英語の重要性を院生に再認識させることができた。また、蔚山大學校の学生との交流によって院生の研究意欲や国際交流の必要性への理解を高めることができた。研究発表以外に、株式会社同仁化学研究所を見学し、阿蘇くじゅう国立公園を共に観光するなど、互いの交友関係を築いた。このジョイントセミナーは、英語によるコミュニケーション能力の向上や国際感覚の涵養に役立っている。

志願者および入学者の確保

■大学院の広報の実施

応用数学専攻：応用数学専攻では学部学生に対し大学院での学習や研究の様子を知ってもらうために、新入生ガイダンスにおいて大学院進学の意味や受験資格・手続き等も含めて説明を行った。さらに、9月の3年次生向けゼミ・ガイダンスにおいて、大学院進学の意味や受験資格・手続き等も含めて説明した。また、2013年11月11日の大学院生中間発表会において、大学院進学の意味および飛び級制度について詳しい説明を行った。

■大学院受験者の減少についての調査・検討

応用物理学専攻：平成23年度から大学院の入試受験者、入学者数が減少してきた。応用物理学専攻では、本年度、その原因および減少に歯止めをかける方策を検討し、学部学生向けの広報活動を行うこととした。まずは、学部卒業後の進路として大学院進学のあることを、大学入学後の早い時期に学生に知らせておくことが重要であると考え、大学入学後の懇談会において大学院進学状況等の説明を行った。また、後期には、学部1年次生に対して、大学院進学の意味、奨学金制度、入試制度、大学院修了後の就職状況等の説明を行った。さらに、学部3年次生向けには、「先輩と語る－大学と社会－」において大学院出身者を講師として招聘し、大学院で学ぶ意義や自らが学んだこと等を先輩から在學生に伝えてもらう取り組みを行った。

10. 研究活動概要

(1) 学科別学術論文数および著書数〔2013年4月～2014年3月(アクセプト済みも含む)〕

	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
学術論文数	38	50	41	48
著書数	2	0	0	8

(2) 学科別国際会議等学術集会での発表回数

	応用数学科	物理科学科	化学科	地球圏科学科
国際会議等学術集会での発表回数	36	19	27	10

(3) 学科別科研費申請・採択件数

序

近年の公的資金の配分方針は、予算のばらまきを止めて優れた研究を行う機関あるいは研究者に対して競争的資金を重点配分するように変化してきた。今や国立大学法人では科研費等の競争的外部資金の導入なしでは研究を続けることさえ困難になっている。一方、私立大学においても、外部資金については容易に得られない状況になりつつある。すなわち競争的外部資金の獲得は私大においても研究者個人の研究費獲得のため、なおかつ大学機関の総合的な研究レベルを高めるためにも非常に重要である。本学でも多くの教員が科研費を始めとする競争的資金の導入に邁進しているが、全学的に見れば、未だ十分ではない。このような状況の中で理学部は個々の教員の努力により、応募件数は年々上昇しており、科学研究費の採択数も増加しつつある。まず全体の概観を含め、各学科のデータを示したい。

理学部

科研費の応募資格者 98 名のうち 2013 年度は 82 件 (2012 年度は 77 件) の申請があり、そのうち採択されたものは 38 件 (2012 年度は 35 件) であった。

2013 年度

() 内は新規申請・採択件数

	申請件数	採択件数	採択率
応用数学科	21 件 (11 件)	11 件 (1 件)	52% (9%)
物理科学科	15 件 (12 件)	4 件 (1 件)	27% (8%)
化学科	22 件 (18 件)	11 件 (7 件)	50% (39%)
地球圏科学科	24 件 (17 件)	12 件 (5 件)	50% (29%)
計	82 件 (58 件)	38 件 (14 件)	46% (24%)

(4) 学科別外部資金導入件数 (科研費以外の公的資金および民間企業財団からの補助金獲得状況)

2013年度

	民間	科学技術振興機構	計
応用数学科	1	1	2
物理科学科	3	1	4
化学科	1	0	1
地球圏科学科	6	1	7
計	11	3	14

(5) 文部科学省補助金 (装置、設備等)

【研究装置】 林田 修：ナノ分子集積系動的解析システム

【教育装置】 眞砂 卓史：高精度ナノスケールデバイス作成装置

(6) 学科別学内資金導入件数

① 研究推進部所管

総合科学研究部研究チームⅢ

2012年度採択〔研究期間2年間：2012年4月1日～2014年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
平松 信康	社会に受け入れられる科学技術コミュニケーションの方法についての研究

総合科学研究部研究チームⅣ

2013年度採択〔研究期間2年間：2013年4月1日～2015年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
塩井 成留実	蛇毒に対する抗毒素薬のリード化合物についての研究

2012年度採択〔研究期間2年間：2012年4月1日～2014年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
福田 将虎	疾病に関わるRNA編集を薬剤標的とする小分子化合物の創製
吉田 亨次	理化学的解析による抗がん性ペプチドの機能発現原理の解明

領域別研究部研究チーム

(理工学研究部)

2013年度選定〔研究期間3年間：2013年4月1日～2016年3月31日〕

研究代表者	研究チーム名
鮎澤 潤	地球システムの物質移動
白石 修二	社会情報システム研究チーム
田中 尚人	非線形偏微分方程式
成瀬 慶明	幾何学とその応用に関する研究
柘宜田 啓史	クラスターとその成長過程
御園 雅俊	励起分子ダイナミクス

2012年度選定〔研究期間3年間：2012年4月1日～2015年3月31日〕

研究代表者	研究チーム名
石黒賢士	トポロジー研究
井上淳	非有界作用素環
大熊健太郎	典型元素化学研究
山口敏男	ナノ多孔性材料

2011年度選定〔研究期間3年間：2011年4月1日～2014年3月31日〕

研究代表者	研究チーム名
川田知	フラストレーション錯体
香野淳	物質材料微細構造の物性と制御
西田昭彦	センサーマテリアル研究

(生命科学研究部)

2012年度選定〔研究期間3年間：2012年4月1日～2015年3月31日〕

研究代表者	研究チーム名
伊東綱男	昆虫適応機構研究

2011年度選定〔研究期間3年間：2011年4月1日～2014年3月31日〕

研究代表者	研究チーム名
景浦宏	細胞シグナル制御研究

推奨研究プロジェクト研究チーム

(一般)

2012年度採択〔研究期間3年間：2012年4月1日～2015年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
奥野充	地質情報のデータベース化に関する基礎的研究
山口敏男	新機能多孔性物質の合成・構造・物性
藍浩之	理工連携によるロボットを用いた社会昆虫の通信機構の研究

2011年度採択〔研究期間3年間：2011年4月1日～2014年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
林政彦	無人小型航空機によるエアロゾル観測の南極対流圏への展開
林田修	ナノ分子システムによる細胞内ホストゲスト化学の構築
御園雅俊	非線形システムの超高分解能レーザー分光

(若手)

2013年度採択〔研究期間3年間：2013年4月1日～2016年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
高島久洋	大気エアロゾル観測のための観測装置・解析アルゴリズムの高度化
中山和之	メタマテリアル表面上のナノ微粒子からの蛍光偏光解析の研究

2012年度採択〔研究期間3年間：2012年4月1日～2015年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
石原 与四郎	地質・言語情報の数値化・統計解析処理に関する研究
長洞 記嘉	新規なリン原子を含む芳香化合物の系統的合成と物性の探求

2011年度採択〔研究期間3年間：2011年4月1日～2014年3月31日〕

研究代表者	研究課題名
吉田 亨次	水和水を基調とした生体分子の分子認識機構の研究

② 2013年度大学院高度化推進事業

■研究科特別経費（研究科分）

陶山 芳彦：多様体上の幾何学研究及び非可換微分幾何の研究

香野 淳：機能性材料創製のためのナノ構造制御プロセスの開発

林田 修：薬物送達のためのホストゲスト分子システムの構築

高島 久洋：大気微量成分観測のための装置開発と地球規模の物質循環過程に関する研究

■研究科特別経費（学生分）

星木 勇作（上野 勝美）：揚子炭酸塩プラットフォーム、石炭系体積益の発達過程と有孔虫群集変遷

■外国人研究員等特別招聘経費（短期）

成瀬 慶明：Li Haizhong（清华大学教授、中国）

山田 直記：Diego A. Gomes（リスボン大学教授、ポルトガル）

山口 敏男：Turq Pierre（ピエール・マリー・キュリー大学教授、フランス）

③「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援」採択事業

『理工系学生の基礎力パワーアッププログラム』

④「教育推進経費」採択事業

『科学的国際交流による表現力の継続的実践教育』

11. 社会（貢献）活動状況

(1) 一般（非研究者）向けの論文数および著書数、行政報告書数 等

応用数学科	物理数学科	化学科	地球圏数学科	計
0	3	1	2	6

(2) 一般（非研究者）対象の集会〔国際会議等学術集会〕での発表回数

応用数学科	物理数学科	化学科	地球圏数学科	計
0	5	0	4	9

(3) 学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

○ SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の講師、城南高等学校 2013年
講義担当者：応用数学科 石黒 賢士 教授（担当補助：中岡史絵助手）

○ 「世界一行きたい科学広場 in 宗像」の講師、宗像ユリックス
実験展示「水と油 - 界面のサイエンス」担当者：化学科 村田 義夫 兼任講師

○ 応用物理学会「リフレッシュ理科教室」実行委員
物理数学科 永田 潔文 教授

○ 福岡市教育委員会、福岡市立片江小学校サポーター会議構成員
物理数学科 永田 潔文 教授

○ 福岡市子ども未来局、背振少年自然の家「チャレンジクラブ」講師
物理数学科 永田 潔文 教授

○ 「わくわく科学カーニバル」での演示・体験実験、福岡市少年科学文化会館
物理数学科 永田 潔文 教授、西田 昭彦 教授

○ 「子どもまつり」講師、福岡市少年科学文化会館
物理数学科 永田 潔文 教授、化学科 山口 武夫 教授

○ 「中学生のためのキャリアデザイン啓発事業」の講師、福岡市市民局
講演「研究者としてのロールモデル」担当者：物理数学科 大槻かおり 助教

○ 2013年度科学技術振興機構科学技術コミュニケーション推進事業
「地球の歴史をかけぬけろっ！」講師、阿蘇火山博物館
地球圏数学科 杵山 哲男 教授

(4) 高校生に向けた模擬講義 (2013 年度)

応用数学科	山田 直記 教授	14 回	応用数学科	杉万 郁夫 准教授	1 回
応用数学科	藤木 淳 准教授	1 回	物理科学科	香野 淳 教授	1 回
物理科学科	永田 潔文 教授	2 回	物理科学科	西田 昭彦 教授	1 回
物理科学科	眞砂 卓史 准教授	2 回	化学科	林田 修 教授	1 回
地球圏科学科	奥野 充 教授	1 回	地球圏科学科	杵山 哲男 教授	1 回
地球圏科学科	田口 幸洋 教授	2 回	地球圏科学科	中川 裕之 教授	1 回
地球圏科学科	林 政彦 教授	1 回			

(5) エクステンションセンター公開講座 (市民カレッジ)

■ 福岡大学キャンパスツアー「研究者と語る福大サロン」(9月)

講義:「社会を感じる数学」

講師: 応用数学科 杉万 郁夫 准教授

■ スマートフォンプログラミング講座 Android プログラミング講座 初級・中級

講師: 応用数学科 白石 修二 教授

■ X線分析講習会

講師: 物理科学科 香野 淳 教授

化学科 栗崎 敏 助教、吉田 亨次 助教

地球圏科学科 柚原 雅樹 助教

■ 体験! 化学の不思議

講師: 化学科教員

■ 環境の時代を生きる親子のための「新しい省エネ発想ワークショップ」

監修: 物理科学科 永田 潔文 教授

(6) 福岡大学くじゅうの杜キャンパスの事業

■ 春のくじゅう山登り教室 くじゅうのミヤマキリシマを楽しもう!

講師: 物理科学科 永田 潔文 教授

■ 秋のくじゅう山登り教室 くじゅうの紅葉を楽しもう!

講師: 物理科学科 永田 潔文 教授

(7) 地域ネット推進センター所管「地域の教育支援活動」

■ 物理コンテスト『物理チャレンジ2013』(2013年6月23日)

・中高生を対象とした物理コンテストを通して科学的思考や知識を学び、科学の楽しさを知る

・会場: 福岡大学文系センター棟 15階 第5会議室

・企画: 物理科学科 平松 信康 教授

・対象者: 40名(地域の中学生、高校生)

■ 親子科学教室『電子万華鏡を作ろう』(2013年7月27日、28日)

・科学的思考や知識を学び、科学の楽しさを知る機会として、理科工作を体験学習

・会場: 片江公民館、別府公民館

・企画: 物理科学科 永田 潔文 教授

・対象者: 80名(片江、別府校区の小学生、保護者)

■ 親子天体観測教室『冬の夜空をみてみよう』（2013年12月7日）

- ・ 科学的思考や知識を学び、科学の楽しさを知る機会として、天体観測を体験学習
- ・ 会 場：福岡市立片江小学校
- ・ 企 画：物理科学科 永田 潔文 教授
- ・ 対象者：70名（片江校区の小学生、保護者）

■ 小学生のためのわくわく理科教室（2014年2月26日）

- ・ 観察や工作、実験を通して科学的思考や知識を学び、科学の楽しさを知る
- ・ 会 場：福岡市立那珂小学校
- ・ 企 画：物理科学科 香野 淳 教授、永田 潔文 教授、西田 昭彦 教授、
平松 信康 教授、赤星 信 准教授
- ・ 対象者：190名（5年生児童）

(8) 地域ネット推進センター所管「地域との交流活動」

■ 夜間防犯パトロール（7月、1月を除く月1回）

- ・ 大学周辺校区の安全・安心なまちづくりの推進および地域住民との交流を深めることを目的に実施
- ・ 場 所：七隈校区・片江校区の各町内
- ・ 企 画：七隈校区自治協議会、片江校区自治協議会
- ・ 参加者：物理科学科 永田 潔文 教授、七隈祭実行委員会、野球部、準硬式野球部、
アメリカン・フットボール部、女子サッカー部、女子バスケ部、女子ソフト
ボール部、ななくま元気にするっ隊、応援指導部、地域住民

12. 研究員の受入れ

〔①研究期間 ②研究テーマ ③指導教育職員〕

<理学部>

○上林 浩行、徳永 幸大

(東レ株式会社フィルム加工製品開発センター)

- ① 2013年4月1日～2014年3月31日
- ② X線反射率法による薄膜構造解析の研究
- ③ 物理科学科 香野 淳 教授

○塩濱 勝博

(九州大学大学院数理学研究院)

- ① 2013年4月1日～2014年3月31日
- ② 完備多様体から正則断面曲率一定な空間への余次元1等長はめ込みの主曲率と位相
- ③ 応用数学科 陶山 芳彦 教授

○脇田 久伸

(佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター)

- ① 2013年4月1日～2014年3月31日
- ② 各種材料の構造解析と評価
- ③ 化学科 山口 敏男 教授

<理学研究科 国際交流事業・外国人研究員等特別招聘>

○Diogo Aguiar Gomes

(リスボン大学教授)

- ① 2013年6月29日～7月27日
- ③ 応用数学専攻 山田 直記 教授

○Li Haizhong

(清华大学教授)

- ① 2013年8月18日～9月16日
- ③ 応用数学専攻 成瀬 慶明 教授

○Turq, Pierre

(ピエール・マリー・キュリー大学教授)

- ① 2013年11月27日～12月12日
- ③ 化学専攻 山口 敏男 教授

13. 学生の国際交流活動状況

理学部の学科等が推進する国際交流事業

○ 第9回日韓交流セミナー

学 科：化学科および化学専攻

学 年：4年次生および大学院生

人 数：66名

目 的：国際交流を通して英語教育とプレゼンテーション教育を行うため。

交流先：蔚山大学校自然科学大学化学科

期 間：2013年8月20日～23日

担当教員：化学科教員25名

○ 材料科学国際演習

学 科：ナノサイエンス・インスティテュート

学 年：3年次生

人 数：9名

目 的：国際交流を通して英語教育とプレゼンテーション教育を行うため。

交流先：上海交通大学金属基複合材料国家重点実験室

期 間：2013年8月19日～23日

担当教員：物理科学科・化学科教員4名

14. 教員の国際交流活動状況

(1) 長期在外研究員（6ヶ月以上1年以内）

氏名	学科	国名	研究先	期間
寺田 貢	物理科学科	フィンランド	タンペレ工科大学、タンペレ大学	2012年8月15日～ 2013年8月14日

(2) 短期海外研修員（1ヶ月未満）

氏名	学科	国名	研究先	期間
奥野 充	地球圏科学科	ベルギー王国	Saint Peter's Abbey	2013年 4月8日～13日
山口 敏男	化学科	フランス	Ecole de Physique des Houches	4月15日～27日
上野 勝美	地球圏科学科	タイ王国	Chulalongkorn 大学地質学教室	4月28日～5月7日
奥野 充	地球圏科学科	韓国	ソウル大学、漢陽大学	5月4日～7日
奥野 充	地球圏科学科	ポーランド	“Ostaniec” Hotel	5月14日～20日
上野 勝美	地球圏科学科	スイス	ジュネーブ大学	5月16日～22日
香野 淳	物理科学科	フランス	Saint Peter's Abbey	5月26日～6月1日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	復旦大学、寧夏大学	5月31日～6月9日
藤木 淳	応用数学科	アメリカ	CVPR2013	6月23日～30日
濱田 龍義	応用数学科	韓国	BEXCO, 釜山	6月30日～7月4日
成瀬 慶明	応用数学科	台湾	国立台湾大学	7月14日～20日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	清華大学、北京師範大学	8月2日～16日
奥野 充	地球圏科学科	韓国	韓国・鬱陵島火山	8月11日～16日
山口 敏男	化学科	スウェーデン	①Chalmers University of Technology ②Stockholm University ③Swedish University of Agriculture Sciences ④University of Lille 1	8月17日～ 9月11日
小田 信行	応用数学科	韓国	Kookmin University	8月18日～24日
吉田 亨次	化学科	ドイツ	ベルリンヘルムホルツセンター	8月20日～28日
奥野 充	地球圏科学科	アメリカ	アリューシャン列島アダック島	8月21日～9月3日
藤木 淳	応用数学科	イギリス	CAIP2013	8月23日～31日
吉田 亨次	化学科	フランス	University of Lille 1 - Sciences and Technologies	9月7日～14日
白石 浩一	地球圏科学科	ノルウェー	ニーオルソン日本観測基地	9月7日～14日
西田 昭彦	物理科学科	イタリア	コトーネ・マガッジーニ	9月14日～23日
藤木 淳	応用数学科	チェコ	ECML/PKDD2013	9月22日～29日

氏名	学科	国名	研究先	期間
上野 勝美	地球圏科学科	ウクライナ、 スイス	ドネツ炭田地域(ウクライナ)、 チューリッヒ大学古生物学博物館 (スイス)	9月27日～ 10月8日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	清華大学	10月3日～7日
奥野 充	地球圏科学科	韓国	韓国・済州島火山	10月16日～20日
田上 響	地球圏科学科	アメリカ	The Society of Vertebrate Paleontology 73rd Annual Meeting (古脊椎動物学会第73回年会)	10月29日～ 11月4日
上野 勝美	地球圏科学科	フィリピン	フィリピン大学国立地球科学研究所	11月2日～7日
奥野 充	地球圏科学科	フィリピン	マニラ首都圏	11月17日～21日
井上 淳	応用数学科	イタリア	パレルモ大学	11月20日～30日
上野 勝美	地球圏科学科	タイ	タイ国北部(ナコンサワン、スコ タイ、ランパン、チェンマイ)	11月25日～ 12月3日
奥野 充	地球圏科学科	フィリピン	パンパンガ州アンヘレス市	12月1日～8日
香野 淳	物理科学科	アメリカ	ハインズコンベンションセンター	12月2日～7日
藤木 淳	応用数学科	アメリカ	NIPS2013	12月4日～10日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	清華大学、復旦大学	12月6日～15日
濱田 龍義	応用数学科	台湾	国立中山大学	12月6日～9日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	華南師範大学	12月27日～ 2014年1月6日
上野 勝美	地球圏科学科	スロバキア	スロバキア国立地質調査所	2014年 1月10日～15日
濱田 龍義	応用数学科	ハンガリー	Budapest College of Communication and Business	1月21日～27日
奥野 充	地球圏科学科	フィリピン	カマリネススル州イリガ市	1月23日～27日
原 圭一郎	地球圏科学科	グリーンランド	シオラパルク	2月15日～ 3月15日
成瀬 慶明	応用数学科	中国	清華大学、広西師範大学	2月19日～3日5日
奥野 充	地球圏科学科	アメリカ	シアトル大学、ワイトマン大学	2月19日～23日
上野 勝美	地球圏科学科	イタリア	ミラノ大学地球科学科	2月24日～3月4日
奥野 充	地球圏科学科	フィリピン	サン・パブロ市、イリガ市	2月26日～3月7日
白石 浩一	地球圏科学科	ノルウェー	ニーオルソン日本観測基地	3月4日～22日
上野 勝美	地球圏科学科	ラオス	ラオス地質鉱産局、ラオス北部	3月18日～30日

15. 卒業生・修了生の就職・進路状況

学部における就職・進路支援センターのデータから、理学部分を抜粋して以下にまとめる。

求人件数は3,744件で、昨年度より12.6%増であった。

理学部の就職決定率は89.5%で、昨年度より1.8ポイントの増であった。しかし大学全体の平均値92.5%より、やや低い値となっている。

学科別の就職決定率を、表1に示す。活動中の項目で、教員志望の学生の比率が多いことが理学部の特徴となっている。本採用になる前に、非常勤教員として数年間、現場を経験するケースが多いためである。

理学研究科修了者の就職・進路状況も表2に示す。

表1 2013年度学科別就職・進路内訳 数値は構成比(%)

2014年3月31日現在

		就職 企業、 公務員 教員など	大学院 進学	その他 専門学校 アルバイト など	合計	就職活動中					※ 就職決定率	前年度
						企業	公務員	教員	その他	合計		
応用 数学科	男	55.0	15.0	—	70.0	7.5	10.0	12.5	—	30.0	88%	97.3%
	女	56.3	12.5	12.5	81.3	—	12.5	6.3	—	18.8	100%	100%
	計	55.4	14.3	3.6	73.2	5.4	10.7	10.7	—	26.8	91.2%	97.9%
物理 科学科	男	67.7	17.7	4.8	90.3	4.8	3.2	1.6	—	9.7	93%	83.9%
	女	33.3	66.7	—	100.0	—	—	—	—	—	100%	100%
	計	66.2	20.0	4.6	90.8	4.6	3.1	1.5	—	9.2	93.5%	85.7%
化学科	男	43.5	43.5	8.7	95.7	—	4.3	—	—	4.3	100%	85.0%
	女	77.3	22.7	—	100.0	—	—	—	—	—	100%	93.3%
	計	54.4	36.8	5.9	97.1	—	2.9	—	—	2.9	100%	88.6%
地球圏 科学科	男	54.2	10.4	6.3	70.8	18.8	8.3	2.1	—	29.2	74%	77.8%
	女	72.7	4.5	—	77.3	13.6	9.1	—	—	22.7	84%	78.9%
	計	60.0	8.6	4.3	72.9	17.1	8.6	1.4	—	27.1	77.8%	78.3%
理学部	男	56.1	21.4	5.1	82.7	7.7	6.1	3.6	—	17.3	88%	87.0%
	女	68.3	15.9	3.2	87.3	4.8	6.3	1.6	—	12.7	94%	89.6%
	計	59.1	20.1	4.6	83.8	6.9	6.2	3.1	—	16.2	89.5%	87.7%

※算出方法：就職決定者 / (就職決定者 + 企業希望未決定者)

表2 2013年度 博士課程〔前期・後期〕 就職状況（専攻別進路内訳）（人数）

2014年3月31日現在

	就 職				進 学	その他	合 計
	企 業	公務員	教 員	大学・ 研究機関			
応用数学専攻	－	－	4	－	－	－	4
応用物理学専攻	3	－	1	－	1	1	6
化学専攻	15	－	1	1	2	－	19
地球圏科学専攻	－	－	－	－	－	1	1
理学研究科	18	0	6	1	3	2	30

16. 研究室の活動状況

研究室名
基礎数学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>基礎数学研究室は小田, 石黒, 秋山, 宮内, 中岡の5名で構成され、代数学および位相数学に関連する分野を研究している。研究の具体的内容は次の通りである。</p> <p>小田・中岡は位相空間の部分集合族に対して定義される作用子を用いて、一般化された開集合族を定義しその性質を調べている。さらに小田はBBT積を用いて、非常に弱い条件の下で得られる随伴写像を用いて位相不変量の一般化の研究を行っている。また、一般の圏において戸田積の様々な一般化と応用の研究を行っている。</p> <p>石黒はコンパクト連結 Lie 群の分類空間の有理数係数のコホモロジー環が Weyl 群の作用による不変式環で表されるが、dual 表現など多くの表現について研究を広げ、射影的 Lie 群の分類空間について調べている。そのためには対称群の既約な integral 表現について、位相的な観点から対応するコホモロジー環の代数的構造を理解することが重要である。特殊ユニタリー群以外の Lie 群にも目を向け、ホモトピー論的部分群や被覆空間との関係など更に研究すべきことが多く残されている。また、不変式環の幾何的非実現性に関連した問題およびペアリング問題についても考察している。</p> <p>秋山はデザイン理論の中で、クラス正則な対称横断デザインに対応する一般アダマール行列の構成と分類の研究を、位数が小さな群について行っている。また、位数が素数べきでない射影平面の存在について研究を行っている。</p> <p>宮内は位相空間の CW-複体としての構造における胞体の接着写像のホモトピー類と乗法的な一般コホモロジー論におけるカップ積の関係の一般化と、それによるホモトピー群と一般コホモロジー論の相互関係について研究を行っている。また、その関係を用いた L-S カテゴリや Topological Complexity などの位相不変量への応用の研究を行っている。</p> <p>キーワード：位相不変量、Lie 群、コホモロジー、一般アダマール行列、ホモトピー</p>
研究室の構成員
<p>小田信行（教授）・理学博士</p> <p>石黒賢士（教授）・Ph. D</p> <p>秋山獻之（教授）・博士（理学）</p> <p>宮内敏行（助教）・博士（数理学）</p> <p>中岡史絵（助手）・学士（教育学）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M2：1名 分類空間のペアリング問題</p> <p>4年次生：4名 ホモロジー論； 4名：位相幾何学</p>

教員の担当科目
<p>小田信行：(学部) 行列と行列式Ⅰ、行列と行列式Ⅱ、基礎数学、数学入門、 数学総合Ⅱ、集合と距離Ⅰ、集合と距離Ⅱ、卒業研究</p> <p>石黒賢士：(学部) 基礎線形代数及び演習、線形代数及び演習、代数学序論、幾何学Ⅱ、 基礎数学研究、卒業研究</p> <p>(大学院) 位相数学講究Ⅱ、現代代数学入門、基礎数学特論Ⅱ</p> <p>秋山獻之：(学部) 行列と行列式Ⅰ、行列と行列式Ⅱ、基礎数学、数学入門、数学総合Ⅰ、 代数学、教育実習事前・事後指導、基礎数学研究</p> <p>宮内敏行：(学部) 微分積分Ⅳ、数学Ⅲ、数学Ⅳ、数学総合Ⅰ</p>
教員の所属学会
<p>小田信行：日本数学会</p> <p>石黒賢士：日本数学会、米国数学会</p> <p>秋山獻之：日本数学会</p> <p>宮内敏行：日本数学会</p> <p>中岡史絵：日本数学会</p>
最近4年間の学術論文
<p>K. Ishiguro and F. Yayama, Pairing and admissible maps, Fukuoka University Science Reports, vol 44 (1), 2014, 53--64.</p> <p>K. Ishiguro, S. Kudo and T. Nakano, Pairings and monomorphisms of classifying spaces, Topology and its Applications 160, 2013, 264--272. (査読有)</p> <p>K. Ishiguro and S. Kudo, Generators of invariant rings and modular representations of symmetric groups, Fukuoka University Science Reports, vol 43 (1), 2013, 1--9.</p> <p>J.-R. Kim and N. Oda, The set of cyclic-element preserving maps, Topology and its Applications 160 (2013), 794--805. (査読有)</p> <p>N. Iwase, M. Mimura, N. Oda and Y. S. Yoon, The Milnor-Stasheff filtration on spaces and generalized cyclic maps, Canadian Mathematical Bulletin, 55 (2012), 523--536. (査読有)</p> <p>H. Kihara and N. Oda, Homotopical presentations and calculations of algebraic K_0-groups for rings of continuous functions, Publications of the Research Institute for Mathematical Sciences, 48 (2012), 65--82. (査読有)</p> <p>T. Inoue, T. Miyauchi and J. Mukai, "Self-homotopy of a suspension of the real 5-projective space, JP J. Geom. Topol. 12 (2012), 111--158. (査読有)</p> <p>Y. Hirashima and N. Oda, Exponential homeomorphisms in the category of topological spaces with base point, Topology and its Applications 158 (2011), 445--456. (査読有)</p> <p>H. J. Marcum and N. Oda, Long box bracket operations in homotopy theory, Applied Categorical Structures, 19 (2011), 137--173. (査読有)</p> <p>H. J. Marcum and N. Oda, Hopf invariants, Toda brackets and the reduced diagonal map, Topology and</p>

its Applications 158 (2011), 15--37. (査読有)

K. Ishiguro and S. Kudo, Invariant theory and the Topology of classifying spaces (in Japanese), Fukuoka University Science Reports, vol 41 (1) (2011), 83-101

K. Ishiguro, Invariant rings and dual representations of dihedral groups, J. Korean Math. Soc. 47, no. 2 (2010), 299--309. (査読有)

最近4年間の学術著書

該当なし

最近4年間の学術(国際)会議での発表

宮内敏行 「Determination of the 2-primary components in 32-stem unstable homotopy groups of spheres」 2014年度日本数学会年会 学習院大学 2014年3月15日

宮内敏行 「SO(10)のL-Sカテゴリ」 Diffeology in Karatsu
唐津市民交流プラザ 2013年12月22日

石黒賢士, 矢山史恭 「コンパクトLie群の分類空間のペアリング」
2013年度秋季総合分科会 (於: 愛媛大学) 2013年9月26日

Nobuyuki Oda 「Brown-Booth-Tillotson products and exponentiable spaces」
Topology Seminar at The Ohio State University
The Ohio State University, Columbus, Ohio, U.S.A. March 19, 2013

秋山獻之 「On generalized Hadamard matrices」 Workshop on Algebraic Combinatoric
神戸学院大、2013年3月7日

石黒賢士, 工藤翔太郎, 中野智弘 「Pairings and monomorphisms of classifying spaces」 2012年度秋季総合分科会 九州大学 2012年9月18日

宮内敏行 「Top cell attaching map in 3-cell complex」 Studio Phones Seminar 神戸大学
2012年6月12日

宮内敏行 「Unstable homotopy group」 Studio Phones Seminar 神戸大 2012年6月11日

石黒賢士 「分類空間のペアリング問題と admissible maps」 福岡大学トポロジーセミナー
2012年6月4日

石黒賢士 「Millerの定理について」 福岡大学トポロジーセミナー 2012年4月23日

秋山獻之 「GH(u, λ) の構成と分類」 組合せ論セミナー 大分高専 2012年3月1日

秋山獻之 「点上, ブロック上に半正則に作用する位数21の巡回群を自己同型にもつ
STD7 [21 ; 3] の構成と分類」 有限幾何とその周辺 崇城大学 2011年12月26日

宮内敏行 「特性数の一般化とCW複体の胞体構造について」 RIMS 研究集会「空間の代数的・幾何的モデルとその周辺」 京都大学数理解析研究所 2011年9月9日

中岡史絵, 小田信行 「Kasahara operation の応用について」 位相空間論とその応用
福岡大学セミナーハウス 2011年8月21日

宮内敏行 「懸垂実6次元射影空間の自己ホモトピー集合の群構造について」 第4回福岡・札幌幾何セミナー 西新プラザ 2010年2月21日

最近4年間の学術的会議の開催実績（応用数学科・専攻のみ）
<p>「代数的組合せ論ミニ集会」、2014年3月7日、 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス、秋山獻之</p> <p>「福岡ホモトピー論セミナー」、2014年1月12日～1月13日、 福岡大学セミナーハウス、小田信行・石黒賢士</p> <p>「福岡ホモトピー論セミナー」、2013年1月12日～1月13日、 福岡大学セミナーハウス、小田信行・石黒賢士</p> <p>「有限幾何とその周辺」、2012年9月29～30日、福岡大学理学部、秋山獻之</p> <p>「福岡ホモトピー論セミナー」、2012年1月7日～1月8日、 福岡大学セミナーハウス、小田信行・石黒賢士</p> <p>「有限幾何とその周辺」、2011年8月27～28日、福岡大学理学部、秋山獻之</p> <p>「福岡ホモトピー論セミナー」、2011年1月8日～1月9日、福岡大学セミナーハウス、 小田信行・石黒賢士</p>
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
<p>科学研究費（基盤研究（C））、平成23～26年度</p> <p>研究課題：指数位相により定まる写像空間とホモトピー不変量の研究</p> <p>研究代表者：小田信行</p>
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
<p>2012年度理学研究科高度化推進事業</p> <p>研究課題：高度情報化社会における数学・情報教育の研究</p> <p>研究代表者：石黒賢士</p> <p>研究推進部領域別研究 2012年度～2014年度</p> <p>研究課題：位相不変量による空間のトポロジーの研究</p> <p>研究代表者：石黒賢士</p> <p>研究推進部領域別研究 2009年度～2011年度</p> <p>研究課題：図形の群論的研究</p> <p>研究代表者：秋山獻之</p>
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の講師、城南高等学校 2012年～2013年 講義担当者：石黒賢士（担当補助：中岡史絵）

その他特筆事項

矢山 史恭 (M2) 2014 年度京都府公立学校教員採用選考試験

大学推薦特別選考合格 2013 年 6 月 11 日

工藤 翔太郎 (D3) 第一回九州若手数学賞を受賞 2013 年 2 月 11 日

研究室名
微分幾何学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>本研究室では微分幾何学と大域解析学に関する様々な研究課題について研究を行っている。特に、下記の研究課題に対して、顕著な進展を与えた。</p> <p>1) 4次元空間形内の共形平坦な超曲面の研究について、①ユークリッド空間内の共形平坦な超曲面の双対共形平坦計量を持つ多様体が、またユークリッド空間内の超曲面として実現できることを示した。この時の双対超曲面の各点での接空間が、最初の超曲面の接空間と対応する点で平行になるように実現できることを得た。双対超曲面の(最初の超曲面の情報による)積分表示も与えた。②1つの共形平坦な超曲面から5次元のパラメータを持って(共形的に異なる)共形平坦な超曲面の対が構成できた。③1つの共形平坦な超曲面の Guichard net から5次元のパラメータを持ってGuichard netのRibaucour pairを構成した。④ユークリッド空間内の共形平坦な超曲面を6次元ミンコフスキー空間内で考えた時、その随伴族よる連続変形の中に、双対超曲面や Ribaucour pair が存在することを証明した。これらの結果は、Guichard曲面等の曲面論の結果が(その内容を越える形で)高次元部分多様体にまで拡張できる事を示したもので、画期的な成果である。⑤共形平坦な超曲面の存在は、Guichard net と呼ばれる座標系とある種の3次元計量の存在と同値である。しかし、Guichard net から空間形内の超曲面を実際に構成する方法はわかっていなかった。この問題を解決し、超曲面をユークリッド空間内に構成する具体的方法を発見した。⑥1つの Guichard net からその Ribaucour partner を代数的に求める方法を発見した。</p> <p>2) リーマン多様体における微分作用素の固有値問題に関する研究について、①Fourier 変換を巧く利用して、Li-Yau はユークリッド空間内の有界領域におけるラプラス作用素の第 k 番目の固有値 の下限を研究し、最適な下限を得た。完備リーマン多様体に対して、Fourier 変換のような道具が存在しないので、Li-Yau の方法とは全く違った新たな分析道具が必要である。独創的、斬新的な研究方法で完備リーマン多様体内の有界領域におけるラプラス作用素の固有値に関する最適な下限を得た。②張り詰められた状態でのプレートの振動の臨界状態を表す双調和作用素の固有値問題の固有値に関する研究について独創的且つ新しい研究方法で試験関数を構成し、1955年に Payne-Polya-Weinberger により提案された固有値に関する普遍不等式の難問を解決し、固有値に関する普遍不等式の研究に対して重要な貢献を与えた。張り詰められた状態でのプレートの振動を表す双調和作用素の Dirichlet 固有値問題の固有値を研究し、固有値に関する最適な上限を得た。さらに、固有値の下限に関する研究に対して、顕著な進展を与えた。</p> <p>3) 一次元弾性体の数学的モデルである Kirchhoff 弾性棒やエラスティカに関して、次のような成果を得た。①高次元空間形内のエラスティカと Kirchhoff 弾性棒を比較し、これらの幾何学的性質に大きな違いがあることを示した。具体的には、4次元以上の空間形において、エラスティカは必ずある3次元全測地的部分多様体の中に収まってしまうことが知られている。これに対し低い次元の全測地的部分多様体に決して収まらないような Kirchhoff 弾性棒を</p>

構成した。②5次元空間形内に、螺旋ではない充満な Kirchhoff 弾性棒が無数存在することを証明し、その自然曲率を sn 関数を用いて具体的に表示した。この結果から Kirchhoff 弾性棒は、単に変分問題の解としてだけでなく、高次元空間形内の曲線論の観点から見ても興味深い例を与えることが分かる。③Kirchhoff 弾性棒は常微分方程式の解であり、初期値問題の大域解の存在問題は、基本的かつ重要な問題である。完備リーマン多様体において、Kirchhoff 弾性棒の方程式の初期値問題を考察し、大域解が一意的に存在することを証明した。④Kirchhoff 弾性棒の、可積分系の観点からの一般化であるソリトン曲線について研究し、次の結果を得た。3次元 Euclid 空間内の準周期的な第4ソリトン曲線を Jacobi の楕円関数によって陽に表した。また、この曲線を用いて空間曲線版変形 KdV 方程式の合同解を構成した。

本研究室全体の活動として、福岡大学微分幾何学セミナーを毎週木曜日定期的に行っている。九州中心とする研究者と大学院生は参加している。

キーワード：リーマン多様体・共形平坦な超曲面・Kirchhoff 弾性棒・固有値・ラプラス作用素

研究室の構成員

陶山芳彦（教授）・理学博士
 成瀬慶明（教授）・博士(理学)
 川久保哲（助教）・博士(理学)
 森 和子（助手）・理学士

2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

2014 年 3 月修士修了者 2 名：

修士論文題目：弾性曲線の測地線論研究、弾性曲線の幾何学的研究

大学院生 (M1) 1 名

研究課題：平均曲率フローの self-shrinker に関する研究

卒業生 15 名

研究課題：極小曲面の安定性、極小曲面に関する Bernstein の定理、変形 KdV 方程式と曲線、空間内の曲面の測地線

教員の担当科目

陶山芳彦：(学部) 微分積分 II 及び演習、幾何学特論、卒業研究 I・II、統計、
 微分積分 II、微分積分 IV

(大学院) 幾何学講究 II (通年)

成瀬慶明：(学部) 幾何学 I、数学総合 I、統計、数学 B、卒業研究 I・II、基礎数学研究、
 微分積分 I 及び演習

(大学院) 現代幾何学入門 I、幾何学講究 I (通年)

川久保哲：(学部) 数学総合 I、数式処理実習、応用線形代数入門、微分積分 II、統計、
 卒業研究 I・II (補助)

森 和子：(学部)：プログラミング I 実習(補助)、教育実習事前・事後指導(補助)、
教職のための数学演習(補助)、数学科教育法Ⅲ(補助)、教員採用試験のため
の勉強会 (補助)

教員の所属学会

陶山芳彦：日本数学会
成瀬慶明：日本数学会
川久保哲：日本数学会
森 和子：情報処理学会

最近 4 年間の学術論文

U. Hertrich-Jeromin and Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of conformally flat hypersurfaces, to appear in Progress in Mathematics, Birkhauser. (査読有)

Qing-Ming Cheng and Y. Peng, Complete self-shrinkers of the mean curvature flow, Calculus of Variations and PDEs., DOI 10.1007/s00526-014-0720-2, published online, 25 Feb. 2014. (査読有)

川久保哲, 第 4 ソリトン曲線について, 2013 年度福岡大学微分幾何研究会報告集 (2014), 3--8.

Satoshi Kawakubo, Kirchhoff elastic rods in five-dimensional space forms whose centerlines are not helices, J. Geom. Phys. 76 (2014), 158--168. (査読有)

U. Hertrich-Jeromin and Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of conformally flat hypersurfaces, 福岡大学微分幾何研究会 2013 報告集, 187--207.

Qing-Ming Cheng and Y. Peng, Self-shrinkers of the mean curvature flow, Proceedings of the workshop on differential geometry of submanifolds and its related topics, World Sci. 2013, pp. 147--163. (査読有)

Qing-Ming Cheng, H. Sun, G. Wei and L. Zeng, Estimates for lower bounds of eigenvalues of the poly-Laplacian and quadratic polynomial operator of the Laplacian, Proc. Royal Soc. Edinburgh, 143A(2013), 1147--1162. (査読有)

Qing-Ming Cheng and Guoxin Wei, Upper and lower bounds for eigenvalues of the clamped plate problem, J. Diff. Eqns., 255(2013), 220--233. (査読有)

川久保哲, 完備 Riemann 多様体内の長さ無限大の Kirchhoff 弾性棒, 福岡大学理学集報 43 (2013), 137--142.

Udo Hertrich-Jeromin and Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces with Bianchi-type Guichard net, Osaka J. Math. 50(2013), 1--30. (査読有)

Qing-Ming Cheng and Yejuan Peng, Estimates for eigenvalues of L operator on self-shrinkers, Comm. Contemporary Math., 15(2013), 1350011-1-1350011-23.. (査読有)

Qing-Ming Cheng, Xuerong Qi and Guoxin Wei, A lower bound for eigenvalues of the poly-Laplacian with arbitrary order, Pacific J. Math., 262(2013), 35--47. (査読有)

Satoshi Kawakubo, Global solutions of the equation of the Kirchhoff elastic rod in space forms, Bull. Aust. Math. Soc. 88 (2013), 70--80. (査読有)

- Satoshi Kawakubo, Congruence solutions to the localized induction hierarchy in three-dimensional space forms, *Osaka J. Math.* 50 (2013), 921--945. (査読有)
- 川久保哲, 完備 Riemann 多様体内の長さ無限大の Kirchhoff 弾性棒, 2012 年度 福岡大学微分幾何研究会報告集 (2013), 1--7.
- Qing-Ming Cheng and Xuerong Qi, Eigenvalues of the Laplacian on Riemannian manifolds, *International J. Math.*, 23(2012), No.7, 1250067-1-1250067-20. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and Hongcang Yang, Universal bounds for eigenvalues of a buckling problem II, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 364(2012), 6139--6158. (査読有)
- Daguang, Chen, Qing-Ming Cheng, Qiaoling Wang and Cangyu Xia, On eigenvalues of a system of elliptic equations and of the biharmonic operator, *J. Math. Anal. Appl.*, 387(2012), 1146--1159. (査読有)
- Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces --- Existence of an associated family and a dual hypersurface---, 2011 年度 福岡大学微分幾何研究会報告集 (2011), 43--50.
- Qing-Ming Cheng and G. Wei, A lower bound for eigenvalues of a clamped plate problem, *Calculus of Variations and PDEs*, 42(2011), 579--590. (査読有)
- Qing-Ming Cheng and Hongcang Yang, Universal inequalities for eigenvalues of a clamped plate problem on a hyperbolic space, *Proc. Amer. Math. Soc.*, 139 (2011), 461--471. (査読有)
- 川久保哲, Kirchhoff 弾性棒の方程式の第一積分と大域解, 福岡大学理学集報 41(2011), 147--153.
- 川久保哲, 5次元空間形内の螺旋でない Kirchhoff 弾性棒, 福岡大学理学集報 41 (2011), 1--6.
- Satoshi Kawakubo, Kirchhoff elastic rods in higher-dimensional space forms, *Proc. Japan Acad. Ser. A Math. Sci.* 87 (2011), 5--9. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Haizhong Li and Guoxin Wei, Embedded hypersurfaces with constant mean curvature in a unit sphere, *Comm. Contemporary Math.*, 12(2010), 997--1013. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Haizhong Li and Guoxin Wei, On some rigidity results of hypersurfaces in a sphere, *Proc. Royal Soc. Edinburgh*, 140A (2010), 477--493. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Xingxiao Li and Xuerong Qi, A classification of hypersurfaces with parallel para-Blaschke tensor in S^{m+1} , *International J. Math.*, 21(2010), 297--316. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Guangyue Huang and Guoxin Wei, Estimates for lower order eigenvalues of a clamped plate problem, *Calculus of Variations and PDEs*, 38(2010), 409--416. (査読有)
- Qing-Ming Cheng, Takamichi Ichikawa and Shinji Mametsuka, Estimates for eigenvalues of a clamped plate problem on Riemannian manifolds, *J. Math. Soc. Japan*, 62(2010), 673--686. (査読有)
- 川久保哲, 5次元空間形内の螺旋でない Kirchhoff 弾性棒, 2010 年度 福岡大学微分幾何研究会報告集 (2011), 1--8.
- 川久保哲, 3次元空間形内の局所誘導階層について, 福岡大学理学集報 40 (2010), 155--161.

最近4年間の学術著書

陶山芳彦編著, 2013年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2014年3月.
 陶山芳彦編著, 2012年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2013年3月.
 陶山芳彦編著, 2011年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2012年3月.
 陶山芳彦編著, 2010年度 福岡大学微分幾何研究会報告集, 2011年3月.

最近4年間の学術国際会議での発表

*は国際会議

- *Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of conformally flat hypersurfaces, March 25, 2014, Fujian Normal University, Fuzhou, China.
- *Qing-Ming Cheng, Critical points of the weighted volume functional, March 25, 2014, Fujian Normal University, Fuzhou, China.
- *Qing-Ming Cheng, A survey on complete self-shrinkers, March 4, 2014, Beijing Normal University, Beijing, China
- *Qing-Ming Cheng, On eigenvalues of Laplace operator, Feb. 28, 2014. Guangxi Normal University. Guilin, China
- *Y. Suyama, Ribaucour pairs corresponding to dual pairs of conformally flat hypersurfaces, International Workshop on Differential Geometry 2014, Feb. 14-16, 2014, Hotel New Imari, Imari.
- *Qing-Ming Cheng, Self-shrinkers of mean curvature flow, International Workshop on Differential Geometry 2014, Feb. 14-16, 2014, Hotel New Imari, Imari.
- 川久保哲, 局所誘導階層の第4ソリトン曲線, 測地線及び関連する諸問題, 2014年1月11日, 熊本大学.
- *Qing-Ming Cheng, The rigidity of complete self-shrinkers of the mean curvature flow, Jan. 3, 2014, South China Normal University, Guangzhou, China.
- *Qing-Ming Cheng, Complete self-shrinkers of the mean curvature flow, The Eleventh Pacific Rim Geometry Conference, December 10-14, 2013, Fudan University, Shanghai, China.
- 川久保哲, 第4ソリトン曲線について, 2013年度福岡大学微分幾何研究会, 2013年11月1日, 福岡大学セミナーハウス.
- 成瀬慶明, 平均曲率フローの完備セルフシュリンカーについて, 九州大学幾何学セミナー, 2013年9月22日, 九州大学
- *Qing-Ming Cheng, Applications of universal estimates for eigenvalues, August 15, 2013, Beijing Normal University, Beijing, China
- *Qing-Ming Cheng, Universal estimates for eigenvalues and applications, ICCM 3013 The Sixth International Congress of Chinese Mathematics, July 14-19, 2013, National Taiwan University, Taipei, Taiwan.
- *Qing-Ming Cheng, Eigenvalues of the eigenvalue problem of Laplacian, Geometric Analysis Workshop 2013, June 3-8, 2013, Ningxia University, Yinchuan, China.
- *Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces --- Existence of an associated family, a dual

hypersurface and a Riccaucour pair---, The Fourth International Workshop on Differential Geometry, 2013年3月26日, 虹ノ松原ホテル.

*Satoshi Kawakubo, Kirchhoff elastic rods of infinite length in a complete Riemannian manifold, The Fourth International Workshop on Differential Geometry, 2013年3月25日, 虹ノ松原ホテル.

*Qing-Ming Cheng, Applications of universal inequalities for eigenvalues, Fudan University, Shanghai, China, March 15, 2013.

*Qing-Ming Cheng, Self-shrinkers of the mean curvature flow, Geometry and topology of submanifolds, Fujian Normal University, Fuzhou, China, November 20-25, 2012.

川久保哲, 完備 Riemann 多様体内の長さ無限大の Kirchhoff 弾性棒, 2012年度 福岡大学微分幾何研究会, 2012年11月1日, 福岡大学セミナーハウス.

Qing-Ming Cheng, Complete self-shrinkers, 2012年度 福岡大学微分幾何研究会, 2012年11月1日-4日, 福岡大学セミナーハウス.

*Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues of the Paneitz operator, The International Conference on Differential Geometry, Fudan University, Shanghai, China, September 21-25, 2012.

川久保哲, 高次元空間形内の Kirchhoff 弾性棒, 第59回幾何学シンポジウム, 2012年8月30日, 九州大学.

*Qing-Ming Cheng, Universal bounds for eigenvalues of Laplacian, Jeju National University, Jeju, Korea, May 4, 2012.

*Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues of L on self-shrinker, Kyungpook National University, Taegu, Korea, May 3, 2012.

*Qing-Ming Cheng, Complete self-shrinkers of the mean curvature flow, Kyungpook National University, Taegu, Korea, May 3, 2012.

川久保哲, 高次元空間形内の Kirchhoff 弾性棒, 第1回室蘭連続講演会, 2012年1月11-13日, 室蘭工業大学.

Qing-Ming Cheng, ラプラシアン固有値の上限と下限について, 松江微分幾何学研究集会 2011, 2011年12月16-17日, 島根大学.

*Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues and applications, Beijing Normal University, Beijing, China, November 22, 2011.

Yoshihiko Suyama, Conformally flat hypersurfaces --- Existence of an associated family and a dual hypersurface---, 2011年度 福岡大学微分幾何研究会, 2011年11月3日, 福岡大学セミナーハウス.

Qing-Ming Cheng, Universal bounds for eigenvalues of the biharmonic operator, 2011年度 福岡大学微分幾何研究会, 2011年11月3--6日, 福岡大学セミナーハウス.

*Qing-Ming Cheng, Universal estimates for eigenvalues of the biharmonic operator, South China Normal University, Guangzhou, China, September, 2011.

川久保哲, Kirchhoff弾性棒の方程式の第一積分と大域解, 福岡大学微分幾何セミナー, 2011年7月7日, 福岡大学.

*Qing-Ming Cheng, A new obstruction on minimal immersions, International workshop on geometry of submanifolds and related topology, Xinxiang Normal University, Henan, China, April 21-24, 2011.

*Qing-Ming Cheng, Estimates for eigenvalues on complete Riemannian manifolds, Differential Geometry and Geometric Analysis, Osaka City University, March 13-15, 2011.

Qing-Ming Cheng, バックリング問題の固有値に関する普遍不等式について, 金沢大学幾何学セミナー, 2010年11月24日, 金沢大学.

川久保哲, 5次元空間形内の螺旋でないKirchhoff弾性棒, 2010年度 福岡大学微分幾何研究会, 2010年10月8日, 福岡大学セミナーハウス.

*Qing-Ming Cheng, A new process on universal estimates for eigenvalues of the buckling problem, Fudan University, Shanghai, China, Sept. 10, 2010.

*Qing-Ming Cheng, Can one hear the shape of a drum? Xianyang Normal University, Xianyang, China, Sept. 1, 2010.

Qing-Ming Cheng, バックリング問題の固有値に関する予想及びその新展望について, 九州大学幾何学セミナー, 2010年7月23日, 九州大学.

Qing-Ming Cheng, バックリング問題の固有値に関する普遍不等式の研究についての新展望, 東北大学幾何学セミナー, 2010年7月13日, 東北大学.

*Qing-Ming Cheng, A conjecture on eigenvalues of the buckling problem, Wuhan University, Wuhan, China, April 30, 2010.

*Qing-Ming Cheng, On eigenvalues of Laplacian, Hubei University, Wuhan, China, April 29, 2010.

最近4年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)

International Workshop on Differential Geometry 2014 2014年2月14~16日
ホテルニュー伊万里 濱田龍義、川久保哲

福岡大学微分幾何研究会、2013年11月1--4日 (福岡大学セミナーハウス) 陶山芳彦

The 9th geometry conference for the friendship of Japan and China, August 31-September 6, 2013, 北海道大学とその他, China: Qing Ding, An-Min Li, Haizhong Li, Changping Wang, Yuanlong Xin, Weiping Zhang, Xi-Ping Zhu and Japan: R. Miyaoka, A. Futaki, T. Mabuchi, Q.M. Cheng, R. Kobayashi, Y. Ohnita, H.Furuhata, K.Shibuya

A memorial symposium for Professor Shoshichi Kobayashi, 2013年5月22~25日 (東京大学) 落合卓四郎 (東京大学)、満渕俊樹 (大阪大学)、前田吉昭 (慶応大) 陶山芳彦 (福岡大学)、他2名

The Fourth International Workshop on Differential Geometry 2013年3月25~28日 唐津市虹の松原ホテル 成瀬慶明、川久保哲、陶山芳彦

Seminar on Differential Geometry of Submanifolds 2013年2月13日~23日 福岡大学 成瀬慶明

福岡大学微分幾何研究会 2012 2012年11月1日～4日 福岡大学 陶山芳彦

第59回幾何学シンポジウム 2012年8月27日～30日 九州大学 納谷信(名古屋大学)、成瀬慶明(福岡大学)、芥川和雄(東北大学)、梅原雅頭(東京工業大学)、小磯深幸(九州大学)、勝田篤(九州大学)

部分多様体の微分幾何学及び関連課題 2012年8月4日～6日 佐賀大学 成瀬慶明(福岡大学)、足立俊明(名古屋工業大学)、庄田敏宏(佐賀大学)、坊向伸隆(東京理科大学)、奥村和浩(旭川工業高等専門学校)

福岡大学微分幾何研究会 2011 2011年11月3日～6日 福岡大学 陶山芳彦

福岡大学微分幾何研究会2010 2010年11月8日～11日 福岡大学 陶山芳彦

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

科学研究費(基盤研究(C))2014年度～2017年度

研究課題: 共形平坦な超曲面の双対性と変換の研究

研究代表者: 陶山芳彦

総額: 360万円(直接経費)

科学研究費(基盤研究(C))2009年度～2013年度

研究課題: 4次元空間形内の共形平坦な超曲面の研究

研究代表者: 陶山芳彦

総額: 310万円(直接経費)

科学研究費(基盤研究(C))2008年度～2010年度

研究課題: 部分多様体の幾何学とリーマン多様体上の微分作用素の固有値理論との融合及び発展

研究代表者: 成瀬慶明

総額: 340万円(直接経費)

科学研究費(基盤研究(B))2012年度～2016年度

研究課題: 幾何学と固有値理論に関する最先端的な研究

研究代表者: 成瀬慶明

総額: 1210万円(直接経費)

科学研究費(挑戦的萌芽研究)2013年度～2015年度

研究課題: 平均曲率フローのセルフ-シュリンカーとその応用に関する挑戦的研究

研究代表者: 成瀬慶明

総額: 300万円(直接経費)

科学研究費(基盤研究(C))2011年度～2014年度

研究課題: 空間形内のキルヒホッフ弾性棒を中心とした1次元弾性体の研究

研究代表者: 川久保哲

総額: 330万円(直接経費)

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
<p>研究推進部領域別研究 2013年度～2015年度 研究チーム名：幾何学とその応用に関する研究チーム 研究課題：幾何学とその応用に関する研究 研究代表者：成瀬慶明</p> <p>研究推進部領域別研究 2009年度～2012年度 研究チーム名：超曲面論とその応用 研究課題：超曲面論とその応用 研究代表者：陶山芳彦</p> <p>理学部大学院高度化推進事業 研究科分 2013年度 研究課題：多様体上の幾何学研究及び非可換微分幾何の研究 研究代表者：陶山芳彦</p> <p>理学部大学院高度化推進事業 外国人研究者招へい 2013年度 招へい者：Li Haizhong (清華大学：教授) 招へい担当者：成瀬慶明</p> <p>理学部大学院高度化推進事業 外国人研究者招へい 2012年度 招へい者：Udo Hertrich-Jeromin (ウィーン工科大学：教授) 招へい担当者：陶山芳彦</p>
最近4年間の学会等学術団体における役職など
<p>成瀬慶明 日本数学会全国区代議員 2013年度 日本数学会幾何学分科会 評議員 2013年度 日本数学会全国区代議員 2012年度 日本数学会幾何学分科会 評議員 2012年度</p>
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

研究室名
解析・関数解析研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>井上、黒瀬、高倉は、非有界作用素環とその量子物理学への応用について、研究している。Hilbert 空間上の準閉作用素のつくる $*$-代数 ($0*$-代数), 部分 $*$-代数 (部分 $0*$-代数) は純粋に数学的な立場だけでなく量子物理への応用の面からも重要であり, 多くの数学者・物理数学者により研究されている。もちろん, 多くの未解決問題があり, 我々はそれらの解決のため, F. Bagarello (パレルモ大), S. J. Bhatt (パーテル・ステール大, インド), M. Fragoulopoulou (アテネ大), W. Karwowski (ブロッツラフ大, ポーランド), K. D. Kuersten, K. Schmuedgen (ライプチヒ大), C. Trapani (パレルモ大) 等と共同研究をしている。</p> <p>井上は, $0*$-代数のクロス積, $GW*$-代数の分類について M. Fragoulopoulou, K. D. Kuersten と, また, F. Bagarello, C. Trapani と一般化された Weyl relation について共同研究をすすめている。</p> <p>黒瀬は, 非有界作用素環の立場から量子群の研究をすすめている。</p> <p>高倉は, weak Weyl commutation relation をみたす 2 つの可閉な非有界作用素から生成される部分 $0*$-代数の構造について研究をすすめている。</p> <p>福嶋は, 多変量の複素解析について, 正則関数や正則写像の接続について研究している。特に, 多重調和関数や多重調和写像についても正則関数や正則写像と同様に議論できることを調べている。</p> <p>キーワード: 非有界 $*$-代数, $C*$-代数, 複素解析</p>
研究室の構成員
<p>井上 淳 (教授)・理学博士 黒瀬秀樹 (教授)・理学博士 福嶋幸生 (教授)・博士 (数理学) 高倉真由美 (助教)・博士 (理学)</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M1: 2 名 Hilbert 空間上の非有界作用素 M2: 1 名 Closed linear operators defined by Riesz basis (修士論文) 4 年次生: 9 名 Hilbert 空間上の有界線形作用素, 信号処理</p>
教員の担当科目
<p>井上 淳: (学部) 解析学 I, 数学総合 I, 解析学特論, 基礎数学研究, 卒業研究 I・II (大学院) 関数解析学講究 I・II 黒瀬秀樹: (学部) 数学科教育法 I, 基礎数学研究, 卒業研究 I・II 福嶋幸生: (学部) 関数論 I・II, 数学科教育法 II, 数学総合 III, 基礎数学研究 (大学院) 複素解析学特論 I 高倉真由美: (学部) 基礎微分積分及び演習, 微分積分 I 及び演習, 数学総合 I</p>

教員の所属学会
井上 淳：日本数学会 黒瀬秀樹：日本数学会 福嶋幸生：日本数学会 高倉真由美：日本数学会
最近4年間の学術論文
F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Non-selfadjoint hamiltonians defined by Riesz bases. J. Math. Physics 55 (2014), 12pp. (査読有) F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Weak commutation relations of unbounded operators : Nonlinear extensions, J. Math. Phys. 53 (2012), 14pp. (査読有) F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Induced and reduced unbounded operator algebras, Annali di Matematica Pura ed Applicata 191 (2012), 285--292. (査読有) F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Representable linear functionals on partial *-algebras Mediterranean J. Math. 9(2012), 153-163. (査読有) S.J. Bhatt, A. Inoue and H. Ogi, Differential Structures in C*-algebras, J. Operator Theory 66(2011), 101--134. (査読有) F. Bagarello, A. Inoue and C. Trapani, Weak commutation relations of unbounded operators and applications, J. Math. Phys. 52(2011), 14pp. (査読有)
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術(国際)会議での発表
該当なし
最近4年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)
高度化推進講演会、2014年3月6日、福岡大学理学部、 講演者 廣島 文生 (九州大学) 題 目 Time operators associated with semi-bounded self-adjoint operators 主催者 井上 淳 高度化推進講演会、2013年9月13日、9月16日、福岡大学理学部、 講演者 Klaus-Detlef Kuersten (ライプチヒ大学) 題 目 Crossed products of algebras of unbounded operators I, II 主催者 井上 淳 高度化推進講演会、2012年5月29日、6月5日、福岡大学理学部、 講演者 Fabio Bagarello (パレルモ大学) 題 目 Recent works on the pseudo-bosons I, II 主催者 井上 淳

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
<p>科学研究費（基盤研究（C））2012年度～2015年度 研究課題：非有界作用素環のクロス積とGW*-代数の構造 研究代表者：井上 淳</p> <p>科学研究費（基盤研究（C））2008年度～2011年度 研究課題：非有界作用素の構造と表現 研究代表者：井上 淳</p>
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
<p>研究推進部領域別研究 2012年度～2014年度 研究チーム名：非有界作用素環 研究課題：非有界作用素環のクロス積の研究 研究代表者：井上 淳</p> <p>研究推進部領域別研究 2009年度～2011年度 研究チーム名：応用関数解析 研究課題：関数解析学の応用に関する研究 研究代表者：黒瀬秀樹</p>
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
微分方程式研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>自然現象、社会現象、生物現象、もの作りのための設計・制御等をモデル化し、数式で表現すると微分方程式が得られる。するとこれらの微分方程式を解析的に(数式のみで)あるいは数値計算を援用して「解く」、「その性質を調べる」必要が生じる。</p> <p>山田は障害物条件を課した変分不等式を粘性解の手法で取り扱う研究に取り組んだ。時間発展項にも劣微分による制限条件のついた場合を主に調べた。</p> <p>田中は空間の領域の形状が滑らかではなく、角や尖点などの特異性を持つ場合に、領域の幾何学的な特異性がどのように解の解析的な特異性に伝わるかという点に重点を置き、流体力学に現れる代表的な非線型の偏微分方程式について考察した。</p> <p>三竹は広い意味のハミルトンヤコビ方程式やその弱結合系について粘性解と呼ばれる広義解の時間大域的な挙動、均質化などの諸性質を考察した。用いた手法は弱 KAM 理論による特異点集合の解析、ラグランジュ力学的な観点からの方程式の再構成、共役法による補助関数の導入など多岐にわたっており、精力的に研究を進めた。2013 年度には H. V. Tran(Univ. Chicago), D. Gomes(Lisbon Inst. Sup. Tec.), A. Cesaroni(Univ. Padova) が来学し、共同研究を行った。さらに G. Barles(Univ. Tour), H. Ishii (Waseda Univ.), Y. Giga(Univ. Tokyo) 等との共同研究を継続した。</p> <p>小林は有限要素法、境界要素法を用いて偏微分方程式の逆問題について数値解析的な研究を遂行した。</p> <p>キーワード：変分不等式、粘性解、流体力学、ハミルトン・ヤコビ方程式、弱 KAM 理論</p>
研究室の構成員
<p>山田直記（教授）・理学博士</p> <p>田中尚人（教授）・博士（理学）</p> <p>三竹大寿（助教）・博士（理学）2013 年 10 月まで在籍、11 月から広島大学に転出</p> <p>小林錦子（助手）・理学士</p>
2013 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4 年次生：7 名：熱伝導方程式、波動方程式</p> <p>大学院 1 年次生：1 名：動く曲面を追いかけて</p>
教員の担当科目
<p>山田直記：(学部) 解析学Ⅱ、数学特論（応用数学科）、 微分方程式（経済学部）、行列と行列式Ⅰ、Ⅱ（工学部）、数学 A（理学部） (大学院) 偏微分方程式特論Ⅰ,Ⅱ</p> <p>田中尚人：(学部) 基礎数学研究、微分積分Ⅲ、数理ファイナンス（応用数学科）、 統計入門（共通教育）、数理統計（共通教育）</p>

<p>(大学院) 現代解析学入門 I, II</p> <p>三竹大寿 : (学部) 数学総合 I、数学 A (理学部)、行列と行列式 I (工学部)</p>
<p>教員の所属学会</p> <p>山田直記 : 日本数学会、American Mathematical Society, International Foundation of Nonlinear Analysis</p> <p>田中尚人 : 日本数学会</p> <p>三竹大寿 : 日本数学会</p> <p>小林錦子 : 日本応用数理学会、日本計算数理工学会</p>
<p>最近 4 年間の学術論文</p> <p>H. Mitaka(with G. Barles and H. Ishii) A new PDE approach to the large time asymptotics of solutions of Hamilton-Jacobi equations, Bull Math. Sci., 3 (2013) 363—388. (査読有)</p> <p>H. Mitake (with G. Barles and H. Ishii) On the large time behavior of solutions of Hamilton-Jacobi equations associated with nonlinear boundary conditions, Arch. Ration. Mech. Anal., 204 (2012), 515--558. (査読有)</p> <p>H. Mitake (with G. Barles and O. Ley) Short time uniqueness results for solutions of nonlocal and non-monotone geometric equations, Math. Ann., 352(2012), 409--451. (査読有)</p> <p>H. Mitake (with G. Barles) A PDE approach to large-time asymptotics for boundary-value problems for nonconvex Hamilton-Jacobi equations, Comm. Partial Differential Equations., 37(2012), 136--168. (査読有)</p> <p>H. Mitake (with Y. Giga and Q. Liu) Large-time asymptotics for one-dimensional Dirichlet problems for Hamilton-Jacobi equations with non-coercive Hamiltonians, J. Differential Equations, 252(2012), 1263--1282. (査読有)</p> <p>H. Mitake (with H. V. Tran) Remarks on the large time behavior of viscosity solutions of quasi-monotone weakly coupled systems of Hamilton--Jacobi equations, Asymptot. Anal., 77(2012), 43--70. (査読有)</p> <p>H. Mitake On convergence rates for solutions of approximate mean curvature equations, Proc. Amer. Math. Soc., 139(2011), 3691--3696 (査読有) .</p> <p>N. Yamada, An idea of the proof of the comparison principle of viscosity solutions for doubly nonlinear Hamilton-Jacobi equations, Proceedings of Seminar on Partial Differential Equations in Osaka 2012 (In honor of Professo Hiroki Tanabe's 80th birthday), Yafi Laboratory, Osaka Univ. 2013, 183—188. (査読無)</p> <p>N. Yamada (with K. Maruo) Existence of non-radially symmetric viscosity solutions to semilinear degenerate elliptic equations with radially symmetric coefficients in the plane, Part II, Diff. Eq. Appl., 2(2010), 377--408. (査読有)</p> <p>N. Tanaka (with M. Kurokiba, A. Tani) Maximal attractor and initial sets for Eguchi-Oki-Matsumura equation, J. MATH. ANAL. APPL., 365(2010), 638--645. (査読有)</p>

最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
<p>*は国際会議</p> <p>*H. Mitake, A new method for large-time asymptotics for degenerate viscous Hamilton-Jacobi equations by the nonlinear adjoint technique, Fukae workshop on partial differential equations, Jan. 25, 2013, Kobe University.</p> <p>*H. Mitake, A dynamical approach to the large time asymptotics for weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations, Weak KAM Theory and Related Topics, Jan. 16, 2013, Univ. Tokyo.</p> <p>H. Mitake (with H. Ishii, G. Barles) ハミルトン・ヤコビ方程式に対する非線形ノイマン型境界値問題の解の長時間挙動、2012年度日本数学会秋季総合分科会、2012年9月20日、九州大学</p> <p>H. Mitake (with H. Tran) ハミルトン・ヤコビ方程式の弱結合型システムに関する漸近問題、2012年度日本数学会秋季総合分科会、2012年9月20日、九州大学</p> <p>H. Mitake, ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間挙動：力学的アプローチ、第9回ハミルトン力学系セミナー、2012年3月7日、大阪大学</p> <p>H. Mitake, Homogenization of weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations with fast switching rates, 非線形偏微分方程式研究会、2012年3月5日、早稲田大学</p> <p>H. Mitake, Homogenization of weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations with fast switching rates, 第5回若手のための偏微分方程式と数学解析、2012年2月14日、九州大学</p> <p>H. Mitake, ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間挙動の応用と最近の発展、第6回岐阜数理科学セミナー、2012年2月10日、岐阜大学</p> <p>H. Mitake, 結晶成長をモデルとした非強圧的ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間挙動、第5回RDSセミナー、2012年1月30日、明治大学</p> <p>*H. Mitake, Large time asymptotics for noncoercive Hamilton-Jacobi equations in crystal growth, Dynamical Optimization in PDE and Geometry, Applications to Hamilton Jacobi, Ergodic Optimization, Weak KAM, Dec. 17, 2011, Institut de Mathematiques, Universite Bordeaux 1.</p> <p>N. Yamada, 2重非線形ハミルトンヤコビ方程式の粘性解について、北九州地区における偏微分方程式研究集会、2011年11月13日、北九州工業大学</p> <p>H. Mitake, ハミルトン・ヤコビ方程式に現れる解の漸近的単調性、第1回室蘭非線形解析セミナー、2011年10月28日、室蘭工業大学</p> <p>H. Mitake, 非凸型Hamilton-Jacobi方程式に対する境界値問題の解の長時間挙動、2011年度日本数学会秋季総合分科会、2011年9月29日、信州大学</p>

H. Mitake, 近似平均曲率流方程式の解に対する収束率、
2011年度日本数学会秋季総合分科会、2011年9月29日、信州大学

*H. Mitake, Large-time asymptotics for Hamilton-Jacobi equations with noncoercive Hamiltonians appearing in crystal growth, The 4th Mathematical Society of Japan Seasonal Institute, Sept. 15, 2011, Kyushu University.

*H. Mitake, On the large time behavior of solutions of weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations, Front propagation, biological problems and related topics: viscosity solution methods for asymptotic analysis, Sept. 9, 2011, Hokkaido University.

H. Mitake, On the large time asymptotics for weakly coupled systems of Hamilton-Jacobi equations, PDE Seminar in U. C. Berkeley, Apr. 15, 2011, Berkeley U. S. A.

*H. Mitake, Review and recent works on the large time asymptotics for Hamilton-Jacobi equations, Seminar at Mathematical Sciences Research Institute, Apr. 11, 2011, Berkeley, U. S. A.

H. Mitake, On the large-time asymptotics for nonconvex Hamilton-Jacobi equations, PDE Seminar in U. C. Berkeley, Jan. 28, 2011, Berkeley U. S. A.

最近4年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)

第31回九州における偏微分方程式研究集会、2014年1月27—29日、福岡大学メディカルホール
世話人：山田直記
講演者：柴田良弘（早稲田大）、Shu Wang(Beijin Univ. Tech.), Heinrich Freistuehler(Univ. Konstanz), 赤木剛朗(神戸大)川下美潮(広島大)、谷口雅治(岡山大)、Ghao-Nien Chen(Nat. Changhua Univ. Edu.), 柳田英二（東京工業大）、前田昌也（千葉大）、三竹大寿（広島大）、中西賢次（京都大）、久保英夫（北海道大）、片山聡一郎（和歌山大）
題目：多数のため略
URL: www2.math.kyushu-u.ac.jp/FE-Seminar/kyu-pde/

第30回九州における偏微分方程式研究集会、2013年1月29--31日、福岡大学2号館、
世話人：山田直記
講演者：柴田徹太郎（広島大）、小川知之（明治大）、田中和永（早稲田大）、前川泰則（神戸大）、M. Paicu(Univ. Bordeaux 1)、谷温之（慶応大）、杉山由恵（九州大）、石下和弘（東北大）、小野寺栄治（高知大）、眞崎聡（広島大）、林仲夫（大阪大）、中村誠（東北大）、片山聡一郎（和歌山大）
題目：多数のため略
URL: www2.math.kyushu-u.ac.jp/FE-Seminar/kyu-pde/

The 4th Mathematical Society of Japan Seasonal Institute Nonlinear Dynamics in Partial Differential Equations (第4回 日本数学会季期研究所 偏微分方程式における非線形ダイナミクス)、
2011年9月12日～21日、九州大学医学部百年記念講堂、
Member of Organizing Committee：山田直記、田中尚人
講演者: Plenary speakers 5名、Invited speakers 18名、Speakers in Organized session

<p>38名、Contributed speakers 51名。 講演題目：多数のため略 URL:http://www2.math.kyushu-u.ac.jp/~tohru/msjsi11/</p>
<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p> <p>学術振興会、研究活動スタート支援、2012年度～2013年度 研究課題：完全非線形偏微分方程式系の漸近問題に関する解析 研究代表者：三竹大寿</p> <p>科学研究費（基盤研究(C)) 2008年度～2010年度 研究課題：角がある領域における非定常 Navier-Stokes 方程式の数学解析 研究代表者：田中尚人</p> <p>住友財団研究助成金、2012年度 研究課題：完全非線形偏微分方程式の弱結合系の解構造解析と漸近問題への応用 研究代表者：三竹大寿</p> <p>学術振興会、特別研究員奨励費、2010年度～2011年度 研究課題：非局所2階完全非線形偏微分方程式に対する粘性解理論 研究代表者：三竹大寿</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p> <p>大学院高度化推進経費外国人特別招聘 2013年度 招聘者氏名（所属）：Diogo A. Gomes (Instituto Superior Tecnico, Professor; King Abdullah University of Science and Technology, Professor)</p> <p>研究推進部領域別研究 2013年度～2015年度 研究課題名：非線形偏微分方程式 研究代表者：田中尚人</p> <p>研究推進部領域別研究 2010年度～2012年度 研究課題名：流体力学の数理 研究代表者：田中尚人（2012年度は山田直記に変更）</p> <p>大学院高度化推進経費 研究科特別経費 2011年度 研究課題名：微分方程式に対する粘性解の理論の展開と関連分野への応用 研究代表者：山田直記</p> <p>大学院高度化推進経費 外国人特別招聘 2010年度 招聘者氏名（所属）：Albert Fathi (Ecole Normale Supérieure de Lyon, Professor)</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>山田直記：九州関数方程式セミナー：世話人 Mathematical Review: Reviewer Applied Mathematical Analysis: Editorial Board</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など 該当なし</p>

最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
山田直記 高校生に向けた模擬講義---多数（2013年度14回、2012年度15回など）
その他特筆事項
三竹大寿 2011年度日本数学会建部賢弘賞（2011年9月29日） 業績題目：ハミルトン・ヤコビ方程式の解の長時間漸近挙動の研究

研究室名
応用数理研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>応用数理研究室では、確率・統計に関する研究を行っている。統計多様体の幾何構造を調べる情報幾何学も本研究室の主要研究分野である。連続から離散への拡張を含み、研究成果は実データの解析に応用されている。</p> <p>渡辺は、古典的な確率近似法を主に含むより一般化した確率近似過程の定式化とその応用に関する研究を進めている。特に観測誤差列が従属確率変数列により構成されている場合の近似過程の収束性を中心に考察している。これらの定式化により、従属確率変数列に関する大数の法則やノンパラメトリックな確率密度関数の推定等に適用可能になる。</p> <p>田中は、指数型分布族と非指数型分布族を統一的に扱うことができるような情報幾何学の枠組みを具体的に構成し、一般的な統計多様体の余次元1のはめ込みに関してさまざまな幾何学的性質を調べている。また、q-指数型分布族のフラクタルのような自己相似型構造を発見し、その統計的な意義について考察を進めている。さらに、この情報幾何学の枠組みを他分野へ応用することを視野に入れながら研究を進めている。</p> <p>杉万は、確率添字の列を伴った確率要素列の極限定理を得るための条件の研究を行っている。特に、確率過程の逐次観測に対する妥当な停止規則の構成方法を与えることを目的として、種々の極限定理に導入が可能な確率添字の列の発散の速さの評価を与えることを目指している。</p> <p>松浦は、曲線と曲面の差分幾何について離散可積分系の立場から研究を進めている。とくに離散的な幾何学的オブジェクトの運動を統制するための新しい数学的枠組みを作ることにより、産業技術と数理とを結ぶ分野のひとつを構築することを目指している。</p> <p>保坂は、神経系で観測されたデータについて統計的観点から解析を行なっている。特に、点過程・非線形振動子・非線形力学系を用いた観測データの数理モデル化、同期・因果性の推定、行動と統計量の相関の解析を行ない、局所神経回路のネットワーク構造・ダイナミクスを推定を行なっている。</p> <p>キーワード：確率近似法、従属確率変数列、大数の法則、統計的推測、パターン認識、情報幾何学、極限定理、確率添字、逐次推定、差分幾何、離散可積分系、計算論的神経科学</p>
研究室の構成員
渡辺正文（教授）・理学博士 田中 勝（教授）・理学博士 杉万郁夫（准教授）・博士（理学） 松浦 望（助教）・博士（情報科学） 保坂亮介（助教）・博士（工学）
2013 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生：10 名

<ul style="list-style-type: none"> ・実験計画法 ～新たな方法論へのアプローチ～ ・結婚問題におけるよりよいマッチングの提案 ・囚人のジレンマ ～人は賢くなれるのか～ ・シミュレーションによる戦術分析 ～プロの送りバントは必要なのか～ ・利益を最大化する在庫管理方式 ・ポートフォリオ最適化問題 ・究極のクラス編成法 ・小売店におけるシフトスケジュール問題 ・葉身のモデル化と葉脈角の分析 ・Izhikevich ニューロンモデルによる確率共鳴
教員の担当科目
<p>渡辺正文：(学部) 数学総合I、確率、統計入門、数理統計、数理統計I・II、多変量解析、基礎数学研究</p> <p>田中 勝：(学部) 数理モデルI・II、応用線形代数、応用微分積分、統計、行列と行列式II、情報数学特論、情報システム論II、統計入門、システム分析特論・実習、基礎数学研究</p> <p>杉万郁夫：(学部) 統計入門、情報と社会、統計、統計入門、離散数学、データ解析特論・実習、リスク管理の数理、基礎研究I・II、卒業研究I・II</p> <p>松浦 望：(学部) 社会数理のための数学実習III、統計、データ処理実習</p> <p>保坂亮介：(学部) 微分積分III、情報実習、社会数理のための数学実習II</p>
教員の所属学会
<p>渡辺正文：日本数学会</p> <p>田中 勝：電子情報通信学会，日本神経回路学会</p> <p>杉万郁夫：日本数学会、統計科学研究会</p> <p>松浦 望：日本数学会、日本応用数理学会</p> <p>保坂亮介：電子情報通信学会，北米神経科学学会</p>
最近4年間の学術論文
<p>井ノ口順一，梶原健司，松浦望，太田泰広，空間離散曲線の等周変形と離散K曲面，応用力学研究所研究集会報告25A0-S2 (2014)，pp. 1--7. (査読有)</p> <p>Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Arm-use dependent lateralization of gamma and beta oscillations in primate medial motor areas,” Neural Networks, 2014. (accepted) (査読有)</p> <p>保坂亮介，中島敏，虫明元，“運動野におけるベータリズムとガンマリズム,” Clinical Neuroscience, 2014. (accepted)</p> <p>Toshi Nakajima, Ryosuke Hosaka, Ichiro Tsuda, Jun Tanji, and Hajime Mushiake, “Two-dimensional representation of action and arm sequences in the pre-supplementary and supplementary motor areas,” Journal of Neuroscience, Vol. 33, pp.15533--15544, 2013.(査</p>

読有)

Shin-ichiro Osawa, Masaki Iwasaki, Ryosuke Hosaka, Yoshiya Matsuzaka, Hiroshi Tomita, Toru Ishizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura, Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, "Optogenetically Induced Seizure and the Longitudinal Hippocampal Network Dynamics," PLoS One, Vol.8(4), e60928, 2013. (査読有)

田中 勝, "τ-情報幾何学: 可測関数空間上の平行移動," PRMU/CNR研究会, 2014.2.13, 福岡大学, 信学技報, vol. 113, no. 431, PRMU2013-133, pp. 67-72, 2014年2月.

田中 勝, "エントロピーと非加法性," PRMU/IBISML/IPSJ-CVIM研究会, 2013.9.2, 鳥取大学, 信学技報, vol. 113, no. 196, PRMU2013-39, pp. 39-46, 2013年9月.

田中 勝, "エスコート分布と期待値," PRMU/IBISML/IPSJ-CVIM研究会, 2013.9.2, 鳥取大学, 信学技報, vol. 113, no. 196, PRMU2013-38, pp. 31-38, 2013年9月.

城真範, 藤木淳, 赤穂昭太郎, 田中勝, "来るべき宇宙世紀へ向けて - 亜光速下における画像からの静止系座標 -, " 日本物理学会年次大会予稿集, 13aSP-7, 2012.

藤木淳, 城真範, 赤穂昭太郎, 田中勝, "準光速で等速直線運動するカメラの幾何学," Proc. of MIRU2012, IS3-28, 2012.

松浦望, 曲線と曲面の差分幾何, 日本応用数理学会論文誌, Vol. 23, No. 1, 2013, pp. 55~107 (査読有)

Jun-ichi Inoguchi, Kenji Kajiwara, Nozomu Matsuura, and Yasuhiro Ohta, Motion and Bäcklund transformations of discrete plane curves, Kyushu Journal of Mathematics 66 (2012), pp. 303--324. (査読有)

松浦望, 曲線の差分幾何, 数理解析研究所講究録別冊B30(2012), pp. 053--075. (査読有)

Nozomu Matsuura, Discrete KdV and discrete modified KdV equations arising from motions of planar discrete curves, International Mathematics Research Notices 2012 (2012), pp. 1681-1698. (査読有)

Jun-ichi Inoguchi, Kenji Kajiwara, Nozomu Matsuura, and Yasuhiro Ohta, Explicit solutions to semi-discrete modified KdV equation and motion of discrete plane curves, Journal of Physics A: Mathematical and Theoretical 45 (2012), 045206 (16pp). (査読有)

Ryosuke Hosaka, Shin-ichiro Osawa, Masaki Iwasaki, Yoshiya Matsuzaka, Hiroshi Tomita, Toru Ishizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura, Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, "Causality analysis in Epileptic Seizure Genesis," Proceedings of Nonlinear Theory and its Applications, pp.543-546, 2012. (査読有)

Ryosuke Hosaka, "Responses of the two-dimensional Hindmarsh-Rose model," 信学技報, NLP2011-161, 2012.

<p>Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Modulation of LFP oscillations at a novel movement in the primate medial motor cortex," 信学技報, NC2011-49, 2011.</p> <p>田中 勝, "q-正規分布とそのエスコート分布との関係について -- エスコート分布とは何なのか? --," 信学技法, 2010.</p> <p>Masaru Tanaka, "Meaning of an escort distribution and τ-transformation," Journal of Physics: Conference Series vol.201, 012007, 2010.</p> <p>Nozomu Matsuura, A discrete analogue of the affine Bäcklund transformation, Fukuoka university science reports 40 (2010), pp. 163--173.</p> <p>Ryosuke Hosaka, Yutaka Sakai, and Kazuyuki Aihara, "Strange responses of the 2-dimensional Hindmarsh-Rose model to fluctuated inputs," 日本電気学会予稿集, 2010.</p> <p>保坂亮介, 中島敏, 虫明元, 合原一幸, 山口陽子, "新規運動準備期に見られる内側運動野LFPのβ振動の減少," 日本物理学会年次大会予稿集, 2010.</p>
<p>最近4年間の学術著書</p> <p>Daiki Tanaya, Masaru Tanaka, and Hiroshi Matsuzoe, "Notes on geometry of q-normal distributions", in Recent progress in differential geometry and its related fields, pp.137-149, World Sci. Publ., Hackensack, NJ, 2012; MR2882536</p> <p>松浦望, Discrete differential geometry of curves, 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2012, 井ノ口順一・太田泰広・笈三郎・梶原健司・松浦望(編), COE Lecture Note Vol. 40, Kyushu University, pp. 75--86, 2012.</p>
<p>最近4年間の学術国際会議での発表</p> <p>*は国際会議</p> <p>梶原健司, 黒田利信, 松浦望, 平面離散曲線の等角変形と離散Burgers階層, 第10回日本応用数理学会研究部会連合発表会(京都大学), 2014年3月20日.</p> <p>井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, 離散mKdV方程式と離散sine-Gordon方程式による空間離散曲線の変形, 日本数学会2014年度年会(学習院大学), 2014年3月16日.</p> <p>松浦望, 曲線の離散微分幾何, 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2014(九州大学), 2014年2月22--23日.</p> <p>松浦望, 空間離散曲線の等周等距離変形と離散K曲面, 福岡微分幾何研究会(福岡大学セミナーハウス), 2013年11月2日.</p> <p>井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, 空間離散曲線の等周変形と離散K曲面, 平成25年度九大応力研共同利用研究集会「非線形波動研究の拡がり」(九州大学), 2013年10月31日.</p> <p>井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, Discrete mKdV flow on discrete space curves, 日本応用数理学会2013年度年会(アクロス福岡), 2013年9月9日.</p> <p>*Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, "Laterality of LFP Oscillations in Medial Motor Area of Monkey," International</p>

Conference on Energy, Environment and Human Engineering, Yangon, Myanmar, Dec, 21-23, 2013.

Nozomi Sugiura, Kantaro Fujiwara, Ryosuke Hosaka, Kenya Jinno, Tohru Ikeguchi, “Estimation of Lyapunov exponents in chaotic response of the Izhikevich neuron model,” 電子情報通信学会非線形問題研究会, HongKong City University, HongKong, Dec 6-7, 2013.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, Hajime Mushiake, “Different lateralization of gamma and beta oscillations in primate medial motor area,” 電子情報通信学会非線形問題研究会, HongKong City University, HongKong, Dec 6-7, 2013.

*Toshi Nakajima, Haruka Arisawa, Ryosuke Hosaka, Keisetsu Shima, Hajime Mushiake, “The influence of arm-movement preparation on interhemispheric beta synchronization in the medial motor areas,” Annual Meeting of SfN, San Diego, USA, Nov.9-13, 2013.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Laterality of Gamma-Oscillations in Primate Medial Motor Area during Visually-Guided Movements,” 電子情報通信学会ソサイエティ大会, 福岡工業大学, Sep 17-20, 2013.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Modulation of Beta and Gamma Oscillations of LFP in Monkey Medial Motor cortex,” 回路とシステムワークショップ, 淡路島, July 29-30, 2013.

杉浦希望, 藤原寛太郎, 保坂亮介, 池口徹, “Izhikevichニューロンにおけるカオス応答とその解析,” 電子情報通信学会 非線形問題研究会, 宮古島, July 7-8, 2013.

Ryosuke Hosaka, Shin-ichiro Ohsawa, Masaki Iwasaki, Yoshiya Matsuzaka, Hiroshi Tomita, Toru Izhizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, “Continuous Time Causality analysis and its application to epileptic seizure genesis,” 電子情報通信学会 非線形問題研究会, 宮古島, July 7-8, 2013.

*Haruka Arisawa, Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, and Hajime Mushiake, International Conference on Cognitive Neurodynamics, Sigtuna, Sweden, June 23-27, 2013.

*Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Laterality of Gamma-Oscillations in Primate Supplementary Motor Area during Performance of Visually-Guided Movements,” International Conference on Cognitive Neurodynamics, Sigtuna, Sweden, June 23-27, 2013.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Laterality of Gamma-Oscillations in Monkey Medial Motor Cortex,” 電子情報通信学会 非線形問題研究会, 福岡大学, May 27-28, 2013.

*Nozomu Matsuura, Discrete differential geometry of curves and surfaces, The Fourth International Workshop on Differential Geometry, Niji Matsubara Hotel, March 27, 2013.

*Ryosuke Hosaka, Shin-ichiro Osawa, Masaki Iwasaki, Yoshiya Matsuzaka, Hiroshi Tomita,

Toru Ishizuka, Eriko Sugano, Eiichi Okumura, Hiromu Yawo, Nobukazu Nakasato, Teiji Tominaga, and Hajime Mushiake, “Causality analysis in Epileptic Seizure Genesis,” International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications (NOLTA), Spain, Oct.22-26, 2012.

*Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Reciprocal activation of beta and gamma oscillations in primate medial motor areas,” Annual Meeting of SfN, New Orleans, Oct.13-17, 2012.

*Toshi Nakajima, Ryosuke Hosaka, Ichiro Tsuda, Jun Tanji, and Hajime Mushiake, “Modular representation of multiple motor sequences based on action and effector use in the medial motor areas,” Annual Meeting of SfN, New Orleans, Oct.13-17, 2012.

松浦望, 曲線と曲面の差分幾何, 計算による数理学の展開2013 (神戸大), 2012年12月27日.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, 空間曲線の等周変形と τ 関数による明示公式, 日本応用数学会2012年度年会 (稚内全日空ホテル), 2012年8月29日.

松浦望, 曲線の差分幾何, 第59回幾何学シンポジウム (九州大学), 2012年8月28日.

Ryosuke Hosaka, “Responses of the two-dimensional Hindmarsh-Rose model,” 電子情報通信学会 非線形問題研究会, 五島列島, March 27-28, 2012.

*Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Modulation of LFP oscillations during updating a motor plan in the primate medial motor cortex,” The 11th Japan-Korea-China Joint Workshop On Neurobiology and Neuroinformatics, OIST, Dec.18-19, 2011.

井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, 離散空間曲線の等周変形と semi-discrete modified KdV 方程式, 日本数学会2012年度年会 (東京理科大), 2012年3月28日.

松浦望, 曲線の離散微分幾何, 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2012 (九州大学), 2012年2月23日.

松浦望, 空間折線の変形, 福岡微分幾何研究会 (福岡大学セミナーハウス), 2011年11月3日.

松浦望, 曲線の差分幾何, RIMS研究集会「可積分系数理の進化」(京都大学数理解析研究所), 2011年8月17日.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Modulation of LFP oscillations during updating a motor plan in the primate medial motor cortex,” The 11th Japan-Korea-China Joint Workshop On Neurobiology and Neuroinformatics, OIST, Dec.18-19, 2011.

Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Modulation of LFP oscillations at a novel movement in the primate medial motor cortex,” 電子情報通信学会 ニューロコンピューティング研究会, 九州大学, Oct.19-20, 2011.

- *Daiki Tanaya, Masaru Tanaka and Hiroshi Matsuzoe, “Notes on geometry of q-normal distributions”, Proceedings of the 2nd International Colloquium on Differential Geometry and its Related Fields, Veliko Tarnovo, September 6–10, 2010
- *Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Modulation of LFP beta oscillation while updating motor plan in primate medial motor areas,” Annual meeting, Society for Neuroscience, San Diego, Nov.2010
- *Toshi Nakajima, Ryosuke Hosaka, Jun Tanji, and Hajime Mushiake, “Neuronal activity in the medial motor areas reflects the switching of arm use and switching of action during performance of a bimanual sequential motor task,” Annual meeting, Society for Neuroscience, San Diego, Nov.2010
- 井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, 平面離散曲線のedge tangential flowとsemi-discrete mKdV方程式, 日本数学会2011年度年会 (早稲田大), 2011年3月22日.
- 井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, semi-discrete modified KdV方程式の解と平面離散曲線の連続的運動, 平成22年度九州大学応用力学研究所共同利用研究集会「非線形波動研究の新たな展開---現象とモデル化---」(九大応力研), 2010年10月29日.
- 松浦望, 曲線と曲面の差分幾何, 平成22年度九州大学応用力学研究所共同利用研究集会「非線形波動研究の新たな展開---現象とモデル化---」(九大応力研), 2010年10月29日.
- 井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, 平面折線の運動 (その2・Backlund変換と厳密解), 日本数学会2010年度秋季総合分科会 (名古屋大), 2010年9月24日.
- 井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, 平面折線の運動 (その1・構成とミウラ変換), 日本数学会2010年度秋季総合分科会 (名古屋大), 2010年9月24日.
- 井ノ口順一, 梶原健司, 松浦望, 太田泰広, ユークリッド平面上の離散曲線の運動とBacklund変換, 日本応用数理学会2010年度年会 (明治大), 2010年9月8日.
- 保坂亮介, “ランダム入力を受けたニューロンの奇妙な応答・ランダム入力とSTDP学習則によるニューラルネットワークの同期発火,” Brain-ISセミナー, 九州工業大学, Dec.2010.
- 保坂亮介, “運動計画更新時に見られるサル内側運動野のLFPベータ振動の減少,” Kagoshima workshop on Nonlinear and Nonequilibrium Dynamics, 鹿児島大学, Oct.2010
- Ryosuke Hosaka, Yutaka Sakai, and Kazuyuki Aihara, “Strange responses of the 2-dimensional Hindmarsh-Rose model to fluctuated inputs,” 日本電気学会, 熊本大学, Sep.2010
- 保坂亮介, “前頭葉・運動野の機能とLFPから探る内側運動野のダイナミクス,” 社会性と脳型ロボットを考える合同研究会2010, 九州工業大学, Aug. 2010
- 保坂亮介, 中島敏, 虫明元, 合原一幸, 山口陽子, “新規運動準備期に見られる内側運動野LFPの β 振動の減少,” 日本物理学会 春期大会, 岡山大学, Mar.2010

最近4年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)

松浦望: 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2014, 九州大学, 2014年2月22日～

<p>23日, 松浦望: 離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル2012, 九州大学, 2012年2月22日～ 24日, 保坂亮介: 電子情報通信学会 非線形問題研究会 現地世話人, 長崎県五島市, 2012年3月 27日～28日.</p>
<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p>
<p>科学研究費(基盤研究(C)) 2010年度～2014年度 研究課題: 離散可積分系の観点による曲線の差分幾何 研究代表者: 松浦望</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p>
<p>研究推進部領域別研究 2010年度～2012年度 研究課題名: 構造を持つデータからの特徴抽出 研究代表者: 田中 勝</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p>
<p>保坂亮介: Special Session Co-chair, International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications 2012</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など</p>
<p>該当なし</p>
<p>最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文</p>
<p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p>
<p>該当なし</p>
<p>その他特筆事項</p>
<p>ベストポスタープレゼンテーション賞 Ryosuke Hosaka, Toshi Nakajima, Kazuyuki Aihara, Yoko Yamaguchi, and Hajime Mushiake, “Laterality of LFP Oscillations in Medial Motor Area of Monkey,” International Conference on Energy, Environment and Human Engineering, Yangon, Myanmar, Dec,21-23, 2013.</p>

研究室名
情報数理研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>情報数理研究室では、コンピュータを用いた各種の応用研究の理論的な基礎研究および実際の応用システムの構築を動じ並行的に大になっており、現在の具体的な研究テーマとしては、計算論的数理科学としての自然言語処理、データベースシステム構築、パターン認識、コンピュータによる幾何学の可視化などに関する研究を中心に行っている。</p> <p>柴田は、算数・数学的な認知と言語の統語的な構造との脳内相互作用について、教育現場の教員研究サークルとの共同研究や学際的な立場からの研究を進めている。</p> <p>白石は現在、データベースシステムの構築並びにモバイルコンピューティングの研究を行っている。データベースに関しては、パスカルデジタルアーカイブを構築し公開している。モバイルに関しては ebook system の開発を進めている。</p> <p>藤木はコンピュータビジョンにおいて頻繁に用いられる非線形問題を線形化するための用いられる特徴空間の性質について研究し、それを画像の較正や画像からの直線や曲線検出などの具体的な問題へ応用する研究も行なっている。</p> <p>濱田は数学研究支援および数学教育、数学の可視化等に特化されたソフトウェアに注目し、可搬性、可塑性の高い計算機環境の構築について研究を行なっている。</p> <p>キーワード：自然言語処理・データベース・パターン認識・可視化、モバイル、コンピュータビジョン、パターン認識、数式処理、数学ソフトウェア</p>
研究室の構成員
<p>柴田勝征（教授）・理学博士</p> <p>白石修二（教授）・理学博士</p> <p>藤木 淳（准教授）・博士（工学）</p> <p>濱田龍義（助教）・博士（理学）</p> <p>岡松弘子（助手）・理学士</p>
2013 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4 年次生 5 名、モバイルプログラミングの研究</p> <p>4 年次生 6 名、顔認識に関する研究</p>
教員の担当科目
<p>柴田勝征：(学部) 数学 A、数学入門、微分積分 I、微分積分 II、微分積分 IV、 情報化社会と倫理、マルチメディア概論、卒業研究 I・II (大学院) 数理情報特論 II</p> <p>白石修二：(学部) 情報入門 I・II、プログラミング II、情報システム論 A、 ネットワークとセキュリティ、アルゴリズムとデータ構造、</p>

<p>基礎研究 I・II、卒業研究 I・II</p> <p>(大学院) 情報システム講究 I・II、情報システム特論 II</p> <p>藤木 淳：(学部) 基礎線形代数及び演習、線形代数及び演習、プログラミング I、 プログラミング I 演習、統計入門、基礎数学研究、卒業研究 I、II</p> <p>濱田龍義：(学部) 数学総合 I、応用微分積分入門、応用微分積分、統計</p>
<p>教員の所属学会</p>
<p>柴田勝征：日本数学会、情報処理学会、言語処理学会、認知言語学会、数学教育学会、 総合人間学会、福岡言語学会</p> <p>白石修二：人文科学とコンピュータ研究会、統計科学研究会</p> <p>藤木 淳：電子情報通信学会</p> <p>濱田龍義：日本数学会、日本数式処理学会</p> <p>岡松弘子：情報処理学会</p>
<p>最近 4 年間の学術論文</p>
<p>J.Fujiki (with K.Nishida and T.Kobayashi) “Tracking by shape with deforming prediction for non-rigid objects,” In Proc. of 3rd International Conference on Pattern Recognition Applications and Methods (ICPRAM 2013), pp.580-587, Mar. 2014. (査読有)</p> <p>J.Fujiki (with K.Nishida and TKobayashi) “Video image recovery for occluded skier's form by combining forward and backward prediction using motion feature,” In abstract book of the 6th International Congress on Science and Skiing, p.77, Nov. 2013. (査読有)</p> <p>J.Fujiki (with H.Hino, S.Akaho, Y.Mochizuki and N.Murata) “Pairwise Similarity for Line Extraction From Distorted Images,” In Proc. of CAIP2013, pp.250-257, Aug. 2013. (査読有)</p> <p>J.Fujiki (with S.Akaho) “Flexible hypersurface fitting with RBF kernels,” In Proc. of CAIP2013, pp.286-293, Aug. 2013. (査読有)</p> <p>藤木淳 (with 坂野鋭, 木村昭悟), “クラス部分空間に着目した判別分析,” MIRU2013, SS6, Aug. 2013.</p> <p>J.Fujiki (with K.Kano, Y.Sato, and S.Akaho) “Motion and remanent magnetization of particles in eruption-fed density currents: Late Eocene scoria deposits, Oga Peninsula, NE Japan,” IAVCEI 2013 Scientific Assembly Forecasting Volcanic Activity, Session 3G, 3W_3G-P3, Kagoshima, July, 2013.</p> <p>藤木淳 (with 日野英逸, 赤穂昭太郎, 望月義彦, 村田昇) “データ対の直線性に基づく画像上の類似度の定義 ～ 歪曲画像からの直線検出への応用 ～,” 信学技報PRMU, vol.IEICE-113, no.75, pp.29-34, June 2013.</p> <p>J.Fujiki, “Finding discriminant axes from multiple viewpoints,” In Proc. the 13th IAPR in International Conference on Machine Vision Applications (MVA2013), pp.73-76, May 2013. (査読有)</p> <p>Tatsuyoshi Hamada, “Some real hypersurfaces of complex projective space”, Proceedings of the workshop on Differential Geometry of Submanifolds and its Related Topics, 82-97, 2013. (査読有)</p>

- 白石修二 Markable book system の開発 情報処理学会第 75 回全国大会講演論文集 (2013)
- J.Fujiki (with S.Akaho, H.Hino and N.Murata), Robust hypersurface fitting based on random sampling approximations. In Proceedings of 19th International Conference on Neural Information Processing, pp.520-527, Nov. 2012. (査読有)
- 濱田龍義, 数学ソフトと歩く曲線の世界', 数学通信, 17, 3, (2012), pp.14—22, Nov. 2012.
- T. Hamada, “Live exhibitions in the classroom with mathematical software”, “Proceedings of the Korean Society of Mathematical Education, Fall meeting, Cheongju, Korea”, 2012, pp.13--16, Nov. 2012. (査読有)
- K. SHIBATA, Dependence on Context in case of English-Japanese Machine
Translation I-15. Fukuoka University Science Reports, vol.42 No.2. pp.125-131, Sep. 2012
- 藤木 淳 (with 城真範, 赤穂昭太郎, 田中勝), 来るべき宇宙世紀へ向けて — 亜光速下における画像からの静止系座標 —, 日本物理学会年次大会概要集, 13aSP-7, Sep. 2012.
- 藤木 淳 (with 城真範, 赤穂昭太郎, 田中勝), 準光速で等速直線運動するカメラの幾何学, MIRU2012 論文集, IS3-28, Aug. 2012.
- T. Hamada, Y. Hoshikawa, H. Tamaru, Curvatures properties of Lie hypersurfaces in the complex hyperbolic space, Journal of Geometry, Journal of Geometry, Vol.103, 2012, pp.247--261, Aug. 2012. (査読有)
- J.Fujiki (with K.Nishida, T.Kobayashi, C.Tsuchiya, S.Tanaka and T.Kurita), Road Region Detection by Spatio-Temporal Graph Segmentation of Optical Flows Using On-Board Camera, In Proceedings of International Conference on Signal Processing, Pattern Recognition and Applications, pp.9-16, Jun. 2012. (査読有)
- 濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011 について, 数理解析研究所講究録 1793, Developments in Computer Algebra Research, 2011年7月6日, 研究代表者 小原功任, 2012年 pp.46—49, Apr, 2012
- T. Hamada and KNOPPIX/Math committers, KNOPPIX/Math: a live system for mathematics, Proceedings of the Second CREST-SBM International Conference, Harmony of Groebner Bases and the Modern Industrial Society edited by Takayuki Hibi, World Scientific, 2012, pp.41--44, Mar. 2012. (査読有)
- 柴田勝征, 算数教育における横地・三角の『上から』原理と言語学におけるチョムスキーの『主要部パラメータ』原理の接点 — 福岡の小学校教師たちが数年間に渡っておどろくべき成果を上げ続けている理由の認知言語学的分析 --, 信学技報 TL2011-57, pp.17-22, Feb. 2012, (査読有)
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 曲線あてはめにおける特徴空間についての一考察, 信学技報 PRMU, vol.111, no.379, pp.85-90, Jan. 2012.
- K. SHIBATA: Dependence on Context in case of English-Japanese Machine
Translation I-14. Fukuoka University Science Reports, vol.41 No.2. pp.217-221, 2011
- K. SHIBATA: Dependence on Context in case of English-Japanese Machine
Translation I-13. Fukuoka University Science Reports, vol.41 No.1. pp.77-81, 2011

- J.Fujiki (with H.Hino, S.Akaho and N.Murata), Calibration of radially symmetric distortion based on linearity in the calibrated image, In Proceedings of OMNIVIS2011 - The 11th Workshop on Omnidirectional Vision, DVD-ROM, Nov. 2011. (査読有)
- J.Fujiki (with K.Nishida, and T.Kurita). Ensemble random-subset SVM, In Proceedings of International Conference on Neural Computation Theory and Applications, pp.334-339, Oct. 2011. (査読有)
- 濱田龍義, USB 起動 KNOPPIX/Math/2010 について, 数理解析研究所講究録 1759, 数式処理研究の新たな発展, Developments in Computer Algebra Research, 2010 年 7 月 8 日, 研究代表者 照井章, pp.74—80, Sep. 2011.
- J.Fujiki (with K.Nishida, and T.Kurita), Multiple random subset-Kernel learning, In Proceedings of International Conference on Computer Analysis of Images and Patterns, pp.343-350, Aug. 2011. (査読有)
- J.Fujiki (with S.Akaho, H.Hino and N.Murata), Robust hyperplane fitting based on k-th power deviation and alpha-quantile, In Proceedings of International Conference on Computer Analysis of Images and Patterns, pp.278-285, Aug. 2011. (査読有)
- J.Fujiki (with S.Akaho), Hypersurface fitting via Jacobian nonlinear PCA on Riemannian space, In Proceedings of International Conference on Computer Analysis of Images and Patterns, pp.236-243, Aug. 2011. (査読あり)
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎, 日野英逸, 村田昇), 較正画像における直線度の最大化に基づく放射対称歪曲の較正, MIRU2011 論文集, Jul. 2011.
- 藤木 淳 (with 西田健次, 栗田多喜夫), 訓練セットのランダムサンプリングによるマルチカーネル学習法, MIRU2011 論文集, Jul. 2011.
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎, 日野英逸, 村田昇), 最適抽出可能性に基づく 1 次元低い超平面や超曲面のあてはめ～ランダムサンプリングは大域的最適解の夢をみるか?～, MIRU2011 論文集, Jul. 2011.
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎, 日野英逸, 村田昇), ランダムサンプリングに基づく超曲面あてはめ, 信学技報 PRMU, vol.111, no.48, pp.69-74, May 2011.
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 1 次元低い超平面あてはめにおける最適抽出可能性, 信学技報 PRMU, vol.111, no.48, pp.63-68, May 2011.
- J.Fujiki (with S.Akaho), Global convergence of independent component analysis based on semidefinite programming relaxation, In Proceedings of International Conference on Acoustics, Speech and Signal Processing, pp.4264-4267, May 2011. (査読有)
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 回帰大作戦～1 次元低い超平面あてはめとしての回帰～, 信学技報 IBISML, vol.110, no.476, pp.85-92, Mar. 2011.
- J.Fujiki (with K.Nishida, C.Tsuchiya, S.Tanaka and T.Kurita), Road Plane Detection using Differential Homography Estimated by Pair Feature Matching of Local Regions, In Proceedings of International Conference on Signal Processing, Pattern Recognition and Applications, pp.23-29, Feb. 2011. (査読有)

- J.Fujiki (with Y.Usami, D.G.Stork, H.Hino, S.Akaho and N.Murata), Improved methods for dewarping images in convex mirrors in fine art: Applications to van Eyck and Parmigianino, In Proceedings of SPIE, Computer Vision and Image Analysis of Art II, Jan. 2011. (査読有)
- K. SHIBATA: Dependence on Context in case of English-Japanese Machine
Translation I-12. Fukuoka University Science Reports, vol.40 No.2. pp.255-259, 2010
- K. SHIBATA: Dependence on Context in case of English-Japanese Machine
Translation I-11. Fukuoka University Science Reports, vol.40 No.1. pp.79-87, 2010
- 藤木 淳 (with 日野英逸, 宇佐見由美, 赤穂昭太郎, 村田昇), 較正画像における直線度に基づく放射対称歪曲の較正, 信学技報 PRMU, vol.110, no.330, pp.79-84, Dec. 2010.
- 濱田龍義, ICM 報告記/ハイデラバードの熱い夏, 数学セミナー, 2011年1月号, 特集「国際数学会議 2010」, pp.8—13, Dec. 2010.
- J.Fujiki (with Y.Usami, H.Hino, S.Akaho and N.Murata), Estimation of a rotationally symmetric mirror shape from a frontal image of the mirror, In Proceedings of 25th International Conference Image and Vision Computing New Zealand, USB proceedings, Nov. 2010. (査読有)
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 半定値計画緩和による多項式コスト関数の大域的最適化, 第13回情報論的学習理論ワークショップ, Nov. 2010.
- J.Fujiki (with H.Hino, Y.Usami, S.Akaho and N.Murata), Self-calibration of radially symmetric distortion by model selection, In Proceedings of 20th International Conference on Pattern Recognition, pp.1812-1815, Aug. 2010. (査読有)
- 藤木 淳 (with 宇佐見由美, 日野英逸, 赤穂昭太郎, 村田昇), 放射対称歪曲の較正に基づく回転対称鏡面形状の推定, MIRU2010 論文集, Jul. 2010.
- 藤木 淳 (with 赤穂昭太郎), 頑健なヤコビ核主成分分析を用いた部分空間あてはめ, 情報研報 CVIM, vol.171, no.7, pp.1-8, Mar. 2010.
- 藤木 淳 (with 日野英逸, 宇佐見由美, 赤穂昭太郎, 村田昇), 極射影平面を利用した放射対称歪曲の較正, 信学技報 PRMU, vol.109, no.470, pp.377-382, Mar. 2010.
- 濱田龍義, 数学ソフトウェアあれこれ - オープンソースというひとつの流れ -, 数学セミナー, 2010年9月号, 特集「数学を発展させるコンピュータソフト」, pp.8—14., Aug. 2010.
- J.-T. Cho, T. Hamada and J. Inoguchi, On three dimensional real hypersurface in complex space form, Tokyo Journal of Mathematics, 33, 2010, pp.31--47, Jun. 2010. (査読有)
- T. Hamada and J. Inoguchi, Ruled real hypersurfaces of complex space forms, Kodai Mathematical Journal, 33, 2010, pp.123--134, Mar. 2010. (査読有)
- 濱田龍義, “大学初年級における GeoGebra の教育利用”, 数理解析研究所講究録 1674, pp.112--119, Jan. 2010.

最近4年間の学術著書

Tatsuyoshi Hamada, “Warm-up Drills and Tips for Mathematical Software”, Gröbner Bases - Statistics and Software Systems, Hibi, Takayuki (Ed.), 55-106, Springer, 2013.

柴田勝征「フィンランド教育の批判的検討」花伝社 1-290 頁 2012 年 5 月
白石修二「例題で学ぶ Excel 統計入門」第 2 版 森北出版 160 頁 2012 年 1 月
濱田龍義「グレブナー道場」JST CREST 日比チーム 編, 共立出版, 第 2 章「数学ソフトウェア受身稽古」 66-127 頁, 2011 年 9 月

最近 4 年間の学術（国際）会議での発表

*は国際会議

濱田龍義, 描いて動かして楽しむ数学, 高等学校・大阪市立大学連携数学協議会第9回シンポジウム, Nov. 23th, 2013.

*濱田龍義, 数学とオープンソース, 平成25年度大阪市立大学国際シンポジウム「都市の最創造」, Sept. 19th 2013.

濱田龍義, GitHub と Debian Live による MathLibre の構築, 数学ソフトウェアとフリードキュメント XVI, Mar. 19th 2013.

濱田龍義, MathLibre の構築とカスタマイズについて, Risa/Asir Conference 2013 + 第 5 回六甲博多計算代数会議, Mar 16th 2013.

白石修二, Markable book system の開発, the 75th National Convention of IPSJ, Mar. 8th, 2013. (with 中島 一)

*T. Hamada, Plenary talk "Live exhibitions in the class room with mathematical software", at Fall meeting of the Korean Society of Mathematical Education, Korea National University of Education, Nov. 3rd, 2012.

*T. Hamada, "MathLibre: portable computer environment for mathematics", 第 139 回 Colloquium 於 韓国教員大学校, Nov 1st, 2012.

濱田龍義, Prezi は黒板の代わりになるか, 数学ソフトウェアとフリードキュメント XV 於 九州大学, Sep. 17th 2012.

*T. Hamada, "Pedagogical practice cases of some trajectories with dynamic geometry software", RIMS 研究集会「数学ソフトウェアと教育」 於 京都大学数理解析研究所, Aug. 22nd 2012.

*T. Hamada, "Math software in Japan", short communication at DG 10: New Challenges in Developing Dynamic Software for Teaching and Learning Mathematics, ICME-12, COEX, Seoul, Korea, Jul. 14th, 2012.

濱田龍義, 数学ソフトウェア再考, RIMS 共同研究「数式処理研究の新たな発展」 於 京都大学数理解析研究所, Jul. 5th 2012.

濱田龍義, KNOPPIX/Math から MathLibre へ, 第 21 回日本数式処理学会大会 於 山口大学, Jun 8th 2012.

濱田龍義, Sage Days 韓国訪問記, Sage Days 39, 於 九州大学, Mar. 26th 2012.

T. Hamada, "Mathematical software for research, education, and exhibition" at Special Session "Tools and Techniques in Math Research and Education" of Spring meeting of the Korean Mathematical Society, Sookmyung Women's University, Apr. 28th 2012.

濱田龍義, GeoGebra が成功している 15 の理由を検証, 数式処理学会教育分科会 於 東京理

科大学, Mar. 26th 2012.

濱田龍義, 動的数学ソフトウェア GeoGebra について, 数学ソフトウェアとフリードキュメント XIV, 於 東京理科大学, Mar 25th 2012.

濱田龍義, 動的数学ソフトウェア GeoGebra の最新機能, 日本数式処理学会基礎理論分科会システム分科会合同研究会, 於 仙台青葉カルチャーセンター, Jan. 21st 2012.

藤木 淳, 曲線あてはめにおける特徴空間の特性について, 第 14 回情報論的学習理論ワークショップ, Nov. 9th, 2011.(with 赤穂昭太郎)

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011dojo について, 第 20 回日本数式処理学会大会 於 神戸大学, Sep. 10th 2011.

濱田龍義, 数学とオープンソース, 数電機シンポジウム 於 首都大学東京, Feb 19th 2012.

濱田龍義, KNOPPIX/Math に見る数学ソフトウェアの世界, 研究集会 計算代数システムの進展 於 九州大学, Aug. 29th, 2011.

濱田龍義, 複素空間形内の実超曲面の話題について, 第 58 回幾何学シンポジウム 於 山口大学, Aug. 27th 2011.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011 について, RIMS 共同研究「数式処理研究の新たな発展」 於 京都大学数理解析研究所, Jul 8th, 2011.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2011 について, Risa/Asir Conference 2011 於 神戸大学瀧川学術記念学術交流会館, Mar 22nd 2011.

濱田龍義, 数学ソフトウェア実行環境の将来について, 第 3 回日本数式処理学会システム分科会研究会 於 福岡大学, Jan. 22nd 2011.

柴田勝征, 理数教育のリテラシー化で日本の理数脳の子どもたちは絶滅の危機に瀕するのではないか?, 福岡言語学会, Dec. 18th, 2010.

藤木 淳, 測鉛線原理に基づく放射対称歪曲の較正, 第 3 回広島画像情報学セミナー, Dec. 6th, 2010.

柴田勝征, α 次のポテンシャルと発散積分のカットオフとによって定義される三角形の対称中心の 1 助変数族, 日本数学会年会幾何学分科会, Sept. 25th, 2010.

*T. Hamada, “An introduction of ICMS-DVDs”, ICMS2010, The Third International Congress of Mathematical Software 2010, Kobe University, Sep. 13rd, 2010.

*T. Hamada, “KNOPPIX/Math: a open source desktop environment for mathematics”, ICM2010, International Congress of Mathematicians 2010, HICC, Hyderabad, India, Aug. 25th 2010.

濱田龍義, Lie hypersurfaces in the complex hyperbolic space, 第 57 回幾何学シンポジウム 於 神戸大学, Aug. 9th 2010.

濱田龍義, USB 起動 KNOPPIX/Math/2010 について, 数式処理研究の新たな発展 於 京都大学数理解析研究所, Jul. 7th 2010.

*T. Hamada, “KNOPPIX/Math: a live system for mathematics”, Harmony of Groebner bases and the modern industrial society, Hotel Hankyu Expopark, Osaka, Jun. 29th 2010.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2010 The Next Generation について, 第 19 回日本数式処理学会大会 於 名古屋大学, Jun. 12th 2010.

濱田龍義, KNOPPIX/Math/2010, Risa/Asir Conference 2010 於 神戸大学瀧川学術記念学術交流会館, Mar. 18th 2010.

柴田勝征, 高度情報化社会における PISA 型リテラシー教育の意味, 京都大学数理解析研究所研究集会, Jan. 9th, 2010.

最近4年間の学術的会議の開催実績 (応用数学科・専攻のみ)

電子情報通信学会 PRMU 研究会, 福岡大学, Feb. 13th-14th, 2014. 藤木 淳

数学ソフトウェアとフリードキュメント XVII 愛媛大学, Sep. 23th 2013. 濱田龍義

数学ソフトウェアとフリードキュメント XVI 京都大学, Mar. 19th 2013. 濱田龍義

数学ソフトウェアとフリードキュメント XV 九州大学, Sep. 17th 2012. 濱田龍義

京都大学数理解析研究所 RIMS 共同研究「数式処理研究の新たな発展」, 京都大学数理解析研究所, Jul 4-6 2012. 濱田龍義

数学ソフトウェアとフリードキュメント XIV 東京理科大学, Mar. 25th 2012. 濱田龍義

数学ソフトウェアとフリードキュメント XIII 信州大学, Sep. 27th 2011. 濱田龍義

数学ソフトウェアとフリードキュメント XII 早稲田大学, Mar. 19th 2011. 濱田龍義 (東日本大震災により中止)

第3回日本数式処理学会システム分科会研究会, 福岡大学, Jan 22nd 2011. 濱田龍義

数学ソフトウェアとフリードキュメント XI 名古屋大学, Sep. 21st 2010. 濱田龍義

数学ソフトウェアとフリードキュメント X, 慶応大学, Mar. 23rd 2010. 濱田龍義

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

科学研究費(基盤研究(C)) 2011年度~2012年度

研究課題: プライバシー保護のための情報幾何的協調フィルタリング

研究予算: 4290 千円

研究代表者: 赤穂昭太郎

研究分担者: 藤木 淳

科学研究費(挑戦的萌芽研究) 2011年度~2013年度

研究課題: 半正値四次形式の比の和で表される関数の最適化とその幾何学

研究予算: 3770 千円

研究代表者: 藤木 淳

科学研究費(基盤研究(C)) 2013年度~2015年度

研究課題: 特徴空間の幾何構造を利用した学習アルゴリズムの構築

研究予算: 4940 千円

研究代表者: 赤穂昭太郎

研究分担者: 藤木 淳

科学研究費(基盤研究(C)) 2013年度~2016年度

研究課題: 微分幾何学への代数計算理論の適用と応用

<p>研究予算：4810 千円 研究代表者：濱田龍義</p> <p>科学研究費（基盤研究(C)）2013 年度～2016 年度 研究課題：計算代数の最近の成果と連携した微分幾何の研究 研究予算：4420 千円 研究代表者：濱田龍義</p> <p>科学技術振興機構 JST CREST 数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索 研究課題：現代の産業社会とグレブナー基底の調和 2008 年～2013 年 研究予算：6000 千円 研究代表者：日比孝之 共同研究者：濱田龍義</p>
<p>最近 4 年間の代表者としての学内資金導入実績</p> <p>研究推進部領域別研究 2011 年度 研究課題：パターン認識 研究代表者：柴田勝征</p> <p>研究推進部領域別研究 2012 年度 研究課題：社会情報システム研究 研究代表者：白石修二</p>
<p>最近 4 年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>柴田勝征：言語処理学会評議員（2011 年度、2012 年度） 藤木 淳：電子情報通信学会 PRMU 専門委員（2013 年度） 画像の認識・理解シンポジウム（MIRU）領域チェア（2012 年度） 電子情報通信学会英文誌編集委員（2011 年度、2012 年度、2013 年度） 電子情報通信学会学会誌編集委員（2011 年度） 情報処理学会論文誌論文賞選定委員（2010 年度） 濱田龍義：日本数学会情報システム運用委員会運営委員（2010 年度、2011 年度、2012 年度） 日本数式処理学会代表会員（2010 年度、2011 年度、2012 年度） 日本数式処理学会常任委員（2010 年度、2011 年度、2012 年度） 日本数式処理学会理事（2012 年度）</p>
<p>最近 4 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など 該当なし</p>
<p>最近 4 年間の一般（非学術）集会での発表論文 該当なし</p>
<p>最近 4 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など 該当なし</p>

研究室名
理論核物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>原子の中心に位置する原子核は陽子と中性子からなり、その個数は高々200前後である。この孤立した有限個数の量子多体系は陽子数、中性子数の違いによって様々な構造を示す。近年の放射活性ビームを用いた実験により、研究の対象になる原子核が飛躍的に増大し、原子核物理学は新たな時代を迎えている。我々の研究室では、核構造論のスタンダードなモデルである殻模型を用いて、fp 殻領域（中性子数が 40 近傍）の原子核に見られる急激な構造変化のメカニズムを研究している。</p> <p>自然界に存在する鉄より重い元素の起源は、ダークマター、ダークエネルギーの正体に次いで自然科学の大きな課題となっている。これらは中性子捕獲反応で生成されると考えられているが、その起源となる天体現象はあきらかではない。本研究室では、主に理論物理学の見地から、最新の原子核実験の結果や天体観測のデータを用いて、中性子捕獲元素がどこで生成されるのか、どのような環境のもとで生成されるのかを探っている。</p> <p>キーワード：原子核、殻模型、構造変化、元素合成、星の進化</p>
研究室の構成員
<p>田崎 茂（教授）・理学博士 大槻かおり（助教）・博士（理学）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M1 : 0名 M2 : 0名 4年次生 : 5名</p>
教員の担当科目
<p>田崎 茂：(学部) 物理科学入門、物理の世界、ASゼミⅠ、ASゼミⅡ、物理学A、物理学B、量子力学Ⅰ、量子力学Ⅱ、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、卒業論文 (大学院) 基礎物理学演習、解析力学（工学研究科） 大槻かおり：(学部) 物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ、物理学基礎ゼミナール、戦争と平和、力学演習（2012年度のみ）</p>
教員の所属学会
<p>田崎 茂：日本物理学会 大槻かおり：日本天文学会、日本物理学会、International Astronomical Union(IAU)</p>
最近4年間の学術論文
<p>Kaneko, K., Sun, Y., Mizusaki, T., Tazaki S., “Isospin nonconserving interaction in the T=1 analogue states of the mass-70 region”, Physical Review C 89(3) 031302 (2014). （査読有）</p>

Kaneko, K., Mizusaki, T., Sun, Y., Tazaki S., “Toward a unified realistic shell-model Hamiltonian with the monopole-based universal force”, *Physical Review C* 89(1) 011302 (2014). (査読有)

Wang, HK, Sun, Y, Jin, H, Kaneko, K, Tazaki, S, “Structure analysis for hole-nuclei close to Sn-132 by a large-scale shell-model calculation”, *Physical Review C* 88(5), 054310 (2013). (査読有)

Kaneko, K, Sun, Y, Mizusaki, T, Tazaki, S, “Variation in Displacement Energies Due to Isospin-Nonconserving Forces”, *Physical Review Letters* 110 (17), 172505 (2013). (査読有)

Jin, H (Jin, Hua), Sun, Y (Sun, Yang), Kaneko, K, Tazaki, S, “Shell model description with neutron $g(9/2)$ excitation for neutron-rich Mn57-62 isotopes”, *Physical Review C* 87(4), 044327 (2013). (査読有)

K. Kaneko, T. Mizusaki, Y. Sun, S. Tazaki, G. de Angelis, “Coulomb Energy Difference as a Probe of Isospin-Symmetry Breaking in the Upper fp-Shell Nuclei”, *Physical Review Letters* 109 (9), 092504 (2012). (査読有)

Y. Sun, YC. Yang, H. Jin, K. Kaneko, S. Tazaki, “Projected shell model study for neutron-rich, odd-odd Mn isotopes”, *Physical Review C* 85(5), 054307 (2012). (査読有)

大槻かおり, S. TYpel, G.Martinez-Pinedo, K. Langanke, “r過程元素合成における中性子直接捕獲反応の役割”, *福岡大学理学集報* 42(1), 15 (2012).

H. Jin, M. Hasegawa, S. Tazaki, K. Kaneko, Y. Sun, “Large-scale shell-model calculation with core excitation for neutron-rich nuclei beyond Sn-132”, *Physical Review C* 84(4), 044324 (2011). (査読有)

K. Kaneko, S. Tazaki, T. Mizusaki, Y. Sun, M. Hasegawa, G. de Angelis, “MIRROR ENERGY DIFFERENCE AT HIGH SPONS IN THE MIRROR PAIR Se-67 AND AS-67”, *ACTA PHYSICA POLONICA B* 42(3-4), 439-442 (2011). (査読有)

M. Hasegawa, Y. Sun, S. Tazaki, K. Kaneko, T. Mizusaki, “Characteristics of the $21/2(+)$ isomer in Mo-93: Toward the possibility of enhanced nuclear isomer decay”, *Physics Letters B* 696(3), 197-200 (2011). (査読有)

最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
K.Otsuki, "r-process and nuclear data", 韓国物理学会日韓合同シンポジウム, 釜山, 2011.10.20. (招待講演) .
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
大槻かおり：「元素で知る宇宙」, EMIS2012 市民講座, くにびきメッセ国際会議場、松江、2012年12月2日 大槻かおり：「星がかがやくしくみ---みんな星から生まれた---」大野城市北コミュニティセンター講演会、福岡、2013年9月21日
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
大槻かおり：「中学生のためのキャリアデザイン啓発事業」福岡市市民局男女共同参画課主催(2012年10月25日城南中学校、同年11月6日箱崎中学校、2013年9月17日壱岐丘中学校), 中学生を対象に「研究者としてのロールモデル」という題目で講演を行った。 大槻かおり：サイエンスパブ世話人として、九州大学、九州産業大学の教員らとともに一般市民に宇宙図を解説し、天文学や物理について話し合うサイエンスパブを開催した。 (第15回2012年7月22日、第16回同年9月30日、第17回2013年3月15日、第18回同年6月29日、第19回同年10月11日、第20回同年12月14日、第21回2014年3月6日、第22回同年6月27日に開催)

研究室名
理論天体物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>重力崩壊型超新星は太陽質量の約 10 倍を超える大質量星がその進化の最終段階に示す大爆発現象である。超新星は一天体現象ではありながら、それ自体が中性子星、ブラックホール、マグネターといった高エネルギーコンパクト天体の形成過程そのものであり、超新星の爆発メカニズムを明らかにすることは、恒星進化論の最重要テーマの一つである。この問題に対して、星が持つ自転、磁場のようなマクロ物理と、ミクロ物理で決まっているニュートリノ加熱機構の関係性に着目した上で、主に数値シミュレーションを用いた研究を行なっている。</p> <p>キーワード：恒星進化論、スーパーコンピューター、ニュートリノ、重力波、高密度状態方程式</p>
研究室の構成員
<p>固武 慶 (准教授)・博士 (理学)</p> <p>竹迫一雄 (助教)・理学修士</p>
2013 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4 年次生：5 名(理論天体物理学、ソフトウェア開発)</p> <p>3 年次生：4 名(理論天体物理学)</p>
教員の担当科目
<p>固武 慶：(学部) 宇宙天体物理学、連続体力学、力学 A、B、物理学 A、物理科学研究、卒業論文</p> <p>竹迫一雄：(学部) 物理科学実験 I、物理科学実験 II</p>
教員の所属学会
固武 慶： 日本物理学会、日本天文学会、理論天文学宇宙物理学懇談会
最近 4 年間の学術論文
<p>(すべて査読有)</p> <p>① Kuroda, Takami; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei, “Gravitational wave signatures from low-mode spiral instabilities in rapidly rotating supernova cores” Physical Review D, Volume 89, Issue 4, id.044011, (2014)</p> <p>② Nakamura, Ko; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei; Nishimura, Nobuya, “Revisiting Impacts of Nuclear Burning for Reviving Weak Shocks in” Neutrino-driven Supernovae, Astrophysical Journal, 782, 91, 14 pp. (2014)</p> <p>③ Yasutake, Nobutoshi; Kotake, Kei; Kutsuna, Masamichi; Shigeyama, Toshikazu, “An Investigation into Surface Temperature Distributions of High-B Pulsars”, PASJ in press,</p> <p>④ Kotake, Kei, “Multiple physical elements to determine the gravitational-wave signatures of core-collapse supernovae”, Comptes rendus - Physique, 14, 4, pp. 318-351, (2013)</p> <p>⑤ Ando, Shin'ichiro et al. (29 人中 24 番). “Colloquium: Multimessenger astronomy with gravitational waves and high-energy neutrinos” Reviews of Modern Physics, 85, 4, pp. 1401-1420, (2013)</p> <p>⑥ Suwa, Yudai; Takiwaki, Tomoya; Kotake, Kei; Fischer, Tobias; Liebendörfer, Matthias; Sato, Katsuhiko, “On the Importance of the Equation of State for the Neutrino-driven Supernova Explosion Mechanism”, Astrophysical Journal, 764, 99, 19 pp. (2013)</p>

<p>⑦ Sawai, H.; Yamada, S.; <u>Kotake, K.</u>; Suzuki, H, “Effects of Resistivity on Magnetized Core-collapse Supernovae” Astrophysical Journal, 764, 10, 38 pp. (2013)</p> <p>⑧ Masada, Youhei; <u>Takiwaki, Tomoya</u>; <u>Kotake, Kei</u>; Sano, Takayoshi, “Local Simulations of the Magnetorotational Instability in Core-collapse Supernovae”, Astrophysical Journal, 759, 110, 11 pp. (2012)</p> <p>⑨ Ono, M.; Hashimoto, M.; Fujimoto, S.; <u>Kotake, K.</u>; Yamada, S, “Explosive Nucleosynthesis in Magnetohydrodynamical Jets from Collapsars. II --- Heavy-Element Nucleosynthesis of s, p, r-Processes”, Progress of Theoretical Physics, 128, No. 4, pp. 741-765 (2012)</p> <p>⑩ <u>Kotake, Kei</u>; Sumiyoshi, Kohsuke; Yamada, Shoichi; <u>Takiwaki, Tomoya</u>; Kuroda, Takami; Suwa, Yudai; Nagakura, Hiroki, “Core-collapse supernovae as supercomputing science: A status report toward six-dimensional simulations with exact Boltzmann neutrino transport in full general relativity”, Progress of Theoretical and Experimental Physics, 1, id.01A301, (2012)</p> <p>⑪ <u>Kotake, Kei</u>; <u>Takiwaki, Tomoya</u>; Harikae, Seiji, “Gravitational Wave Signatures of Hyperaccreting Collapsar Disks”, Astrophysical Journal, 755, 84, 14 pp. (2012)</p> <p>⑫ Kuroda, Takami; <u>Kotake, Kei</u>; <u>Takiwaki, Tomoya</u>, “Fully General Relativistic Simulations of Core-collapse Supernovae with an Approximate Neutrino Transport”, Astrophysical Journal, 755, 11, 21 pp. (2012)</p> <p>⑬ <u>Takiwaki, Tomoya</u>; <u>Kotake, Kei</u>; Suwa, Yudai, “Three-dimensional Hydrodynamic Core-collapse Supernova Simulations for an 11.2 M\odot Star with Spectral Neutrino Transport”, Astrophysical Journal, 749, 98, 17 pp. (2012)</p> <p>⑭ <u>Kotake, Kei</u>; <u>Takiwaki, Tomoya</u>; Suwa, Yudai; Iwakami Nakano, Wakana; Kawagoe, Shio; Masada, Youhei; Fujimoto, Shin-ichiro, “Multimessengers from Core-Collapse Supernovae: Multidimensionality as a Key to Bridge Theory and Observation”, Advances in Astronomy, vol. 2012, 46pp, (2012), id. 428757</p> <p>⑮ <u>Kotake Kei</u>, Nakano-Iwakami Wakana, Naofumi Ohnishi “Effects of Rotation on Stochasticity of GWs” Astrophysical Journal 736. 124, 15pp (2011)</p> <p>⑯ <u>Takiwaki, Tomoya</u>; <u>Kotake, Kei</u> “Gravitational Wave Signatures of Magnetohydrodynamically Driven Core-collapse Supernova Explosions”, Astrophysical Journal, 743, 30, 13 pp. (2011)</p> <p>⑰ Suwa, Yudai; <u>Kotake, Kei</u>; <u>Takiwaki, Tomoya</u>; Liebendörfer, Matthias; Sato, Katsuhiko, “Impacts of Collective Neutrino Oscillations on Core-collapse Supernova Explosions”, Astrophysical Journal, 738, 165, 13 pp. (2011)</p> <p>⑱ <u>Kotake, Kei</u>; Iwakami-Nakano, Wakana; Ohnishi, Naofumi, “Effects of Rotation on Stochasticity of Gravitational Waves in the Nonlinear Phase of Core-collapse Supernovae”, Astrophysical Journal, 124, 15 pp. (2011)</p> <p>⑲ Fujimoto Shin-ichiro, <u>Kotake Kei</u>, Hashimoto et al.: “Explosive Nucleosynthesis in Neutrino-driven SN” Astrophysical Journal 738. 61, 15pp (2011)</p>
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
<p>① 固武 慶: “超新星からの重力波、ニュートリノ、電磁波放射” (招待講演), 日本物理学会 第69回年次大会 (2014年3/28) 東海大学</p> <p>② 固武 慶: “多次元超新星モデルの現状と問題点” (招待講演), 超新星研究会 (2014年1/16), 九州大学</p> <p>③ <u>Kotake, Kei</u>: “Cutting-edge issues in core-collapse supernova theory” (招待講演), Origin of Matter and Evolution of Galaxies (OMEG12), (2013年11/19), エポカルつくば</p> <p>④ <u>Kotake, Kei</u>: “Multi-D Core-Collapse Supernova Explosions and the Multi-Messenger Signatures” (招待講演), Supernovae and Gamma-ray bursts in Kyoto, (2013年10/29), 京都大学</p>

- ⑤ Kotake, Kei: “Explosion mechanism of core-collapse supernovae and the astrophysical multi-messengers”, 13th International Conference on Topics in Astroparticle and Underground Physics (TAUP), (2013年9/12), Asilomar, California USA
- ⑥ Kotake, Kei: “Simulations of Core-Collapse Supernovae” (招待講演) Inauguration symposium of Center of Nuclear Astrophysics, (2013年5/31), Jiao Tong University (上海交通大学), 中国
- ⑦ 固武 慶: “京コンピュータによる超新星爆発シミュレーション” (招待講演) 日本物理学会:シンポジウム 「動き出した京コンピュータと素粒子・原子核・宇宙の計算物理」, (2012年9/11) 京都産業大学
- ⑧ Kotake Kei: “Current status of multi-D hydrodynamic simulations of core-collapse supernovae (招待講演)” NIC XII satellite workshop on r-process Nucleosynthesis, (2012年8/4-10), ケアンズ、オーストラリア
- ⑨ Kotake, Kei: “Brainstorming on core-collapse supernova theory with perspectives toward multi-messenger astronomy(招待講演)”, Nuclear Theory program INT-12-2a, Core-Collapse Supernovae :Models and observable Signals, (2012年7/13-23), University of Washington, institute of nuclear theory
- ⑩ Kotake Kei:Gravitational Waves from Core-Collapse Supernovae and Collapsars” (招待講演)Marcel Grossmann Meeting, (2012年7/1-7), スtockホルム
- ⑪ Kotake Kei: “From micro- to macrophysical impacts on the mechanism of core-collapse supernovae”, (招待講演) Modeling at the interface between nuclear physics and nuclear astrophysics, (2012年6/17-22), Beijing (Kavli 研究所)
- ⑫ Kotake Kei: “Fostering Core-Collapse Supernovae by General Relativity, 3D hydrodynamics, and anything else ?” CompStar2012 (2012年6/3-9), Tahiti
- ⑬ Kotake Kei: “3D vs. GR: which one will help the onset of CCSN ? ” 16th workshop on nuclear and astrophysics. (2012年3/26-30). Ringberg, Munich, Germany
- ⑭ Kotake Kei: “Cutting-edge issues in the theory of CCSN” IAU Symposium 279(招待講演). (2012年3/12-16). 日光、栃木県、日光千姫ホテル
- ⑮ Kotake Kei: “Cutting-edge issues in CCSN modeling” Formations of compact objects(招待講演). (2012年3/7-9). 早稲田大学
- ⑯ 固武 慶: “超新星爆発からのニュートリノと重力波” 研究会「Multi-messenger Astronomy で迫るコンパクト天体」(招待講演). (2012年2/23-24). 京都大学
- ⑰ 固武 慶: “超新星の物理” 大阪市立大学アインシュタインの物理でリンクする研究・教育拠点 研究会(招待講演). (2012年2/18-21). 滋賀県、長浜市、サイクルセンター
- ⑱ 固武 慶: “数値シミュレーションで迫る爆発天体のエンジン” 天文天体物理 夏の学校(招待講演). (2011年8/1). 愛知県、蒲郡市、ホテルたつき
- ⑲ Kotake Kei: “Multimessenger from CCSN” Microphysical probe into nuclear astrophysics(招待講演). (2011年7/16-24). Institute of nuclear theory, アメリカ
- ⑳ Kotake Kei: “Microphysical recipes to energize CCSN” Microphysics in Computational Astrophysics(招待講演). (2011年6/20-24). Perimeter institute, カナダ
- ㉑ Kotake Kei: “Multimessenger from CCSN” International symposium of symmetry energy(招待講演). (2011年6/17-19). Smith college, Massachusetts, アメリカ

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
科研費：基盤研究C「次世代計算機・観測から迫る高密度爆発的天体現象の理論的解明」 (期間2011年度～2013年度、金額：4160千円) 若手研究B 「非対称超新星の爆発機構の解明と重力波、ニュートリノ放射の定量的評価」 (期間2010年度～2012年度、金額2860千円)
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
学部長預り金：「次世代計算機・次世代宇宙観測で迫る高密度天体現象の爆発機構の解明」

(期間 2013 年度、3000 千円)
最近 4 年間の学会等学術団体における役職など
日本物理学会誌 編集委員 (2009 年 9 月～2011 年 9 月) 国立天文台：すばる望遠鏡 TAC 委員, 天文シミュレーションプロジェクト計算機運営委員会委員 欧州学術会議(European Research Council) 審査委員
最近 4 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 4 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 4 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
2012年3/10 固武 慶：超新星からの新メッセンジャー 朝日カルチャーセンター新宿「超新星爆発研究の最前線」 2012年1/16 固武 慶：激しい星の最後：超新星爆発 ふれ合い天文学：葛飾区立住吉小学校（5年生）
その他特筆事項
該当なし

研究室名
物理情報科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>物理科学科物理情報科学研究室では、応用物理学の分野において情報通信技術(ICT: Information Communication Technology)を有効に活用することを目指して研究活動を行っている。ICTを適用する分野として、計測・制御および教育を対象としている。計測分野では、アドホックネットワーキングによる、センサーネットワークの応用である。近距離無線通信規格 IEEE802.15.4 に基づいて策定された通信プロトコル ZigBee を用いて構築されたセンサーネットワークは、センサーノードを任意に設置するだけでノードどうしが自律的にネットワーク接続を確立する点で、多様な応用が期待される。その一例を 2009 年末に発行された Measurement Science Review 誌 第9巻 第6号に “Application of ZigBee sensor network to data acquisition and monitoring” として報告している。制御分野では、実車の 1/10 の電動自動車を対象に、搭載された各種センサーの計測結果を基に自動走行や障害物衝突回避を行うカーロボティクスに取り組んでいる。導入してから日が浅いため、成果としては十分とは言えないが、今後、積極的に展開することを検討している。教育分野では、学習管理システム(LMS: Learning Management System)や Social Mediaなどを講義などで実際に利用し、それらを利用する効果を検証している。2012 年後期から 2013 年前期までの在外研究では、フィンランドのタンペレ工科大学において行った医療分野への ICT の適用が研究課題に加わり、タンペレ工科大学の研究者との共著論文が Journal of Atherosclerosis and Thrombosis 誌に掲載される予定である。</p> <p>キーワード：センサーネットワーク・情報通信技術(ICT)・計測・ロボット制御・物理教育</p>
研究室の構成員
寺田 貢 (教授)・工学博士
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
2013 年度後期より 2013 年度前期まで在外研究のため、2013 年度の配属学生なし
教員の担当科目
<p>寺田 貢：(学部) 情報活用演習、情報処理概論、コンピュータシミュレーション、薬学物理学入門、物理の世界(薬学部共通教育科目)、物理科学入門、物理の世界(共通教育科目)、物理科学研究 I II、卒業論文</p> <p>(大学院) 物理情報計測講究、物理情報計測実験、計測情報処理特論、修士論文</p>
教員の所属学会
寺田 貢：応用物理学会、日本リメディアル教育学会、日本物理教育学会、物理教育研究会
最近4年間の学術論文
<p>寺田 貢，“日本の大学におけるグローバル人材教育を阻害する要因(理系教育の立場から)”，リメディアル教育研究 9(1), 16-20(2014). (査読有)</p> <p>寺田 貢, Jarmo Viteli, “フィンランドの教育”，リメディアル教育研究 8(1), 95-100(2013). (査</p>

<p>読有)</p> <p>M. Terada, N. Hiramatsu, A. Kohno, S. Hoyashita, K. Nagata, H. Nishimura, H. Ono, A. Otsu, M. Takahashi, N. Tsuruta, "ICT in Education: Case Japan", Interaktiivinen Tekniikka Koulutuksessa . 21, 47-48 (2010). (査読有)</p>
<p>最近4年間の学術著書</p> <p>寺田 貢：大学教育への提言 未知の時代を切り拓く教育とICT活用 公益社団法人私立大学情報教育協会編 公益社団法人私立大学情報教育協会 学系別教育FD/ICT活用研究委員会・分野別サイバーキャンパスコンソーシアム運営委員会・情報教育研究委員会発行 p135-p142(物理学教育FD/ICT活用研究委員会の委員との共著) 2012年11月.</p> <p>寺田 貢：大学における学習支援への挑戦 日本リメディアル教育学会監修 ナカニシヤ出版 Chapter 4編集担当 2012年10月.</p>
<p>最近4年間の学術国際会議での発表</p> <p>M. Terada, S. Akahoshi, A. Kohno, N. Hiramatsu, T. Manago, K. Nagata, H. Nishimura, M. Misono, N. Takesue, "Learning support system on 'Mechanics' for engineering freshman students with Social media", Interaktiivinen Tekniikka Koulutuksessa 2012. Hämeenlinna Finland. 2012年4月.</p> <p>M. Terada, N. Hiramatsu, A. Kohno, S. Hoyashita, K. Nagata, H. Nishimura, H. Ono, A. Otsu, M. Takahashi, N. Tsuruta, "ICT in Education: Case Japan", Interaktiivinen Tekniikka Koulutuksessa 2010. Hämeenlinna Finland. 2010年4月.</p>
<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>寺田 貢：</p> <p>1)団体名：日本リメディアル教育学会</p> <p>活動：2013年8月より、会長として学会全体を運営している。それ以前には、2009年8月より、副会長(2011年8月まで)および事務局長として、学会全体の運営に携わり、学会の予算・決算、全国大会の実施(2011年度は福岡大学で開催)、会誌・ニューズレターの発行、支部会・専門部会の活動を支援した。また、2011年8月まで九州・沖縄支部会支部長として、支部大会の企画・運営および支部会に所属する会員への情報提供を行った。</p> <p>役職：会長・2013年8月～現在、副会長・2009年8月～2011年8月、事務局長・2009年8月～2013年8月、第7回全国大会実行委員会委員長・2010年8月～2011年12月、第8回全国大会実行委員会委員・2011年8月～2012年12月、第10回全国大会実行委員会委員・2013年8月～、九州・沖縄支部会支部長・2007年8月～2011年8月</p> <p>2)団体名：The Institute of Electrical and Electronics Engineering, Inc.</p> <p>活動：2012年9月より、IEEE P1876™ Standard for Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories 規格化委員会の IEEE Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories 作業部会に所属し、規格作成の作業を参加している。この規格化作業に伴い、実施された国際会議 EDUCON2013(2013年3月13日～15日、ドイツベルリン工科大学において開</p>

権)の Special Track "Standard on Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories: IEEE-SA P1876™"にプログラム委員として参画した。

役職：Member; IEEE Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories Working Group・2012年9月～, Program committee member; Special Track "Standard on Networked Smart Learning Objects for Online Laboratories: IEEE-SA P1876™" at EDUCON2013・2012年11月～2013年3月

3)団体名：応用物理学会

活動：2003年の第7回リフレッシュ理科教育(九州支部福岡会場)から実行委員として、企画運営およびテキストの編集・発行を担当している。

役職：リフレッシュ理科教育実行委員会委員・2003年～現在

最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

該当なし

最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文

該当なし

最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

寺田 貢：

1)団体名：公益社団法人 私立大学情報教育協会

活動：2005年4月より社団法人 私立大学情報教育協会物理学教育 IT 活用研究委員会の委員に就任後、協会の法人名の変更および委員会の名称変更により公益社団法人 私立大学情報教育協会物理学教育 FD/ICT 活用研究委員会の委員として、現在に至るまで、大学における ICT(情報通信技術)を用いた物理学教育について検討を行っている。本活動のまとめとして、2012年11月に「大学教育への提言 未知の時代を切り拓く教育と ICT 活用」が発行された。

役職：物理学教育 FD/ICT 活用研究委員会 副委員長・2013年10月～現在、委員・2005年4月～現在

2)団体名：一般社団法人 日本私立大学連盟

活動：2011年4月より一般社団法人 日本私立大学連盟(以下、私大連と記す)が実施するマネジメントサイクル(PDCA サイクル)修得研修運営委員会に参加し、委員として研修の運営に参画している。夏季休暇中に私大連に加盟する大学の教職員向けに実施される研修について、課題の設定などの準備、研修期間中の全国の大学の教職員のグループ作業におけるファシリテータ、研修終了後に参加者が作成したレポートの評価・採点などの作業を行っている。

役職：マネジメントサイクル(PDCA サイクル)修得研修運営委員会 委員・2011年4月～現在

研究室名
光科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>・基本的な分子の分光学的性質を研究することは、基礎科学として重要であるだけでなく、環境問題や生命科学、材料科学の基礎としても極めて重要である。この研究において重要となるのが、優れた精度を持つ光周波数の目盛である。我々は、光周波数コムがこの目盛として利用できることに着目し、従来の分解能を大幅に上回る超高分解能レーザー分光システムの開発を行っている。さらに、このシステムを利用して、分子の超高分解能スペクトルを測定し、電子励起状態におけるエネルギー準位構造の詳細やダイナミクスの解明を行っている。</p> <p>・確率共鳴とは、ある種の実線形系において、コヒーレントな信号と雑音との協力効果により信号伝達が共鳴的に増大する現象である。双安定系や興奮系などでは、雑音強度を変化させると、伝達される情報量は、系に特有な雑音強度において共鳴的に増大する。従って、雑音の強度を最適化することにより、系の信号伝達を最適化することができる。我々は、このような非線形システムのフィードバックによる制御、論理素子としてみたときの振る舞い、多段接続した際の時空間パターン等について、光双安定系や非線形電子回路を利用した研究を行っている。</p> <p>・メタマテリアルとは、自然界の物質には無い特異な電磁応答を示す人工物質のことであり、負の屈折率を持つ媒質や透明マントなど、興味深い光学現象の研究が行われている。最近ではメタマテリアルの概念を利用した、新奇な量子光学、量子電磁気学の研究も活発に進められている。我々は特に量子真空に起因する物理現象に着目しており、メタマテリアルを用いた光-物質相互作用の研究や自然放出の制御に取り組んでいる。</p> <p>キーワード：超高分解能レーザー分光・光周波数コム・確率共鳴・光双安定系・メタマテリアル・量子真空</p>
研究室の構成員
御園雅俊（教授）・博士（理学） 中山和之（助教）・博士（理学）
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>D2：1名、光周波数コムを利用した超高分解能レーザー分光</p> <p>M2：1名、光論理素子における確率共鳴</p> <p>4年次生：5名、光論理素子における確率共鳴、自己補対回路の研究：メタマテリアルと双対性、ナフタレン分子のドップラーフリー2光子吸収分光、光周波数コムを利用したRb原子の高分解能分光へ向けて1,2</p>
教員の担当科目
御園雅俊：(学部) 物理学基礎ゼミナール、ナノサイエンス基礎演習、物理学の世界、力学A、力学B、物理学実験、電磁気学Ⅰ、電磁気学Ⅱ、レーザー物理学、

<p>物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、科学プレゼンテーション、卒業論文 (大学院) 光科学特論、物理情報計測実験、物理情報計測講究、物理情報計測特別 研究</p> <p>中山和之：(学部) 物理学基礎ゼミナール、ナノサイエンス基礎演習、物理科学実験Ⅰ、 物理科学実験Ⅱ</p>
<p>教員の所属学会</p> <p>御園雅俊：日本物理学会、日本分光学会、分子科学会、レーザー学会 中山和之：日本物理学会、アメリカ物理学会</p>
<p>最近4年間の学術論文</p> <p>Akiko Nishiyama, Daiki Ishikawa, and Masatoshi Misono, "Development of high resolution molecular spectroscopic system with an optical frequency comb," JPS Conf. Proc. 1, 013088 (2014). 石川大樹, 西山明子, 御園雅俊, 宮川賢治, "光双安定系における論理的確率共鳴," 福岡大学理学集報, 44 (1), pp. 1 - 10 (2014). 西山明子, 石川大樹, 御園雅俊, "光周波数コムと音響光学変調器を用いた分光システムの開発とナフタレン分子の高分解能分光計測への応用," 福岡大学理学集報, 44 (1), pp. 11 - 19 (2014). Akiko Nishiyama, Daiki Ishikawa, and Masatoshi Misono, "High resolution molecular spectroscopic system assisted by an optical frequency comb," Journal of the Optical Society of America B, Vol. 30, Iss. 8, pp. 2107-2112 (2013). (査読有) K. Narahara, M. Misono, and K. Miyakawa, "External synchronization of oscillating pulse edge on a transmission line with regularly spaced tunnel diodes," Phys. Rev. E 87 (1), 012903 (2013). (査読有) 西山明子, 石川大樹, 御園雅俊, "光周波数コムによるヨウ素分子超微細構造の周波数計測," 福岡大学理学集報 43 (1), 21 - 28 (2013). H. Suo, K. Takano, S. Ohno, H. Kurosawa, K. Nakayama, T. Ishihara, and M. Hangyo, "Polarization property of terahertz wave emission from gammadion-type photoconductive antennas," Appl. Phys. Lett. 103, 111106 (2013). (査読有) M. Misono, W. Nakashima, and K. Miyakawa, "Chaotic Behavior and Noise-Induced Order in a Laser Diode System with the Feedback Employing Rb Atom," J. Phys. Soc. Jpn. 80 (12), 124803 (2011). (査読有) M. Misono and K. Miyakawa, "Noise-Induced Phase Locking and Frequency Mixing in an Optical Bistable System with Delayed Feedback," J. Phys. Soc. Jpn. 80 (11), 114801 (2011). (査読有) M. Misono and K. Miyakawa, "Noise-induced phase locking and frequency mixing in a Schmitt-trigger inverter with delayed feedback," J. Phys. Soc. Jpn. 79 (3), 034801 (2010). (査読有) 御園雅俊, 中島渉, 宮川賢治, "ルビジウム原子と結合した半導体レーザーにおける光周波数のカオス的変動," 福岡大学理学集報 40 (2), 175-180 (2010). 御園雅俊, 宮川賢治, "遅延帰還のあるシュミットトリガー・インバータにおけるコヒーレンス共鳴と確率共鳴," 福岡大学理学集報 40 (1), 21-29 (2010).</p>

最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
<p>Akiko Nishiyama, Daiki Ishikawa, and Masatoshi Misono, "Development of high resolution molecular spectroscopic system with an optical frequency comb," The 12th Asia Pacific Physics Conference, Chiba, July 2013.</p> <p>Akiko Nishiyama, Daiki Ishikawa, and Masatoshi Misono, "High Resolution Molecular Spectroscopy Assisted by an Optical Frequency Comb," The 10th Conference on Lasers and Electro-Optics Pacific Rim (CLEO-PR 2013), Kyoto, July 2013.</p> <p>F. Sakamoto, A. Nishiyama, M. Misono, and K. Miyakawa, "Synchronization between Chemical Oscillators through Mechanical Contact and Connection. Self-organization and Emergent Dynamics in Active Soft Matter", Kyoto. 2013年2月.</p> <p>K. Nakayama, Y. Moritake, T. Suzuki, H. Kurosawa, T. Kodama, S. Tomita, H. Yanagi, and T. Ishihara, "Manipulation of Spontaneous Emission with Quasi-periodic Metamaterials." The 10th Conference on Lasers and Electro-Optics Pacific Rim, Kyoto. 2013年7月.</p> <p>S. Ohno, M. Shingu, H. Kurosawa, Y. Moritake, K. Nakayama, and T. Ishihara, "Fabrication and Terahertz Response of "split-tube" Arrays." The 10th Conference on Lasers and Electro-Optics Pacific Rim, Kyoto. 2013年7月.</p> <p>Y. Moritake, K. Nakayama, T. Suzuki, H. Kurosawa, T. Kodama, S. Tomita, H. Yanagi, and T. Ishihara, "Controlling spontaneous emission using a quasi-periodically stratified metal-dielectric metamaterial." 3rd Korea-Japan Metamaterials Forum, Seoul 2013年6月.</p>
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
<p>御園雅俊：日本学術振興会・科研費・挑戦的萌芽研究・「光周波数コムと狭線幅色素レーザーを利用した超高分解能レーザー分光」・代表・310万円（直接経費）, 2012年度～2014年度（終了予定）</p> <p>御園雅俊：日本学術振興会・科研費・基盤研究(C)・「光周波数コムと高フィネス光共振器を併用した超高分解能・超高感度レーザー分光計測」・代表・330万円（直接経費）, 2008年度～2010年度</p> <p>御園雅俊：光科学技術研究振興財団・研究助成・「光周波数コムを利用した超高分解能レーザー分光」・代表・110万円, 2012年～2013年</p> <p>中山和之：日本学術振興会・科研費・若手研究(B)・「メタマテリアルを用いた単一光子源の開発と輻射場制御」・代表・320万円（直接経費）, 2012年度～2013年度</p>
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
<p>御園雅俊：領域別研究チーム・「励起分子ダイナミクス」・2013年度～2015年度（分担者：宮川賢治、坂本文隆、中山和之）</p> <p>御園雅俊：領域別研究チーム・「超高分解能分光」・116.6万円・2010年度～2012年度（分担者：宮川賢治、坂本文隆）</p> <p>御園雅俊：推奨研究プロジェクト・「非線形システムの超高分解能レーザー分光」・47万円・2011年度～2013年度（終了予定）</p> <p>中山和之：推奨研究プロジェクト・「メタマテリアル表面上のナノ微粒子からの蛍光偏光解析の研究」・112万円（2015年度の助成額は未定）・2013年度～2015年度（終了予定）（分</p>

担者：田尻恭之，原田拓典)
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
御園雅俊，西山明子，"光周波数コムを利用した超高分解能レーザー分光," 化学工業, 63 (8), pp. 55-60 (2012).
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名

結晶物性研究室

最近の研究課題とその取り組みの概要

結晶材料には構造の欠陥や揺らぎがある。それらは材料の物性と深い関係を持つので、欠陥や揺らぎを詳しく分析することは重要である。その手法として量子ビームを用いた回折・分光法がよく用いられる。中でも透過電子顕微鏡による電子回折・分光法は、構造の詳細を実空間と逆空間で知ることができる有力な手法である。本研究室では、この手法で金属、誘電体、鉱物の研究分野における興味深い課題に取り組む。以下、各分野における研究内容について記す。

金属の分野では、金属結晶に高強度と高変形能を両立させることを目指して、結晶学および物性物理学、材料力学的手法により、金属結晶の弾性異常と欠陥との相互作用、ならびに金属結晶の理想変形の発現機構を研究している。最近の研究より、ゴムメタルと呼ばれる高強度と高変形能を併せ持つチタン合金が、理想強度まで強化されていることが分かった。加えて、ゴムメタルが示す弾性異常が、理想変形の要因の一つであることも分かった。また、ゴムメタルに関連したチタンの研究より、チタンは、hcp、orthorhombic、bcc、hexagonal の構造を潜在的に持ち、それらの内、hcp と hexagonal は最も安定で、bcc は最も不安定であり、orthorhombic は hcp と bcc の間の状態にあることが分かった。さらに、hcp から bcc にわたる状態は、チタンよりも価電子数が多い遷移金属で合金化することにより制御でき、両状態の間で弾性異常が起こることも分かった。他に、結晶の欠陥が作る弾性場から弾性定数を測定する手法を開発した。今後はその手法を、弾性異常の実証や理想強度の決定に活用していく。

誘電体の分野では、リラクサーと呼ばれる物質を研究対象とした。リラクサーは特殊な強誘電体で、特異な焦電性と圧電性を持つ酸化物結晶である。その結晶構造について分かっていることは、結晶構造は単純ペロフスカイトを基本とすることと、その酸素八面体中心のサイトは異なる価数の2種の金属イオンで占有され、両イオンはNaCl型に短範囲規則配列をすることである。これら事実より、この結晶について予想されることは、格子ひずみの原因となる電荷の不均衡やイオンサイズのスフィットが生じることと、そのような原因に対して格子は緩和してナノサイズの強誘電領域を形成することである。これら予想されることが、特異な誘電性の発現機構に深く関係すると考えられるが、未だ短範囲規則領域と強誘電領域の局所構造はよく観測されておらず、両者の関係はよく分かっていない。よって、本研究により不明なことを明らかにし、予想の実証に努めたい。最近の透過電子顕微鏡観察より、リラクサーの原子配列を示す高分解能像を得た。その像にはリラクサーの平均構造がよく表れていることが分かった。今後はさらに高分解能像観察を行い、平均構造に加えて局所構造・組織を評価して研究を進めていく。

鉱物の分野では、天然の鉱物と同じ結晶構造を持つセラミックスの開発研究を行っている。その一つがコーディエライトを主成分とするセラミックスである。コーディエライトは特異な熱膨張特性をもつ事が知られており、その性質を利用したセラミックスは室温付近での熱膨張率がほぼゼロの特長を持つ。我々のグループではコーディエライトの熱膨張特性を結晶構造の観点から評価する試みを行って来た。コーディエライトは低温型と高温型で異なる結晶系に属するが、結晶構造は類似しており、通常のX線回折実験のみでその結晶系を決定することは困難である。こ

の事は結晶学的な熱膨張特性を評価する際に、膨張率の指標となる結晶方位が決定できない事を意味する。そこで、本研究室ではX線による精密構造解析実験と透過型分析電子顕微鏡を組み合わせた研究を進め、コーディエライトの結晶系を一義的に決定する事が出来る事を示した。

キーワード：結晶学・回折・散乱・電子顕微鏡法・相転移・物性

研究室の構成員

武末 尚久（教授）・Ph. D.

藤 昇一（助教）・博士（理学）

2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ

4年次生：4名

教員の担当科目

武末 尚久：(学部) 物理学基礎ゼミナール、物理科学の世界、振動波動論Ⅰ、振動波動論Ⅱ、結晶物理学、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、卒業論文、物理学A、力学B
(大学院) X線結晶学特論、物性物理学実験

藤 昇一：(学部) 物理学実験、物理学基礎ゼミナール

教員の所属学会

武末 尚久：日本金属学会、日本物理学会

藤 昇一：日本鉱物科学会、日本顕微鏡学会

最近4年間の学術論文

武末 尚久, 藤 昇一, “面心立方金属細密格子面内拡張転位の転位線形状と平均ヤング率による弾性定数決定”, 福岡大学理学集報, 44(1), 21-25 (2014). (査読有)

Kohei Kusada, Hirokazu Kobayashi, Ryuichi Ikeda, Yoshiki Kubota, Masaki Takeda, Shoichi Toh, Tomokazu Yamamoto, Syo Matsumura, Naoya Sumi, Katsutoshi Sato, Katsutoshi Nagaoka, and Hisoshi Kitagawa, “Solid solution alloy nanoparticles of immiscible Pd and Ru elements neighbouring on Rh: changeover of the thermodynamic behavior for hydrogen storage and enhanced CO-Oxidizing ability”, Journal of the American chemical Society, 136, 1864-1871, (2014). (査読有)

M. Tane, T. Nakano, S. Kuramoto, M. Niinomi, N. Takesue, H. Nakajima, “ ω transformation in cold-worked Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys with low body-centered cubic phase stability and its correlation with their elastic properties”, Acta Materialia 61, 139-150 (2013). (査読有)

Kaveh Edalati, Hideki Iwaoka, Shoichi Toh, Ken Sasaki and Zenji Horita, “Application of high-pressure torsion to WC-Co ceramic-based composites for improvement of consolidation, microstructure and hardness”, Materials Transactions, 54, 9, 1540-1548 (2013). (査読有)

Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Makoto Arita, Masashi watanabe, and Zenji Horita, “High-pressure torsion of pure cobalt: hcp-fcc phase transformations and twinning during severe plastic deformation”, Applied Physics Letters, 102, 181902-1-4 (2013). (査読有)

Kaveh Edalati, Junko Matsuda, Hideaki Iwaoka, Shoichi Toh, Etsuo Akiba and Zenji Horita, “High-pressure torsion of TiFe intermetallics for activation of hydrogen storage at room temperature with heterogeneous nanostructure”, International Journal of Hydrogen Energy, 38, 4622-4627 (2013). (査読有)

Yoshihiro Nakamuta and Shoichi Toh, “Transformation of graphite to lonsdaleite and diamond in the Goalpara ureilite directly observed by TEM”, American Mineralogist, 98, 574-581 (2013). (査読有)

Md Jafar Sharif, Miho Yamauchi, Shoichi Toh, Matsumura Syo, Shin-ichiro Noro, Kenichi Kato, Masaki Takata and Tatsuya Tsukuba, “Enhanced magnetization in highly crystalline and atomically mixed

<p>bcc Fe-Co nanoalloys prepared by hydrogen reduction of oxide composites”, NANOSCALE, 5, 1489-1493 (2013). (査読有)</p> <p>Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Hideaki Iwaoka, Masashi Watanabe, Zenji Horita, Daisuke Kashioka, Kyosuke Kishida and Haruyuki Inui, “Ultrahigh strength and high plasticity in TiAl intermetallics with bimodal grain structure and nanotwins”, Scripta Materialia, 67, 814-817 (2012). (査読有)</p> <p>Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Tadahiko Furuta, Shigeru Kuramoto, Masashi Watanabe and Zenji Horita, “Development of ultrahigh strength and high ductility in nanostructured iron alloys with lattice softening and nanotwins”, Scripta Materialia, 67, 511-514 (2012). (査読有)</p> <p>Hirokazu Kobayashi, Hitoshi Morita, Miho Yamauchi, Ryuichi Ikeda, Hiroshi Kitagawa, Yoshiki Kubota, Kenichi Kato, Masaki Takata, Shoichi Toh, Syo Matsumura, “Nanosize-Induced Drastic Drop in Equilibrium Hydrogen Pressure for Hydride Formation and Structural Stabilization in Pd-Rh Solid Solution Alloys”, Journal of the American Chemical Society, 1134, 12390-12393 (2012). (査読有)</p> <p>Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Hideaki Iwaoka, Zenji Horita, “Microstructural characteristics of tungsten-base nanocomposites produced from micropowders by high-pressure torsion”, Acta Materialia, 60, 3885-3893 (2012). (査読有)</p> <p>Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Masashi Watanabe, Zenji Horita, “In situ production of bulk intermetallic-based nanocomposites and nanostructured intermetallics by high-pressure torsion”, Scripta Materialia, 66, 386-389 (2012). (査読有)</p> <p>M. Tane, T. Nakano, S. Kuramoto, M. Hara, M. Niinomi, N. Takesue, T. Yano, H. Nakajima, “Low Young’s modulus in Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys: Cold working and oxygen effects”, Acta Materialia 59, 6975-6988 (2011). (査読有)</p> <p>K. Tanaka, N. Takesue, T. Yano, “Strengthening of alloys with elastic anomalies toward the ideal strengths – Gum Metal as an example”, Fukuoka University Science Report 41(2), 165-176 (2011). (査読有)</p> <p>Kaveh Edalati, Shoichi Toh, Yoshifumi Ikoma, Zenji Horita, “Plastic deformation and allotropic phase transformations in zirconia ceramics during high-pressure torsion”, Scripta Materialia, 65, 974-977 (2011). (査読有)</p> <p>H. Unno, Y. Sato, S. Toh, N. Yoshinaga and S. Matsumura, “Microstructures of TiO₂-doped Al₂O₃ Ceramics”, Annual Reports of HVEM Laboratory, Kyushu University, 34, 27-28 (2010). (査読有)</p> <p>Hiroto UNNO, Yutaka SATO, Shoichi TOH, Norito YOSHINAGA, Syo MATSUMURA, “Microstructures and Electrical Properties of TiO₂-doped Al₂O₃ Ceramics”, Journal of Electron Microscopy, 59, S107-S115 (2010). (査読有)</p>
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
<p>Kaveh Edalati, Junko Matsuda, Makoto Arita, Shoichi Toh, Takeshi Daio, Etsuo Akida, Zenji Horita, “Hydrogen strage in nanostructured TiFe severely deformed by high-pressure torsion”, The 3rd Nano Today Conference, Singapore, 2013年12月.</p> <p>Shu-Sheng Liu, Michihisa Koyama, Shoichi Toh, Syo Matsumura, “Microstructure observation of Ni/YSZ interface”, The 19th International Conference on Solid State Physics, Japan, 2013年6月.</p> <p>S. S. Liu, M. Koyama, S. Toh, S. Matsumura, “Microstructure Evolution of SOFC Anode during Sintering”, IUPAC 8th International Conference on Novel Materials and Synthesis (NMS-VIII) & 22nd International Symposium on Fine Chemistry and Functional Polymers (FCFP-XXII), China, 2012年10月.</p> <p>M. Tane, T. Nakano, S. Kuramoto, M. Hara, M. Niinomi, N. Takesue, T. Yano, H. Nakajima, “Elastic properties of Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys”, TMS 2012 Annual Meeting & Exhibition. USA. 2012年3月.</p> <p>Hiroto UNNO, Shoichi TOH, Jun SUGAWARA, Kensaku HATTORI, Seiichiro UEHARA, Syo MATSUMURA, “Microstructures of La-doped Low Thermal Expansion Cordierite Ceramics”, 36th International Conference and Exposition on Advanced Ceramics and Composites, USA. 2012</p>

<p>年1月. S. Matsumura, I. Ohnishi, E. Okunishi, K. Yamazaki, N. Aota, K. Miyatake, M. Nakanishi, Y. Ohkura, Y. Kondo, K. Yasuda, and S. Toh, "Steradian-Class X-ray Detector for Analytical Transmission Electron Microscopy", Frontiers of Electron Microscopy in Materials Science 2011, USA, 2011年9月.</p> <p>I. Ohnishi, E. Okunishi, K. Yamazaki, N. Aota, K. Miyatake, M. Nakanishi, Y. Ohkura, Y. Kondo, K. Yasunaga, S. Toh, and S. Matsumura, "Development of Large Solid Angle SDD for TEM and its Applications", Microscopy and Microanalysis 2011 Meeting, USA. 2011年8月.</p>
<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p>
<p>藤 昇一： 研究助成寄付金、新日鉄住金マテリアルズ（株）電子材料事業部、「金属組織観察に関する研究助成のため」・50万4千円・2013年8月20日～2015年8月19日 日本学術振興会、科学研究費、基盤研究（C）「最先端電顕法による造岩鉱物の元素分配に関する実験的研究」・直接経費390万円・2011年4月～2015年3月</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p>
<p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p>
<p>日本顕微鏡学会第67回学術講演会実行委員、2010年7月～2011年5月</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など</p>
<p>該当なし</p>
<p>最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文</p>
<p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p>
<p>該当なし</p>
<p>その他特筆事項</p>
<p>多根正和, 原昌司, 矢野壮, 中野貴由, 新家光雄, 中嶋英雄, 倉本繁, 武末尚久: グローバルCOEプログラム「構造・機能先進材料デザイン教育研究拠点」論文賞受賞（共著）「Low Young's modulus in Ti-Nb-Ta-Zr-O alloys: Cold working and oxygen effects」 大阪大学、大阪、2012年2月14日</p>

研究室名
構造物性研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>本研究室では誘電体や磁性体などのナノメートルサイズの粒子（ナノ粒子）や薄膜を作製する技術を開発するとともに、ナノメートルスケールで特徴的に発現する物性（ナノ物性、ナノ構造）とその応用について研究を行っている。現在の主なテーマは以下の通りである。</p> <p>(1) 強誘電体薄膜の結晶配向制御と物性</p> <p>高集積化・低消費電力・高速動作が期待できるトランジスタ型の強誘電体薄膜メモリの開発を目指して、$\text{Bi}_{4-x}\text{La}_x\text{Ti}_3\text{O}_{12}$ や $\text{SrBi}_2\text{Ta}_2\text{O}_9$ などの鉛を含まない強誘電体の薄膜をシリコン基板上に直接堆積し、薄膜・界面の構造と物性制御の研究を行っている。結晶化過程を制御することで結晶配向や電気特性が制御できることを見出し、結晶配向が生じる機構の研究、界面制御の研究を進めている。</p> <p>(2) フェロイックナノ粒子における構造と物性のサイズ効果の解明</p> <p>近年注目を集めている複数のフェロイック特性を持つマルチフェロイック物質や高温超伝導体、磁性体、強誘電体などを対象として、ナノ粒子を粉体のメソ多孔体や Si 基板やガラス基板上に作製したメソ多孔体薄膜の細孔中で合成し、それらの結晶構造解析や磁気特性、光学特性、電気特性などの物性測定を行い、ナノ物性を解明に向けた研究を行っている。</p> <p>(3) 不純物過飽和ドーピングシリコンの物性</p> <p>レーザーメルティング法を用いてシリコン表面近傍を急速に加熱熔融、固化させることで、平衡状態の固溶限を遥かに超える量の不純物をドーピングすることができる。S、Se などのカルコゲンを過飽和ドーピングした Si が（通常の Si が全く吸収を示さない）赤外光域にブロードでかつ巨大な吸収を生じる現象について、局所構造や電子状態の観点から物性発現機構の研究を行っている。</p> <p>(4) 薄膜・ナノ粒子・界面の構造研究</p> <p>X線回折法、X線反射率法、X線吸収微細構造解析などの手法を駆使して、薄膜、ナノ粒子、界面の構造を解明することに取り組んでいる。放射光科学研究施設、SPring-8、KEK PF、Saga-LS のシンクロトロン光を活用した研究も行っている。</p> <p>キーワード： 強誘電体， 磁性体， 薄膜， ナノ粒子， メソ多孔体， 界面， X線</p>
研究室の構成員
<p>香野 淳（教授）・博士（理学）</p> <p>田尻恭之（助教）・博士（工学）</p> <p>上林浩行（研究員）</p> <p>徳永幸大（研究員）</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：1名，「 TiO_2 ナノ粒子内包メソ多孔体薄膜の作製と物性の研究」

4年次生：4名、「高圧水蒸気熱処理による Si 酸化膜および薄膜/基板構造の変化」、「ランタン置換チタン酸ビスマス薄膜および界面の構造－薄膜化プロセスの検討－」、「ランタン置換チタン酸ビスマス薄膜の結晶化」、「レーザーメルティング法を用いた Si への不純物 (Fe)過飽和ドーピング」
教員の担当科目
香野 淳：(学部) 卒業論文、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、力学Ⅰ、力学演習Ⅰ、物理学基礎ゼミナール（ナノサイエンス基礎演習）、物性物理学Ⅰ、理科教育法Ⅱ、物理科学の世界、力学A、物理学実験 (大学院) ナノ物理学講究、ナノ物理学実験、結晶物理学特論 田尻恭之：(学部) 物理学基礎ゼミナール、物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ、力学演習Ⅰ、力学演習Ⅱ、ナノ材料科学実験Ⅱ
教員の所属学会
香野 淳：日本物理学会、応用物理学会、日本結晶学会、日本 MRS、MRS 田尻恭之：日本物理学会、応用物理学会
最近4年間の学術論文
K. Yagyu, <u>T. Tajiri</u> , <u>A. Kohno</u> , K. Takahashi, H. Tochiyama, H. Tomokage T. Suzuki, “Fabrication of a single layer graphene by copper intercalation on a SiC(0001) surface”, Applied Physics Letters 104, 053115-[1]-[4] (2014). (査読有)
I. Umezu, M. Naito, D. Kawabe, Y. Koshihara, K. Nagao, A. Sugimura, T. Aoki, M. Inada, T. Saitoh, and <u>A. Kohno</u> , “Hyperdoping of silicon with deep-level impurities by pulsed YAG laser melting”, Applied Physics A, published online: 23 February, 2014. DOI : 10.1007/s00339-014-8313-7 (2014). (査読有)
<u>T. Tajiri</u> , N. Terashita, K. Hamamoto, H. Deguchi, M. Mito, Y. Morimoto, K. Konishi, <u>A. Kohno</u> , “Size dependences of crystal structure and magnetic properties of DyMnO ₃ nanoparticles”, Journal of Magnetism and Magnetic Materials 345, 288-293 (2013). (査読有)
<u>T. Tajiri</u> , <u>A. Kohno</u> , K. Hamamoto, Y. Ando, H. Deguchi, M. Mito, “Synthesis and magnetic properties of DyMnO ₃ nanoparticles in mesoporous silica”, Journal of the Korean Physical Society 63, 826-829 (2013). (査読有)
M. Mito, Y. Komorida, H. Deguchi, <u>T. Tajiri</u> , T. Iwamoto, Y. Kitamoto, “Artificial material manipulation of magnetic anisotropy in FePt magnetic nanoparticles through application of hydrostatic pressure”, Journal of Applied Physics 113, 044302-[1]-[6] (2013). (査読有)
M. Mito, T. Imakyurei, H. Deguchi, K. Matsumoto, <u>T. Tajiri</u> , H. Hara, T. Ozaki, H. Takeya, and Y. Takano, “Uniaxial Strain Effects on Cuprate Superconductor YBa ₂ Cu ₄ O ₈ ”, Journal of the Physical Society of Japan 81, 113709-[1]-[4] (2012). (査読有)
<u>T. Tajiri</u> , S. Hohdai, K. Hamamoto, H. Deguchi, M. Mito and <u>A. Kohno</u> , “Magnetic Properties of La _{2-x} Sr _x CuO ₄ Nanoparticles in Mesoporous Silica”, Journal of Physics: Conference Series 400, 032095-[1]-[4] (2012). (査読有)

梅津郁朗, 香野淳, 川邊大介, 松田祐樹, 中川将, 杉村陽, “パルスレーザーメルティング法によって深い準位をとる不純物を過飽和ドーブしたシリコンの赤外光吸収”, 電気学会研究会資料 OQD-12-010, 47-50 (2012).

A. Kohno, T. Gondo, K. Koga, and T. Tajiri, “Structural and Optical Characteristics of TiO₂ Nanoparticles-Containing Mesoporous Silica (SBA-15) Thin Films”, IOP Conf. Series: Materials Science and Engineering 24, 012019-[1]-[8] (2011). (査読有)

S. Kohiki, K. Okada, M. Mitome, A. Kohno, T. Kinoshita, K. Iyama, F. Tsunawaki, and H. Deguchi, “Magnetic and Magnetoelectric Properties of Self-Assembled Fe_{2.5}Mn_{0.5}O₄ Nanocrystals”, ACS Applied Materials Interfaces 3, 3594–3601 (2011). (査読有)

I. Umezu, A. Kohno, J. M. Warrender, Y. Takatori, Y. Hirao, S. Nakagawa, A. Sugimura, S. Charnvanichborikarn, J. S. Williams, and M. J. Aziz, “Strong mid-infrared optical absorption by supersaturated sulfur doping in silicon”, AIP Conference Proceedings (PHYSICS OF SEMICONDUCTORS) 1399, 51-52 (2011). (査読有)

K. Okada, S. Kohiki, S. Luo, A. Kohno, T. Tajiri, S. Ishii, D. Sekiba, M. Mitome, F. Shoji, “Oxygen annealing for deuteriumdoped indium tin oxide thin films”, Physica Status Solidi A 208, 829-833 (2011). (査読有)

T. Tajiri, S. Saisho, Y. Komorida, M. Mito, H. Deguchi, and A. Kohno, “Effects of anisotropic strain on perovskite LaMnO_{3+δ} nanoparticles embedded in mesoporous silica”, Journal of Applied Physics 110, 044307-[1]-[5] (2011). (査読有)

K. Okada, S. Kohiki, S. Luo, D. Sekiba, S. Ishii, M. Mitome, A. Kohno, T. Tajiri, F. Shoji, “Correlation between resistivity and oxygen vacancy of hydrogen-doped indium tin oxide thin films”, Thin Solid Films 519, 3557-3561 (2011). (査読有)

B. P. Bob, A. Kohno, S. Charnvanichborikarn, J. M. Warrender, I. Umezu, M. Tabbal, J. S. Williams, and M. J. Aziz, “Fabrication and subband gap optical properties of silicon supersaturated with chalcogens by ion implantation and pulsed laser melting”, Journal of Applied Physics 107, 123506-[1]-[5] (2010). (査読有)

A. Kohno, T. Tajiri, T. Gondo, H. Deguchi, C. Moriyoshi, Y. Kuroiwa, “Formation and Characterization of Oxide Nanoparticles-Containing SBA-15 Powder and Thin Film”, AIP Conf. Proc. 1325, 8-11 (2010). (査読有)

Y. Komorida, M. Mito, H. Deguchi, S. Takagi, T. Tajiri, A. Millan, N. J. O. Silva, M. A. Laguna, F. Palacio, “Effects of pressure on maghemite nanoparticles with a core/shell structure”, Journal of Magnetism and Magnetic Materials 322, 2117-2126 (2010). (査読有)

M. Mito, T. Tatano, Y. Komorida, T. Tajiri, H. Deguchi, S. Takagi, S. Kohiki, M. Ohba, R. Matsuda, S. Kitagawa, “Magnetic properties of nitric oxide molecules physisorbed into nano-sized pores of MCM-41”, Microporous and Mesoporous Materials 132, 464-469 (2010). (査読有)

T. Tajiri, M. Harazono, H. Deguchi, M. Mito, A. Kohno, and S. Kohiki, “Synthesis and Magnetic Property of Multiferroic BiMnO₃ Nanoparticles in the Pores of Mesoporous Silica”, Japanese Journal of Applied Physics 49, 06GH04-[1]-[4] (2010). (査読有)

- M. Mito, Y. Komorida, N. J. O. Silva, H. Tsuruda, H. Deguchi, S. Takagi, T. Tajiri, T. Iwamoto, Y. Kitamoto, “Particle-diameter dependence of the coercive field in FePt nanoparticles with a face-centered tetragonal structure”, Journal of Applied Physics 108, 124315-[1]-[5] (2010). (査読有)
- S. Luo, S. Kohiki, K. Okada, A. Kohno, T. Tajiri, M. Arai, S. Ishii, D. Sekiba, M. Mitome, F. Shoji, “Effects of Hydrogen in Working Gas on Valence States of Oxygen in Sputter-Deposited Indium Tin Oxide Thin Films”, ACS Applied Materials & Interfaces 2, 663-668 (2010). (査読有)

最近4年間の学術著書

該当なし

最近4年間の学術国際会議での発表

- T. Toyota, T. Tajiri, and A. Kohno, “Electrical and Optical Properties of Ferroelectric Lanthanum-Substituted Bismuth Titanate Thin Films Composed of Nanometer-Scale Grains”, International Symposium on Syntheses, Characterizations and Applications of Oxide Nanocomposites Materials, 23rd Annual Meeting of MRS-J, Yokohama, Japan, December 2013. [Invited]
- A. Kohno, Y. Hidaka, T. Tajiri, “Optical and Electrical characterization of nanoparticles synthesized in the pores of mesoporous silica SBA-15 thin film: the case of titanium oxide nanoparticles”, 2013 MRS Fall Meeting & Exhibit, Boston, USA, December 2013.
- A. Kohno, T. Tajiri, and T. Sameshima, “Effect of High-Pressure H₂O Vapor Heat Treatment on Structure and Electronic States of SiO₂ Film Prepared by Oxygen Plasma”, 2013 JSAP-MRS Joint Symposia, Kyoto, Japan, September 2013.
- A. Kohno, Y. Hidaka, T. Tajiri, “Synthesis and characterization of TiO₂ nanoparticles synthesized in the pores of mesoporous silica thin film on silicon substrate”, EMRS 2013 Spring Meeting, Strasbourg, France, May 2013.
- K. Yagyu, T. Tajiri, A. Kohno, K. Takahashi, H. Tochiara, H. Tomokage, and T. Suzuki, “Cu intercalation to graphene sheets grown on SiC(0001)”, 15th International Conference on Solid Surfaces (ICSS-15), Paris, France, September 2013.
- K. Koga, T. Tajiri, and A. Kohno, “Control of Structure of Mesoporous Silica Thin Film on Silicon and Formation of TiO₂ Nanoparticles in the Pores”, International Union of Materials Research Society – International Conference in Asia – 2012 (IUMRS-ICA2012), Busan, Korea, August 2012.
- T. Tajiri, K. Hamamoto, Y. Ando, H. Deguchi, M. Mito, and A. Kohno, “Synthesis and Magnetic Property of Multiferroic DyMnO₃ Nanoparticles in Mesoporous Silica”, 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea, July 2012.
- T. Imakyurei, K. Nagai, M. Mito, H. Deguchi, T. Tajiri, Y. Nakao, Y. Kousaka, J. Akimitsu, “Pressure-induced suppression of magnetic ordering in a chiral magnet Cr_{0.33}NbS₂”, 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea, July 2012.
- A. Kohno, T. Tajiri, S. Yoshidomi, M. Hasumi, and T. Sameshima, “Chemical Bonding and Valence

Band States of SiO₂ Thin Film Prepared by Oxygen Plasma Followed by High-Pressure H₂O Vapor Heat Treatment”, 24th International Conference on Amorphous and Nanocrystalline Semiconductors, Nara, August 2011.

T. Tajiri, S. Hohdai, K. Hamamoto, H. Deguchi, M. Mito, A. Kohno, “Magnetic Properties of La_{2-x}Sr_xCuO₄ Nanoparticles in Mesoporous Silica”, 26th International Conference on Low Temperature Physics, Beijing, August 2011.

A. Kohno, T. Tajiri, T. Gondo, H. Deguchi, C. Moriyoshi, and Y. Kuroiwa, “Formation and Characterization of Oxide Nanoparticles- Containing SBA-15 Powder and Thin Film”, The 4th Asian Physics Symposium, Bandung, Indonesia, October 2010. [Invited].

I. Umezu, A. Kohno, J. M. Warrender, Y. Takatori, Y. Hirao, S. Nakagawa, A. Sugimura, S. Charnvanichborikarn, J. S. Williams, and M. J. Aziz, “Strong mid-infrared optical absorption emerged by supersaturated sulfur doping in silicon wafer”, 30th International Conference on the Physics of Semiconductors, Seoul, July 2010.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

香野 淳 (分担者: 田尻恭之): (独) 科学技術振興機構, 研究成果展開事業・研究成果最適展開支援プログラム A-STEP, フィージビリティスタディステージ・探索タイプ, 「規則配列ナノ細孔薄膜への酸化ナノ粒子形成技術とメモリ素子への展開」, 1,010,000 円 (2013 年分), 2013~2014 年度.

香野 淳: 研究助成寄附金, 東レ株式会社, 2,400,000 円 (総計), 2011~2013 年度.

田尻恭之: 科学研究費補助金 (若手研究 (B)) 「マルチフェロイック物質ナノ粒子の電気磁気サイズ効果とナノ粒子内包薄膜の創製」, 4,290,000 円 (総計), 2013~2015 年度.

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績

香野 淳 (分担者: 永田潔文, 眞砂卓史, 脇田久伸, 匠 正治, 田尻恭之, 栗崎 敏): 領域別研究チーム「物質材料微細構造の物性と制御」, 487,000 円, 2011 年.

香野 淳 (実施責任者・分担者: 眞砂卓史), 高度化推進研究・研究科特別経費 (タイプ I): 「スピノンピング効果を用いたスピンの発生」, 4,022,000 円, 2011 年.

香野 淳 (分担者: 田尻恭之), 高度化推進研究・研究科特別経費 (タイプ I): 「機能性材料創製のためのナノ構造制御プロセスの開発」, 4,530,000 円, 2013 年.

最近4年間の学会等学術団体における役職など

香野 淳:

(1) (公社)応用物理学会・九州支部 理事.

(2) International Microprocesses and Nanotechnology Conference, Program Committee, 2008 年~.

(3) International Microprocesses and Nanotechnology Conference, Section Subhead (Nanofabrication), 2012 年~2013 年.

(4) Japanese Journal of Applied Physics (Special Issue: Microprocesses and Nanotechnology), Editor, 2011 年, 2013 年

(5) リフレッシュ理科教室・実行委員 (主催: 応用物理学会), 1999 年~

(6) 第 71 回応用物理学会学術講演会 現地実行委員, 2010 年.

(7) International Union of Materials Research Societies- The IUMRS International Conference in Asia 2014, Local steering committee Vice chair, 2013 年~2014 年

<p>田尻恭之：</p> <p>(1) リフレッシュ理科教室・実行委員（主催：応用物理学会），2011年～</p> <p>(2) International Union of Materials Research Societies- The IUMRS International Conference in Asia 2014, Local steering committee, 2013年～2014年</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文</p> <p><u>香野 淳</u>，「X線反射・X線回折による薄膜・界面・ナノ構造の計測と構造評価」，東レ株式会社・社内講演会，大津市，2014年1月20日。【依頼講演】。</p> <p><u>香野 淳</u>，「規則配列ナノ細孔薄膜中へのナノ粒子の形成と構造物性」，佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター講演会，鳥栖市，2013年12月19日。【招待講演】。</p> <p><u>香野 淳</u>，「ナノ粒子およびナノ薄膜の作製と構造解析・状態分析の手法」，第8回おおむた産学官連環交流会，大牟田，2011年3月18日。</p> <p><u>A. Kohno</u>，“Nanomaterials Research for Green Technology – fundamental and applied sciences”，Seminar at College of Natural Sciences, University of Incheon, Korea, December 2, 2011.</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p> <p>該当なし</p>
<p>その他特筆事項</p> <p>特許：「直列接続型ソーラーセルおよびソーラーセルシステム」（共同出願：鮫島俊之，神谷秀博，白樫淳一，蓮見真彦，東清一郎，<u>香野 淳</u>），特願2011-068760号（2011年3月25日出願）。</p>

研究室名
量子電子物性研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>量子電子物性研究室では、電子物性の中で特に固体中のスピンに着目したスピントロニクス分野の研究を行っている。</p> <p>金属スピントロニクスにおいては、スピン流の生成・検出に取り組んでおり、近年は高周波応用の観点から、強磁性共鳴やスピンプンピングによるスピン注入を行っている。これまでに単一微小磁性体の強磁性共鳴の観測により、磁性体形状によって共鳴周波数を大きく制御することに成功した。また、電子の伝搬に依存しないスピン流として、パーマロイ中を伝搬する静磁表面スピン波の生成・検出実験を行い、スピン波の波数や減衰長などを見積もった。今後、スピン波の非相反性や群速度に関する膜厚依存性など、基礎物性の蓄積とともに、スピン波への磁壁の影響などを調べる予定である。(九州大学、物質材料研究機構、産業技術総合研究所と一部共同研究)</p> <p>半導体スピントロニクスにおいては、狭ギャップ化合物半導体 InSb 系の量子井戸を用いて、キャリア密度、移動度、スピン軌道相互作用などの電子伝導物性についてドーピング濃度や井戸幅の依存性、幅広い温度領域にわたって系統的な測定を行っている。さらに、バンドアライメントのシミュレーションによる検討を行い、量子井戸層への As 導入によりバンドが大きく変化し、電気伝導特性に影響していることを見いだした。これらの結果を検討し、より特性のよい量子井戸構造の検討を行っている。(野口研究所、旭化成、山口東京理科大学と共同研究)</p> <p>その他、磁気力顕微鏡において我々のグループで開発した CNT-MFM 探針 (カーボンナノチューブに磁性体をコートした探針) を用いることにより分解能が劇的に向上する起源の探求、及び、さらなる性能向上の指針を得るために、マイクロマグネティックシミュレーションによる探針磁化状態の解析を行った。(東京大学、山口大学と共同研究)</p> <p>キーワード: スピントロニクス・スピン流・スピン波・狭ギャップ化合物半導体・スピン軌道相互作用・CNT-MFM (強磁性コートカーボンナノチューブ探針を用いた磁気力顕微鏡)・マイクロマグネティックシミュレーション・ナノテクノロジー</p>
研究室の構成員
眞砂卓史 (准教授)・博士 (理学)
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2 : 1 名 4 年次生 : 4 名
教員の担当科目
<p>眞砂卓史 :</p> <p>(理学部) 基礎電磁気学Ⅱ、基礎電磁気学演習Ⅱ、先端材料科学・ナノ構造科学、物理学基礎ゼミナール・ナノサイエンス基礎演習、物理科学の世界、ナノサイエンス入門、物理と社会・理学と社会、材料科学国際演習、物理科学研究Ⅰ・Ⅱ、卒業論文</p> <p>(工学部) 力学C、物理学実験</p>

(大学院) 磁性物理学特論、ナノ物理学実験、ナノ物理学講究

教員の所属学会

眞砂卓史：応用物理学会、日本物理学会、日本磁気学会

最近4年間の学術論文

眞砂卓史、石田修一、外賀寛崇、柴崎一郎

"狭ギャップ半導体 InSb 系量子井戸の最近の進展" (解説)

J. Vac. Soc. Jpn. (「真空」), 57, in press.

H. Kuramochi, H. Asada, T. Uzumaki, H. Yui, M. Iitake, F. Takano, H. Akinaga, T. Manago,

"Material Dependence of Magnetic Force Microscopy Performance using Carbon Nanotube Probes: Experiment and Simulation",

J. Appl. Phys. 115, 093907 (6 pages) (2014). (査読有)

K. Yamanoi, S. Yakata, T. Kimura, T. Manago,

"Spin Wave Excitation and Propagation Properties in a Permalloy film",

J. Jpn. Appl. Phys. 52, 083001 (5 pages) (2013). (査読有)

T. Manago, K. Yamanoi, S. Yakata, T. Kimura,

"Size Dependence of Ferromagnetic Resonance in a Submicron Patterned Magnet",

Jpn. J. Appl. Phys., 52, 053001 (4 pages) (2013). (査読有)

K. Yamanoi, S. Yakata, T. Kimura, T. Manago,

"Ferromagnetic Resonance of a Single Micron Dot using Vector Network Analyzer",

J. Korea Phys. Soc., 63, 800-803 (2013). (査読有)

T. Manago, H. Asada, H. Kuramochi,

"Micromagnetic Simulation of CNT-MFM Probes under Magnetic Field",

J. Korea Phys. Soc., 62, 1883-1886 (2013). (査読有)

D. Tanabe, K. Tsukada, I. Yamaguchi, T. Manago,

"Preparation of $\text{YBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_{7-d}$ Patterned Film using Metal Organic Deposition with Electron Beam Irradiation",

Jpn. J. Appl. Phys. 51, 113101 (5 pages) (2012). (査読有)

T. Manago, H. Asada, T. Uzumaki, F. Takano, H. Akinaga and H. Kuramochi,

"The advantages of the magnetic structure in ferromagnetic-film-coated carbon nanotube probes",
Nanotechnology 23, 035501 (6 pages) (2012). (査読有)

D. Tanabe, K. Tsukada, I. Yamaguchi, T. Manago, "

Preparation of $\text{YBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_{7-d}$ Micro-Patterns by Metal Organic Deposition with Electron Beam",

Jpn. J. Appl. Phys. 49, 081101 (4 pages) (2010). (査読有)

T. Manago, T. Sonobe, I. Yamaguchi, F. Takano,

"Lattice template effect on epitaxial $\gamma\text{-Fe}_2\text{O}_3$ films prepared by metal organic deposition",

J. Appl. Phys. 107, 053908 (4 pages) (2010). (査読有)

- S. Ishida, T. Manago, N. Nishizako, H. Geka, I. Shibasaki,
 "Spin-orbit interaction and negative magnetoresistance for localized electrons in InSb quantum wells",
 Physica E 42, 984-986 (2010). (査読有)
- N. Nishizako, T. Manago, S. Ishida, H. Geka, I. Shibasaki,
 "Carrier Density Dependence of Spin-Orbit Interaction in InAsSb Quantum Wells",
 Physica E 42, 975-978 (2010). (査読有)
- T. Manago, N. Nishizako, S. Ishida, H. Geka, I. Shibasaki, K. Makise, K. Mitsuishi,
 "Doping Level Dependence of Transport Properties in InAsSb Quantum Wells",
 Physics Procedia 3, 1219-1224 (2010). (査読有)
- S. Ishida, T. Manago, I. Shibasaki, H. Geka, A. Okamoto,
 "Accumulation of Localized Electrons in Sn Doped InSb/Al_xIn_{1-x}Sb Quantum Wells",
 Physics Procedia 3, 1213-1218 (2010). (査読有)

最近4年間の学術著書

該当なし

最近4年間の学術国際会議での発表

- T. Manago, S. Ishida, H. Geka, I. Shibasaki,
 "Comparative Study of Transport Properties in AlInSb/InSb and AlInSb/InAsSb Quantum Wells",
 17th International Conference on Crystal Growth and Epitaxy (ICCGE17), Warsaw, Poland,
 2013/8/14 (11~16)
- K. Yamanoi, S. Yakata, K. Kimura, T. Manago,
 "Ferromagnetic Resonance of a Single Micron Dot using Vector Network Analyzer",
 The 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea 2012/7/12 (8~13).
- T. Manago, H. Asada, H. Kuramochi,
 "Micromagnetic Simulation of CNT-MFM Probes under Magnetic Field",
 The 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea 2012/7/9 (8~13).
- H. Asada, H. Kubo, H. A. Seman, T. Manago, H. Kuramochi,
 "Micromagnetic study on the perturbative effect of MFM probe on 90°asymmetric Neel walls in a soft magnetic material",
 The 19th International Conference on Magnetism, Busan, Korea 2012/7/12 (8~13).
- H. Asada, H. Kubo, A. S. Hazrina, T. Manago, H. Kuramochi, F. Takano, H. Akinaga,
 "Micromagnetic Study on the Perturbative Effect of CNT-MFM Probe on Soft Magnetic Materials",
 The 55th Annual Conference on Magnetism & Magnetic Materials, Atlanta, USA, 2010/11/16 (14~18).

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
眞砂卓史：日本学術振興会・科研費・基盤(B)「CNT-MFM 探針を用いた微小磁区構造評価法と微弱磁気計測法の開発」・代表（2010年度）・1898万円（直接経費）・2008年～2010年 眞砂卓史：日本学術振興会・科研費・基盤(C)「狭ギャップ化合物半導体の基礎電子物性とスピン物性の探求」・代表・420万円（直接経費）・2012年度～2014年度（終了予定）
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
眞砂卓史：福岡大学・領域別研究部研究チーム「物質材料微細構造の物性と制御」・35.1万円・2012年度（分担者：田尻恭之・匠正治・脇田久伸・栗崎敏）
最近4年間の学会等学術団体における役職など
眞砂卓史：日本磁気学会 編集委員 応用物理学会 リフレッシュ理科教室 実行委員
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
眞砂卓史、「微小磁性体の高周波ダイナミクスの研究」、ナノテクノロジー・ネットワーク 2012年度報告書、p.46. 眞砂卓史、「局所強磁性共鳴によって誘起される直流電圧の研究」、ナノテクノロジー・ネットワーク 2011年度報告書、p.86-87. 眞砂卓史、「CNT-MFM 探針の作製と特性評価」、ナノプロセッシング・パートナーシップ・プラットフォーム 2011年度報告書. 眞砂卓史、「磁気力顕微鏡用 CNT-MFM 探針の磁気特性評価」、ナノテクノロジー・ネットワーク 2010年度報告書、p.67-68.
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
計算物性物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>近年のコンピュータ技術の発展・進歩により、物性物理研究における数値計算の役割が増大し、コンピュータを用いた研究活動は質的にも量的にも大きな進展を遂げつつある。我々の研究室では、コンピュータを用いた理論研究、データ解析、シミュレーションなどを行っている。コンピュータを数値実験の道具として活用することで、物性物理、量子物理学、統計力学などのさまざまな分野の問題を解明することを目指している。</p> <p>キーワード：量子スピン系、マルチフェロイクス、磁化プラトー、フラストレーション</p>
研究室の構成員
<p>宮原 慎 (准教授)・博士 (理学) 椿原 晋介 (助教)・博士 (工学)</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M1：0名、M2：0名、4年次生：4名 卒論生の研究テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ● シミュレーションを用いた静電場解析 ● 振り子運動のシミュレーション ● 偏光顕微鏡像の画像解析による生分解性高分子の融解・結晶化過程の研究 ● 偏光顕微鏡像の画像解析によるポリエチレンテレフタレートの融解・結晶化過程の研究
教員の担当科目
<p>宮原 慎：物理数学 I、物理学と数学 I、計算物理学、物理学 B、力学 C 椿原 晋介：物理学基礎ゼミナール、物理科学実験 I、物理科学実験 II</p>
教員の所属学会
<p>宮原 慎：日本物理学会 椿原 晋介：応用物理学会、高分子学会</p>
最近4年間の学術論文
<ol style="list-style-type: none"> 1. S. Miyahara and N. Furukawa, Theory of magneto-optical effects in helical multiferroic materials via toroidal magnon excitation, Phys. Rev. B 89, 195145 (2014) 2. S. Miyahara and N. Furukawa, Electromagnon in multiferroic materials with Dzyaloshinsky-Moriya-interaction-induced helical spin structure, Journal of the Korean Physical Society 62, 1763 (2013) 3. R. S. Fishman, J. T. Haraldsen, N. Furukawa, and S. Miyahara, Spin state and spectroscopic modes of multiferroic BiFeO₃, Phys. Rev. B 87, 134416 (2013) 4. 椿原晋介、坂本一成、安庭宗久、ポリブチレンサクシネートの動的粘弾性測定による融解過程の解析、福岡大学理学集報 41, 1(2011)
最近4年間の学術著書
なし
最近4年間の学術国際会議での発表
S. Miyahara and N. Furukawa, Toroidalmagnon in 2D Antiferromagnet Ba ₂ CoGe ₂ O ₇ , Strongly Correlated Electron Systems, Tokyo, Aug. 2013
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
なし

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績	なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など	なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など	なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文	なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など	なし
その他特筆事項	なし

研究室名
複雑系物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>複雑系物理学研究室では、生命現象を支配する基本原理を解明することを最終目標としている。“生きている物”を、エネルギーの流れの中で自発的に質の転換を起こして秩序を自己生成する非線形非平衡システムとして捉え、生命の基本原理を物理学の観点から追究する中で、新しい非線形非平衡科学の分野を切り開いていくことを目的としている。本研究室の最近の研究では、生きている証としてのリズムの自発的発生や同期、形態形成、神経ネットワークの情報処理などについて、反応拡散系で現れる自己組織化を基本にしたモデル系を構築した。マイクロエマルジョンを用いた連続反応場では、酸化還元反応スポットが対で現れる場合や交互に鎖状で現れる場合など、Turing 不安定性が引き金になって新奇な多重安定パターンが形成されることを見出した。自己触媒反応を内包させた活性素子からなるニューロネットワークのモデル系では、結合様式と揺らぎを鍵に、発火の時空コヒーレンス、相互同期、クラスタリングなど集団ダイナミクスを自在に制御できことを明らかにした。更に、高集束レーザー光場では、微小物体の高速回転や液晶の配向欠陥の制御など、多彩な非線形現象を誘起できることを明らかにした。</p> <p>キーワード：自己組織化・反応拡散系・確率共鳴・非平衡パターン・ネットワーク・光トラッピング</p>
研究室の構成員
<p>宮川賢治（教授）・理学博士 坂本文隆（助教）・修士（理学）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M2：1名 M1：0名 4年次生：5名</p>
教員の担当科目
<p>宮川賢治：(学部) 基礎ゼミナール、力学A、物理科学の世界、熱力学Ⅰ、熱力学Ⅱ、物理数学Ⅱ、物理学実験、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、卒業論文 (大学院) 超分子物性講究、超分子物性実験、物理情報計測講究、物理情報計測実験、相転移物理学特論、応用数学特論Ⅰ、物理情報計測特別研究、修士論文 坂本文隆：(学部) 基礎ゼミナール、物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ</p>
教員の所属学会
<p>宮川賢治：日本物理学会、日本生物物理学会 坂本文隆：日本物理学会、日本生物物理学会、高分子学会、日本液晶学会</p>

最近4年間の学術論文

- K. Miyakawa, T. Okano, and S. Yamazaki: Cluster Synchronization in a Chemical Oscillator Network with Adaptive Coupling. *J. Phys. Soc. Jpn.* 82, 034005-1-034005-6 (2013). (査読有)
- K. Narahara, M. Misono, and K. Miyakawa: External synchronization of oscillating pulse edge on a transmission line with regularly spaced tunnel diodes. *Phys. Rev. E* 87, 012902-1-012902-10 (2013). (査読有)
- 坂本文隆, 宮川賢治: ノイズが誘起する新しいチューリング不安定性. *福岡大学理学集報*, 42 (1), 9-14 (2012).
- M. Misono and K. Miyakawa: Chaotic Behavior and Noise-Induced Order in a Laser Diode System with the Feedback Employing Rb Atom. *J. Phys. Soc. Jpn.* 80, 124803-1-124803-6 (2011). (査読有)
- M. Misono and K. Miyakawa: Noise-Induced Phase Locking and Frequency Mixing in an Optical Bistable System with Delayed Feedback. *J. Phys. Soc. Jpn.* 80, 114801-1-114801-6 (2011). (査読有)
- K. Miyakawa, A. Yoshinaga, and D. Ariyoshi: Textures in thin films of nematic liquid crystals induced by strongly focusing a circularly polarized laser. *Phys. Rev. E* 83, 031704-1-031704-6 (2011). (査読有)
- T. Okano and K. Miyakawa: Control of noise-induced coherent behaviors in an array of excitable elements by time-delayed feedback. *Phys. Rev. E* 82, 027202-1-027202-4 (2010). (査読有)
- 御園雅俊, 中島渉, 宮川賢治: ルビジウム原子と結合した半導体レーザーにおける光周波数のカオス的変動. *福岡大学理学集報* 40 (2), 175-180 (2010).
- 御園雅俊, 宮川賢治: 遅延帰還のあるシュミットトリガー・インバータにおけるコヒーレンス共鳴と確率共鳴. *福岡大学理学集報* 40 (1), 21-29 (2010).
- M. Misono and K. Miyakawa: Noise-Induced Phase Locking and Frequency Mixing in a Schmitt-Trigger Inverter with Delayed Feedback. *J. Phys. Soc. Jpn.* 79, 034801-1-034801-6 (2010). (査読有)

最近4年間の学術著書

該当なし

最近4年間の学術国際会議での発表

- F. Sakamoto and K. Miyakawa: Oxidized and Reduced Spots induced in the Intermediate-State Background by the Turing Instability. (Workshop on Self-organization and Emergent Dynamics in Active Soft Matter. Kyoto. 2013年2月).
- F. Sakamoto, A. Nishiyama, M. Misono, and K. Miyakawa: Synchronization between Chemical Oscillators through Mechanical Contact and Connection. (Workshop on Self-organization and Emergent Dynamics in Active Soft Matter. Kyoto. 2013年2月).

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

- 宮川賢治: 日本学術振興会・科研費・基盤研究 (C)「神経ネットワークが創発する集団ダイナミクスのモデリング」・代表・400万円 (直接経費)・2012年度~2014年度 (終了予定)
- 宮川賢治: 日本学術振興会・科研費・基盤研究 (C)「アダプティブ結合を持つ能動要素ネットワークの自己組織化—デザインと制御」・代表・340万円 (直接経費)・2009年度~2011年度

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
宮川賢治：福岡大学大学院理学研究科高度化推進事業タイプI・「非平衡揺動場における非線形系のコヒーレントダイナミクス」・500万円・2010年（分担者：御園雅俊・坂本文隆）
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
ソフトマター構造物性・科学コミュニケーション研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>当研究室では、長年にわたり長鎖有機分子の凝集構造とその物性について、各種の測定手法を使って研究してきた。近年の大きなテーマとして、天然や合成ゲルの低含水量域での分子鎖と水の相互作用を検討してきた。具体的には、天然高分子ゲルとして卵白ゲル、合成高分子ゲルとしてアクリルアミドゲルや N-イソプロピルアクリルアミドゲル (NIPA ゲル)、ポリビニルアルコールゲルについて調べている。その結果、分子鎖ネットワークに束縛された水と、自由に運動することができる水の、脱離過程における量的な割合の変化を明らかにすることができた。また、各種ゲル分子鎖の相互作用の違いによって、その様子が違う事を明らかにした。</p> <p>以上の研究に加えて、科学技術コミュニケーションの方法論の研究を行なっている。具体的には、社会に受け入れられる科学技術コミュニケーションの方法について、理科読におけるファシリテーション技法の活用の可能性を探っている。昨年度は、コントロール対象群として、ファシリテーションの技法について系統だった知識経験のない被験者に理科読の企画立案運営を行ってもらい、その活動を詳細に記録した。今年度は、引き続き理科読の企画立案運営を被験者に行っていただき、その活動を資料集として記録した。また、滝川洋二氏（東海大教授、ガリレオ工房理事）のサイエンスショーに参加してもらい、運営等の技術指導を行った。</p> <p>キーワード：高分子・ゲル・分子凝集構造・相互作用・科学技術コミュニケーション、理科読</p>
研究室の構成員
平松信康（教授）・工学博士 中村忠嗣（助教）・理学修士
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生：5 名
教員の担当科目
平松信康：(学部) 物理学と数学Ⅱ、物理学と数学演習、基礎電磁気学Ⅰ、基礎電磁気学演習Ⅰ、物理科学研究Ⅰ、Ⅱ、卒業論文 (大学院) 超分子物性講究、超分子物性実験、超分子物性特論B、生体物性特論、力学物性特論 中村忠嗣：(学部) 物理科学実験Ⅰ・Ⅱ、物理学基礎ゼミナール
教員の所属学会
平松信康：応用物理学会、日本物理学会、日本 MRS、高圧力学会、物理教育研究会 中村忠嗣：応用物理学会、日本物理学会、高分子学会、日本 MRS、日本結晶学会

最近4年間の学術論文								
A. Nakamura, K. Hara, N. Hiramatsu, "Thermal Behavior of Thermal Behavior of Albumin Gel in Low Water Content", Transactions of the Materials Research Society of Japan 35 (4), 869-872 (2010). (査読有)								
最近4年間の学術著書								
該当無し								
最近4年間の学術国際会議での発表								
A. Nakamura, K. Hara, N. Hiramatsu, "Relationship Between Exothermic Peak and Heat of Fusion of Low Water Content Gel in The Heating Process", International Union of Materials Research Societies – International Conference in Asia, Korea, 2012年8月. A. Nakamura, K. Hara, N. Hiramatsu, "Comparison of Thermal Behavior between Gel and Sol of Poly(N-isopropylacrylamide) in Low Water Content", International Union of Materials Research Societies – International Conference in Asia, Taipei, 2011年9月. A. Nakamura, K. Hara, and N. Hiramatsu, "Thermal Behavior of N-isopropylacrylamide (NIPA) Gel in Low D2O Content", 11th IUMRS International Conference in Asia, China. 2010年9月.								
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績								
平松信康（代表者）（分担者は多数の実行委員）： <table border="0"> <tr> <td>応用物理学会平成25年度リフレッシュ理科教室の開催資金</td> <td>65万円（応用物理学会）</td> </tr> <tr> <td>応用物理学会平成24年度リフレッシュ理科教室の開催資金</td> <td>80万円（応用物理学会）</td> </tr> <tr> <td>応用物理学会平成23年度リフレッシュ理科教室の開催資金</td> <td>45万円（応用物理学会）</td> </tr> <tr> <td>応用物理学会平成22年度リフレッシュ理科教室の開催資金</td> <td>50万円（応用物理学会）</td> </tr> </table>	応用物理学会平成25年度リフレッシュ理科教室の開催資金	65万円（応用物理学会）	応用物理学会平成24年度リフレッシュ理科教室の開催資金	80万円（応用物理学会）	応用物理学会平成23年度リフレッシュ理科教室の開催資金	45万円（応用物理学会）	応用物理学会平成22年度リフレッシュ理科教室の開催資金	50万円（応用物理学会）
応用物理学会平成25年度リフレッシュ理科教室の開催資金	65万円（応用物理学会）							
応用物理学会平成24年度リフレッシュ理科教室の開催資金	80万円（応用物理学会）							
応用物理学会平成23年度リフレッシュ理科教室の開催資金	45万円（応用物理学会）							
応用物理学会平成22年度リフレッシュ理科教室の開催資金	50万円（応用物理学会）							
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績								
平松信康（代表者）： 2012年～2013年度の総合科学研究部研究チーム「社会に受け入れられる科学技術コミュニケーションの方法についての研究」・237.7万円（2012年）（学内分担者：永田潔文・村上剛人・鶴田直之）								
最近4年間の学会等学術団体における役職など								
平松信康： 公益社団法人応用物理学会 理事（2010年～2014年3月） 公益社団法人応用物理学会 九州支部長（2012年～2014年3月） IUMRS-ICA2014 準備現地実行委員長(Chair of local steering committee) 日本技術者教育認定機構 基準総合調整委員会委員（日本技術者教育認定機構（JABEE）） （2014年3月まで）								
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など								
平松信康： 巻頭言「科学の楽しさをすべての人に」応用物理教育 第34巻2号 2010年								

最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文

平松信康：

- ・「理科読の実践報告」第11回理科読シンポジウム 於東京大学（東京都文京区）と福岡大学との同時中継による開催（2013. 6. 29）
- ・「科学啓発活動の実践」平成24年度大分県科学体験指導者研修会 於大分市（2013. 3. 13）
- ・「福岡県における理科読の実践報告-地域で理科読をどのように広めるか」-シンポジウム地域の科学教育・支援を取り巻く新しい潮流-、於福岡大学（2012. 12. 25）
- ・「理科読をはじめよう」飯塚市学校図書館協議会講演会（2012. 7.）
- ・「科学の楽しみをすべての人に」カルティエ福大 アクロス福岡（2010. 11. 25）
- ・「世界一受けたいサイエンス教室～磁石のふしぎな世界～」世界一行きたい科学広場 in 宗像 於宗像市（2010. 10. 30）
- ・「教育公益事業として応用物理学会九州支部（福岡会場）が取り組んできたリフレッシュ理科教室」第71回応用物理学会学術講演会シンポジウム「ものづくり人材育成および理科教育の地域の取組みとその活性化～九州地区～」於長崎大学（2010. 9. 15）
- ・「福岡での科学啓発活動ーリフレッシュ理科教室から SAFnet へー」物理教育研究会（APEJ）2010年度夏季大会 総合講演 福岡（2010. 8. 4）

最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

平松信康：

JST 地域ネットワーク支援推進事業「SAFnet の構築」常任運営委員
第53回～第56回 福岡県児童生徒発明くふう展 審査員長
小倉高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業 コア SSH 運営指導委員
第14回～第17回リフレッシュ理科教室 実行委員長
物理教育研究会2010年度夏季大会 実行委員
高校物理の授業に役立つ基本実験講習会 in 福岡 実行委員
世界一行きたい科学広場 in 宗像 大会運営委員
JST 地域ネットワーク支援推進事業 SAFnet キックオフシンポジウム 実行委員
「理科読（りかどく）のすすめ」（飯塚）実行委員長
平成24年度および平成25年度「サイエンスモール in 飯塚」実行委員長

その他特筆事項

平松信康：

福岡市立少年科学文化会館（福岡市）基本構想検討委員会 委員
第2級アマチュア無線技士従事者免許（免許証番号 HBKI00024）取得
第1級アマチュア無線技士従事者免許（免許証番号 HBLH00001）取得
米国 Federal Communication Commission (FCC) Amateur Radio License (General Class) 取得

研究室名
形象物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>合金における規則化相転移とそれに伴うドメイン構造形成の時間発展</p> <p>合金における不規則状態から規則状態への相転移では、規則構造の位相や方位が異なる兄弟晶の領域が異位相境界や双晶境界によって区切られるドメイン構造が形成される。このような構造の発生と時間空間発展に関して、熱統計力学を基礎とする理論的解析を行っている。代表的ないくつかの規則化過程について、結晶対称性を考慮した連続媒質上のメゾスコピックな time-dependent-Ginzburg-Landau (TDGL) モデルを構築しており、そこから導かれる速度方程式に基づいた計算機シミュレーションと TEM による実験観察結果から、規則ドメイン構造の形態と時間発展に関する理解を試みている。</p> <p>キーワード：規則不規則転移，合金，TDGL モデル</p>
<p>PostScript による規則性非周期図形の作画</p> <p>PostScript はページ記述言語の 1 つで、再帰的な処理に向いており、一見複雑な図形を短いプログラムで描くことができる。これを用いて規則性のある非周期図形（例えば、ペンローズタイル）の作画法を研究している。</p> <p>キーワード：ペンローズタイル，PostScript</p>
<p>PSoC マイコンによる計測と制御</p> <p>Programmable System on Chip (PSoC: ピーソック) はソフトウェアで変更可能なアナログ信号処理系を内蔵している安価なマイクロコンピュータチップである。これを種々の計測制御システムに利用すべく、使い方を研究している</p> <p>キーワード：PSoC，アナログ信号処理</p>
研究室内の構成員
<p>赤星 信 (准教授)・理学博士</p> <p>小隈龍一郎 (助教)・博士 (工学)</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M1：0 名，M2：1 名 PSoC による計測制御</p> <p>4 年次生：6 名 PostScript による作画，3D プリンタ(2 件)，脈拍の LED 表示，棒振子内加速度分布，ばね振子の位置制御</p>
教員の担当科目
<p>赤星 信：(学部) 物理学基礎ゼミナール、物理科学の世界、エレクトロニクス、物理学基礎演習、物理学演習、物理科学研究 I、物理科学研究 II、科学プレゼンテーション、卒業論文 薬学物理学入門、物理学</p> <p>(大学院) 信号特論、物理情報計測実験、物理情報計測講究、応用物理学特論 II</p> <p>小隈龍一郎：(学部) 物理科学実験 I、物理科学実験 II、物理学基礎ゼミナール</p>

教員の所属学会
赤星 信：日本物理学会、応用物理学会 小隈龍一郎：日本金属学会、日本物理学会
最近4年間の学術論文
小隈龍一郎, 松村晶, 土井稔, 波多聰, 緒方啓丞, “Fe-Ni-Al合金の2段階相分離過程に対する2個の球状ドメインを用いたシミュレーション”, 福岡大学理学集報 43(2), 143-151 (2013). R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Simulations of Structure Formation in B2 type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, AIP Conference Proceedings 1518, 703-709 (2013). (査読有) R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Application of TDGL Model to B2 Type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, Proceedings of the MMM2012-6th International Conference on MULTISCALE MATERIALS MODELING, MRS online proceedings, 7 pages (2013), to be published. (査読有) R. Oguma, S. Matsumura, T. Eguchi, “Mesoscopic TDGL Model for Formation of Domain Structures in D0 ₁₉ Type Ordering”, Solid State Phenomena 172-174, Part 1, 602-607 (2011). (査読有)
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Simulations of Structure Formation in B2 type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, The 4th International Symposium on Slow Dynamics in Complex Systems, December, 2012, Sendai, Japan. R. Oguma, S. Matsumura, M. Doi, S. Hata, K. Ogata, “Application of TDGL Model to B2 Type Ordering with Two Step Phase Separation in Fe-Ni-Al Alloys”, MMM 2012-Sixth International Conference on Multiscale Materials Modeling, October 15-19, 2012, Biopolis, Singapore. R. Oguma, S. Matsumura, T. Eguchi, “Domain Growth and Formation of Boundary Structures in D0 ₁₉ Type Ordering in Binary Alloys”, The 4th Discussion Meeting on Glass Transition, February 28-March 2, 2011, Sendai, Japan.
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
小隈龍一郎：飯塚市理科読の会実行委員

研究室名
超伝導物性研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>超伝導物性研究室では、高温超伝導体を中心とする特異な物性を発現する物質について、凝縮メカニズムや磁束ピン止め機構の解明などの基礎物理学的観点と、高機能で新規な性質を発現する材料開発の物質科学的観点の両面から、研究を行っている。具体的には、イットリウム系、ガドリニウム系、イッテルビウム系、ビスマス系、二ホウ化マグネシウム系を中心とする高温超伝導物質の実験的研究を行っている。固相反応法を用いてバルク試料や膜状試料を作成し、電気抵抗測定、走査型電子顕微鏡観察、X線回折測定、熱分析測定、磁気測定などによる、多角的な解析・評価を行い、さらに評価結果を試料作成方法にフィードバックすることによって、より高機能な物質の創製と物性の発現を目指している。</p> <p>最近の研究では、二ホウ化マグネシウム多層膜の臨界特性におけるスケール則の吟味、これまでで最大の厚さの二ホウ化マグネシウム多層膜の臨界特性の測定と膜厚効果の研究、Gd系銅酸化物超伝導体に対するYb置換効果の研究、Yb系銅酸化物超伝導体に対するGd置換効果の検討、Bi2212系銅酸化物超伝導体の作成と評価などについて研究を行った。これにより、焼結温度が高いGdをYbで部分置換することによって焼結温度を下げ、より低いエネルギーで良質の試料を作成することに成功した。</p> <p>キーワード：高温超伝導・ガドリニウム系・ビスマス系・MgB₂・スケール則・元素置換</p>
研究室の構成員
西田昭彦（教授）・理学博士 竹内（高）千寿（助教）・理学修士
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4年次生：6名 （卒業論文研究テーマ）</p> <p>Y系銅酸化物超伝導体の試料作成と評価 Y系銅酸化物超伝導体における浸水前後の性質の変化 Yb系銅酸化物超伝導体の試料作成とその評価 Yb系銅酸化物超伝導体へのGd置換による転移温度の変化 Gd系銅酸化物超伝導体の焼結温度と転移温度の関係 Gd系銅酸化物超伝導体へのYb置換効果の研究</p>
教員の担当科目
<p>西田昭彦：(学部) ナノサイエンス入門、ナノサイエンス基礎演習、物理科学の世界、ナノ材料科学実験Ⅱ、物性物理学Ⅱ、物理科学研究Ⅰ・Ⅱ、卒業論文、力学B、C、物理学実験</p> <p>(大学院) 物性物理学講究、物性物理学実験、低温物理学特論、修士論文</p> <p>竹内千寿：(学部) 物理学基礎ゼミナール、物理科学実験Ⅰ・Ⅱ、ナノ材料科学実験Ⅱ</p>

教員の所属学会
西田昭彦：日本物理学会、応用物理学会 竹内千寿：日本物理学会
最近4年間の学術論文
<p>A. Nishida, C. Taka, S. Chromik, R. Durny, “Comparison of critical properties in MgB₂ nanometer films prepared on SiC/Si substrate”, accepted for publication in Journal of Physics: Conference Series. (査読有)</p> <p>Chihiro Taka, Masatomo Murata, Akihiko Nishida, “Effects of Ca Substitution in High-Temperature Superconducting YbBa₂Cu₃O_{7-δ} Ceramics”, Fukuoka University Science Reports 43(1), 1-9 (2013).</p> <p>S. Chromik, A. Nishida, V. Štrbík, M. Gregor, J.P. Espinós, J. Liday, R. Durný, “The distribution of elements in sequentially prepared MgB₂ on SiC buffered Si substrate and possible pinning mechanisms”, Applied Surface Science 269, 29 – 32 (2013). (査読有)</p> <p>Y. Matsumoto, H. Tanaka, A. Nishida, T. Akune, N. Sakamoto, A A A. Youssef, “On the scaling analyses of the flux pinning force density estimated for two types of MgB₂ specimens” Journal of Physics: Conference Series 400, 022070 (4 pages) (2012). (査読有)</p> <p>Akihiko Nishida, Chihiro Taka, Stefan Chromik, Rudolf Durny, “Examination of the scaling behavior of critical properties in MgB₂/SiC/Si thin films”, Physics Procedia 36, 644 – 648 (2012). (査読有)</p> <p>A. Nishida, C. Taka, S. Chromik, R. Durny, “Nanometer thickness effects on critical properties in MgB₂ thin films prepared on SiC/Si substrate”, Proceedings of the Twenty-Third International Cryogenic Engineering Conference and International Cryogenic Materials Conference 2010, 1249-1254 (Publication Office, Wrocław University of Technology, Poland, 2011). (査読有)</p> <p>高（竹内）千寿，西田昭彦，“ナノ粒子γ-フェライト膜の磁気特性とシミュレーション”，福岡大学理学集報 41(2), 155-163 (2011).</p>
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
<p>A. Nishida, C. Taka, S. Chromik, R. Durny, “Comparison of critical properties in MgB₂ nanometer films prepared on SiC/Si substrate”, 11th European Conference on Applied Superconductivity 2013 (EUCAS 2013): Genova, Italy 2013. 9. 15-19</p> <p>A. Nishida, C. Taka, S. Chromik, R. Durny, “Examination of the scaling behavior of critical properties in MgB₂/SiC/Si thin films”, Superconductivity Centennial Conference: Den Haag, Netherlands 2011. 9. 18-23.</p> <p>Y. Matsumoto, H. Tanaka, A. Nishida, T. Akune, N. Sakamoto, Ahmed A A. Youssef, “On the scaling analyses of the flux pinning force density estimated for two types of MgB₂ specimens”, 26th International Conference on Low Temperature Physics (LT26), Beijing, China. 2011. 8. 10-17.</p> <p>A. Nishida, C. Taka, S. Chromik, R. Durny, “Nanometer thickness effects on critical properties in MgB₂</p>

thin films prepared on SiC/Si substrate”, International Cryogenic Engineering Conference 23 - International Cryogenic Materials Conference 2010, Wrocław, Poland, 2010. 7. 27-28.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

該当なし

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績

研究推進部領域別研究経費

センサーマテリアル研究 (2011年度～2013年度) 1,023,000円

研究代表者 西田昭彦

最近4年間の学会等学術団体における役職など

西田昭彦：応用物理学会 九州支部理事 (2010年度～2013年度)

リフレッシュ理科教室 実行委員 (2010年度～2013年度)

第71回応用物理学会学術講演会実行委員 (2010.9.14-17)

最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

西田昭彦：「ナノ粒子 γ -フェライト LB 膜の磁気特性とシミュレーション II」, 高機能物質研究所 2009年度研究成果報告書, pp. 125-133, 2010.

最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文

該当なし

最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

「小学生のためのワクワク理科教室」福岡市立那珂小学校 (2014.2.26) 小学校児童向けに液体窒素を用いた演示・体験実験を行った。

「わくわく科学カーニバル」福岡市少年科学文化会館 (2013.12.23) 小中学生向けに液体窒素を用いた演示・体験実験を行った。

「小学生のためのワクワク理科教室」福岡市立那珂小学校 (2013.2.26) 小学校児童向けに液体窒素を用いた演示・体験実験を行った。

「わくわく科学カーニバル」福岡市少年科学文化会館 (2012.12.23) 小中学生向けに液体窒素を用いた演示・体験実験を行った。

「みんなで楽しい科学教室」飯塚市立潤野小学校 (2012.11.2) 小学校児童向けに液体窒素を用いた演示・体験実験を行った。

科学夜話第三十七夜、北九州、(2011.2.23) 「不思議な現象、超伝導。そのヒミツに迫る。」の題目で一般市民向けに依頼講演を行った。

「宗像子供サイエンス」近畿大学九州工学部(2010.10.30): 超伝導磁気浮上の演示実験を行った。

日米教育交流振興財団、評議員 (2010年度)

研究室名
生物物理研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>生物物理研究室では、タンパク質や生体膜をはじめとする生体分子のナノ構造やそのダイナミクス的高速原子間力顕微鏡による直接観察を通して、生体分子の機能発現機構の解明を目指して研究している。さらに、高速原子間力顕微鏡装置の高性能化に関する研究も行っており、生体分子の振る舞いをより高精度で解析することも目指している。</p> <p>生体分子の高速原子間力顕微鏡観察については、AAA タンパクである p97 の機能動態解析、植物由来のグラナ膜の構造解析、光駆動プロトンポンプであるバクテリオロドプシンの高次構造形成機構の研究に取り組んでいる。それぞれの研究テーマで分子分解能観察を達成しており、生体分子の構造と機能の解明に進展がみられた。</p> <p>装置開発に関しては、装置の時間分解能を制限する要因の解析を行っており、一部については今後装置を高性能化するための重要な情報を得ることができた。</p>
キーワード：生体超分子・タンパク質・生体膜・高速原子間力顕微鏡・1分子計測
研究室の構成員
山本大輔（准教授）・博士（理学）
2013 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：1名 M1：2名 4年次生：3名
教員の担当科目
山本大輔：(学部) 現代物理学入門、原子物理学、力学Ⅱ、力学演習Ⅱ、物理学の世界、ナノサイエンス入門、物理学実験、材料科学国際演習、力学B、物理学A、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、卒業論文 (大学院) ナノ物理学講究、ナノ物理学実験、生物物理学特論
教員の所属学会
日本生物物理学会、日本物理学会
最近4年間の学術論文
A. Sumino, D. Yamamoto, M. Iwamoto, T. Dewa and S. Oiki “Gating-associated clustering-dispersion dynamics of the KcsA potassium channel in a lipid membrane” Journal of Physical Chemistry Letters 5(3), 578-584 (2014) (査読有) K. Noi, D. Yamamoto, S. Nishikori, K. Arita-Morikawa, T. Kato, T. Ando and T. Ogura “High-speed atomic force microscopic observation of ATP-dependent rotation of the AAA+ chaperone p97” Structure 21(11), 1992-2002 (2013) (査読有) S. Inoue, T. Uchihashi, D. Yamamoto, T. Ando, “Direct observation of surfactant aggregate behavior on a mica surface using high-speed atomic force microscopy”, Chemical Communications

<p>47(17), 4974-4976 (2011) (査読有)</p> <p>N. Kodera, D. Yamamoto, R. Ishikawa, T. Ando, "Video imaging of walking myosin V by high-speed atomic force microscopy", Nature 468(7320), 72-76 (2010) (査読有)</p> <p>P.-E. Milhiet, D. Yamamoto, O. Berthoumieu, P. Dosset, C. Le Grimellec, J.-M. Verdier, S. Marchal, T. Ando, "Deciphering the Structure, Growth and Assembly of Amyloid-Like Fibrils Using High-Speed Atomic Force Microscopy", PLoS ONE 5(10), e13240(8pages) (2010) (査読有)</p> <p>D. Yamamoto, A. Taoka, T. Uchihashi, H. Sasaki, H. Watanabe, T. Ando, Y. Fukumori, "Visualization and structural analysis of the bacterial magnetic organelle magnetosome using atomic force microscopy", Proceedings of the National Academy of Sciences of USA 107(20), 9382-9387 (2010) (査読有)</p> <p>M.-C. Giocondi, D. Yamamoto, E. Lesniewska, P.-E. Milhiet, T. Ando, C. Le Grimellec, "Surface topography of membrane domains", Biochimica et Biophysica Acta – Biomembranes. 1798(4), 703-718 (2010) (査読有)</p>
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
<p>T. Ogura, K. Noi, T. Okuno, K. Arita-Morikawa, D. Yamamoto, A. Okawa, H. Tsuchiya, Y. Saeki, T. Ando, M. Esaki and K. Yamanaka "Dynamics of p97 and the 26S proteasome in action revealed by high-speed atomic force microscopy" EMBO workshop on AAA+ Proteins: from mechanism and disease to targets, 2013年3月</p> <p>K. Noi, D. Yamamoto, S. Nishikori, K. Arita-Morioka, T. Ando, T. Ogura, "High-speed atomic force microscopy of ATP-dependent rotational movements of p97/VCP and its interaction with amyloid fibrils of TDP-43", 3rd Kanazawa Bio-AFM Workshop. Kanazawa. 2012年11月</p>
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
<p>山本大輔：熊本大学発生医学研究所・発生医学の共同研究拠点・旅費支援「高速原子間力顕微鏡観察技術の適正化とAAA型シャペロン群の動態観察」・8万円・2013年度</p> <p>山本大輔：熊本大学発生医学研究所・発生医学の共同研究拠点・旅費支援「AAAタンパク質の高速原子間力顕微鏡によるナノ動態観察とデータ解析」・8万円・2012年度</p>
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

研究室名
超高圧物性・ナノ物理学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>当研究室では2つのテーマで研究を行っている。</p> <p>1) 超高圧下における物質の構造と性質</p> <p> 高圧力を加えることによって、同じ元素からなる物質(主として硫黄、セレン、テルルなどカルコゲン単体とその化合物)の状態を絶縁体相から半導体相を経て金属相まで変化させている。この一連の金属化の過程で、原子配列や化学結合、電気的性質や光学的性質がどのように変化していくかを調べ、それを価電子の状態変化から統一的に理解していこうとしている。そうすることによって物質の理解を深め、半導体など物質設計の基本的な方針を得ようとしている。</p> <p>2) 走査プローブ顕微鏡による薄膜の観察</p> <p> 1個の分子でスイッチやメモリになる分子素子の開発を行うには、分子が自己組織化する仕組みを知る必要がある。そのために基板や分子、あるいは分子の基板への吸着条件を種々変えて基板に単分子膜を作成し、その分子配列を走査トンネル電子顕微鏡を使って観察することによって、薄膜作成条件と分子配列との関係を明らかにしようとしている。</p> <p>キーワード：高圧、半導体、分子、相転移、構造、物性、走査プローブ顕微鏡</p>
研究室の構成員
永田潔文（教授）・工学博士 匠 正治（助教）・修士
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：走査型プローブ顕微鏡によるフラーレンの観察 M1：高圧走査型プローブ顕微鏡によるフラーレンの観察 B1：風力発電装置の作成1 B2：風力発電装置の作成2 B3：模型スターリングエンジンの作成 B4：ニュートンの運動方程式の数値積分1 B5：ニュートンの運動方程式の数値積分2 B6：走査型プローブ顕微鏡による GaSe の観察
教員の担当科目
永田潔文：(学部) ナノサイエンス入門、物理科学の世界、物理学実験、物理学入門、物理学A、力学B、ナノ材料科学実験Ⅱ、物理科学研究Ⅰ、物理科学研究Ⅱ、材料科学国際演習、ナノ科学応用実習、光学、科学プレゼンテーション、卒業論文 (大学院) ナノ物理学講究、ナノ物理学実験、応用物理学特論、半導体特論 匠 正治：(学部) 物理科学実験Ⅰ、物理科学実験Ⅱ、ナノ材料科学実験Ⅱ

教員の所属学会
永田潔文：高分子学会、応用物理学会、日本物理学会、日本高圧力学会、日本分光学会 匠 正治：日本物理学会、高圧力学会、応用物理学会
最近4年間の学術論文
匠正治, 武田在満, 金井照満, 永田潔文, “高圧下におけるn-C ₃₃ H ₆₈ の構造相転移”, 福岡大学理学集報 44(1), 27-37 (2014). 匠正治, 平井信弘, 永田潔文, “高圧下におけるテルルの赤外吸収スペクトル”, 福岡大学理学集報 42(1), 1-8 (2012). Takumi, M., Tsujioka, Y., Hirai, N., Yamamoto, K., Nagata, K., “Optical absorption spectrum of trigonal selenium under high pressure”, J. Phys. Conf. Ser. 215, 012049-1 – 012049-4 (2010). (査読有) M. Terada, N. Hiramatsu, A. Kohno, S. Hoyashita, K. Nagata, H. Nishimura, H. Ono, A. Otsu, M. Takahashi, N. Tsuruta, “ICT in education: Case Japan”, Interaktiivinen Tekniikka Koulutuksessa 21, 47-48 (2010).
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
該当なし
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
(社) 応用物理学会、福岡市立少年科学文化会館、リフレッシュ理科教室（九州支部福岡会場） 実行委員、2010年～2013年 (社) 応用物理学会、飯塚市、飯塚市教育委員会、リフレッシュ理科教室（九州支部飯塚会場） 実行委員、2011年～2013年 福岡市こども未来局、背振少年自然の家「チャレンジクラブ」講師、2010年～2013年 福岡市教育委員会、福岡市立片江小学校サポーター会議構成員、2010年～2013年 福岡市立少年科学文化会館、こどもまつり 講師、2010年～2013年 福岡市立少年科学文化会館、わくわく科学カーニバル 講師、2010年～2013年 福岡市立那珂小学校、小学生のためのオモシロ理科教室 講師、2011年～2013年

飯塚市立潤野小学校、みんなで楽しい科学教室 講師、2012年
福岡市片江公民館、親子科学教室 講師、2010年～2013年
福岡市片江公民館、親子天体観測教室 講師、2011年～2013年
福岡市別府公民館、親子科学教室 講師、2011年～2013年
福岡市保育協会、保育研修会 I 講師、2012年～2013年
小倉高等学校コアSSH事業、自然観察&天体観測合宿 講師、2012年
福岡大学くじゅうの杜キャンパス、紅葉のくじゅう山歩き教室 講師、2012年～2013年
(社)応用物理学会、第47回応用物理学会スクール(2010年秋)「科学啓発教育活動入門－理科教育を企画・運営するノウハウを学ぶ－」講師、2010年
宗像市、宗像子供サイエンス(東海大学九州短期大学部)講師、2010年
SAFnet 運営機関、(財)九州先端技術研究所、JST 地域ネットワーク支援推進事業 SAFnet キックオフシンポジウム 実行委員、2010年

研究室名
機能生物化学研究室（タンパク質）
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>当研究班では、「酵素と阻害剤」をキーワードに、主に「毒ヘビ」と「ユリ科植物」の2つを研究対象とし、特定のタンパク質の構造や性質、さらにはその遺伝子構造を調べている。</p> <p>蛇毒には獲物の恒常性を破壊する様々な生理活性を示す毒タンパク質が含まれる。これに対して、毒ヘビ自身の血液中には、これらの毒成分に対する阻害タンパク質が含まれている。当研究班では、ハブ、マムシ、エラブウミヘビなどの毒、およびその血液から多くの新規タンパク質を発見し、構造と機能解析を行ってきた。ここ数年は、蛇毒タンパク質の作用を阻害する数種の低分子タンパク質（Small Serum Proteins）を毒ヘビの血液から単離し、その阻害機構の解明を行っている。</p> <p>これまで、ヒヤシンス球根から十数種の新規 Bowman-Birk 型トリプシンインヒビター（LHTI）を発見し、その性質や構造を調べてきた。その結果、複数の LHTI が linker 配列を隔てて一つながりの前駆体としてコードされ、限定分解によって成熟型になることが示された。現在、LHTI の全遺伝子構造を解明すること、また LHTI の限定分解・成熟に関わるヒヤシンスの芽抽出物中に存在するプロセシング酵素の同定を目的として研究を行っている。</p> <p>キーワード：ヘビ毒タンパク質、プロテアーゼ、毒ヘビの自己防御系、植物酵素インヒビター、前駆体プロセシング</p>
研究室の構成員
<p>寺田成之（教授）・博士(理学)</p> <p>塩井(青木)成留実（助教）・博士(理学)</p> <p>岡部由紀（研究補助員：2012/04/01-2014/03/31）</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M2：1名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エラブウミヘビ血清タンパク質の構造と機能 <p>4 年次生：4 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハブ神経毒様タンパク質 triflin の発現系構築 ・ハブ血清タンパク質 SSP-1 の変異体解析 ・ヒヤシンス・トリプシンインヒビターのプロセシング酵素の性質 ・ヒヤシンス・トリプシンインヒビターの遺伝子構造の解析
教員の担当科目
<p>寺田成之：(学部) 自然界と物質の化学、生物化学 B、生物化学 C、放射化学、機能生物化学実験、生化学実験、化学特別研究、卒業論文</p> <p>(大学院) 化学講究Ⅳ、化学特別実験Ⅳ、機能生物化学特論 I</p> <p>塩井(青木)成留実：(学部) 化学演習、基礎化学実験、基礎生物化学実験、生化学実験</p>

教員の所属学会

寺田成之：日本生化学会、日本農芸化学会

塩井(青木)成留実：日本生化学会、日本農芸化学会、日本蛋白質科学会、日本ペプチド学会、
日本化学会、毒素シンポジウム学会

最近4年間の学術論文

N. Shioi, M. Deshimaru, **S. Terada**, Structural analysis and characterization of new small serum proteins from the serum of a venomous snake (*Gloydius blomhoffii*), *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*, 2014, 78 (3), 410-419, 査読有

Y. Tanaka, **N. Shioi(Aoki)**, **S. Terada**, M. Deshimaru, Accelerated evolution of fetuin family proteins in *Protobothrops flavoviridis* (Habu snake) serum and discovery of an L1-like genomic element in the intronic sequence of a fetuin-encoding gene, *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*, 2013, 77, 582-590, 査読有

S. Terada, T. Hattori, Characterization of brevilysin H2, an α -fibrinolytic metalloproteinase from the venom of Chinese snake (*Gloydius blomhoffii brevicaudus*), *Fukuoka Univ. Sci. Rep.*, 2013, 43, 29-38, 査読無

N. Shioi, E. Ogawa, Y. Mizukami, S. Abe, R. Hayashi, **S. Terada**, Small serum protein-1 changes the susceptibility of an apoptosis-inducing metalloproteinase HV1 to a metalloproteinase inhibitor in habu snake (*Trimeresurus flavoviridis*), *J. Biochem.*, 2013, 153, 121-129, 査読有

寺田成之、渡部敦子、古田佳孝、前川枝里奈、上村真由、ヒヤシンス・トリプシンインヒビター (LHTI) の構造と作用機序、*理学集報*、2012、第42巻、頁19-28、査読無。

N. Shioi, M. Narasaki, and **S. Terada**, Novel function of antihemorrhagic factor HSF as an SSP-binding protein in Habu (*Trimeresurus flavoviridis*) serum, *Fukuoka Univ. Sci. Rep.*, 2011, 41, 177-184, 査読無。

N. Shioi, **S. Terada**, Isolation and characterization of a novel subunit of phospholipase A2 inhibitor in the serum of *Trimeresurus flavoviridis*, *Fukuoka Univ. Sci. Rep.*, 2011, 41, 185-193, 査読無。

S. Terada, Y. Tsumura, A. Kawabata, Characterization of brevilysin H1, an α -fibrinolytic metalloproteinase from the venom of Chinese snake (*Gloydius blomhoffii brevicaudus*), *Fukuoka Univ. Sci. Rep.*, 2011, 41, 195-202, 査読無。

最近4年間の学術著書

S. Shioi*, **N. Shioi(Aoki)***, Y. Okabe, S. Ando, Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO protein expression system, *Peptide Science 2013* (ISBN 978-4-931541-14-6),

2014, 169-172, 査読有, *equal contributors
S. Shioi, N. Shioi(Aoki) , Y. Karube, Biosynthesis of cationic peptide labeled with radioisotope, Peptide Science 2012 (ISSN:1344-7661), 2013, 151-154, 査読有
最近4年間の学術国際会議での発表
N. Shioi(Aoki) , S. Shioi, Y. Okabe, S. Ando, Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO, protein expression system, the 4th Asia-Pacific International Peptide Symposium (APIPS) and the 50th Japanese Peptide Symposium (JPS), 6-8th, November 2013
N. Shioi Aoki , Y. Tanaka, M. Deshimal, S. Terada , Accelerated evolution of anti-toxic protein in a Japanese viper serum, International Conference on Structural Genomics 2013-Structural Life Science-(ICSG2013-SLS), 29th July-1st August 2013
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
塩井(青木) 成留実: 日本学術振興会・科研費・若手研究 B「蛇毒酵素蛋白質に対する抗毒素蛋白質 SSP の分子認識機構の解明」・代表・330 万円 (直接経費)・2010 年～2011 年
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
塩井(青木) 成留実: 総合科学研究チーム「蛇毒に対する抗毒素薬のリード化合物についての研究 (課題番号 131042)」・代表・150 万円/年・2013-2014、(分担者: 九州大学薬学部田畑香織、福岡大学医学部倉原琳)
最近4年間の学会等学術団体における役職など
寺田成之: 日本生化学会九州支部長(2011年～2012年)、平成24年日本生化学会九州支部例会責任者(世話役)、平成25年日本生化学会評議員および代議員
塩井(青木)成留実: 毒素シンポジウム学会運営委員(2012～2014年)、平成24年日本生化学会九州支部実行委員
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
塩井(青木)成留実: 塩井(青木)成留実、2012年、「蛇毒酵素蛋白質に対する抗毒素蛋白質 SSP の分子認識機構の解明」、2010年度～2011年度科学研究費補助金(若手研究 B) 研究成果報告書(課題番号 22770134)
塩井(青木)成留実、2011年、「蛋白質・抗毒素蛋白質複合体の立体構造解析よりその特異的認識機構の解明」、最先端研究施設共用促進事業 NMR 立体構造解析パイプライン・トライヤルユース報告書(課題番号 10-500-009)
最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
塩井(青木)成留実: 毒素シンポジウム若手奨励賞受賞 「毒へびの生体防御物質に関する研究」, ○塩井(青木)成留実、寺田成之, 第59回トキシンシンポジウム、北海道帯広、2012年8月

研究室名
機能生物化学研究室（細胞）
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>機能生物化学研究室の細胞班では、酸化ストレスや高圧ストレスに対する細胞の応答を生化学的および生物物理化学的方法を用いて調べることにより、細胞の構造と機能の関係を明らかにすることを目指して研究している。特に、細胞膜に着目し、膜の基本的な性質を理解するために、単分子膜の研究も展開している。酸化ストレスに関する研究では、培養細胞に対するパラコートの酸化傷害を、合成した両親媒性のアスコルビン酸誘導体が抑制するメカニズムについて研究を行っている。細胞に含まれる各種還元剤（グルタチオン、α-トコフェロールなど）との関連についても研究を進めている。高圧ストレスに関する研究では、高圧による赤血球の溶血、アポトーシスの誘導機構、アフリカツメガエル胚の発生異常について調べている。赤血球に関する最近の研究成果としては、糖鎖を認識するコンカナバリン A により赤血球を凝集すると、加圧による溶血は抑制されるが、骨格タンパク質であるスペクトリンは一部変性していることを示した。最近では、赤血球膜への 2 価金属イオンやコレステロール誘導体の影響について、単分子膜での表面圧の測定結果も含めて検討している。</p> <p>キーワード：酸化および高圧ストレス・生体膜・単分子膜・アスコルビン酸誘導体・細胞死</p>
研究室の構成員
山口武夫（教授）・理学博士 田中英彦（併任講師）・理学博士 永留重実（助教）・理学博士
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：2 名、4 年次生：7 名 研究テーマ <ul style="list-style-type: none"> ・熱により誘導されるアポトーシスにおける HSPs の関与 ・NG108 細胞への両親媒性アスコルビン酸誘導体 6-O-hexanoyl ascorbic acid (HEA) の取り込み機構 ・NG108 細胞に対するパラコート毒性の 6-O-hexanoyl ascorbic acid (HEA) による抑制機構 ・リン脂質混合単分子膜挙動に対する金属イオンの添加効果 ・スペクトリンのトリプシンによる消化特性 ・プロテアーゼ処理した赤血球の加圧溶血に関するアニオン輸送阻害剤の効果 ・ストレスにより誘導されるアポトーシスにおける checkpoint kinase 1 のリン酸化 ・アフリカツメガエル初期胚の発生に関する圧力効果
教員の担当科目
山口武夫：(学部) 生物物理化学、基礎物理化学 A、自然界と物質の化学、生活と環境の化学、基礎生物化学実験、機能生物化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 機能生物学特論 II、化学講究 IV、化学特別実験 IV 田中英彦：(学部) 基礎生物化学実験、生化学実験 永留重実：(学部) 化学実験

教員の所属学会
山口武夫：日本生化学会、日本生物物理会、日本化学会、日本高圧力学会 田中英彦：日本生化学会、日本化学会、日本ビタミン学会 永留重実：日本化学会、日本油化学
最近4年間の学術論文
(すべて査読有) T. Yamaguchi, Y. Iwata, S. Miura, Y. Maehara, K. Nozawa, Enhancement of pressure-induced hemolysis by aquaporin-1 inhibitors in human erythrocytes, Bull. Chem. Soc. Jpn. 2012, 85(4), 497-503 T. Yamaguchi, Y. Iwata, S. Miura, K. Kawada, Reinvestigation of drugs and chemicals as aquaporin-1 inhibitors using pressure-induced hemolysis in human erythrocytes, Biol. Pharm. Bull. 2012, 35(11), 2088-2091 T. Yamaguchi, S. Miyauchi, Y. Isahara, Pressure-induced hemolysis of in vivo aged human erythrocytes is enhanced by inhibition of water transport via aquaporin-1, High pressure Research, 2013, 33(2), 285-291 T. Yamaguchi, K. Tajiri, K. Murata, S. Nagadome, Membrane damages under high pressure of human erythrocytes agglutinated by concanavalin A, Colloids and Surface B: Biointerfaces. 2014, 116, 695-699
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
T. Yamaguchi, S. Miyauchi, Y. Isahara, Pressure-induced hemolysis is enhanced by inhibition of water transport via aquaporin-1 in human erythrocytes. 7 th International Conference on High Pressure Bioscience and Biotechnology (HPBB 2012) Otsu, 2012年10月. Y. Uehara, N. Irie, Y. Kobayashi, T. Yamaguchi, Is pressure-induced apoptosis suppressed by heat shock proteins? 7 th International Conference on High Pressure Bioscience and Biotechnology (HPBB 2012) Otsu, 2012年10月.
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
山口武夫：学部長預り金「フレンド赤白病細胞での高圧によるアポトーシス誘導機構の解明」113万・2013
最近4年間の学会等学術団体における役職など
日本生化学会九州支部評議員 (2010年、2011年、2012年、2013年) 日本生化学会九州支部代議員 (2010年)
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文
山口武夫、永留重実、理系一、二年次学生を対象とした基礎化学実験、第59回九州地区大学一般教育研究協議会、福岡大学、2010年9月10日

最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
福岡市立少年科学文化会館 主催 こどもまつり 「おもしろ化学」を担当 : 2011年5月5日; 2012年5月5日; 2013年5月5日
その他特筆事項
該当なし

研究室名
機能生物化学研究室（RNA プロセッシング）
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>真核生物における遺伝子発現の過程では、転写により生じた mRNA 前駆体がさまざまなプロセッシングを受けて成熟 mRNA を生じる。mRNA のプロセッシングには、一般的に知られるキャッピング・スプライシング・ポリ A 付加に加えて、塩基部分の脱アミノ化・メチル化・結合異性化およびリボース部分のメチル化など多様なヌクレオチド修飾が含まれるが、これらは mRNA 分子のもつ遺伝暗号や立体構造の変化を介して生体機能の調節に重大な役割を果たす場合がある。当研究室では、主に mRNA のヌクレオチド修飾に関する次のような研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) RNA 編集酵素 ADAR の標的特異性と生体内 RNA 編集機構の解明 (2) RNA 編集酵素 ADAR の機能を外的要因に応じて調節する分子機構の解明 (3) 生体内 RNA 修飾を制御可能な機能性 RNA 及び低分子化合物の創製 (4) mRNA 配列中のリボース 2'-O-メチル化の生理的意義の解明 (5) シュードウリジンを塩基配列中に含む mRNA の探索 <p>キーワード：転写後修飾・RNA 編集・機能性 RNA</p>
研究室の構成員
<p>弟子丸正伸（准教授）・博士（理学） 福田将虎（助教）・博士（エネルギー科学）</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M2：2 名、M1：3 名、4 年次生：5 名</p> <p>研究テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・細胞を基盤とした RNA 編集阻害剤のスクリーニング法の開発 ・RNA 編集酵素 ADAR1 及び ADAR2 の標的特異性を決定する構造領域の探索 ・ADAR2 および ADAR3 が <i>Alu</i> 配列の A-to-I RNA 編集に及ぼす影響 ・snoRNA MBII-52 が HTR2C mRNA の A-to-I 編集に及ぼす影響 ・生体内の A-to-I RNA 編集と転写の関係性 ・部位特異的に RNA 編集を誘導する機能性 RNA の構築 ・セロトニン 2C 型受容体 mRNA における A-to-I 編集の調節分子機構 ・ミツバチ神経受容体 mRNA における A-to-I 編集の解析 ・シュードウリジンを含む mRNA 分子種の同定 ・ストレス顆粒に蓄積する mRNA 分子種の同定と A-to-I 編集の解析

教員の担当科目
<p>弟子丸正伸：(学部) 生物化学A、生物化学D、化学入門、生体の化学、理科教育法Ⅱ、化学実験、機能生物化学実験、放射化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 機能生物化学講究、機能生物化学特別実験、機能生物化学特論Ⅲ、修士論文</p> <p>福田将虎：(学部) 化学実験、基礎化学演習、基礎生物化学実験、機能生物化学実験</p>
教員の所属学会
<p>弟子丸正伸：日本生化学会、日本分子生物学会、日本 RNA 学会</p> <p>福田将虎：日本化学会、日本生化学会、日本分子生物学会、日本 RNA 学会</p>
最近4年間の学術論文
<p>N. Shioi, M. Deshimaru, S. Terada, Structural analysis and characterization of new small serum proteins from the serum of a venomous snake (<i>Gloydius blomhoffii</i>). <i>Biosci. Biotechnol. Biochem.</i> 78(3), 410-419 (2014). (査読有)</p> <p>M. Fukuda, K. Kurihara, M. Deshimaru, Ribozyme design for selective target RNA cleavage depending on RNA modifications. <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 44 (1), 39-44 (2014)</p> <p>Y. Tomonoh, M. Deshimaru, K. Araki, Y. Miyazaki, T. Arasaki, Y. Tanaka, H. Kitamura, F. Mori, K. Wakabayashi, S. Yamashita, R. Saito, M. Itoh, T. Uchida, J. Yamada, K. Migita, S. Ueno, H. Kitaura, A. Kakita, C. Lossin, Y. Takano, S. Hirose, The kick-in system: a novel rapid knock-in strategy. <i>PLoS One</i> 9(2), e88549 (2014). (査読有)</p> <p>M. Fukuda, K. Kurihara, S. Yamaguchi, Y. Oyama, M. Deshimaru, Improved design of hammerhead ribozyme for selective digestion of target RNA through recognition of site-specific adenosine-to-inosine RNA editing. <i>RNA</i> 20(3), 392-405 (2014). (査読有)</p> <p>Y. Tanaka, N. Shioi, S. Terada, M. Deshimaru, Structural organization and evolution of a cluster of small serum protein genes of <i>Protobothrops flavoviridis</i> snake. <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 43(1), 59-66 (2013).</p> <p>Y. Tanaka, S. Oyama, S. Hori, K. Ushio, N. Shioi, S. Terada, M. Deshimaru, Accelerated Evolution of Fetuin Family Proteins in <i>Protobothrops flavoviridis</i> (Habu Snake) Serum and the Discovery of an L1-Like Genomic Element in the Intronic Sequence of a Fetuin-Encoding Gene. <i>Biosci. Biotechnol. Biochem.</i> 77(3), 582-590 (2013). (査読有)</p> <p>S. Nakano, M. Fukuda, T. Tamura, R. Sakaguchi, E. Nakata, T. Morii, Simultaneous detection of ATP and GTP by covalently linked fluorescent ribonucleopeptide sensors. <i>J. Am. Chem. Soc.</i> 135(9), 3465-3473 (2013). (査読有)</p> <p>M. Fukuda, K. Kurihara, Y. Tanaka, M. Deshimaru, A strategy for developing a hammerhead ribozyme for selective RNA cleavage depending on substitutional RNA editing. <i>RNA</i> 18(9), 1735-1744 (2012). (査読有)</p> <p>F. F. Liew, T. Hasegawa, M. Fukuda, E. Nakata, T. Morii. Construction of dopamine sensors by using fluorescent ribonucleopeptide complexes. <i>Bioorg. Med. Chem.</i> 19(15), 4473-4481 (2011).</p>

(査読有)
Y. Tanaka and M. Deshimaru. Alteration in editing profile of mRNA for 5-hydroxytryptamine 2C receptor depending on expression level of editing enzyme, ADAR1. <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 41(1), 15-21 (2011).
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
M. Fukuda, K. Kurihara, M. Deshimaru, Construction of the functional RNAs for regulating the site-specific RNA editing Gordon Research Conference on RNA editing. Galveston, USA, Jan. 2013.
M. Fukuda, K. Kurihara, M. Deshimaru, Construction of ribozymes recognizing specific RNA modifications in HRE2C mRNA. The 16th annual meeting of the RNA society, Kyoto, Japan, Jun. 2011.
Y. Tanaka, S. Kato, M. Fukuda, M. Deshimaru, Editing pattern of serotonin 2C receptor mRNA depends on the expression levels of ADARs. The 16th annual meeting of the RNA society, Kyoto, Japan, Jun. 2011.
Y. Tanaka, S. Kato, M. Fukuda, M. Deshimaru, Editing pattern of serotonin 2C receptor mRNA depends on ADAR1 expression level. Gordon Research Conference on RNA editing, Galveston, USA, Jan. 2011.
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
弟子丸正伸：日本学術振興会・科研費・挑戦的萌芽研究「PWSにおける食欲亢進および性格異常の原因分子機構の解明」・代表・290万円（直接経費）・2012年度～2014年度（予定）
福田将虎：日本学術振興会・科研費・若手研究B「核小体低分子RNAを基盤とした遺伝子発現制御方法の開発」・代表・210万円（直接経費）・2011年度～2012年度
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
弟子丸正伸：福岡大学総合科学研究チームIV・「mRNAにおけるヌクレオチド修飾を介した生体機能調節機構の解明」・300万円・2011年度～2012年度（分担者：松原公紀、長洞記嘉）
福田将虎：福岡大学総合科学研究チームIV・「疾病に関わるRNA編集を薬剤標的とする小分子化合物の創製」・300万円・2012年度～2013年度（分担者：佐藤慎一、古賀裕二）
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

研究室名
有機生物化学O研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>有機生物化学O研究室では酸素、窒素、硫黄、リン、セレン、テルル等の典型元素を含む種々の有機合成を反応から機構およびその応用に至るまで幅広く行っている。特に典型元素を含む複素環化合物の合成を多方面から検討している。</p> <p>酸素や窒素を含む化合物では、インドール、キノリン、イソクマリンなど生理活性を有する化合物を反応性の高いアライン誘導体から簡便に合成する方法を開発している。最近ではこれまでに合成例の無い窒素と酸素を含むベンゾオキサゼピン類の合成法の開発をした。硫黄を含む環状ポリスルフィド類の合成も容易に得られる天然物であるカンファーやフェンコンを用いて合成した。これらの反応機構を検討する過程において金属イオンやフッ化物イオンの重要性を明らかにすることができ、新しい複素環化合物合成への手法が開拓された。</p> <p>上記手法により得られた新しい反応や新規化合物の特性を利用して、細胞内シグナルを感受する蛍光プローブを開発し、これまで知られていなかった生命現象の詳細を明らかにしようとしている。</p> <p>キーワード：チオカルボニル・ポリスルフィド・アライン・蛍光プローブ</p>
研究室の構成員
<p>大熊健太郎（教授）・理学博士 塩路幸生（准教授）・理学博士 長洞記嘉（助教）・博士（理学）および博士（工学）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M2 5名 アラインを用いたベンゾジアゼピン類の合成 チオ及びセレノフェンコンの Wagner-Meerwein 転移反応 新規ホスフィニン類の合成と性質の解明 硫黄およびセレン原子を含む複素環類の合成</p> <p>M1 6名 アラインを用いた光学活性バイノールの合成とその反応 2-アセチルアミノベンズアルデヒドを用いたジヒドロキノリン類の合成 脱離能の高い置換基をもつホスフィニン類の合成</p> <p>4年 7名 トリフルオロメチル基を含むベータージケトンのアルキル化反応 ヒドラゾンを用いたテルラジアゾリンの合成 新規ピリリウム二量体の合成 ピリリウム誘導体の反応性の解明</p>

教員の担当科目
<p>大熊健太郎：(学部) 有機化学C、有機材料合成化学、外書購読、化学Ⅲ、基礎有機化学実験、有機生物化学実験、化学実験、卒業論文</p> <p>(大学院) 化学講究、有機生物化学実験、有機化学特論Ⅰ、修士論文</p> <p>塩路幸生：(学部) 有機化学A、基礎有機化学Ⅱ、基礎有機化学実験、有機生物化学実験</p> <p>(大学院) 化学講究、有機生物化学実験、有機化学特論Ⅲ、修士論文</p> <p>長洞記嘉：(学部) 基礎有機化学実験、有機生物化学実験、ナノ材料科学実験Ⅰ</p>
教員の所属学会
<p>大熊健太郎：日本化学会、アメリカ化学会、有機合成化学協会、錯体化学会</p> <p>塩路幸生：日本化学会、アメリカ化学会、有機合成化学協会、分析化学会、電子スピンスサイエンス学会</p> <p>長洞記嘉：日本化学会、有機合成化学協会、ケイ素化学協会</p>
最近4年間の学術論文
<p>K. Okuma, K. Munakata, H. Matsui, N. Nagahora, K. Shioji, Reaction of fenchone hydrazone with diselenium dibromide: novel formation of bicyclic diselenide Heterocycles, 2014, 89, 473-480. (査読有)</p> <p>K. Okuma, Reaction of propiolic acid and its derivatives: Fukuoka Univ. Sci. Rep. 2013, 43, 189-194.</p> <p>N. Nagahora, T. Wasano, K. Nozaki, T. Ogawa, S. Nishijima, D. Motomatsu, K. Shioji, K. Okuma, The First Formation of (1Z)-1-Alkylidene-1H-isobenzofuranium Amides and 1H-Inden-1-ones: Acid-Promoted 5-exo Cyclization and Hydration/Aldol Condensation Reactions of o-Ethynylbenzophenones: Eur. J. Org. Chem., 2014, 1423-1430. (査読有)</p> <p>K. Okuma, Y. Tanabe, R. Itoyama, N. Nagahora, K. Shioji, One-pot synthesis of 2,3-benzodiazepines from arynes and β-diketones: Chem. Lett., 2013, 42, 1260-1262. (査読有)</p> <p>K. Okuma, K. Hirano, C. Shioga, N. Nagahora, K. Shioji, Novel formation of oxazepino[4,5-a]quinolines by tandem 1,3-dipolar and insertion reaction of quinoline N-oxides with arynes: Bull. Chem. Soc. Jpn., 2013, 86, 615-619. (査読有)</p> <p>K. Okuma, Synthesis of Heterocycles From Thio- and Selenocarbonyl Compounds: Phosphorus, Sulfur, Silicon, and Related. Elem., 2013, 188, 340-348. (査読有)</p> <p>K. Okuma, R. Itoyama, A. Sou, N. Nagahora, K. Shioji, Tandem Carbon-Carbon Bond Insertion and Intramolecular aldol Reaction of Benzyne with Aroylacetones: Chem. Commun. 2012, 48, 11145-11147. (査読有)</p> <p>K. Okuma, K. Munakata, T. Tsubota, M. Kanto, N. Nagahora, K. Shioji, Y. Yokomori, Synthesis and Reaction of Tricyclic Tetrathiins and Pentathiepins: Novel Formation of α-Disulfines Tetrahedron, 2012, 68, 5317-5320. (査読有)</p> <p>K. Okuma, Reaction of Arynes with Carbon-heteroatom double bonds, Heterocycles, 2012, 85, 515-544 (review). (査読有)</p> <p>K. Okuma, N. Matsunaga, S. Ozaki, Reaction of benzyne with 2-hydroxy- and 2-aminophenyl ketones:</p>

- synthesis of xanthenes and acridines, Fukuoka University Science Reports, 2011, 41, 1, 23-28.
- K. Okuma, A. Nojima, Y. Nakamura, N. Matsunaga, N. Nagahora, K. Shioji, Reaction of benzyne with formamides and acetylimidazole, Bull. Chem. Soc. Jpn. 2011, 84, 328-332. (査読有)
- K. Okuma, N. Matsunaga, N. Nagahora, K. Shioji, Y. Yokomori, Reaction of Arynes with Amino Acid Esters, Chem. Commun. 2011, 47, 5822-5824. (査読有)
- K. Okuma, S. Ozaki, N. Nagahora, K. Shioji, Synthesis of 3,1-Benzothiazines from 2-Alkenyl- and 2-Alkynylanilides and Lawesson Reagent, Heterocycles, 2011, 83, 1303-1313. (査読有)
- K. Okuma, Reaction of Thiofenchone or Thiochamphor with Disulfur Dichloride: Novel Formation of Tricyclic Polysulfanes, Phosphorus, Sulfur, Silicon, and related Elements, 2011, 186, 1196-1200. (査読有)
- H. Morita, S. Ando, K. Okuma, N. Nagahora, Y. Aizawa, M. Fukuda, H. Nakagawa, K. Shioji, Intracellular molecular dynamics of N-terminal motif of myristoylated peptide, *Peptide Science*, 2011, 309-312. (査読有)
- K. Okuma, T. Tsubota, M. Tabuchi, M. Kanto, N. Nagahora, K. Shioji, Y. Yokomori, Reaction of thiocamphor with disulfur dichloride. Novel formation of α -disulfine, Chem. Lett. 2010, 39, 648-649. (査読有)
- K. Okuma, J. Seto, Synthesis of indoles, 3,1-benzoxazines, and quinolines from 2-alkenylanilides and active seleniums, Phosphorus, Sulfur and Silicon and the Related Elements 2010, 185, 1014-1020. (査読有)
- K. Okuma, S. Ozaki, J. Seto, N. Nagahora, K. Shioji, A highly effective one-pot synthesis of quinolines from 2-alkynylnitrobenzenes, Heterocycles 2010, 81, 935-942. (査読有)
- K. Okuma, Kentaro, J. Seto, N. Nagahora, K. Shioji, Chemoselective synthesis of quinoline *N*-oxides from 3-(2-nitrophenyl)-3-hydroxypropanones, J. Heterocycl. Chem. 2010, 47, 1372-1378. (査読有)
- K. Okuma, Y. Fukuzaki, A. Nojima, A. Sou, H. Hino, N. Matsunaga, N. Nagahora, K. Shioji, Y. Yokomori, Three component reaction of arynes with cyclic ethers and active methines: synthesis of ω -trichloroalkyl phenyl ethers. Bull. Chem. Soc. Jpn. 2010, 83, 1238-1247. (査読有)
- K. Shioji, Y. Oyama, K. Okuma, H. Nakagawa, Synthesis and Properties of Fluorescence Probe for Detection of Peroxides in Mitochondria, Bioorg. Med. Chem. Lett. 2010, 20, 3911-3915. (査読有)
- O. Hayashida, C. Eguchi, K. Kimura, Y. Oyama, T. Nakashima, K. Shioji, Guest binding, cellular uptake, and molecular delivery of water-soluble cyclophanes having a pyrene moiety, Chem. Lett., 2010, 39, 1321-1322 (査読有)

最近4年間の学術著書

該当なし

最近4年間の学術国際会議での発表

- K. Okuma, K. Munakata, Reaction of fenchone or camphor hydrazones with chalcogen halides
12th International Conference on the Chemistry of Selenium and Tellurium, OC-5, Cardiff, Wales,

UK, July 22-26, 2013

招待講演 : K. Okuma, Synthesis of Heterocycles from Thio- and Selenocarbonyl Compounds, Kentaro Okuma, 25th International Symposium on the Organic Chemistry of Sulfur, IL03 Czestchowa, Poland, June 24-29, 2012.

K. Okuma, T. Koga, S. Ozaki, N. Nagahora, K. Shioji, Synthesis of Benzothiazines, Quinolines, and Dibenzonaphthyridines from 2-Alkynyl- or 2-Alkenylnitrobenzenes, International Conference on Heteroatom Chemistry, Kyoto, Japan, May 22, 2012.

K. Shioji, Y. Ogawa, T. Matsuki, H. Nakagawa, N. Nagahora, K. Okuma, Synthesis and Properties of Peryrenylphosphonium Salts having Triphenylphosphine, International Conference on Heteroatom Chemistry, Kyoto, Japan, May 22, 2012.

N. Nagahora, M. Honda, T. Wasano, S. Nishijima, K. Shioji, K. Okuma, Synthesis and property of a new type of phosphinines and 2-phosphanaphthalenes, International Conference on Heteroatom Chemistry, Kyoto, Japan, May 22, 2012.

K. Okuma, Synthesis of cyclic polysulfans and alpha-disulfine from thiocamphor and thiofenchone, 24th International Symposium on the Organic Chemistry of Sulfur, OL08, Florence, Italy, July 25-30, 2010.

K. Shioji, Y. Nakano, C. Sadahira T. Matsuki, H. Nakagawa, N. Nagahora, K. Okuma, Synthesis and properties of pH responsive fluorescent probe based on the BODIPY moiety, International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Hawaii, December 15-20, 2010.

N. Matsunaga, K. Okuma, N. Nagahora, K. Shioji, Reaction of arynes with DMF and salicylaldehydes, General synthesis of xanthenes, xanthonenes, and xanthols, International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Hawaii, December 15-20, 2010.

S. Ozaki; K. Okuma; N. Nagahora; K. Shioji, Efficient synthesis of quinolines and 4H-3,1-benzothiazines from 2-alkynylnitrobenzenes and 2-alkynylanilines, International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Hawaii, December 15-20, 2010.

N. Nagahora, T. Wasano, K. Shioji, K. Okuma, New synthetic route for 2-phosphanaphthalenes, International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Hawaii, December 15-20, 2010.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

塩路幸生 : 日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究 (C)・「細胞内微小器官局在化蛍光プローブを用いた正味の細胞内抗酸化活性測定」・代表・360万円・2010年度～2012年度

長洞記嘉 : 日本学術振興会・科学研究費補助金・若手研究 (B)「炭素-リン三重結合種を鍵試剤として用いた多環式芳香族化合物の系統的合成法の開発」・代表・310万円 (直接経費)・2011年度～2012年度

塩路幸生 : 科学技術振興機構・研究成果最適展開支援事業 A-STEP[FS]ステージ・「光線力学療法の光増感剤を指向した脂溶性蛍光ホスホニウム塩の開発」・代表・130万円・2010年度

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績

大熊健太郎 : 領域別研究チーム・「典型元素化学研究」・115万円・2012年～2014年 (分担者 : 山口武夫、田中英彦、塩路幸生)

<p>塩路幸生：領域別研究チーム・「元素戦略で探る細胞死のメカニズム」・97万円・2009年～2011年（分担者：大熊健太郎、山口武夫、田中英彦、長洞記嘉）</p> <p>長洞記嘉：福岡大学推奨研究プロジェクト・「新規なリン原子を含む芳香族化合物の系統的合成と物性の探究」・258万円・2012年度～2014年度（終了予定）（分担者：山田勇治）</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>大熊健太郎：九州大学特任教授 2012年、有機反応若手の会幹事 2010年7月（宗像） 福岡</p> <p>塩路幸生：日本化学会九州支部幹事 2012年、日本分析化学会九州支部庶務幹事 2010年度</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など</p> <p>塩路幸生：新版大学の化学への招待・井上 亨・川田 知・栗原寛人・小寺 安・塩路幸生・脇田久伸、三共出版、206-221、2013年</p>
<p>最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p> <p>該当なし</p>
<p>その他特筆事項</p> <p>大熊健太郎：大牟田市産業廃棄物調整委員 2011～2012年度</p> <p>長洞記嘉：日本化学会 欧文誌論文賞 BCSJ Award (Vol.82, No.5)、2010年5月</p>

研究室名
有機生物化学P研究室（生命分子化学）
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>生命現象の基本原理である分子認識に着目し、ゲストの捕捉・送達・放出を制御できる大環状ホストおよび標的タンパク質に親和性を有するペプチドの分子設計と機能創発を目的としている。本年度は主にゲストに対する捕捉力が飛躍的に向上するクラスター効果の概念をホストの分子設計に取り入れて複数個のシクロファンを集積したホストの合成と癌細胞への薬物送達などに取り組んだ。具体的には、鎖状のシクロファン2～5量体をシクロファンの活性エステル体とリジンやリジンペプチドとのアミノリシスにより高収率で得ることに成功した。さらに、シクロファンの連結にクリック反応を適用することで更に収率が向上することも見出した。シクロファンの個数が増すにつれてゲスト捕捉力が飛躍的に向上するクラスター効果の発現を蛍光滴定法や表面プラズモン共鳴法などから明らかにした。シクロファンの個数とゲスト捕捉力の相関関係を明らかにすることにも成功した。その他、シクロファン多量体がダウノルビシン等の抗癌剤を捕捉できることや蛍光性のピレン基を導入したシクロファンがヒト肝癌細胞へ取り込まれることも明らかにした。また、コレステロール排出能作用を持つ apoA-I C 末端ドメイン部分の模倣ペプチドの合成に成功し、動脈硬化の治療薬や診断薬としての研究を進めた。</p> <p>キーワード：ホストゲスト化学・シクロファン・クラスター効果・薬物送達・ペプチド</p>
研究室の構成員
<p>林田 修（教授）・博士（工学） 安東 勢津子（講師）・理学博士</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>大学院生 M2：3名、M1：2名、4年次生：6名</p> <p>研究テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 機能性ホストの合成と性質 ・ 機能性ホストの合成と評価 ・ 機能性ホストの分光学的研究 ・ 機能性ホストの蛍光特性 ・ 機能性ホストの会合特性 ・ シクロファンの合成と性質 ・ シクロファンの合成と評価 ・ シクロファンの分光学的研究 ・ シクロファンの蛍光特性 ・ 骨粗しょう症薬の膜透過性 ・ 動脈硬化の治療薬や診断薬の研究 ・ リラキシンの化学合成と応用

教員の担当科目
<p>林田 修：(学部) 自然界と物質の化学、生活と環境の化学、ナノサイエンス入門、機能新素材科学、構造有機化学、ナノ材料科学実験Ⅰ、化学実験、卒業論文 (大学院) ナノ化学特論Ⅱ、有機生物化学特論Ⅳ、化学講究Ⅲ、化学講究Ⅴ、化学特別実験Ⅲ、化学特別実験Ⅴ</p> <p>安東 勢津子：(学部) 外書購読Ⅱ、化学Ⅴ、化学実験、基礎有機化学実験、有機生物化学実験、一般化学実験</p>
教員の所属学会
<p>林田 修：日本化学会、有機合成化学協会、アメリカ化学会 安東 勢津子：日本化学会、日本生化学会、日本ペプチド学会</p>
最近4年間の学術論文
<p>(すべて査読有)</p> <p>O. Hayashida, D. Sato, Degradation properties and pH-responsive guest-release of cyclophanes having four ester side chains with terminal choline residues, <i>Chem. Lett.</i> 2014, 43(3), 322-324.</p> <p>O. Hayashida, Y. Kaku, Synthesis of dabsyl-appended cyclophanes and their heterodimer formation with pyrene-appended cyclophanes, <i>J. Org. Chem.</i> 2013, 78 (20), 10437 - 10442.</p> <p>O. Hayashida, K. Ichimura, D. Sato, T. Yasunaga, Synthesis, Guest-binding, and reduction-responsive degradation properties of water-soluble cyclophanes having disulfide moieties, <i>J. Org. Chem.</i> 2013, 78 (11), 5463-5469.</p> <p>O. Hayashida, T. Nakashima, Y. Kaku, Synthesis and enhanced guest-binding affinities of dendrimer-based cyclophane tetramer and octamer, <i>Adv. Chem. Eng. Sci.</i> 2013, 3(3), 33-37.</p> <p>O. Hayashida, Y. Nakamura, Synthesis of water-soluble cyclophane pentamers using click chemistry as a multivalent host for daunorubicin and doxorubicin, <i>Bull. Chem. Soc. Jpn.</i> 2013, 86(2), 223-229.</p> <p>O. Hayashida, K. Ichimura, Synthesis and characterization of reduction-responsive cyclophane dimer based on disulfide linkage, <i>Chem. Lett.</i> 2012, 41(12), 1650-1651.</p> <p>O. Hayashida, T. Nakashima, Synthesis of peptide-based cyclophane oligomers having multivalently enhanced guest-binding affinity, <i>Bull. Chem. Soc. Jpn.</i> 2012, 85(6), 715-723.</p> <p>O. Hayashida, T. Nakashima, Synthesis of cyclophane dimer using cyclophane-tethered Fmoc-amino acid derivatives as a multivalent host, <i>Chem. Lett.</i> 2011, 40(2), 134-135.</p> <p>O. Hayahsida, D. Sato, Surface plasmon resonance study on binding interactions of multivalent cyclophane hosts with immobilized guests, <i>Polym. Adv. Technol.</i>, 2010, 21 (2), 96-99.</p> <p>O. Hayahsida, C. Eguchi, K. Kimura, Y. Oyama, T. Nakashima, K. Shioji, Guest-binding, cellular uptake, and molecular delivery of water-soluble cyclophanes having a pyrene moiety, <i>Chem. Lett.</i>, 2010, 39(12), 1321-1322.</p>

- N. Kumari, R. Prajapati, O. Hayashida, L. Mishra, Synthesis and characterization of coordination polymers of a carboxylato cyclophane with metal [Zn(II) and Cd(II)]-2,20- bipyridines, *Polyhedron*, 2010, 29(13), 2755-2761.
- S. Shioi, N. Shioi(Aoki), Y. Okabe, S. Ando and Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO protein expression system, *Peptide Science* 2013, 2014, 169-172.
- Y. Uehara, S. Ando, E. Yahiro, K. Oniki, M. Ayaori, S. Abe, E. Kawachi, B. Zhang, S. Shioi, H. Tanigawa, S. Imaizumi, S. Miura, K. Saku, FAMP, a Novel ApoA-I mimetic peptide, suppresses aortic plaque formation through promotion of biological HDL Function in ApoE-Deficient Mice. *Journal of the American Heart Association* 01/2013; 2(3):e000048.
- K. Arai, M. Noguchi, B. G. Singh, K. I. Priyadarsini, K. Fujio, Y. Kubo, K. Takayama, S. Ando, M. Iwaoka, A water-soluble selenoxide reagent as a useful probe for the reactivity and folding of polythiol peptides, *FEBS Open Bio*, 2013, 355–64.
- E. Kawachi, Y. Uehara, K. Hasegawa, E. Yahiro, S. Ando, Y. Wada, T. Yano, H. Nishikawa, M. Shiomi, S. Miura, Y. Watanabe, K. Saku, Novel molecular imaging of atherosclerosis with Gallium-68-Labeled apolipoprotein A-I mimetic peptide and positron emission tomography, *Circulation Journal*, 2013.
- Y. Kubo, A. Maeda, M. Yukawa, H. Ikeda, T. Ueda, H. Aki, S. Ando, Synthesis of peptidyl-alendronic acid derivatives as a prodrug for enhancing bioavailability (II), *Peptide Science* 2012, 2013, 259-262.
- Y. Kubo, M. Yukawa, H. Ikeda, H. Aki, T. Ueda, S. Ando, Synthesis and properties of alendronic acid containing dipeptide, *Peptide Science* 2011, 2012, 241-244.
- K. Hasegawa, E. Kawachi, R. Kuwabara, E. Yahiro, S. Ando, K. Oniki, R. Adachi, Y. Wada, T. Yano, Y. Uehara, S. Miura, K. Saku, Y. Watanabe, Synthesis of 68 Ga-DOTA-FAMP and PET imaging study with atherosclerotic plaques, *Peptide Science* 2011, 2012, 291-294.
- R. Adachi, K. Oniki, H. Aoyagi, S. Abe, Y. Uehara, K. Saku, K. Yamada, S. Ando, Correlation of structure in solution and lipid affinity of apolipoprotein A-I mimetic peptide (II), *Peptide Science* 2011, 2012, 237-240.
- H. Urakawa, K. Yamada, K. Komagoe, S. Ando, H. Oku, T. Katsu, I. Matsuo, Structure- activity relationships of bacterial outer-membrane permeabilizers based on polymyxin B heptapeptides, *Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters*, 2010, 20, 1771-1775.
- S. Ando, K. Mitsuyasu, Y. Soeda, M. Hidaka, Y. i Ito, K. Matsubara, M. Shindo, Y. Uchida, H. Aoyagi, Structure-activity relationship of indolicidin, a Trp-rich antibacterial peptide” *J. Peptide Science*, 2010, 16, 171-177.
- K. Takayama, S. Ando, H. Katayama, E. Mizuki, H. Aoyagi, K. Matsubara, Antibody production using fragments of human-2 relaxin (H2-RLX), *Peptide Science* 2009, 2010, 289-292.
- K. Oniki, S. Ando, Y. Uehara, B. Zhang, K. Saku, Synthesis of a peptide removing cholesterol from cell and its ability of HDL formation in blood plasma, *Peptide Science* 2009, 2010, 281-284.

最近4年間の学術著書

- 林田 修、松原 公紀、安東 勢津子、古賀 裕二：「機能性ナノ分子研究」Research, 18巻2号 pp. 36-37 (2013).
- 林田 修、市村 和明、木村 圭一朗、中村 勇氣、中島 智美：「クラスター効果によって機能化された水溶性シクロファン類の創製とゲスト捕捉能」福岡大学理学集報43巻1号 pp. 87-95 (2013).

最近4年間の学術国際会議での発表

- S. Shioi, N. Shioi(Aoki), Y. Okabe, S. Ando and Y. Karube, Preparation of a radiolabeled cationic peptide using an improved SUMO protein expression system, *Peptide Science* 2013, 2014, 169-172, 4th Asia-Pacific International Peptide Symposium,(APIPS 2013), 50th Japanese Peptide Symposium (第50回 日本ペプチド討論会 大阪 ホテル阪急 エキスポパーク, 2013年11月
- O. Hayashida, Synthesis and host-guest properties of functionalized cyclophanes, 超分子・超構造科学フォーラム第29回特別講演会生体関連化学技術の展開と応用, Kumamoto University, 2012年12月
- O. Hayashida, K. Ichimura, K. Kimura, Y. Nakamura, T. Nakashima, SPR and fluorescence study on host-guest interactions of cyclophane oligomers having multivalently enhanced guest-binding affinity, Label-Free Technologies: Advances and Applications, NH Grand Krasnapolsky, Amsterdam, The Netherlands, 2012年11月
- O. Hayashida, D. Sato, N. Yahiro, K. Kimura, Syntheses and guest-binding behaviors of peptide-based cyclophane oligomers, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, Hawaii, USA, 2010年12月
- O. Hayashida, C. Eguchi, T. Nakashima, Y. Oyama, K. Shioji, Guest-binding and molecular delivery of water-soluble cyclophanes having a pyrene moiety, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, Hawaii, USA, 2010年12月
- T. Nakashima, Y. Nakamura, K. Ichimura, O. Hayashida, Syntheses and guest-binding behaviors of peptide-based cyclophane oligomers, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, Hawaii, USA, 2010年12月
- Y. Uehara, S. Ando, K. Oniki, S. Abe, E. Yahiro, H. Tanigawa, SI. Miura, K. Saku, FAMP, A novel ApoA-I mimetic peptide promotes HDL via ABCA1-dependent cholesterol efflux, 第78回欧州動脈硬化学会, 2010年6月, Hamburg
- Y. Uehara, S. Ando, K. Oniki, S. Abe, E. Yahiro, H. Tanigawa, SI. Miura, K. Saku, FAMP, A powerful producer of pre-beta HDL via an ABCA1-mediated cholesterol efflux pathway, American Heart Association Scientific Sessions 2010 Chicago (2010, 11)
- K. Takayama, K. Matsubara, S. Ando, Y. Koga, Development of efficient intermolecular disulfide bond formation in H2-RLX peptide hormone, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, Hawaii, USA (2010. 12)
- T. Shimada, S. Ando, K. Matsubara, Synthetic and structural studies of zinc-SALOPHEN containing

<p>metallopeptides, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, HI, USA (2010. 12)</p> <p>K. Oniki, R. Adachi, S. Abe, Y. Uehara, K.Saku, S. Shioi, and S. Ando, Synthesis of a new apoA-I mimetic peptide inducing the dissociation of lipid-poor apoA-I from plasma HDL, 5th International Peptide Symposium, Kyoto, Japan, (2010,12)</p> <p>R. Adachi, K. Oniki, H. Aoyagi, S. Abe, Y. Uehara, K. Saku, and S. Ando, Correlation of structure in solution and lipid affinity of apolipoproteinA-I mimetic peptide, 5th International Peptide Symposium, Kyoto, Japan, (2010,12)</p>
<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p>
<p>林田 修：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）・「ゲストの捕捉および放出を制御できる刺激応答性シクロファン型ホスト多量体の開発」・代表・430万円（直接経費）・2012～2014年（予定）</p> <p>林田 修：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）・「クラスター効果に基づくシクロファン多量体の合成および標的ゲストの捕捉と検出」・代表・380万円（直接経費）・2009～2011年</p> <p>林田 修：科学技術振興機構・研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム A-STEP フィーチャビリティスタディステージ探索タイプ・「ホストゲスト分子システムを基盤とする薬物送達および放出に関する探索研究」・代表・170万円（直接経費）・2011年</p> <p>林田 修：福岡県産業・科学技術振興財団・I S T研究F S事業・「ホストゲストを基盤とした細胞内への薬物送達システムの開発」・代表・160万円（直接経費）・2011年</p> <p>林田 修：科学技術振興機構・戦略的創造研究事業研究シーズ探索プログラム・「ホストゲスト化学に基づく薬物送達システムの開発」・代表・500万円（直接経費）・2010年</p> <p>安東 勢津子：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）・「薬剤の捕捉や送達及び放出が制御できる新規分子システムの開発」・代表・500万円（直接経費）・2013～2015年（予定）</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p>
<p>林田 修：福岡大学領域別研究部理工学研究部研究チーム・「ナノ構造をもつシクロファン多量体の合成と機能」・119.2万円・2010年度～2012年度（分担者：松原 公紀（～2010年）・安東 勢津子・古賀 裕二（～2011年））</p> <p>林田 修：福岡大学推奨研究プロジェクト（一般）・「ナノ分子システムによる細胞内ホストゲスト化学の構築」・130万円・2011年度～2012年度（分担者：塩路 幸生・中川 裕之）</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p>
<p>林田 修：有機合成化学協会九州山口支部幹事</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など</p>
<p>林田 修：科学技術振興機構・戦略的創造研究事業研究シーズ探索プログラム研究成果報告書・「ホストゲスト化学に基づく薬物送達システムの開発」・2011年7月 http://www.jst.go.jp/kisoken/tansaku/seika.html</p> <p>林田 修：科学技術振興機構・研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム A-STEP フィーチャビリティスタディステージ探索タイプ研究成果報告書・「ホストゲスト分子システムを基盤とする薬物送達および放出に関する探索研究」・2013年2月 http://www.jst.go.jp/a-step/hyoka/tansaku_h2502/tansaku_d.html</p>
<p>最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文</p>
<p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p>
<p>該当なし</p>

研究室名
有機生物化学P研究室（有機金属化学）
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>化学科有機生物化学P研究グループ有機金属化学研究室では、遷移金属元素に炭化水素化合物群が結合した有機金属化合物を新たに合成・構造決定し、触媒として用いて有機化学における新しい化学反応を開拓する研究を行っている。また、できるだけ効率良く燐光発光する機能性有機金属化合物を新たに設計・合成し、その評価を行っている。最近では、触媒として多用されているパラジウムやロジウムなどの貴金属元素に替わり、鉄・コバルト・ニッケルを用いた触媒開発に注目し、特にニッケルを用いた研究では非常に珍しいニッケル 1 価の化合物の単離・構造決定に成功し、いくつかの化学反応に対して非常に高い触媒活性を持っていることを明らかにしている。また、これまでに明らかにされていない一連のコバルト化合物についても合成し、その構造と触媒能力について明らかにしている。一方、イリジウム元素をもつ燐光発光性化合物の開発研究では、イリジウムに結合する配位子の結合配置に注目し、通常よりも高い量子収率で発光できる一連の化合物を発見している。また、配位子の構造に応じて発光特性がどのように変化するのかを調査・考察している。</p> <p>キーワード：有機金属化学・金属錯体・均一系触媒反応・重合反応・燐光発光錯体</p>
研究室の構成員
<p>松原公紀（教授）・博士（工学） 古賀裕二（助教）・博士（理学）</p>
2013 度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>D1：1名、M1：2名、4年次生：4名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規鉄触媒の開発研究 ・ニッケル 1 価錯体の開発と触媒反応開発研究 ・コバルト錯体を触媒とする不飽和炭化水素のヒドロホウ素化反応 ・発光性イリジウム錯体の設計と合成および発光特性
教員の担当科目
<p>松原公紀：(学部) 有機化学B、生物有機化学、基礎有機化学実験、有機生物化学実験、化学特別研究、卒業論文、化学実験、生活と環境の化学、基礎有機化学 I (大学院) 化学講究、化学特別実験、有機生物化学特論 II</p> <p>古賀裕二：(学部) 基礎化学演習、化学実験、基礎有機化学実験、有機生物化学実験</p>
教員の所属学会
<p>松原公紀：日本化学会、高分子学会、有機合成化学協会、錯体化学会、アメリカ化学会 古賀裕二：日本化学会、高分子学会、有機合成化学協会</p>

最近4年間の学術論文

松原 公紀・山本 瞳・長尾 慎哉・宮崎 智史・上野 景太・古賀 裕二

かさ高いカルベン配位子を持つニッケル分子触媒と触媒的クロスカップリング反応
の開発 福岡大学理学集報, 42(2), 133-141 (2012).

(以降すべて査読有)

K. Matsubara, A. Kumamoto, H. Yamamoto, Y. Koga, S. Kawata, Synthesis and Structure of
Cobalt(II) Iodide Bearing a Bulky NHC ligand and Catalytic Activation of Bromoalkanes. J.
Organomet. Chem., 727, 44-49 (2013).

K. Matsubara, T. Sueyasu, M. Esaki, Y. Koga, S. Kawata, T. Matsumoto, Cobalt(II)
Complexes Bearing a Bulky *N*-Heterocyclic Carbene Ligand: Preparation, Crystal Structures,
and High Catalytic Activities toward Kumada-Tamao-Corriu Cross-Coupling Reaction. Eur. J.
Inorg. Chem., (18), 3079-3086 (2012).

K. Matsubara, C. Terata, H. Sekine, K. Yamatani, T. Harada, K. Eda, Y. Koga, M. Yasuniwa.
Stereoselective Ring-Opening Polymerization of D,L-Lactide, Initiated by Aluminum
Isopropoxides Bearing Tridentate Non-Chiral Schiff-Base Ligands. J. Polym. Sci. A: Polym.
Chem., 50(5), 957-966 (2012).

S. Nagao, T. Matsumoto, Y. Koga, K. Matsubara, Monovalent Nickel Complex Bearing a Bulky
N-Heterocyclic Carbene Catalyzes Buchwald-Hartwig Amination of Aryl Halides under Mild
Conditions. Chem. Lett., 40(9), 1036-1038 (2011).

Y. Koga, M. Kamo, Y. Yamada, T. Matsumoto, K. Matsubara, Synthesis, Structures and Unique
Luminescent Properties of Tridentate C[∧]C[∧]N Cyclometalated Complexes of Iridium. Eur. J.
Inorg. Chem., (18), 2869-2878 (2011).

B. Bichler, L. F. Veiros, Ö. Öztöpcü, M. Puchberger, K. Mereiter, K. Matsubara, K. A. Kirchner,
Synthesis, Structure, Ligand Dynamics, and Catalytic Activity of Cationic
[Pd(η^3 -allyl)(κ^2 (E,N)-EN-chelate)]⁺ (E = P, O, S, Se) Complexes. Organometallics, 30(21),
5928-5942 (2011).

S. Miyazaki, Y. Koga, T. Matsumoto, K. Matsubara, A New Aspect of Nickel-Catalyzed Grignard
Cross-Coupling Reactions: Selective Synthesis, Structure, and Catalytic Behavior of a T-Shape
Three-Coordinate Nickel(I) Chloride Bearing a Bulky NHC Ligand. Chemical
Communications, 46, 1932-1934 (2010).

S. Ando, K. Mitsuyasu, Y. Soeda, M. Hidaka, Y. Ito, K. Matsubara, M. Shido, Y. Uchida, H. Aoyagi,
Structure-Activity Relationship of Indolicidin, a Trp-Rich Antibacterial Peptide. J. Peptide
Sci., 16, 171-177 (2010).

K. Matsubara, A. Kurimaru, M. Yamanaka, T. Hirashima, Y. Onishi, E. Murakami, E. Kawachi, Y.
koga, S. Ando, Radical Polymerization of Styrene Derivatives Bearing *N*-free Amino Acid
Side Chains, Synergic Effect of Chirality and Hydrogen Bonding for Stereoselective
Polymerization. J. Polym. Sci. A: Polym. Chem., 48(23), 5593-5602 (2010).

最近4年間の学術著書
Y. Koga, K. Matsubara, "Synthesis and Luminescent Properties of Phosphorescent Iridium and Platinum Complex Polymers, Which Were Applied to OLED Devices", Organic Light Emitting Diode – Material, Process and Devices. Ed by S. H. Ko, InTech, 2011, Chapter 1, pp. 1-20.
最近4年間の学術国際会議での発表
K. Matsubara, H. Yamamoto, Y. Koga, Dinickel(I) Catalysts Bearing Bulky NHC Ligand; Synthesis and Catalytic Behavior toward Cross-Coupling Reactions of Aryl Halides. XXV International Conference on Organometallic Chemistry. Lisbon, Portugal, 2012年9月3日
H. Yamamoto, Y. Koga, K. Matsubara, Dinickel(I) Complexes Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene in Efficient Kumada-Tamao-Corriu Cross-Coupling Reactions: a Mechanistic Study. 10th International Conference of Hetero Atom Chemistry. Kyoto, 2012年5月22日
K. Matsubara, S. Nagao, H. Yamamoto, Y. Koga, Monovalent Nickel Mediated Efficient Buchwald-Hartwig Amination of Aryl Halides. 10th International Conference of Hetero Atom Chemistry. Kyoto, 2012年5月22日
K. Matsubara, Cross-Coupling Reactions of Aryl Halides Catalyzed by Nickel Complexes. Symposium in Institute für Angewante Chemie, Technische Universität Wien, Wien, 2011年3月
K. Eda, Y. Koga, K. Matsubara, Development of Helical Zinc Complexes Composed of Zinc SALEN and Bridging Linker Units. 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, USA, 2010年12月
T. Takayama, K. Matsubara, S. Ando, Y. Koga, Development of Efficient Intermolecular Disulfide Bond Formation in H ₂ RLX Peptide Hormone. 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, USA, 2010年12月
T. Shimada, S. Ando, K. Matsubara, Synthetic and Structural Studies of Zinc SALOPHEN Containing Metallopeptides. 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, USA, 2010年12月
M. Kamo, Y. Koga, K. Matsubara, Synthesis and Luminescence Behavior of Novel Iridium Complexes with Tridentate Biphenylpyridine Ligand. 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, USA, 2010年12月
S. Nagao, Y. Koga, K. Matsubara, Monovalent Nickel Complex Bearing Bulky N-Heterocyclic Carbene Catalyzed Kumada Cross-Coupling Reactions. 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, USA, 2010年12月
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
松原公紀：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「ニッケル1価錯体触媒開発を基軸とする汎用性触媒システムの開拓」・代表・410万円（直接経費）・2013年～2015年（終了予定）、日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「配位不飽和二核ニッケル錯体を鍵とする協奏触媒開発と汎用性触媒系の開拓」・代表・370万円（直接経費）・2011年～2013年（分担者：古賀裕二）

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
松原公紀：福岡大学推奨研究プロジェクト・「微細構造制御された有機-無機ナノハイブリッド材料の創製」・426万円・2011年～2013年（分担者：福田将虎）
最近4年間の学会等学術団体における役職など
松原公紀：有機合成化学協会・協会誌編集協力委員（2011年～2012年）、高分子学会九州支部幹事（2012年～）、ISRN Organic Chemistry, Editorial Board（2011年～2013年）、Member of Organizing Committee, ICOMC2014（2013年～2014年）
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
松原公紀：依頼講演・「かさ高いカルベン配位子を持つニッケル分子触媒の創生と触媒的クロスカップリング反応」・第46回有機金属若手の会 夏の学校・2013年7月、有機合成化学協会九州山口支部奨励賞受賞・「かさ高いカルベン配位子を持つニッケル分子触媒の創生と触媒的クロスカップリング反応の開発」・有機合成化学協会九州山口支部、2011年12月

研究室名

物質機能化学A研究室（機能性物質の分析化学）

最近の研究課題とその取り組みの概要

超臨界状態を含む高温高压水は、誘電率の減少やイオン積の増加により、常温常圧では得られない新機能性溶媒として振る舞う。超臨界水を用いた金属酸化物ナノ微粒子の生成機構を明らかにするために、X線回折やラマン散乱法、計算機モデリングにより、高温高压下の水、メタノール水溶液、電解質水溶液の構造を分子レベルで明らかにした。メソ細孔をもつ多孔性物質は、その大きな比表面積により触媒、吸着材、ドラッグデリバリーシステムなどの実用化研究が進められている。MCM-41 や Ph-PMO などの多孔性物質中に閉じ込めた水や有機溶媒の構造とダイナミクスを X線・中性子散乱法により明らかにした。細孔中の低温水において高密度水—低密度水転位が 225 K で起こることを明らかにした。タンパク質をはじめとする生体関連分子はその周囲を取り巻く水によってユニークな構造に折り畳まれ、機能を発揮する。モデルペプチドや β -ラクトグロブリンなどを研究対象とし、その二次構造や三次構造、および会合構造の安定性に対する温度・溶媒効果を X線・中性子散乱実験、MDシミュレーションなど物理化学的手段で調べ、タンパク質の機能発現における水や溶媒の役割を分子論的に明らかにした。

高い機能性を有する新規機能性材料や金属錯体はその反応が主に溶液中で行われているため、高い機能性を有する金属錯体の創成を行うためには、溶液中での溶存構造や反応機構を解明する必要がある。水溶液中の金属錯体の溶存構造を明らかにするために、紫外可視吸光分光法と DV-ME 分子軌道法により遷移金属イオンの水和構造を明らかにした。また、機能性物質として酸化チタンに軽元素を組み込んだ可視光応答型酸化チタンの合成および有機物の分解反応の研究を行った。合成した酸化チタンを用いた触媒能実験と XPS 測定より、酸化チタン内部に存在している-3 価のリンが可視光活性に重要な役割を果たしていることを明らかにした。

キーワード：超臨界水、多孔性物質、水の構造とダイナミクス、タンパク質、X線中性子散乱、水和イオン、酸化チタン

研究室の構成員

山口敏男（教授）・理学博士

吉田亨次（助教）・博士（工学）

栗崎 敏（助教）・博士（理学）

Pierre Turq (Universite Pierre & Marie Curie Paris, France) (Professor)(2013.11.27-2013.12.12)

Bellissent-Funel, Marie-Claire (Laboratoire Léon Brillouin, France) (Director of Research) (2012.12.03 – 2012.12.23)

Kempton, Volker (Clausthal University of Technology, Germany) (Professor) (2012.12.03 – 2012.12.23)

Soper, Alan K. (ISIS, United Kingdom) (SFTC Senior Fellow) (2013.02.16 – 2013.03.03)

2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
D3:1名、M2:1名、M1:4名、4年次生：9名
教員の担当科目
山口敏男：(学部) 化学Ⅱ、無機分析化学 A、物質機能化学 C、化学実験、無機分析化学実験、ナノ材料評価実験、物質機能化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 物質機能化学特論Ⅱ、水圏物質化学特論Ⅱ、化学講究Ⅰ、化学特別実験Ⅰ、化学特別研究Ⅰ 吉田亨次：(学部) 情報化学、情報活用基礎、無機分析化学実験、物質機能化学実験、ナノ材料評価実験、卒業論文(補助) (大学院) 修士論文(補助) 栗崎 敏：(学部) 無機分析化学実験、物質機能化学実験、基礎化学演習、卒業論文(補助) (大学院) 修士論文(補助)
教員の所属学会
山口敏男：日本化学会、日本分析化学会、電気化学会、日本中性子科学会、日本放射光学会、日本結晶学会、化学工学会、日本高圧力学会、錯体化学会、分子科学会、溶液化学研究会 吉田亨次：日本化学会、日本分析学会、日本高圧力学会、溶液化学研究会、中性子科学会、日本生物物理学会 栗崎 敏：日本化学会、日本分析化学会、DV-X α 研究協会、錯体化学会、希土類学会、日本結晶学会
最近4年間の学術論文
(すべて査読有) K. Ito, K. Yoshida, M.-C. Bellissent-Funel, T. Yamaguchi, Dynamic Properties of Water Confined in Sephadex G15 Gel by Quasi-elastic Neutron Scattering and Neutron Spin Echo Measurements, Bull. Chem. Soc. Jpn. 87(5), 603-608 (2014) (Selected papers) 山口敏男, 吉田亨次, 「中性子散乱による原子・分子のダイナミクスの観測Ⅲ—1 細孔中の水のダイナミクス 過冷却水の相転移」, RADIOISOTOPES, 63(6), 331-342 (2014). K. Yoshida, Y. Fukushima, T. Yamaguchi, “A study of alcohol and temperature effects on aggregation of β -lactoglobulin by viscosity and small-angle X-ray scattering measurements”, J. Mol. Liquids 189, 1-8 (2014). K. Fujii, M. Shibayama, T. Yamaguchi, K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Seki, H. Uchiyama, A. Q. R. Baron, Y. Umebayashi, “Collective dynamics of room-temperature ionic liquids and their Li ion solutions studied by high-resolution inelastic X-ray scattering”, J. Chem. Phys. 138, 151101-1-4 (2013). C. Tahara, Y. Toyose, H. I. Ogawa, T. Yamaguchi, T. Yoshinaga, Specificity of lucigenin solubility and solvents and bases effects on lucigenin chemiluminescence, Bull. Chem. Soc. Jpn. 86(5), 635-641 (2013). S. Kittaka, S. Takahara, H. Matsumoto, Y. Wada, T. Satoh, T. Yamaguchi, Low temperature phase

- properties of water confined in mesoporous silica MCM-41: Thermodynamic and neutron scattering study, *J. Chem. Phys.* 138, 204714 (9 pages) (2013).
- K. Ito, K. Yoshida, K. Ujimoto, T. Yamaguchi, Thermal behavior and structure of low-temperature water confined in Sephadex G15 Gel by differential scanning calorimetry and large-angle X-ray diffraction measurements, *Anal. Sci.*, 29(3), 353–359 (2013).
- M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, T. Yamaguchi, Thermal behavior, structure, and dynamics of low-temperature water confined in mesoporous organosilica by differential scanning calorimetry, X-ray diffraction, and quasi-elastic neutron scattering, *Pure Appl. Chem.* 85(1), 289–305 (2013).
- T. Yamaguchi, S. Imura T. Kai, and K. Yoshida, Structure of Hexafluoroisopropanol–Water Mixtures by Molecular Dynamics Simulations”, *Z. Naturforsch.* 68a, 145-151 (2013).
- T. Kurisaki, Y. Matsuki, H. Wakita, Synthesis and Equilibrium Study of Nickel(II), Copper(II), and Zinc(II) Complexes with N,N',N'',N''',N''''-Hexakis(2-aminoethyl)-1,4,7,10,13,16-hexaazacyclooctadecane in an Aqueous Solution *Polyhedron* 65, 200-205, (2013).
- M. Etou, T. Kurisaki, Y. Okaue, H. Wakita, T. Yokoyama, ¹³C and ²⁷Al NMR Study of Complexation between Aluminium Ion and Simple Dicarboxylic Acids under an Acidic Condition: New Peak Assignments of ²⁷Al NMR Spectra of Mixed Solutions of Al³⁺ and Simple Dicarboxylic Acids, *Anal. Sci.*, 29 843-848, (2013).
- M. Iwase, K. Yamada, T. Kurisaki, H. Wakita, Characterization and photocatalytic activity of nitrogen-doped titanium(IV) oxide prepared by doping titania with TiN powder, *Appl. Catal. A*, 455(30) 86-91 (2013).
- M. Iwase, K. Yamada, T. Kurisaki, O. O. Prieto-Mahaney, B. Ohtani, H. Wakita, Visible-light photocatalysis with phosphorus-doped titanium(IV) oxide particles prepared using a phosphide compound. *Appl. Catal. B*, 132-133(27) , 39-44 (2013).
- T. Kurisaki, M. Hamano, H. Wakita, [Bromo(1,4,7,10,13-pentaazacyclohexadecane)cobalt(III) Bromide] Dihydrate. *Acta Cryst.*, E69, m179-m180 (2013).
- T. Yamaguchi, K. Fujimura, K. Uchi, K. Yoshida, Y. Katayama, “Structure of water from ambient to 4 GPa revealed by energy-dispersive X-ray diffraction combined with empirical potential structure refinement modeling”, *J. Mol Liquids* 176, 44-51 (2012).
- 吉田亨次・早田 葵・麻生真以・伊藤華苗・橘高茂治・稲垣伸二・山口敏男, 「メソポーラスシリカならびに規則性メソポーラス有機シリカ内に閉じ込められた水の構造とダイナミクス」, *分析化学*, 61 (12), 989-998 (2012).
- K. Ito, K. Yoshida, S. Kittaka, T. Yamaguchi, “Pore Size Dependent Behavior of Hydrated Ag⁺ Ions Confined in Mesoporous”, *Anal. Sci.* 28, 639-642 (2012).
- K. Yoshida, K. Vogtt, Z. Izaola, M. Russina, T. Yamaguchi, M.-C. Bellissent-Funel, “Alcohol Induced Structural and Dynamic Changes in β-Lactoglobulin in Aqueous Solution: A Neutron Scattering Study”, *BBA - Proteins and Proteomics*, 1824, 502-510 (2012).
- 池田一貴、大友季哉、鈴谷賢太郎、三沢正勝、木下英敏、坪田雅巳、金子直勝、瀬谷智洋、

福永俊晴、伊藤恵司、亀田恭男、山口敏男、吉田亨次、丸山健二、社本真一、樹神克明、川北至信、藤崎布美佳、高強度中性子全散乱装置NOVAによる水素貯蔵材料の構造解析、水素エネルギーシステム、37(4)、(2012).

- K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, “Neutron spin echo measurements of monolayer and capillary condensed water in MCM-41 at low temperatures”, *J. Phys: Condens. Matter* 24, (2012) 064101 (9pp).
- T. Kurisaki, D. Tanaka, Y. Inoue, H. Wakita, T. Mmitsugi, S. Fukuda, S. Ishiguro, Y. Umebayashi, The Surface Analysis of Ionic Liquids Using X-ray Photoelectron Spectroscopy. *J. Phys. Chem. B*, 116, 10870-10875 (2012).
- T. Yamaguchi, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, S. Kittaka, “X-ray diffraction study on monolayer and capillary-condensed acetonitrile in mesoporous MCM-41 at low temperatures”, *J. Mol. Liq.*, 164, 53–58 (2011).
- S. Kittaka, Y. Ueda, F. Fujisaki, T. Iiyama, T. Yamaguchi, Mechanism of freezing of water in contact with mesoporous silicas MCM-41, SBA-15 and SBA-16: role of boundary water of pore outlets in freezing, *Phys. Chem. Chem. Phys.*, 13, 17222-17233 (2011).
- T. Shimomura, T. Takamuku, T. Yamaguchi, Clusters of imidazolium-based ionic liquids in benzene solutions, *J. Phys. Chem. B*, 115, 8518-8527 (2011).
- 山口敏男、吉田亨次、伊藤華苗、橘高茂治、高原周一、メソポーラス物質MCM-41中に閉じ込めた低温水の熱挙動、構造とダイナミクス、分析化学、60(2)、115-130 (2011).
- 李孝成、藤村恒児、吉田亨次、山口敏男、X線回折法及びビラマン散乱法による30 MPa一定、25°Cから350°Cにおける硝酸亜鉛(II)水溶液の構造解析、福岡大学理学集報、41(1)、29-37 (2011).
- 岩瀬元希、藤尾侑輝、長濱 俊、山田啓二、栗崎 敏、脇田久伸、新規リンドープ酸化チタンのXRD・XPSによる解析、X線分析の進歩、42、213-219 (2011).
- K. Yoshida, S. Hosokawa, A.Q.R. Baron, T. Yamaguchi, “Collective dynamics of hydrated β -lactoglobulin by inelastic x-ray scattering”, *J. Chem. Phys.* 133(13), 134501 (2010) (7pp).
- T. Yamaguchi, H. Ohzono, M. Yamagami, K. Yamanaka, K. Yoshida, H. Wakita, “Ion hydration in aqueous solutions of lithium chloride, nickel chloride, and cesium chloride in ambient to supercritical water₂”, *J. Mol. Liq.*, 153, 2-8, (2010).
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, N. Osaka, H. Endo, M. Shibayama, “A Study of alcohol-induced gelation of beta-lactoglobulin with small-angle neutron scattering, neutron spin echo, and dynamic light scattering measurements”, *Phys. Chem. Chem. Phys.*, 12, 3260 – 3269 (2010).
- O. Cespedes, O. Inomoto, S. Kai, Y. Nibu, T. Yamaguchi, N. Sakamoto, T. Akune, M. Inoue, T. Kiss, S. Ueno, Radio frequency magnetic field effects on molecular dynamics and iron uptake in cage proteins, *Bioelectromagnetics*, 31, 311-319 (2010).
- 吉田亨次、山口敏男、中性子スピンエコー法による細孔水の動的性質の研究、波紋、20(4)、302-306 (2010).
- 栗崎 敏、三木祐典、南 慧多、横山尚平、國分伸一郎、岩瀬元希、脇田久伸、軟X線吸収

分光法を用いた水溶液中のナトリウムおよびマグネシウムイオンの溶存構造解析, 福岡大学理学集報、42(1)、29-35 (2010).

栗崎 敏, 三木祐典, 南 慧多, 横山尚平, 國分伸一郎, 岩瀬元希, 迫川泰幸, 脇田久伸, (2011), 軟X線吸収分光法による固体および溶液中の軽元素の状態分、X線分析の進歩、42、281-290 (2010).

栗崎 敏, 迫川泰幸 松尾修司, 脇田久伸, 軟 X 線分光スペクトル測定装置用生体試料測定システムの設計・開発・性能評価、X 線分析の進歩、41、165-170 (2010).

最近4年間の学術著書

- 山口敏男：溶媒の構造、「錯体の溶液化学」、横山晴彦・田端正明編著、三共出版、11~25頁、2012年5月
- 栗崎 敏：容量分析、「コンパクト分析化学」、脇田久伸・横山拓史編著、三共出版、32~66頁、2013年3月
- 栗崎 敏：X線を用いた溶存錯体の構造解析、「錯体の溶液化学」、横山晴彦・田端正明編著、三共出版、32~66頁、2012年5月

最近4年間の学術国際会議での発表

- T. Yamaguchi, Structure and dynamics of liquids in hydrophilic to hydrophobic mesopores, EMLG/JMLG Annual Meeting, September 9–13, 2013, Lille, France (Plenary lecture).
- T. Yamaguchi, Thermal behavior, structure and dynamics of low-temperature water confined in mesoporous materials, Water at Interface, April 15-26, 2013, des Houches, France (Invited lecture).
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, “Structure and dynamics of hydrated proteins revealed by X-ray scattering”, EMLG/J MLG annual meeting, Lille (France), September, 2013.
- K. Yoshida, N. Fukuyama, T. Yamaguchi, S. Hosokawa, H. Uchiyama, S. Tsutsui, A. Q. R. Baron, “Collective dynamics of liquid benzene”, EMLG/J MLG annual meeting, Lille (France), September, 2013.
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, “Terahertz dynamics and structure of hydrated protein studied by X-ray scattering”, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, “Collective dynamics of hydrated protein measured by X-ray scattering”, Pre-symposium of 33ICSC (Wakita Symposium) “Recent Progress in Analytical Sciences”, Fukuoka, July, 2013.
- Y. Fukushima, K. Yoshida, T. Yamaguchi, Effect of methanol and trifluoroethanol on thermal denaturation of β -lactoglobulin, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.
- N. Fukuyama, X. C. Li, K. Yoshida, Y. Katayama, T. Yamaguchi, X-ray and neutron diffraction and EPSR modeling of an aqueous NaCl solution from ambient pressure to 2 GPa, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.
- T. Kurisaki, D. Tanaka, Y. Inoue, H. Wakita, B. Minofar, S. Fukuda, S. Ishiguro and Y. Umebayash,

The Surface Analysis of Ionic Liquids Using X-ray Photoelectron Spectroscopy, 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, July, 2013.

- T. Kurisaki, D. Tanaka, Y. Inoue, H. Wakita, B. Minofar, S. Fukuda, S. Ishiguro and Y. Umebayash, Electronic Structure Analysis of Ionic Liquids Using X-Ray Photoelectron Spectroscopy, ASIANALYSIS XII, Fukuoka, August, 2013.
- N. Fukuyama, K. Yoshida, O. Yagafarov, Y. Katayama, T. Yamaguchi, X-ray diffraction of a 2 molal magnesium chloride solution from ambient pressure to 2 GPa, ASIANALYSIS XII, Fukuoka, August, 2013.
- Y. Obana, T. Kurisaki, C. Numako, H. Wakita, T. Yamaguchi, Analysis of Historical Iron Samples in Edo and Meiji Era by Means of ICP-MS and Portable type XRF, ASIANALYSIS XII, Fukuoka, August, 2013.
- K. Ito, K. Yoshida, M.-C. Bellissent-Funel, T. Yamaguchi, Thermal behavior, structure and dynamic properties of water confined in Sephadex G15, Water at Interface; New Development in Physics, Chemistry, and Biology, des Houches, France, April 2013.
- T. Yamaguchi, M. Aso, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Dynamics of water confined in some periodic mesoporous organosilica, QENS/WINS2012, Nikko (Japan), October, 2012 (Invited lecture).
- T. Yamaguchi, M. Aso, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Thermal behaviour, structure and dynamics of low-temperature water confined in periodic mesoporous organosilica, 12th Eurasia Conference on Chemical Sciences (EuAsC2S-12), Corfu (Greece), April, 2012 (Invited lecture).
- T. Yamaguchi, M. Aso, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Thermal behaviour, structure and dynamics of low-temperature water confined in periodic mesoporous organosilica, EMLG/JMLG annual meeting, Eger (Hungary), September, 2012.
- T. Yamaguchi, M. Aso, K. Ito, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, Dynamics of water confined in some mesoporous organosilica, QENS2012, October 2012 (Invited lecture).
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, "Alcohol effect on structure, dynamics, and aggregation of peptide and protein", EMLG/JMLG annual meeting, Eger (Hungary), September, 2012.
- K. Yoshida, A. Soda, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, "Structure and Dynamics of Monolayer and Capillary Condensed Water Confined in Mesoporous Silica MCM-41", 12th Eurasia Conference on Chemical Sciences (EuAsC2S-12), Corfu (Greece), April, 2012.
- T. Yamaguchi, Structure and Dynamics of Liquids and Solutions in Confinement, The 31st International Conference of Solution Chemistry, La Grande Motte, France, August 27-September 2, 2011 (Plenary lecture).
- T. Yamaguchi, K. Fujimura, K. Uchi, K. Yoshida, Y. Katayama, Structure of water and methanol-water mixture from ambient pressure to 4 GPa by energy dispersive X-ray and neutron diffraction and EPSR modelling, EMLG/JMLG Annual Meeting, Warsaw, Poland, September 11-15, 2011.

- T. Takamuku, T. Shimomura, T. Yamaguchi, Cluster of imidazolium-based ionic liquid in benzene solutions, EMLG/JMLG Annual Meeting, Warsaw, Poland, September 11-15, 2011.
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, D. Bowron, "Structure and dynamics of low-temperature water confined in porous silica", Liquid Matter Conference, Wien, Austria, September 6-10, 2011.
- M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, T. Yamaguchi, Dynamics of water confined in periodic mesoporous organosilica (PMO) by quasi-elastic neutron scattering, International Conference of Analytical Sciences, Kyoto, May 22-26, 2011.
- T. Yamaguchi, T. Nagaki, K. Ito, K. Yoshida, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, Thermal behavior, structure and dynamics of low-temperature water confined in mesoporous MCM-41 materials, 1st Asia-Oceania Conference on Neutron Scattering, Tsukuba, November 20-24, 2011.
- M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, T. Yamaguchi, Structure and dynamics of water confined in periodic mesoporous organosilica by X-ray diffraction and quasi-elastic neutron scattering, 1st Asia-Oceania Conference on Neutron Scattering, Tsukuba, November 20-24, 2011.
- T. Yamaguchi, H. Sugino, K. Ito, K. Yoshida, T. Takamuku, S. Takahara, S. Kittaka, Structural and dynamic properties of liquids confined in mesoporous silica as drug delivery system, IUPAC International Congress on Analytical Sciences, Kyoto, May 2011.
- M. Aso, K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, T. Yamada, O. Yamamuro, S. Inagaki, T. Yamaguchi, Dynamics of water confined in periodic mesoporous organosilica by quasielastic neutron scattering, IUPAC International Congress on Analytical Sciences, Kyoto, May 2011.
- M.-C. Bellissent-Funel, K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, P. Fouquet, "Dynamics of nano-confined water, 5th European Conference on Neutron Scattering", Prague, July, 2011.
- Wakita, H., Kurisaki, T., Kokubu, S., Numako, C., Nagano, S., Analytical Chemical Study of Historical Iron Samples by Using Various X-Ray Analytical Methods. International Symposium on History of Indigenous Knowledge, China, October, 2011
- Kurisaki, T., Sakogawa, Y., Miki, Y., Kokubu, S., Minami, K., Yokoyama, S., Wakita, H., The Characterization of light element ions in aqueous solution by soft X-ray absorption spectral measurement apparatus using polycapillary X-ray optics. International Conference of Analytical Sciences, Kyoto, May, 2011
- Iwase, M., Yamada, K., Kurisaki, T., Wakita, H., X-ray analysis of phosphorus-doped TiO₂ with visible-light photocatalytic activity. International Conference of Analytical Sciences, Kyoto, May, 2011
- T. Yamaguchi, Thermal behavior, structure, and dynamics of liquids and electrolyte solutions confined in mesoporous materials, EMLG-JMLG annual meeting 2010, Ukraine, September, 2010. (Plenary lecture).
- T. Yamaguchi, On the structure of organic solvent – water binary solutions and their role in protein folding and amyloid fibrils disaggregation, 11th Eurasia Conference of Chemical Sciences,

- Jordan, 6-10 October, 2010. (Invited lecture).
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Hosokawa, A.Q.R. Baron, Collective dynamics of hydrated protein by inelastic X-ray scattering, PACIFICHEM 2010, Honolulu, December, 2010.
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, Neutron spin echo measurements of monolayer and capillary condensed water in MCM-41 at low temperatures, International Workshop on Dynamic Crossover Phenomena in Water and Other Glass-forming Liquids, Florence, 11-14 November, 2010.
- K. Yoshida, T. Yamaguchi, S. Kittaka, M.-C. Bellissent-Funel, P. Fouquet, "Dynamics of low temperature water confined in MCM-41", 5th International Conference Physics of Liquid Matter: Modern Problems, Kiev, Ukraine, May, 2010.
- K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, S. Kittaka, T. Yamaguchi, The Structure of Ag^+ , Ca^{2+} and Y^{3+} Hydration in Confinement in Nanometer Scale over the temperature range of 298 – 190 K, EMLG-JMLG annual meeting 2010, Lviv (Ukraine), September, 2010.
- K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, S. Kittaka, T. Yamaguchi, The Structure of Hydrated Ions Confined in Nanometer Scale over the Temperature Range of 298 – 190 K, The 11th Eurasia Conference on Chemical Sciences, Jordan, October, 2010.
- K. Ito, H. Sugino, K. Yoshida, S. Kittaka, T. Yamaguchi, Thermal and Structural Behaviors of Ag^+ , Ca^{2+} and Y^{3+} Hydration Confined in Nanometer Scale, JSPS-DST Asian Academic Seminar 2010, India, November, 2010.
- K. Fujimura, K. Uchi, K. Yoshida, Y. Katayama, T. Yamaguchi, Structure of water and methanol-water mixture at high-temperatures and high-pressure by using energy dispersive X-ray diffraction combined with EPSR modeling, EMLG 28th Annual Meeting, Lviv, September 05-09, 2010.
- K. Fujimura, K. Yoshida, T. Yamaguchi, EPSR modeling of water and methanol-water mixture at high temperature and high pressure based on energy dispersive X-ray diffraction, The 11th Eurasia Conference on Chemical Sciences, Jordan, October 6-10, 2010.
- Kurisaki, T., Matsuo, S., Perera, R. C. C., Underwood, J., Wakita, H., Recent new soft X-ray spectrometers developed for the analysis of biochemical samples. PACIFICHEM 2010, Honolulu, December, 2010.
- Iwase, M., Yamada, K., Kurisaki, T., Wakita, H., X-ray absorption spectroscopic characterization of Phosphorus-doped TiO_2 with visible-light photocatalytic activity. PACIFICHEM 2010, Honolulu, December, 2010.
- Kurisaki, T., Sakogawa, Y., Wakita, H., 6th International Conference on DV-X α and the 23rd DV-X α Annual Meeting, South Korea, August, 2010.
- Kokubu, S., Kurisaki, T., Wakita, H., Characterization of Iron Slags and Lump Found from Reverberatory Furnace Vacant Lot by X-ray Absorption Spectroscopy (2). 6th International Conference on DV-X α and the 23rd DV-X α Annual Meeting, South Korea, August, 2010.
- Iwase, M., Kokubu, S., Yamada, K., Kurisaki, T., Wakita, H., Electronic Structure of Phosphorus-doped TiO_2 with visible-light photocatalytic activity. 6th International Conference on DV-X α

and the 23rd DV-X α Annual Meeting, South Korea, August, 2010.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

山口敏男：日本学術振興会・科研費・基盤研究 B「X線を用いるエアロゾル液滴のマイクロ構造解析装置の開発とその応用」(26288073) (代表) 670 万円(直接経費)・2014～2017 年 (分担者：栗崎敏、石坂昌司)

山口敏男：日本学術振興会・科研費・基盤研究 C「メソポーラス有機シリカ中の液体の構造とダイナミクス」(23550028) (代表) 400 万円 (直接経費)・2011 年～2013 年

山口敏男：大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構・受託研究・「中性子実験装置による水素貯蔵材料に関する共通基盤研究」(100175) (代表) 227 万 (直接経費)・2010～2011 年 (分担者：吉田亨次)

吉田亨次：日本学術振興会・科研費・基盤研究 (C) 「集団ダイナミクスと液体構造解析によるタンパク質水和水の液体-液体相転移の研究」(25390130) (代表) 169 万円 (直接経費)・2012～2015 年(予定)

吉田亨次：日本学術振興会・科研費・新学術領域研究(研究領域提案型)「水を主役とした ATP エネルギー変換」 公募研究 「中性子散乱によるアクチンフィラメント形成機構の解明」(23118718) (代表) 360 万円 (直接経費) 2011 年～2012 年

吉田亨次：日本学術振興会・科研費・基盤研究 (C) 「不凍タンパク質の機能発現と水の動的クロスオーバーの関係」(22550024) (代表) 360 万円 (直接経費) 2010 年～2012 年

吉田亨次：日本学術振興会・科研費・若手研究 (B) 「水の第 2 臨界点仮説から見たタンパク質のフォールディング機構の解明」(19750010) (代表) 330 万円 (直接経費) 2007 年～2010 年

栗崎 敏：日本学術振興会・科研費・基盤研究 C「実験室系 XAFS および紫外可視吸収スペクトル同時測定装置の開発と触媒反応への応用」・代表・400 万円 (直接経費)・2013～2015 年

栗崎 敏：日本学術振興会・科研費・基盤研究 C「金属錯体の溶存構造解析用実験室系 in-situ X線吸収スペクトル測定装置の開発」・代表・360 万円 (直接経費)・2010～2012 年 (終了予定)

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績

山口敏男：推奨研究「新機能多孔性物質の合成・構造・物性」(127002) (代表) 105 万円・2012～2014 年 (終了予定) (分担者：川田 知、栗崎 敏)

山口敏男：領域別研究「ナノ多孔性材料の合成・構造・機能の研究」(125004) (代表) 52.6 万円・2012～2014 年 (終了予定) (分担者：吉田亨次)

山口敏男：大学院高度化推進特別経費 (外国人招へい) (代表) 70 万円・2012 年

山口敏男：文部科学省補助金 (研究装置)「ナノ物質精密構造解析システム」9,996 万円 (代表) 2010 年 (分担者：脇田久伸、川田 知、香野 淳、安庭宗久)

吉田亨次：推奨研究「水和水を基調とした生体分子の分子認識機構の研究」・244 万円・2011～2013 年 (分担者：塩井成留実)

最近4年間の学会等学術団体における役職など

山口敏男：

日本分析化学会九州支部幹事 1987 年 4 月～現在

日本分析化学会本部理事 2011 年 3 月～2013 年 2 月

日本分析化学会九州支部長 2010年3月～2011年2月
 溶液化学研究会副運営委員長 2006年～現在
 中性子課題審査部会分科会委員 2011年9～2013年3月
 独立行政法人日本原子力研究開発機構任期付研究員研究業績評価委員会委員 2013年3月
 中性子課題審査部会委員及び分科会委員 2013年7月～2015年3月
 一般財団法人総合科学研究機構東海事業センター利用研究課題審査委員会「分科会」委員 2011年10月～2013年3月
 一般財団法人総合科学研究機構利用研究課題審査委員会委員 2013年5月～2015年3月
 一般財団法人総合科学研究機構利用研究課題審査委員会「分科会」委員 2013年7月～2015年3月
 一般財団法人総合科学研究機構東海事業センター 利用研究課題審査委員会分科会レフェリー 2013年5月～2015年3月
 EMLG/JMLG International Advisory Board member 2003年～現在
 International Conference on Solution Chemistry Steering Committee member 2009年～現在
 Eurasia Conference of Chemical Sciences International Advisory Board member 2008年～現在
 Journal of Molecular Liquids, Editor-in-Chief 2013～現在
 Journal of Solution Chemistry, Associate Editor 2008～現在
 33rd International Conference on Solution Chemistry, Chairman 2013年7月

吉田亨次：

日本化学会新領域研究グループ「機能性ソフトマテリアルと分子統計化学」メンバー 2013年4月～現在
 公益財団法人新世代研究所 水和ナノ構造研究会委員 2013年4月～現在
 一般財団法人総合科学研究機構利用研究課題審査委員会分科会レフェリー 2011年8月～現在
 日本分析化学会九州支部幹事 2011年3月～現在
 日本分析化学会九州支部会計幹事, 2010年3月-2011年2月
 高圧力の科学と技術（日本高圧力学会），編集委員, 2007年9月-2010年8月

栗崎 敏：

日本分析化学会九州支部幹事 2005年3月～現在
 DV-X α 研究協会常任幹事 2010年4月～現在

最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

該当なし

最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文

該当なし

最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

該当なし

その他特筆事項

山口敏男：日本分析化学会学会賞を受賞 2013年9月

伊藤華苗：日本分析化学会九州支部九州分析化学奨励賞を受賞 2013年9月

山口敏男：日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査委員、
2010年8月～2012年7月

研究室名
物質機能化学 I 研究室 (金属錯体集積体)
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>物質機能化学 I 研究室金属錯体集積体研究グループでは、ナノメートルサイズに集合した遷移金属錯体集積体の合成と物性を中心に研究している。遷移金属錯体をビルディングブロックとし、階層構造を有する金属錯体集積体は、複合化した構造と単一の金属錯体にはない量子的性質を持つことから、多面的な物性発現が期待されている。また、細孔構造を有する集積体においては、細孔の特異的な環境から生じるホスト-ゲスト相互作用により、様々なゲスト分子の導入とそれをトリガーとする新規機能の発現が期待できる。本研究グループでは、クリスタルエンジニアリングの手法を用いて配位高分子状の集積体、あるいは多核錯体の集合体を新たに合成し、それらの物性、機能発現を検討している。たとえば、配位高分子状の集積体に関して、プロトン伝導性、磁性等の物性に対する結晶溶媒の吸脱着依存性、あるいは多核錯体の集合体に関して、特異的な磁気フラストレーション挙動を明らかにした。</p> <p>キーワード：金属錯体集積体・配位高分子・多核錯体・ホスト-ゲスト相互作用・クリスタルエンジニアリング</p>
研究室の構成員
<p>川田 知 (教授)・理学博士 有福文博 (助教)・工学博士</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M2 : 4 名 M1 : 3 名 4 年次生 : 4 名</p>
教員の担当科目
<p>川田 知 : (学部) 一般化学、物質機能化学 B、機能新素材科学、化学 A、化学 B、無機分析化学実験、物質機能化学実験、卒業論文 (大学院) 化学講究 V、化学特別実験 V、ナノ化学特論 I、修士論文 有福文博 : (学部) 化学実験、一般化学実験</p>
教員の所属学会
<p>川田 知 : 日本化学会、アメリカ化学会、錯体化学会、電気化学会、電子スピンスサイエンス学会 有福文博 : 電気化学会</p>
最近 4 年間の学術論文
<p>(すべて査読有)</p> <p>Y. Tsunozumi, K. Matsumoto, S. Hayami, A. Fuyuhiko, and S. Kawata, Bis[tetrakis(pyridin-2-yl)methane-κ 3N,N',N'']cobalt(II) tetrakis(thiocyanato-κ N)cobaltate(II) methanol monosolvate, <i>Acta Crystallogr. E</i>, 2014, E70, m90-m91.</p> <p>S. Tanaka, A. Himegi, T. Ohishi, A. Fuyuhiko, and S. Kawata, <i>catena-Poly[[bis(ethanol-κO)</i></p>

- manganese(II)]- μ -2,5-dichloro-3,6-dioxocyclohexa-1,4-diene-1,4-bis(olato)- κ 4O1,O6:O3,O4], *Acta Crystallogr. E*, 2014, E70, m90-m91.
- A. Himegi and S. Kawata, Bis(n-dodecylammonium) bis(chloranilato) diethanol cuprate(II), *Acta Crystallogr. E*, 2014, E70, m63-m64.
- N. Katsuta, A. Mishima, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Bis[μ -3,5-bis(2-pyridyl)-pyrazole]diiron(III)-tetrabromide, *Acta Crystallogr. E*, 2013, E69, m574.
- A. Mishima, N. Katsuta, M. Furusho, A. Fuyuhiko, and S. Kawata, Bis[μ -3,5-bis(2-pyridyl)-pyrazolato]bis(hexafluorophosphonato)dicopper(II), *Acta Crystallogr. E*, 2013, E69, m455-m456.
- K. Matsubara, A. Kumamoto, H. Yamamoto, Y. Koga, and S. Kawata, Synthesis and Structure of Cobalt(II) Iodide Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene Ligand, and Catalytic Activation of Bromoalkanes, *J. Organomet. Chem.*, 2013, 727, 44-49
- H. Kumagai, S. Kawata, and Y. Sakamoto, Poly[(μ^2 -1,4-benzenedicarboxylato) di(4-pyridine-aldoxime)zinc(II)] (4-pyridineoxime), *Acta Crystallogr. E*, 2013, E69, m216.
- Y. Nishimura, A. Himegi, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, catena-Poly [[(2,2'-bipyridine - κ 2N,N')manganese(II)]- μ -(2,5-dichloro-3,6-dioxocyclohexa-1,4-diene-1,4-diolato)- κ 4O1,O6:O3,O4] ethanol disolvate], *Acta Crystallogr. E*, 2013, E69, m119-m120.
- Y. H. Lee, M. R. Karim, Y. Ikeda, T. Shimizu, S. Kawata, A. Fuyuhiko, and S. Hayami, Tris-Alkoxyphenylterpyridine Cobalt(II) Complexes: Synthesis, Structure, and Magnetic and Mesomorphic Behaviors, *J. Inorg. Organomet. Polym.*, 2013, 23(1), 186-192.
- T. Washizaki, R. Ishikawa, K. Yoneda, S. Kitagawa, S. Kaizaki, A. Fuyuhiko, and S. Kawata, Reversible Solid State Hydration and Dehydration Process Involving Anion Transfer in a Self-Assembled Cu₂ System, *RSC Advances*, 2012, 2(32), 12169-12172.
- H. Kumagai, Y. Sakamoto, S. Kawata, S. Matsunaga, and S. Inagaki, Synthesis, Crystal Structures and Properties of a Series of Coordination Polymers Employing R₄terephthalate (R = H, F, Cl, Br) and 4,4'-bipyridine as Bridging Ligands. *Bull. Chem. Soc. Jpn.*, 2012, 85(10), 1102-1111 (selected papers).
- K. Matsubara, T. Sueyasu, M. Esaki, A. Kumamoto, S. Nagao, H. Yamamoto, Y. Koga, S. Kawata, and T. Matsumoto, Cobalt(II) Complexes Bearing a Bulky N-Heterocyclic Carbene for Catalysis of Kumada–Tamao–Corriu Cross-Coupling Reactions of Aryl Halides, *Eur. J. Inorg. Chem.* 2012, 3079–3086.
- Y. H. Lee, E. Kubota, A. Fuyuhiko, S. Kawata, J. M. Harrowfield, Y. K. and S. Hayami, Synthesis, structure and luminescence properties of Cu(II), Zn(II) and Cd(II) complexes with 4'-terphenylterpyridine, *Dalton Trans.*, 2012, 41(35), 10825-10831.
- Y. H. Lee, K. Kato, E. Kubota, S. Kawata, and S. Hayami, Molecular Structure and Magnetic Properties of Pentapyridyl-based Iron(II) and Cobalt(II) Complexes, *Chem. Lett.*, 2012, 41(6), 620-621.
- Y. Komatsu, K. Kato, Y. Yamamoto, H. Kamihata, Y. H. Lee, A. Fuyuhiko, S. Kawata, and S. Hayami,

- Spin-Crossover Behaviors Based on Intermolecular Interactions for Cobalt(II) Complexes with Long Alkyl Chains, *Eur. J. Inorg. Chem.*, 2012, 2769-2775.
- R. Ishikawa, K. Nishio, A. Fuyuhiko, K. Yoneda, H. Sakamoto, S. Kitagawa, and S. Kawata, Water Adsorption-Desorption Property of Stable Porous Supramolecular Assembly Composed of Discrete Tetranuclear Iron(III) Complex Using $\pi \cdots \pi$ Interactions, *Inorg. Chim. Acta*, 2012, 386, 122-128.
- H. Kumagai, Y. Sakamoto, S. Kawata and S. Inagaki, Poly[[dodecaqua(μ 4-benzene-1,4-dicarboxylato)(μ 2-4,4'-bipyridine- κ 2N:N') dicerium(III)] bis(benzene-1,4-dicarboxylate)], *Acta Crystallogr.*, 2012, E68, m643-m644.
- T. Hamaguchi, Y. Inoue, K. Ujimoto, S. Kawata, and I. Ando Control of Isomerization of Pyridinethiol-ruthenium Complexes via External Stimuli and Factors Affecting Isomerization Behavior, *Bull. Chem. Soc. Jpn.*, 2012, 85(1), 61-68, Selected Paper.
- T. Suzuki, H. Yamaguchi, A. Hashimoto, K. Nozaki, M. Doi, N. Inazumi, N. Ikeda, S. Kawata, M. Kojima, and H. D. Takagi, Orange and Yellow Crystals of Copper(I) Complexes Bearing 8-(Diphenyl-phosphino)quinoline: A Pair of Distortion Isomers of an Intrinsic Tetrahedral Complex, *Inorg. Chem.*, 2011, 50(9), 3981-3987.
- S. Komatsuda, W. Sato, S. Kawata, and Y. Ohkubo, Strong Affinity between In and Al Impurities Doped in ZnO, *J. Phys. Soc. Jpn.*, 2011, 80, 095001.
- A. Mishima, A. Fuyuhiko, H. Kumagai, and S. Kawata, Bis[μ -3,5-bis(2-pyridyl)pyrazolato] bis(hydrogensulfato)dicopper(II) dimethanol solvate, *Acta Crystallogr. E*, 2011, E67, m1523-m1524.
- T. Hamaguchi, T. Nagata, S. Kawata and I. Ando, Tris(pyridin-2-ylmethanol)nickel(II) hexafluoridophosphate trifluoroacetate, *Acta Crystallogr. E*, 2011, E67, m1632.
- H. Kumagai and S. Kawata, 4,4'-Bipyridinium 2,3,5,6-tetrabromoterephthalate dehydrate, *Acta Crystallogr. E*, 2011, E67, o2636.
- W. Sato, Y. Ohkubo, Y. Itsuki, S. Komatsuda, D. Minami, T. Kubota, S. Kawata, A. Yokoyama, and T. Nakanishi, Local fields at impurity sites in ZnO, *Proc. Radiochim. Acta*, 2011, 1, 435-438.
- R. Ishikawa, M. Nakano, A. Fuyuhiko, T. Takeuchi, S. Kimura, T. Kashiwagi, M. Hagiwara, K. Kindo, S. Kaizaki, and S. Kawata, Construction of a Novel Topological Frustrated System: a Frustrated Metal Cluster in a Helical Space, *Chem. Eur. J.*, 2010, 16(31), 11139-11144.
- S. Hayami, D. Urakami, Y. Kojima, H. Yoshizaki, Y. Yamamoto, K. Kato, A. Fuyuhiko, S. Kawata, and K. Inoue, Stabilization of Long-Lived Metastable State in Long Alkylated Spin-Crossover Cobalt(II) Compound, *Inorg. Chem.*, 2010, 49(4), 1428-1432.
- R. Ishikawa, K. Yamada, S. Yamauchi, R. Miyamoto, and S. Kawata, Solvent control on the structural versatility and properties of manganese(II) complexes surrounded by the flexible hinge-like ligand, *Inorg. Chem. Commun.*, 2010, 13(5), 636-640.
- R. Ishikawa and S. Kawata, Metal-Complex Assemblies Constructed from a Flexible Hinge-

Like Ligand H₂bhnq: Structural Versatility and Dynamic Behavior in the Solid State, Fukuoka Univ. Sci. Rep., 2010, 40(1), 89-96.

最近4年間の学術著書

川田 知：井上 亨、川田 知、栗原寛人、小寺 安、塩路幸生、脇田久伸、
新版化学への招待、三共出版、2013年3月

最近4年間の学術国際会議での発表

- S. Tanaka, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Metal-Complex Assemblies Constructed from a Flexible Ligand H₂bhnq: Structural Versatility and Control of Cavity, Challenges in Organic Materials and Supramolecular Chemistry (ISACS10), 2013年6月京都.
- A. Himegi, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Novel intercalation system based on metal-chloranilate assembled compounds, Challenges in Organic Materials and Supramolecular Chemistry (ISACS10), 京都, 2013年6月.
- Y. Tsunozumi, S. Hayami, K. Matsumoto, and S. Kawata, Synthesis and characterization of metal-complex from polypyridylmethanes, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月.
- N. Katsuta, T. Washizaki, A. Fuyuhiko, M. Ohba, S. Hayami, and S. Kawata, Symmetry control of the [M^{II}₃(μ₃-O/OH)]ⁿ⁺ triangle core in pentanuclear cluster helicates, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月.
- M. Furusho, N. Katuta, T. Wasizaki, A. Misina, Y. Hamatake, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Novel reactions of TCNE: formation of supramolecular structures by reaction with self-assembled M₂-bypyz systems, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月.
- S. Yoshioka, A. Fuyuhiko, S. Hayami, and S. Kawata, Role of the multi hydrogen-bonded organic-inorganic hybrid modules in formation of the supramolecular structures, International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 仙台, 2013年9月.
- S. Kawata, R. Ishikawa, S. Kaizaki, A. Fuyuhiko, M. Nakano, Construction of a Novel Topological Frustrate System: a Frustrated Metal Cluster in a Helical Space, 2010環太平洋国際化学会議 (Pacifichem2010), Hawaii, 2010年12月.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

川田 知：科学研究費補助金・基盤研究 C・スピンプラストレーションを内在する金属錯体集合体を用いた交差相関物性の開拓・代表・410万円（直接経費）・2013年～2015年

川田 知：科学研究費補助金・基盤研究 C・多重水素結合無機—有機複合モジュールを用いた一次元階層構造の構築・代表・380万円（直接経費）・2010年～2012年

川田 知：研究助成寄付金（日産化学）・18万円（直接経費）・2011年

川田 知：私学助成金・教育基盤設備・1,670万円・2011年

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
川田 知：福岡大学大学院理学研究科高度化推進事業タイプI・外場応答性を持つ金属錯体集積体の構築・458.5万円・2012年
川田 知：福岡大学領域別研究部(理工学研究部)・「フラストレーション錯体研究チーム」・117万円・2011年～2013年
川田 知：福岡大学総合科学研究部・多重水素結合ハイブリッド研究チーム・500万円・2010年
最近4年間の学会等学術団体における役職など
川田 知：九州錯体化学懇談会運営委員
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
物質機能化学 I 研究室（単分子金属錯体）
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>化学科物質機能化学 I 研究室(単分子金属錯体研究グループ)では、単分子金属錯体を用いた新機能発現機構や機能性向上を明らかにすることを目指して、化学的及び物理的外部刺激による単分子錯体の物性変化を研究している。また、異なる物性をもつ錯体を連結させて構築した単分子多核錯体における機能発現についても検討している。</p> <p>ルテニウムアンミン錯体の <i>Second Sphere Coordination</i> (化学的外部刺激) 応答を調べ、応答には選択性があることと、錯体の酸化還元電位に重要な影響を与える因子を明らかにした。また、酸化還元活性なキノン類を配位子とする錯体について、溶媒効果によりラジカル種をもつ錯体が安定に生成することを明らかにし、さらにキノン類配位子に導入した置換基の効果による、ラジカル種をもつ錯体の安定化について検討した。これらの結果をもとに機能性二核錯体の検討を行っている。</p> <p>一方、外部刺激として電位を用い、分子構造が動的に変化する単分子錯体の構築に成功した。本錯体は第二の外部刺激により、構造変化を制御できる事も明らかにした。現在は構造変化に伴うクロミズムを用い、マルチクロミズムを示す系について研究を行っている。</p> <p>キーワード：単分子金属錯体・外部刺激応答・多核金属錯体・酸化還元活性・クロミズム</p>
研究室の構成員
安藤 功(准教授)・理学博士 濱口 智彦(助教)・博士(理学)
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
4 年次生 : 2 名 ・クラウンエーテルとの水素結合による非対称 Ru 二核錯体の物性変化—機能性錯体の設計— ・2-ピリジンメタノール類を配位子とする銅錯体のサーモクロミズム挙動
教員の担当科目
安藤 功:(共通教育)自然界と物質の化学、化学実験(工学部) (学部)無機分析化学B、無機化学概論、物質機能化学C、無機分析化学実験、物質機能化学実験、ナノ材料評価実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院)化学講究 I、化学特別実験 I、物質機能化学特論 III 濱口 智彦:(学部)基礎化学演習、無機分析化学実験、物質機能化学実験、ナノ材料評価実験
教員の所属学会
安藤 功:日本化学会、日本分析化学会、錯体化学会、溶液化学研究会、九州錯体化学懇談会 濱口 智彦:日本化学会、錯体化学会、九州錯体化学懇談会

最近4年間の学術論文

(すべて査読有)

I. Ado, H. Katae, M. Okamura, Effect of second-sphere coordination 13. Consideration of factors affecting adduct formation of ruthenium-ammine complexes with crown ethers based on the stability constants, *Inorg. Chim. Acta*, 2014, 411, 56-60.

T. Hamaguchi, I. Kawahara and I. Ando, Bis[(5-bromopyridin-2-yl)methanolato- k^2N,O]copper(II) monohydrate, *Acta Cryst.* 2013, E69, m585.

T. Hamaguchi, Y. Kurashige, I. Ando, Identification of various electrochemical processes in the ruthenium complexes with a redox-active ligand by in situ spectroscopy and time-dependent density function theory calculation, *Inorg. Chim. Acta*, 2013, 405, 410-414.

T. Hamaguchi, M. Kaneko, I. Ando, Effect of ligand basicity on electrochemically induced linkage isomerization in 2-mercaptopyridine–ruthenium complexes, *Polyhedron*, 2013, 50(1), 215–218.

T. Hamaguchi, Y. Inoue, K. Ujimoto, S. Kawata, I. Ando, Control of isomerization of pyridinethiol–ruthenium complexes via external stimuli and factors affecting isomerization behavior, *Bull. Chem. Soc. Jpn.* 2012, 85(1), 61-68.

I. Ando, T. Fukuishi, K. Ujimoto, H. Kurihara, Oxidation States and Redox Behavior of Ruthenium Ammine Complexes with Redox Active Dioxolen Ligands, *Inorg. Chim. Acta*, 2012, 390, 47-52.

T. Hamaguchi, I. Ando, Bis(2,2'-bipyridine)(pyridin-2-olato)ruthenium(II) hexafluoridophosphate benzene hemisolvate, *Acta Cryst.* 2011, E67(12), m1687.

T. Hamaguchi, T. Nagata, S. Kawata, I. Ando, Tris(pyridin-2-ylmethanol)nickel(II) hexafluoridophosphate trifluoroacetate, *Acta Cryst.* 2011, E67(11), m1632.

I. Umemura, I. Ando, and T. Hamaguchi, Synthesis and Redox Behavior of Tetraammineruthenium Complexes with N,N-Donor Quinonoid, *Fukuoka Univ. Sci. Reports*, 2010, 40(2), 195-201.

最近4年間の学術著書

混合原子価錯体(3章2節), 伊藤 翼・山口 正・Brian K. BREEDLOVE・濱口 智彦, 金属錯体の電子移動と電気化学, 西原 寛・市村 彰男・田中 晃二 編著, 三共出版, 2013, pp. 88-101

最近4年間の学術国際会議での発表
T. Hamaguchi, Y. Inoue, M. Kaneko, I. Ando, Effect of ligand basicity on electrochemically induced linkage isomerization in 2-mercaptopyridine-ruthenium complexes, International Symposium for the 70 th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan, 日本(仙台市), 2013年9月
T. Hamaguchi, Y. Inoue, K. Ujimoto, S. Kawata, I. Ando, Electrochemically induced linkage isomerization switched on/off by protolysis in 2-mercaptopyridine ruthenium(II) complexes, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, 米国(ハワイ), 2010年12月
I. Umemura, T. Hamaguchi, S. Kawata, I. Ando, Synthesis and electrochemical behavior of tetraammineruthenium complexes of quinonoid with N, O-coordination, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, 米国(ハワイ), 2010年12月
T. Hamaguchi, Y. Inoue, E. Nanagi, K. Ujimoto, S. Kawata, I. Ando, Control by external stimuli for the isomerization on the mercaptopyridine ruthenium complex, 60th Anniversary Conference on Coordination Chemistry in OSAKA, JAPAN, 日本(大阪市), 2010年9月
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
安藤 功:九州錯体化学懇談会(運営委員)
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
安藤 功:化学への招待(責任者)

研究室名
物理化学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>物理化学研究室では、次の3つの課題についての研究を行っている。(1) 液晶の秩序構造とずり誘起構造との関係、(2) イオン液体の相挙動と秩序構造の解明、(3) 粗視化モデルによる界面活性剤ミセルの解析。それぞれの課題の詳細は、以下のとおりである。(1) 液晶にずり流動を与えながら誘電率を測定すると、ずり流動によって誘起される構造や運動を反映した結果が得られる。温度、周波数、ずり速度などを変化させて、誘電率がどのように変化するかを測定し、そのずり誘起構造や構造変化などの実体を明らかにする。(2) イオン液体は液体であるにもかかわらず、秩序構造が存在する液体である。また、一成分系であるにもかかわらず、複数の相が共存することも指摘されている。これらの秩序構造の実体を、誘電率、熱容量、Raman 散乱、X 線散乱などの実験から明らかにする。(3) 水溶液中で形成される会合体中の界面活性剤分子の配向及び分子間距離を NMR で実測し、これら結果を、コンピュータシミュレーションを使って、会合体の構造と疎水性相互作用から解析する。</p> <p>キーワード：イオン液体・液晶・粗視化モデル・両親媒性分子</p>
研究室の構成員
柘宜田啓史（教授）・理学博士 村田義夫（併任講師）・理学博士 渡辺啓介（助教）・博士（理学） 井上 亨（名誉教授）・理学博士
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M2：1名，4年次生：9名
教員の担当科目
柘宜田啓史：(学部) 化学数学A、化学数学B、物理化学D、外書講読、化学I、基礎物理化学実験、構造物理化学実験、化学特別研究、卒業論文 (大学院) 化学講究II、化学特別実験II、構造物理化学特論III、修士論文 村田義夫：(学部) 基礎物理化学実験、構造物理化学実験、放射化学実験 渡辺啓介：(学部) 基礎物理化学実験、構造物理化学実験、基礎化学演習 井上 亨：(学部) 物理化学A、物理化学B、物理化学C、化学IV、基礎物理化学実験、基礎量子化学実験、構造物理化学実験、化学実験
教員の所属学会
柘宜田啓史：日本化学会，日本物理学会，日本熱測定学会，分子科学会，日本液晶学会 村田義夫：日本化学会 渡辺啓介：日本化学会，日本物理学会，日本熱測定学会，分子科学会，日本核磁気共鳴学会 井上 亨：日本化学会，日本油化学会

最近4年間の学術論文

- T. Inoue, T. Takasago, T. Ushifusa, Effect of hydrophilic additives on mesophase regions of aqueous nonionic surfactant mixture, *Fukuoka Univ. Sci. Rep.* 2013, 43(1), 39-50.
渡辺啓介, 黒木琢也, 祢宜田啓史, イオン液体($C_n\text{mim}$) BF_4 ($n = 4, 6$ and 8)の誘電的性質, 福岡大学理学集報, 2013, 43(1), 51-57.
- T. Inoue, K. Aburai, H. Sakai, M. Abe, Surface adsorption and vesicle formation of dilauroylphosphatidylcholine in room temperature ionic liquids, *J. Colloid Interface Sci.* 2012, 377, 262-268.
- K. Watanabe, M. Tadokoro, M. Oguni, Thermal characteristics of channel water confined in nanopores with crystalline pore-wall structure in $[\text{M}(\text{H}_2\text{bim})_3](\text{TMA})\cdot n\text{H}_2\text{O}$, *J. Phys. Chem. C.* 2012, 116, 11768-11775.
- T. Inoue, K. Kawashima, Y. Miyagawa, Aggregation behavior of nonionic surfactants in ionic liquid mixtures, *J. Colloid Interface Sci.* 2011, 363, 295-300.
- T. Inoue, K. Maema, Self-aggregation of nonionic surfactants in imidazolium-based ionic liquids with trifluoromethanesulfonate anion, *Colloid Polym. Sci.* 2011, 289, 1167-1175.
- T. Misono, H. Sakai, K. Sakai, M. Abe, T. Inoue, Surface adsorption and aggregate formation of nonionic surfactants in a room temperature ionic liquid, 1-butyl-3-methylimidazolium hexafluorophosphate (bmimPF_6), *J. Colloid Interface Sci.* 2011, 358, 527-533.
- T. Inoue, H. Yamakawa, Micelle formation of nonionic surfactants in a room temperature ionic liquid, 1-butyl-3-methylimidazolium tetrafluoroborate: Surfactant chain length dependence of the critical micelle concentration, *J. Colloid Interface Sci.* 2011, 356, 798-802.
- S. Zhang, J. Yuan, H. Ma, N. Li, L. Zheng, T. Inoue, Aqueous phase behavior of ionic liquid-related Gemini surfactant revealed by differential scanning calorimetry and polarized optical microscopy, *Colloid Polym. Sci.* 2011, 289, 213-218.
- M. Iwahashi, T. Nozaki, K. Kamaya, K. Taguchi, M. Fujita, Y. Kasahara, H. Minami, H. Matsuzawa, S. Nakamura, K. Harada, Y. Ozaki, T. Inoue, Phase behavior of binary mixtures composed of ethylene carbonate and various organic solvents, *J. Chem. Thermodyn.* 2011, 43, 80-87.
- B. Dong, Y. Gao, Y. Su, L. Zheng, J. Xu, T. Inoue, Self-aggregation behavior of fluorescent carbazole-tailed imidazolium ionic liquids in aqueous solutions, *J. Phys. Chem. B* 2010, 114, 340-348.
- T. Inoue, Y. Iwasaki, Cloud point phenomena of polyoxyethylene-type surfactants in ionic liquid mixtures of emimBF_4 and hmimBF_4 , *J. Colloid Interface Sci.* 2010, 348, 522-528.
- 井上 亨, イオン液体中で形成される界面活性剤の分子集合体, *オレオサイエンス*, 2010, 10, 179-184.
- 祢宜田啓史, 稲益良樹, デンプン/液晶分散系におけるER効果, *日本レオロジー学会誌*, 2010, 38, 87-92.
- 村田義夫: 水溶液中のオレイン酸カリウムのミセル構造解明への2次元NMR法 (NOESY) の応用, *福岡大学理学集報*, 2010, 40, 203~216.

最近4年間の学術著書
柘宜田啓史, 液晶のネマティックおよびスメクティックA相におけるずり誘起構造変化, 液晶, 2010, 14, 193-202.
最近4年間の学術国際会議での発表
K. Watanabe, T. Kuroki, A. Nimonji, K. Negita, Phase behavior and dielectric property of ionic liquid (C ₈ mim)BF ₄ , 33rd International Conference on Solution Chemistry, Kyoto, 2013年7月.
K. Watanabe, T. Kuroki, A. Nimonji, K. Negita, Observation of the dynamics in ionic liquids (C _n mim)BF ₄ (n = 4, 6, 8) by dielectric spectroscopy, 7th International Discussion Meeting on Relaxations in Complex Systems, 2013年7月.
K. Watanabe, Thermal behaviors of water confined within 2-D porous silica. 7th International Discussion Meeting on Relaxations in Complex Systems, 2013年7月.
T. Inoue, Aggregation behavior of nonionic surfactants in some room temperature ionic liquids, World Congress on Oleo Science, Sasebo, 2012年10月.
T. Inoue, K. Aburai, H. Sakai, M. Abe, Self-assembly and phase behavior of phospholipids in ionic liquids, 14th International Association of Colloid and Interface Scientists, Conference, Sendai, 2012年5月.
Y. Murata, M. Eto, T. Inoue, M. Suzuki, M. Temperature dependence of surface adsorption and CMC of sodium oleate in aqueous solution. 14th International Association of Colloid and Interface Scientists, Conference, Sendai, 2012年5月.
K. Watanabe, Y. Kanke, Calorimetric Observation of fusion and glass-transition phenomena of the water confined within porous silica: Effects of pore size and pore morphology, 14th International Association of Colloid and Interface Scientists, Conference, Sendai, 2012年5月.
T. Inoue, K. Maema, Self-aggregation of nonionic surfactants in imidazolium-based ionic liquids: Effect of alkyl chain length attached to imidazolium ring, The 3rd International Kyushu Colloid Colloquium, Fukuoka, 2010年9月.
K. Watanabe, M. Oguni, Thermal behaviors of the water confined within silica pores: The effects of the pore size and morphology, 2nd International Symposium on Structural Thermodynamics, Osaka, 2010年8月.
K. Negita, H. Nakashima, Metastable crystalline phases in ionic liquid (C ₄ mim)PF ₆ : thermal studies with a newly designed adiabatic calorimeter using cryogenerator, 21st IUPAC International Conference on Chemical Thermodynamics, Tsukuba, 2010年8月.
H. Kusakabe, K. Negita, Thermal and dielectric properties of ionic liquids (C _n mim)BF ₄ , 21st IUPAC International Conference on Chemical Thermodynamics, Tsukuba, 2010年8月.
K. Watanabe, M. Oguni, The size dependence of the fusion and the glass transition temperature of the water confined in 2-D silica pores, 21st IUPAC International Conference on Chemical Thermodynamics, Tsukuba, 2010年8月.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
<p>柘宜田啓史（分担者：仁部芳則，山田勇治・渡辺啓介）：領域別研究・「クラスターとその成長過程」・48.1万円（2013年度）・2013年度～2015年度</p> <p>柘宜田啓史（分担者：井上 亨，渡辺啓介）：領域別研究・「複雑流体」・100.3万円・2010年度～2012年度</p> <p>井上 亨：学部長預り金・「イオン液体中におけるリン脂質の界面吸着と会合挙動」・82万円・2011年</p>
最近4年間の学会等学術団体における役職など
<p>柘宜田啓史：日本液晶学会 講演会・討論会実行委員（2010年9月）</p> <p>井上 亨：日本油化学会関西支部幹事，日本油化学会欧文誌（J. Oleo Science）部門編集長（2007年4月～2011年3月）</p>
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
村田義夫・衛藤厚介・井上 亨・鈴木正夫、「オレイン酸ナトリウムと飽和脂肪酸塩の水溶液中の CMC と吸着挙動の差異」構造機能科学研究所研究交流会，けいはんなプラザ、2013年3月
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
<p>村田義夫，「世界一行きたい科学広場 in 宗像」SAFnet，において，実験展示 No.36「水と油 - 界面のサイエンス」を担当，2013年8月10日（宗像ユリックス）</p> <p>村田義男，「世界一行きたい科学広場 in 宗像」SAFnet，において，実験展示 No.45「水と油 - 界面のサイエンス」を担当，2012年8月11日（宗像ユリックス）</p> <p>村田義男，「世界一行きたい科学広場 in 宗像」SAFnet，において，実験展示 No.5「おもしろ化学 - 表面張力とはなんだろう」を担当，2010年10月30日（東海大学福岡キャンパス）</p>
その他特筆事項
該当なし

研究室名
構造化学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>構造化学研究室では、超音速ジェット法と呼ばれる方法により分子間力で結合した分子クラスターと呼ばれる極低温気体を作り出し、レーザー分子分光法の手法を使って研究する。主に、窒素原子を芳香環に含む複素芳香族分子や酸素原子を分子内にもつ分子を研究対象とし、これらの分子と溶媒としてよく用いられる水やメタノール等の分子が結合した水素結合クラスターについて、電子スペクトルや赤外吸収スペクトルを観測する。水素結合クラスターにおいては OH や NH 基などの水素原子を介して水素結合を行うため、これらの置換基の関与する振動はクラスターの構造に応じて、その振動数や強度が変化する。クラスターを形成した際のスペクトルの変化を理論計算と比較することにより、クラスター構造の決定が可能となる。これらの研究を通じて、水素結合を形成する際の構造や、水素結合が電子状態にどのような影響を及ぼすかを解明する。</p> <p>従来は、蛍光法を使用していたためクラスターの質量の帰属にあいまいさが残ったが、現在、質量選別が可能な装置を開発しており、今後、質量選別してクラスターのスペクトルを観測することによって、溶媒和の過程をより詳細に解明できるものと期待している。</p> <p>キーワード：電子スペクトル、レーザー、水素結合、クラスター、超音速ジェット、赤外吸収</p>
研究室の構成員
仁部芳則（准教授）・理学博士 山田勇治（助教）・博士（理学）
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
M1：1 名 複素芳香族分子溶媒和クラスターのレーザー分光研究 4 年次生：7 名 レーザー分光及び量子化学計算による分子クラスターの研究
教員の担当科目
仁部芳則：(学部) 量子化学A、量子化学B、量子化学C、基礎量子化学実験、構造物理化学実験、化学実験、化学特別研究、卒業論文、量子化学概論、自然界と物質の化学 (大学院) 化学講究Ⅱ、化学特別実験Ⅱ、構造物理化学特論Ⅰ、修士論文 山田勇治：(学部) 基礎量子化学実験、構造物理化学実験
教員の所属学会
仁部芳則：日本化学会、日本分光学会、分子科学会、日本コンピュータ化学会 山田勇治：日本化学会、分子科学会
最近 4 年間の学術論文
H. Sasaki, S. Daicho, Y. Yamada, Y. Nibu, Comparable Strength of OH-O Versus OH- π Hydrogen Bond in Hydrogen-bonded 2,3-Benzofuran Clusters with Water and Methanol, J. Phys. Chem. A, 2013, 117(15), 3183-3189 (査読有) Y. Yamada, H. Ohba, Y. Noboru, S. Daicho, Y. Nibu, Solvation Effect on the NH Stretching Vibrations of

<p>Solvated Aminopyrazine, 2-Aminopyridine, and 3-Aminopyridine Clusters, <i>J. Phys. Chem. A</i> 2012, 116(37), 9271-9278. (査読有)</p> <p>Y. Yamada, Y. Noboru, T. Sakaguchi, Y. Nibu, Conformation of 2,2,2-Trifluoroethanol and the Solvation Structure of Its 2-Fluoropyridine Clusters, <i>J. Phys. Chem. A</i> 2012, 116(11), 2845-2854. (査読有)</p> <p>Y. Yamada, Y. Noboru, T. Sakaguchi, Y. Nibu, Isomer-Selected Vibrational Spectra of Solvated 2-Fluoropyridine Clusters with Water and 2,2,2-Trifluoroethanol Mixture: Effect of Cluster Formation on Conformation and Solvation Structure, <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 2012, 42(2), 109-124. (査読無)</p> <p>Y. Yamada, H. Ishikawa, K. Fuke, Solvation Structure and Stability of $[(\text{CH}_3)_2\text{NH}]_m[\text{NH}_3]_n\text{-H}$ Hypervalent Clusters: Ionization potentials and Switching of Hydrogen-Atom Localized Site, <i>J. Phys. Chem. A</i> 2011, 115(30), 8380-8391. (査読有)</p> <p>Y. Nibu, A study on the Hydrogen-bonded Clusters of 2-Fluoropyridine based on IR-UV Double Resonance Spectroscopy. <i>Fukuoka Univ. Sci. Rep.</i> 2011, 41(2), 223-228. (査読無)</p> <p>H. Ishikawa, N. Yabuguchi, Y. Yamada, A. Fujihara, K. Fuke, Infrared Spectroscopy of Jet-Cooled Tautomeric Dimer of 7-Azaindole: A Model System for the Ground-State Double Proton Transfer Reaction, <i>J. Phys. Chem. A</i> 2010, 114(9), 3199-3206. (査読有)</p> <p>O. Cespedes, O. Inomoto, S. Kai, Y. Nibu, <i>et al.</i>, Radio Frequency Magnetic Field Effects on Molecular Dynamics and Iron Uptake in Cage Proteins, <i>Bioelectromagnetics</i> 2010, 31(4), 311-317. (査読有)</p>
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
<p>Y. Goto, Y. Yamada, Y. Nibu, Analysis for vibrational spectra of 2-aminopyridine-(H₂O)₂ and 2-aminopyridine-(H₂O)₃ clusters. 7th International Conference on Advanced Vibrational Spectroscopy, Kobe, 2013年8月</p> <p>Y. Yamada, Y. Goto, H. Ohba, Y. Nibu, Switching of hydrogen-bond network in hydrated aminopyrazine clusters. 7th International Conference on Advanced Vibrational Spectroscopy, Kobe, 2013年8月</p> <p>Y. Yamada, H. Ohba, Y. Fukuda, Y. Nibu, Switching of hydrogen-bond network and its effect on the excited state relaxation in hydrated aminopyrazine clusters. 29th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, Sendai, 2013年6月</p> <p>Y. Yamada, H. Fuji, T. Hashimura, Y. Nibu, Solvation structure and isomerization of hydrated Benzimidazole clusters. 28th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, Fukuoka, 2012年6月</p> <p>Y. Nibu, T. Hashimura, IR spectra of 2-fluoropyridine-methanol-water clusters. 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu, 2010年12月</p> <p>Y. Yamada, S. Daicho, H. Ohba, Y. Nibu, Cluster Structure and Contribution to Amino Group for Solvated Clusters of Heteroaromatic Molecules. Gordon Research Conference on Molecular and Ionic Clusters, Toukamachi, 2010年9月</p>

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
山田勇治：日本学術振興会・科研費・若手（B）「電子捕獲解離反応における水素原子付加ペプチドラジカルの反応中間体としての役割」・代表・340万円（直接経費）・2010年～2012年
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
仁部芳則：分子科学会運営委員（2010年9月～2012年8月）、 第28回化学反応討論会実行委員（2011年11月～2012年6月） 山田勇治：第28回化学反応討論会実行委員（2011年11月～2012年6月）
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
地球惑星気象学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>地球惑星気象学研究室では、様々な大気の構造の研究を、データ解析・観測・数値計算などを用いて行っている。</p> <p>1) 気象学データ解析</p> <p>高低気圧や前線などのなじみのある天気現象を、最新の衛星画像や長期の統計データを用いることによって、新しい視点から見直してみるようなアプローチが代表的なテーマである。大雨などの災害に関する現象、全球規模気候変動など気象・気候学に関する幅広いテーマを研究している。</p> <p>2) 惑星の観測と解析</p> <p>惑星大気の観測・解析を行う。惑星の大気は、地球大気と共通点もあるが違うところも多く、まだまだ未知の現象が存在する。それらの解明のため、観測画像の解析より大気の雲構造などについて調べる。木星の雲層構造の可視・近赤外・電波による解析や、金星の雲模様の検出などを行ってきた。</p> <p>キーワード：気象学、熱帯気象、総観気象、惑星大気</p>
研究室の構成員
<p>西 憲敬（准教授）・博士(理学)</p> <p>竹内 覚（助教）・博士(物理)</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4年次生：6名</p> <p>谷筋に沿った風の地上観測の統計</p> <p>静止衛星データを用いた積雲・積乱雲の解析</p> <p>カルマン渦列の数値シミュレーション</p> <p>木星大気の鉛直構造と熱放射モデル</p> <p>木星の可視・近赤外反射率 -大赤斑の解析-</p> <p>木星の近赤外反射率の周辺減光と極ヘイズ</p>
教員の担当科目
<p>西 憲敬：(学部) 物理学 I、数理情報、流体力学 I、地球流体力学、地球物理学実験 I、地球物理学実験IV、卒業論文</p> <p>(大学院) 地球流体力学特論 I、地球流体力学実験、修士論文</p> <p>竹内 覚：(学部) 地球物理学実験 I、地球物理学実験IV</p>
教員の所属学会
<p>西 憲敬：日本気象学会、American Meteorological Society, American Geophysical Union</p> <p>竹内 覚：日本気象学会、日本惑星科学会、日本天文学会</p>

最近4年間の学術論文

(査読有)

- Takeuchi, S., Sugiyama, K., Detectability of moist convective activity in Jovian troposphere by radio observation with high resolution, in submit to The proceedings the International Symposium on Planetary Science 2011 (ISPS2911), 2012.
- Suzuki, J., M. Shiotani, and N. Nishi, 2010: Lifetime and longitudinal variability of equatorial Kelvin waves around the tropical tropopause region, *J. Geophys. Res.*, **115**, D03103, doi:10.1029/2009JD012261.
- Nishi, N., E. Nishimoto, H. Hayashi, M. Shiotani, H. Takashima, and T. Tsuda, 2010: Quasi - stationary temperature structure in the upper troposphere over the tropical Indian Ocean inferred from radio occultation data, *J. Geophys. Res.*, **115**, D14112, doi:10.1029/2009JD012857.
- Hamada, A., and N. Nishi, 2010: Hamada, A., and N. Nishi, 2010: Development of a cloud-top height estimation method by geostationary satellite split-window measurements trained with CloudSat data. *J. Appl. Meteor. Climatol.*, **49**, 2035-2049.
- Luce, H., T. Mega, M. K. Yamamoto, M. Yamamoto, H. Hashiguchi, S. Fukao, N. Nishi, T. Tajiri, and M. Nakazato, 2010: Observations of Kelvin - Helmholtz instability at a cloud base with the middle and upper atmosphere (MU) and weather radars. *J. Geophys. Res.*, **115**, D19116, doi:10.1029/2009JD013519.
- Fujiwara, M., H. Vömel, F. Hasebe, M. Shiotani, S.-Y. Ogino, S. Iwasaki, N. Nishi, T. Shibata, K. Shimizu, E. Nishimoto, J. M. Valverde Canossa, H. B. Selkirk, and S. J. Oltmans, 2010: Seasonal to decadal variations of water vapor in the tropical lower stratosphere observed with balloon-borne cryogenic frost point hygrometers, *J. Geophys. Res.*, **115**, D18304, doi:10.1029/2010JD014179.
- Luce, H., N. Nishi, J-L Caccia, S. Fukao, M. K. Yamamoto, T. Mega, H. Hashiguchi, T. Tajiri, M. Nakazato, 2012: Kelvin-Helmholtz billows generated at a cirrus cloud base within a tropopause fold/upper-level frontal system. *Geophys. Res. Lett.*, **39**, L04807, doi:10.1029/2011GL050120.
- Mega, T., M. K. Yamamoto, M. Abo, Y. Shibata, H. Hashiguchi, N. Nishi, T. Shimomai, Y. Shibagaki, M. Yamamoto, M. D. Yamanaka, S. Fukao, and T. Manik, 2012: First simultaneous measurement of vertical air velocity, particle fall velocity, and hydrometeor sphericity in stratiform precipitation: Results from 47 MHz wind-profiling radar and 532 nm polarization lidar observations, *Radio Sci.*, **47**, RS3002, doi:10.1029/2011RS004823.
- Shibata, T. M. Hayashi, A. Naganuma, N. Hara, K. Hara, F. Hasebe, K. Shimizu, N. Komala, Y. Inai, H. Vömel, S. Hamdi, S. Iwasaki, M. Fujiwara, M. Shiotani, S.-Y. Ogino, and, N. Nishi, 2012: Cirrus cloud appearance in a volcanic aerosol layer around the tropical cold point tropopause over Biak, Indonesia, in January 2011, *J. Geophys. Res.*, **117**, D11209, doi:10.1029/2011JD017029.
- Hamada, A., N. Nishi, and H. Kida, 2013: Separation of zonally elongated large cloud disturbances over the western tropical Pacific. *J. Meteor. Soc. Japan*, **91**, 375-389, DOI:10.2151/jmsj.2013-309.
- Hasebe, F., Y. Inai, M. Shiotani, M. Fujiwara, H. Vömel, N. Nishi, S.-Y. Ogino, T. Shibata, S. Iwasaki, N. Komala, T. Peter, and S. J. Oltmans, 2013: Cold trap dehydration in the Tropical Tropopause Layer

characterised by SOWER chilled-mirror hygrometer network data in the Tropical Pacific. *Atmos. Chem. Phys.*, **13**, 4393-4411, doi:10.5194/acp-13-4393-2013, 2013.

(査読無)

Takahashi, Y., Nakajima, K., Takeuchi, S., Sugiyama, K., Sato, M., Fukuhara, T., Sato, S., Yair, Y., Aplin, K., Fischer, G., Jovian thundercloud observation with telescope and spacecraft, European Planetary Science Congress 2010, p.802, 2010.

最近4年間の学術著書

該当なし

最近4年間の学術国際会議での発表

Takeuchi, S., Sugiyama, K., Detectability of moist convective activity in Jovian troposphere by radio observation with high resolution, The International Symposium on Planetary Science 2011 (ISPS2911), Tohoku University, Sendai, March 9-11, 2011.

Nishi, N., J. Suzuki, A. Hamada, and M. Shiotani, 2010: Phase speed and period of equatorial Kelvin waves around the tropopause. American Geophysical Union (AGU) Fall meeting (San Francisco, USA, 17 Dec 2010).

Naito, Y., N. Nishi, E. Nishimoto, M. Suzuki, C. Mitsuda, C. Takahashi, K. Imai, N. Manago, H. Hayashi, T. Sano, and M. Shiotani, 2011: Global distribution of minor constituents observed by SMILES and its dynamical background. 91th American Meteorological Society Annual Meeting, (Seattle, USA, 25 Jan 2011).

Nishi N., A. Hamada, M. Ohigawa, and S. Shige, 2011: Cloud-top height dataset by geostationary satellite split window measurements trained with CloudSat data. Fifth Korea-Japan-China Joint Conference on Meteorology (Busan, Korea, 25 October, 2011)

Nishi N., A. Hamada, M. Ohigawa, and S. Shige, 2011: Analysis of tropical cloud systems using a new cloud-top height data by geostationary satellite splitwindow measurements trained with CloudSat data. American Geophysical Union (AGU) Fall meeting (San Francisco, USA, 6 Dec 2011).

Nishi, N., and A. Hamada, 2012: Temporal variation of the cloud top height over the tropical Pacific observed by geostationary satellites. American Geophysical Union (AGU) Fall meeting (San Francisco, USA, 5 Dec 2012).

Nishi, N., A. Hamada, and H. Hirose, 2013: Top height of the upper tropospheric cloud over the tropical Pacific observed by geostationary satellites. WCRP regional workshop on stratosphere-troposphere processes and their role in climate. (Kyoto, 2 Apr 2013).

Nishi, N., A. Hamada, H. Itoh, and M. Ohigawa, 2013: Separation of zonally elongated large-scale cloud disturbances over the western tropical Pacific, American Geophysical Union (AGU) Fall meeting (San Francisco, USA, 9 Dec 2013).

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
<p>科学研究費(基盤研究(C)) 2011年度～2013年度</p> <p>研究課題: 熱帯上部対流圏における大規模波動の伝播および増幅過程の解明</p> <p>研究予算: 3900千円</p> <p>研究代表者: 西 憲敬</p>
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
竹内 覚: 宇宙理学委員会 班員
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
竹内 覚: 「数値シミュレーション」、地球物理学実験Ⅰ・Ⅱテキスト 第4章
最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
竹内 覚: 平成24年度自然観測&天体観測合宿(2012年8月16-18日、やまなみ荘)

研究室名
地球流体力学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>地球圏科学科地球流体力学研究室では、地球流体のふるまいを、モデル実験、観測、数値シミュレーションなどの手段で明らかにしようとしている。地球流体力学は、地球に限らず木星や火星などの惑星や恒星の流動部分（地球の場合は大気、海洋、マントル、外核）の運動を、自転と重力の影響を受けて行う運動にとらえ、物理現象として統一的・体系的に理解することを目指す分野である。最近の研究概要は以下のとおりである。</p> <p>(1) 鉛直環状水槽内の熱対流：鉛直に置いた環状水槽の下部を加熱、上部を冷却したときに生じる周回流の周期的な反転現象について、その温度場と速度場を詳細に調査した。</p> <p>(2) 超音波風速計の製作：地表付近の3次元的な大気の運動を調べるために、超音波風速計の製作を開始した。現在は改良をおこなっている段階である。</p> <p>(3) 準2年周期振動（QBO）のモデル実験：赤道成層圏で観測されるQBOのモデル実験を行ない、流れの反転現象を再現した。また、この現象を引き起こしている内部重力波をモアレ法で可視化することにより、その伝播の様子を明らかにした。</p> <p>キーワード：地球流体・自転・重力・対流・QBO</p>
研究室の構成員
<p>玉木克美（准教授）・博士（理学）</p> <p>乙部直人（助教）・理学修士</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4年次生：5名</p> <p>回転水槽を用いた傾圧不安定波の実験</p> <p>環状水槽の対流の温度分布と全体像の可視化</p> <p>超音波風速計の製作</p> <p>ソルトフィンガーとベナール対流</p> <p>傾圧不安定波のドリフト周期測定実験</p>
教員の担当科目
<p>玉木克美：(学部) 力学Ⅰ、力学A、力学Ⅱ、流体力学Ⅱ、物理学実験、物理科学入門、物理の世界、地球物理学実験Ⅰ、地球物理学実験Ⅲ、地球物理学実験Ⅳ、卒業論文(大学院) 地球流体力学講究、地球流体力学実験、地球流体力学特論Ⅰ</p> <p>乙部直人：(学部) 地球物理学実験Ⅰ、地球物理学実験Ⅱ、地球物理学実験Ⅲ、地球物理学実験Ⅳ</p>
教員の所属学会
<p>玉木克美：日本気象学会</p> <p>乙部直人：日本気象学会、日本流体力学会</p>

最近4年間の学術論文
(査読有) Ishiwatari, M., Toyoda, E., Morikawa, Y., Takehiro, S., Sasaki, Y., Nishizawa, S., Odaka, M., Otohe, N., Takahashi, Y. O., Nakajima, K., Horinouchi, T., Shiotani, M., Hayashi, Y.-Y., Gtool development group, 2012: "Gtool5": a Fortran90 library of input/output interfaces for self-descriptive multi-dimensional numerical data. <i>Geosci. Model Dev.</i> , 5 , 449-455.
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
Takeshi Imamura, Yasuko Kasai, Takeshi Kuroda, Yasumasa Kasaba, Naohito Otohe, George Hashimoto, Kazunori Ogohara. Mars Atmosphere Exploration Plan in MELOS. AOGS 2011, Shingapole. 2011年8月 Naohito Otohe, George L. Hashimoto, Kazunori Ogohara et al. Development of Martian meteorological Instruments. JpGU Meeting 2011, Makuhari. 2011年5月
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
大気モデル・観測統合研究チーム (分担者: 高島久洋・西憲敬)
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
大気中の物質拡散入門 原子力発電所からの放射性物質拡散を念頭に, 林 祥介, 石川裕彦, 乙部直 人, 酒井 敏, 塩谷雅人, 竹見哲也, 坪木和久, 山田道夫, 余田成男, 2011年9月
最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
大気微粒子動態学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>当研究室では、大気浮遊微粒子（エアロゾル）の地球規模の動態とその仕組み、環境変動に対する役割について研究を進めている。最近は、①極域、熱帯の上部対流圏下部成層圏領域のエアロゾル動態と物質循環、②東アジア域の黄砂、汚染物質等の長距離輸送と都市活動の複合作用（汚染）をテーマとしている。これらの研究の推進のために、③無人航空機を用いた新たな観測プラットフォームの開発、④エアロゾルと雲相互作用の解明のための電子顕微鏡下氷晶形成実験、などを行っている。①については、南極観測事業に参加し、南極地域におけるエアロゾルの定常的観測の維持、南極域への中緯度からの大陸起源物質の輸送について、また、熱帯対流圏成層圏のエアロゾル動態については、名古屋大学、北海道大学などと共同で、エアロゾル不揮発性分の鉛直分布を明らかにするなどの取り組みをしている。②については、多くの研究機関の要望を受け入れ、福岡大学におけるエアロゾルと微量機体成分の組成と放射への影響に関する総合的な観測を組織し、福岡の大気の状態が大陸からの越境物質と福岡の都市排出物質の複合的な状態にあることが明らかになりつつある。③については、九州大学との協力により、南極昭和基地における高度 10km からの無人観測航空機自律帰還を成功させ、④に関しては、数 10%の過飽和度までエアロゾルが氷晶核として活性化しない、形成される氷晶の形の特徴などを明らかにしてきている。</p> <p>キーワード：エアロゾル・全球規模環境変動・エアロゾル－雲相互作用・全球規模観測・飛行体観測</p>
研究室の構成員
<p>林 政彦（教授）・博士（理学） 原圭一郎（助教）・博士（理学）</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>卒論生4名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福岡におけるPM2.5の季節変化 ・成層圏観測用小型気圧トリガーの開発 ～センサノイズの影響とその低減～ ・福岡における非海塩性硫酸イオンと二酸化硫黄の濃度変化とその要因 ・福岡における地上付近のエアロゾル数濃度の季節変化
教員の担当科目
<p>林 政彦：(学部) 地球圏科学序論、自然地理学、大気物理学、物理学Ⅲ、物理学実験、地球物理学実験Ⅱ・Ⅲ、気水圏物理化学、卒業研究 (大学院) 地球環境物理学特論Ⅱ、地球環境物理学実験、地球環境物理学講究、地球環境物理学特別研究</p> <p>原圭一郎：(学部) 地球物理学実験Ⅱ・Ⅲ</p>

教員の所属学会

林 政彦：気象学会、エアロゾル学会、地球電磁気惑星圏学会、American Geophysical Union、日本地球惑星科学連合、大気化学研究会

原圭一郎：気象学会、エアロゾル学会、日本分析化学会、American Geophysical Union、日本地球惑星科学連合、大気化学研究会

最近4年間の学術論文

原著論文（査読有）

査読者 2名以上

Higashino S., M. Hayashi, S. Niagasaki, S. Umemoto, and M. Nishimura, A Balloon-Assisted Gliding UAV for Aerosol Observation in Antarctica, *Aerospace Technology Japan* (Accepted), 2014.

佐藤圭, 高見昭憲, 兼保直樹, 清水厚, 小川佳美, 吉野彩子, 中山寛康, 前田恵, 原圭一郎, 林政彦, 伊禮聡, 三好猛雄, 畠山史郎, 2009～2012 年北部九州の都市と離島におけるベンゾ[a]ピレン濃度、*大気環境学会誌*, 49, 138-148, 2014.

鈴木亮太, 吉野彩子, 兼保直樹, 高見昭憲, 林政彦, 原圭一郎, 渡邊泉, 畠山史郎, 長崎県福江島・福岡県福岡市におけるエアロゾル金属成分の特徴と発生源推定、*大気環境学会誌*, 49, 15-25, 2014.

Higashino, S., Funaki, M., Hirasawa, N., Hayashi, M., and Nagasaki, S., Development and Operational Experiences of UAVs for Scientific Research in Antarctica, in *Autonomous Control Systems and Vehicles – International Series on Intelligent Systems, Control and Automation: Science and Engineering*, Vol.65, pp. 159-173, Springer, 2013.

高見昭憲, 伊礼聡, 紀本岳志, 竹村俊彦, 林政彦, 原圭一郎, 三好猛雄, 上田佳代, 佐藤圭, 兼保直樹, 吉野彩子, 畠山史郎, 2012 年夏季, 福岡市と大阪市における高濃度硫酸イオン観測事例の解析, *エアロゾル研究*, 28, 281-286, 2013.

K. Hara, K. Osada, and T. Yamanouchi, Tethered balloon-borne aerosol measurements: Seasonal and vertical variations of aerosol constituents over Syowa Station, Antarctica, *Atmos. Chem. Phys.* 13, 9119-9139, doi:10.5194/acp-13-9119-2013, 2013.

K.Sato, A. Takami, S. Irei, T. Miyoshi, Y. Ogawa, A. Yoshino, Y. Iwasaki, H. Nakayama, T. Ishida, R. Suzuki, M. Maeda, M. Tanaka, S. Hatakeyama, K. Hara, M. Hayashi, N. Kaneyasu, Transported and Local Organic Aerosols over Fukuoka, Japan, *Aerosol Air Qual. Res.*, 13, 1263-1272, 2013.

江崎雄治, 平沢尚彦, 林政彦, 山内恭 (2013), 1997 年春季に南極昭和基地において発言した地上オゾン消失現象, *天気*, 60, 91-96.

Atkinson D. E., K. Sassen, M. Hayashi, C. F. Cahill, G. Shaw, D. Harrigan, and H. Fuelberg, (2013), Aerosol properties over Interior Alaska from lidar, DRUM Impactor sampler, and OPC-sonde measurements and their meteorological context during ARCTAS-A, April 2008, *Atmos. Chem. Phys.*, 13, 1293-1310, doi:10.5194/acp-13-1293-2013.

Higashino, S., M. Funaki, N. Hirasawa, M. Hayashi, and S. Nagasaki, Development and Operational Experiences of UAVs for Scientific Research in Antarctica , *Autonomous Control Systems and Vehicles - Intelligent Unmanned Systems-*, Springer Monograph, 2012.

- Hara, K., K. Osada, M. Yabuki, and T. Yamanouchi (2012), Seasonal variation of fractionated sea-salt particles on the Antarctic coast, *Geophys. Res. Lett.*, 39, L18801, doi:10.1029/2012GL052761.
- Shibata T., M. Hayashi, A. Naganuma, N. Hara, K. Hara, F. Hasebe, K. Shimizu, N. Komala, Y. Inai, H. Vömel, S. Hamdi, S. Iwasaki, M. Fujiwara, M. Shiotani, S.-Y. Ogino and N. Nishi, Cirrus cloud appearance in a volcanic aerosol layer around the tropical cold point tropopause over Biak, Indonesia in January 2011, *J. Geophys. Res.*, 117, D11209, doi:10.1029/2011JD017029.
- 小川 佳美, 兼保 直樹, 佐藤 圭, 高見 昭憲, 林 政彦, 原 圭一郎, 畠山 史郎 (2012), 長距離輸送された多環芳香族炭化水素と n-アルカン – 2009 年春季および秋季の沖縄辺戸岬, 福江島, 福岡での測定から, 大気環境学会誌, 47(1), 18-25, 2012.
- Fujita, S., Holmlund, P., Andersson, I., Brown, I., Enomoto, H., Fujii, Y., Fujita, K., Fukui, K., Furukawa, T., Hansson, M., Hara K., Hoshina, Y., Igarashi, M., Iizuka, Y., Imura, S., Ingvander, S., Karlin, T., Motoyama, H., Nakazawa, F., Oerter, H., Sjöberg, L., Sugiyama, S., Surdyk, S., Ström, J., Uemura, R. and Wilhelms, F., Spatial and temporal variability of snow accumulation in Dronning Maud Land, East Antarctica, including two deep ice coring sites at Dome Fuji and EPICA DML, *The Cryosphere*, 5, 1057-1081, 2011 (doi:10.5194/tc-5-1057-2011).
- Shiraishi, K., M. Hayashi, M. Fujiwara, T. Shibata, M. Watanabe, Y. Iwasaka, R. Neuber and T. Yamanouchi, (2011), Comparable analysis of measurement of stratospheric aerosol by lidar and aerosol sonde above Ny-Aalesund in the winter of 1995, *Polar Science*, doi:10.1016/j.polar.2011.08.003, 5, 399-410.
- Hara K., K. Osada, C. Nishita-Hara, M. Yabuki, M. Hayashi, T. Yamanouchi, M. Wada, and M. Shiobara (2011), Seasonal features of ultra-fine particle volatility in coastal Antarctic troposphere, *Atmos. Chem. Phys.*, 11, 9803-9812, doi:10.5194/acp-11-9803-2011.
- Hara K., K. Osada, C. Nishita-Hara, and T. Yamanouchi (2011), Seasonal variations and vertical features of aerosol particles in the Antarctic troposphere, *Atmos. Chem. Phys.*, 11, 5471–5484, doi:10.5194/acp-11-5471-2011.
- Osada K., S. Ura, M. Kagawa, M. Mikami, T. Y. Tanaka, S. Matoba, K. Aoki, M. Shinoda, Y. Kurosaki, M. Hayashi, A. Shimizu, and M. Uematsu (2011), Temporal and Spatial Variations of Wet Deposition Flux of Mineral Dust in Japan, *SOLA*, 7, 049-052, doi:10.2151/sola.2011-013
- 兼保直樹, 高見昭憲, 佐藤 圭, 畠山史郎, 林 政彦, 原圭一郎, 河本和明, 山本重一 (2011), 九州北部の離島および大都市部における PM_{2.5} 濃度の通年での挙動, 大気環境学会誌, 46, 111-118.
- 兼保直樹, 高見昭憲, 佐藤 圭, 畠山史郎, 林 政彦, 原圭一郎, Chang Lim-Seok, Ahn Joon-Young (2010), 九州北部における春季の高濃度 PM_{2.5} と長距離輸送, 大気環境学会誌, 45, 227-234.
- 浦 幸帆, 長田 和雄, 香川 雅子, 三上 正男, 的場 澄人, 青木 一真, 篠田 雅人, 黒崎 泰典, 林 政彦, 清水 厚, 植松 光夫 (2011), 非水溶性大気沈着物中の Fe 含有量を用いた鉱物質ダスト量の推定, エアロゾル研究, 26, 234-241.
- Hara K., K. Osada, M. Yabuki, G. Hashida, T. Yamanouchi, M. Hayashi, M. Shiobara, C. Nishita-Hara, and M. Wada (2010), Haze episodes at Syowa Station, coastal Antarctica: Where did they come from?, *J. Geophys. Res.*, 115, D14205, doi:10.1029/2009JD012582.

査読者 1名

- Hara K., K. Osada, and T. Yamanouchi (2013), Tethered balloon-borne aerosol measurements: Seasonal and vertical variations of aerosol constituents over Syowa Station, Antarctica, *Atmos. Chem. Phys. Discuss.*, 13, 8153–8211, doi:10.5194/acpd-13-8153-2013.
- Fujita, S., Holmlund, P., Andersson, I., Brown, I., Enomoto, H., Fujii, Y., Fujita, K., Fukui, K., Furukawa, T., Hansson, M., Hara, K., Hoshina, Y., Igarashi, M., Iizuka, Y., Imura, S., Ingvander, S., Karlin, T., Motoyama, H., Nakazawa, F., Oerter, H., Sjöberg, L. E., Sugiyama, S., Surdyk, S., Ström, J., Uemura, R., and Wilhelms, F. (2011): Spatial and temporal variability of snow

- accumulation in Dronning Maud Land, East Antarctica, including two deep ice coring sites at Dome Fuji and EPICA DML, *The Cryosphere Discuss.*, 5, 2061-2114, doi:10.5194/tcd-5-2061-2011.
- Hara K., K. Osada, C. Nishita-Hara, M. Yabuki, M. Hayashi, T. Yamanouchi, M. Wada, and M. Shiobara (2011), Seasonal features of ultra-fine particle volatility in coastal Antarctic troposphere, *Atmos. Chem. Phys. Discuss.*, 11, 14777-14799, doi:10.5194/acpd-11-14777-2011.
- Yamagata, S., K. Hara, A. Matsuki (2010), Scattering coefficient, size distribution and the transport process of tropospheric aerosol in the arctic region observed with an aircraft during ASTAR2000/20004 and AAMP2002 campaign in spring, *Antarctic Record*, 54, 868-881 (in Japanese with English abstract).
- Osada, K., K. Hara, M. Yabuki, M. Adachi (2010), Electroconductivity of fallen and drifting snow at Syowa station, Antarctica, *Antarctic Record*, 54, 697-703 (in Japanese with English abstract).
- Osada, K., C. Nishita, K. Hara, M. Yabuki, M. Shiobara, M. Wada, T. Yamanouchi, M. Hayashi (2010), Seasonal variation of size distribution of submicrometer aerosol particles at Syowa station, Antarctica, *Antarctic Record*, 54, 530-540 (in Japanese with English abstract)
- Osada, K., K. Hara, M. Yabuki, C. Nishita, H. Kobayashi, K. Miura, S. Ueda, M. Hayashi, G. Hashida, M. Shiobara, M. Wada, T. Yamanouchi (2010), Observations of atmospheric aerosol particles over the Antarctic Ocean by ocean research vessels, *Antarctic Record*, 54, 449-464 (in Japanese with English abstract)
- Osada, K., M. Hayashi, K. Hara, M. Yabuki, M. Wada, M. Shiobara, T. Yamanouchi, K. Fujita (2010), Seasonal variation of coarse aerosol particle concentration at Syowa station, Antarctica, *Antarctic Record*, 54, 487-497 (in Japanese with English abstract)
- Kobayashi H., K. Hara, M. Shiobara, T. Yamanouchi, K. Osada and S. Ohta (2010), Seasonal variation of carbonaceous and metal compositions of atmospheric aerosols at Syowa Station, Antarctica in 2001, *Antarctic Record*, 54, 554-561 (in Japanese with English abstract)
- Hayashi, M., K. Osada, K. Hara, M. Yabuki, H. Kobayashi, S. Ihara, M. Wada, T. Yamanouchi, H. Hashida and M. Shiobara (2010), Monitoring of aerosol concentration at Syowa Station, *Antarctic Record*, 54, 474-486 (in Japanese with English abstract)
- Hara, K., N. Hirasawa, T. Yamanouchi, M. Wada, A. Herber, and ANTSYO-II members (2010), Spatial distributions and mixing states of aerosol particles in the summer Antarctic troposphere, *Antarctic Record*, 54, 704-730 (in Japanese with English abstract)
- Hara, K., A. Matsuki, S. Yamagata, Y. Iwasaka, T. Yamanouchi, and A. Herber (2010), Aerosols in Arctic troposphere in spring and summer: spatial features of aerosol constituents and their mixing states, *Antarctic Record*, 54, 845-867 (in Japanese with English abstract)
- Hara, K., K. Osada, M. Yabuki, M. Hayashi, T. Yamanouchi, M. Shiobara, M. Wada (2010), Black carbon at the coastal Antarctic station (Syowa): Seasonal variation and Transport processes, *Antarctic Record*, 54, 562-592 (in Japanese with English abstract)
- Hara, K., K. Osada, C. Nishita-Hara, M. Yabuki, M. Hayashi, T. Yamanouchi, M. Wada, and M. Shiobara (2010), Seasonal variation and volatility of ultra-fine particles in coastal Antarctic troposphere, *Antarctic Record*, 54, 541-553 (in Japanese with English abstract)
- Hara, K., K. Osada, M. Hayashi, M. Yabuki, G. Hashida, T. Yamanouchi (2010), Chemistry of sea-salt particles and sea-salt fractionation in Antarctic region, *Antarctic Record*, 54, 668-696 (in Japanese with English abstract)
- Hara, K., K. Osada, M. Yabuki, G. Hashida, T. Yamanouchi, M. Hayashi, M. Shiobara, C. Nishita-Hara, M. Wada (2010), Haze episodes at Syowa station, Antarctica, *Antarctic Record*, 54, 593-622 (in Japanese with English abstract)
- Hara, K., K. Osada, C. Nishita-Hara, T. Yamanouchi, M. Hayashi (2010), Seasonal variations and vertical features of aerosol particles in Antarctic troposphere, Antarctica, *Antarctic Record*, 54, 731-759 (in Japanese with English abstract).

Hayashi M., Y. Kamiya, K. Ozuka, K. Yamashita, H. Higashi, M. Ashida, K. Okabe and T. Shigeta (2010), Mineral particles internally mixed with sea salt over Karatsu Bay, southwest of Japan, observed with a small unmanned aerial vehicle, 福岡大学理学集報, 40(2), 245-253.

林政彦, 松本易典, 平沢尚彦, 山内恭, 岩坂泰信 (2010), 昭和基地とドームふじ基地におけるエアロゾル粒径分布の通年観測, 南極資料, 498-529.

木津暢彦, 林政彦, 山内恭, 岩坂泰信, 渡辺征春 (2010), エアロゾルゾンデによる成層圏・対流圏エアロゾル濃度の季節・経年変化の観測, 南極資料, 760-778.

白石浩一, 柴田隆, 林政彦, 藤原玄夫 (2010), ニーオルスンにおける成層圏エアロゾルと北極PSCのゾンデ, ライダー観測, 南極資料, 54, 899-916.

白石浩一, 林政彦, 藤原玄夫, 柴田隆, 渡辺征春, 岩坂泰信, 山内恭, R. Neuber (2010), エアロゾルゾンデによる極成層圏雲観測 -エアロゾルゾンデ内でのPSC粒子の変質の可能性について, 福岡大学理学集報, 40(1), 71-78.

総説 (査読あり)

原圭一郎, 極域対流圏の光学吸収性炭素質粒子の季節変化、輸送過程、発生源 (2010), エアロゾル研究, 25(3), 226-233

解説 (査読なし)

林政彦 (2012), 海塩粒子の潮解・-70°Cの微小氷晶形成, 空気清浄, 49(6), p57.

原圭一郎 (2012), 極域大気エアロゾルの混合状態、空気清浄, 50, p. 55.

最近4年間の学術著書

原圭一郎

地球と宇宙の化学辞典(「極域の大気化学」page. 207)、日本地球化学会編、朝倉書店、2012年9月

最近4年間の学術国際会議での発表

Hayashi, M., Observation of fine ice crystals on ice nucleus at 70 °C using ESEM, International symposium on aerosol studies explored by electron microscopy, Tsukuba, 2012. 2.

Hara, K., Vertical distributions of aerosol constituents and their mixing states in Antarctic troposphere during the summer, International symposium on aerosol studies explored by electron microscopy, Tsukuba, 2012. 2.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

科学研究費補助金

挑戦的萌芽研究「北極季節海氷上の海塩粒子：海氷からの粒子発生とフロストフラワー」(代表者：原圭一郎, 分担者：的場澄人), 3,100千円, 2013年度～2015年度

挑戦的萌芽研究「気球分離式小型無人航空機による成層圏エアロゾル上部境界領域動態の直接観測」(代表者：林政彦, 分担者：白石浩一, 原圭一郎), 3,100千円, 2011年度～2013年度

基盤研究(B)(海外学術調査)「南極大陸辺縁部における夏季エアロゾル相の上下混合過程の飛行体観測」(代表：林政彦, 分担者：白石浩一、原圭一郎) 13,700千円, 2012年度～2014年度

基盤研究(B)「南極ヘイズ：その出現状況と鉛直分布、低中緯度からの物質輸送」(代表者：原圭一郎, 分担者：林政彦) 総額：7930千円(直接経費+間接経費)・2010年度～2013年度

研究助成寄付金

寄付者：小林製薬㈱，（受け入れ：林政彦） 990 千円，2012 年度
最近 4 年間の代表者としての学内資金導入実績
<p>推奨研究：無人小型航空機によるエアロゾル観測の南極対流圏への展開（代表者：林政彦，分担者：原圭一郎，高島久洋），1,050 千円，2011 年度～2013 年度</p> <p>大学院高度化推進特別経費：自由対流圏エアロゾルの氷晶核機能に関する研究（代表者：林政彦，分担者：白石浩一、原圭一郎），6,000 千円，2010 年度</p>
最近 4 年間の学会等学術団体における役職など
<p>林 政彦：2012 年 エアロゾル科学技術研究討論会 実行委員（エアロゾル学会） 2012 年 大気化学討論会 実行委員長（大気化学研究会） 2008 年 8 月～2012 年 8 月 日本エアロゾル学会 理事 2008 年 8 月～2012 年 8 月 エアロゾル研究（日本エアロゾル学会学会誌）編集委員 2007 年 5 月～2011 年 4 月 情報システム研究機構国立極地研究所南極観測委員会気水圏分科会委員 2011 年 5 月～2012 年 4 月 情報システム研究機構国立極地研究所南極観測委員会気水圏専門委員会委員</p> <p>原圭一郎：2012 年 エアロゾル科学技術研究討論会 実行委員（エアロゾル学会） 2012 年 大気化学討論会 実行委員（大気化学研究会）</p>
最近 4 年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近 4 年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近 4 年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
大気環境科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>当研究室では、大気中のエアロゾル・微量ガス成分・雲を対象として遠隔的な観測（リモートセンシング観測）をおこない、都市大気現象から、黄砂・エアロゾル・大気ガス成分の半球規模の輸送現象、熱帯・極域（対流圏-成層圏）を含めた地球規模の物質循環まで、主に物理（輸送）過程に着目した研究をおこなっている。また、より広域的な（地域規模・半球規模）現象をとらえるために人工衛星観測データを用いた解析もあわせておこなっている。最近は ①福岡（都市域）におけるエアロゾル・ガス成分の動態/大気環境に関する研究、②ラマンライダーを用いた大気エアロゾル・雲の光学特性に関する研究、③ライダー・MAX-DOAS 法等のリモートセンシング観測手法の高度化に関する研究、④極域成層圏エアロゾル/極成層圏雲の動態に関する研究、⑤熱帯における成層圏-対流圏物質交換過程に関する研究、⑤船舶を用いた海洋上の大気組成の動態に関する研究をおこなっている。福岡における大気環境モニタリングの観点からエアロゾル・二酸化窒素の連続立体観測を行っている。</p> <p>キーワード： リモートセンシング観測，物質循環，極域，熱帯，大気環境，黄砂</p>
研究室の構成員
<p>高島久洋（講師）・博士（理学） 白石浩一（助教）・博士（理学）</p>
2013 年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4 年次生：7 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ライダーで観測された冬季のニーオルスン上空における対流圏エアロゾルの光学特性 冬季熱帯東太平洋で観測された対流圏界面近傍の水平 3000 km 規模の巻雲に関する研究 福岡市における海陸風出現頻度の季節・経年変動 ライダー観測による福岡上空におけるエアロゾルの時空間変動 ラマンライダーで観測された福岡上空のエアロゾル層の光学特性 福岡都市圏におけるホルムアルデヒドの時空間変動 ～MAX-DOAS 法による分光観測～ 海洋上における二酸化窒素・エアロゾルの時空間変動 ～MAX-DOAS 法による分光観測～
教員の担当科目
<p>高島久洋：(学部) 地球物理学、地球物理学概論、物理学実験、物理学Ⅱ（振動と波）、地球物理学実験Ⅱ・Ⅲ、大気環境物理学A、大気環境物理学B、卒業論文 (大学院) 地球環境物理学特論Ⅰ</p> <p>白石浩一：(学部) 地球物理学実験Ⅱ・Ⅲ</p>

教員の所属学会

高島久洋：日本気象学会，日本地球惑星科学連合，American Geophysical Union (AGU)，大気環境学会

白石浩一：日本気象学会，日本エアロゾル学会，American Geophysical Union (AGU)

最近4年間の学術論文

学術論文

1. Kanaya, Y., H. Irie, H. Takashima, H. Iwabuchi, H. Akimoto, K. Sudo, M. Gu, J. Chong, Y. J. Kim, H. Lee, A. Li, F. Si, J. Xu, P.-H. Xie, W.-Q. Liu, A. Dzhola, O. Postlyakov, V. Ivanov, E. Grechko, S. Terpigova, and M. Panchenko, Long-term MAX-DOAS network observations of NO₂ in Russia and Asia (MADRAS) during 2007–2012: instrumentation, elucidation of climatology, and comparisons with OMI satellite observations and global model simulations, *Atmos. Chem. Phys. Discuss.*, 14, 2883-2934, 2014. (査読有)
2. Pinaridi, G., M. Van Roozendaal, N. Abuhassan, C. Adams, A. Cede, K. Clémer, C. Fayt, U. Frieß, M. Gil, J. Herman, C. Hermans, F. Hendrick, H. Irie, A. Merlaud, M. Navarro Comas, E. Peters, A. J. M. Piters, O. Puentedura, A. Richter, A. Schönhardt, R. Shaiganfar, E. Spinei, K. Strong, H. Takashima, M. Vrekoussis, T. Wagner, F. Wittrock, and S. Yilmaz, MAX-DOAS formaldehyde slant column measurements during CINDI: intercomparison and analysis improvement, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 6/1, 167-185, 2013. (査読有)
3. 白石浩一，藤原玄夫，高島久洋，鳥越剛，ライダーで観測された福岡における成層圏エアロゾルの長期変動，*福岡大学理学集報*，43/2，153-157，2013.
4. 白石浩一，林政彦，橋本あやか，内山明博，山崎 明宏，ライダー比の推定とエアロゾルの同定 —2011年4-11月に福岡でライダーとスカイラジオメータにより観測された下部対流圏エアロゾルの光学特性—，*福岡大学理学集報*，43/2，159-165，2013.
5. Pan, X.L., Y. Kanaya, Z. F. Wang, F. Taketani, H. Tanimoto, H. Irie, H. Takashima, and S. Inomata Emission ratio of carbonaceous aerosols observed near crop residual burning sources in a rural area of the Yangtze River Delta Region, China, *Journal of Geophysical Research (JGR) –Atmospheres*, 117, 2012. (査読有)
6. Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, and F. Syamsudin, NO₂ observations over the western Pacific and Indian Ocean by MAX-DOAS on Kaiyo, a Japanese research vessel, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 5, 2351-2360, 2012. (査読有)
7. Kanaya, Y., F. Taketani, Y. Komazaki, X. Liu, Y. Kondo, L. K. Sahu, H. Irie and H. Takashima Comparison of Black Carbon Mass Concentrations Observed by Multi-Angle Absorption Photometer (MAAP) and Continuous Soot-Monitoring System (COSMOS) on Fukue Island and in Tokyo, Japan, *Aerosol Science and Technology*, 47/1, 2012. (査読有)
8. Piters, A. J. M., K. F. Boersma, M. Kroon, J. C. Hains, M. Van Roozendaal, F. Wittrock, N. Abuhassan, C. Adams, M. Akrami, M. A. F. Allaart, A. Apituley, J. B. Bergwerff, A. J. C. Berkhout, D. Brunner, A. Cede, J. Chong, K. Clémer, C. Fayt, U. Frieß, L. F. L. Gast, M. Gil-Ojeda, F.

- Goutail, R. Graves, A. Griesfeller, K. Großmann, G. Hemerijckx, F. Hendrick, B. Henzing, J. Herman, C. Hermans, M. Hoexum, G. R. van der Hoff, H. Irie, P. V. Johnston, Y. Kanaya, Y. J. Kim, H. Klein Baltink, K. Kreher, G. de Leeuw, R. Leigh, A. Merlaud, M. M. Moerman, P. S. Monks, G. H. Mount, M. Navarro-Comas, H. Oetjen, A. Pazmino, M. Perez-Camacho, E. Peters, A. du Piesanie, G. Pinardi, O. Puentedura, A. Richter, H. K. Roscoe, A. Schönhardt, B. Schwarzenbach, R. Shaiganfar, W. Sluis, E. Spinei, A. P. Stolk, K. Strong, D. P. J. Swart, H. Takashima, T. Vlemmix, M. Vrekoussis, T. Wagner, C. Whyte, K. M. Wilson, M. Yela, S. Yilmaz, P. Zieger, and Y. Zhou The Cabauw Intercomparison campaign for Nitrogen Dioxide Measuring Instruments (CINDI): design, execution, and early results, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 5/457-485, 2012. (査読有)
9. Irie, H, H. Takashima, Y. Kanaya, K. F. Boersma, L. Gast, F. Wittrock, D. Brunner, Y. Zhou, and M. Van Roozendaal, Eight-component retrievals from ground-based MAX-DOAS observations, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 4/1027-1044, 2011. (査読有)
 10. Takashima, H, H. Irie, Y Kanaya, H. Akimoto Enhanced NO₂ at Okinawa Island, Japan caused by rapid air mass transport from China as observed by MAX-DOAS, *Atmospheric Environment*, 45/15,2593-2597, 2011. (査読有)
 11. Shiraishi, K., M.Hayashi, M.Fujiwara, T.Shibata, M.Watanabe, Y. Iwasaka, R.Neuber, T.Yananouchi, Comparative analysis of measurements of stratospheric aerosol by lidar and aerosol sonde above Ny-Ålesund in the winter of 1995, *Polar Science*, 5/4, 399-410, 2011. (査読有)
 12. Roscoe, H. K., Van Roozendaal, C. Fayt, A. du Piesanie, N. Abuhassan, C. Adams, M. Akrami, A. Cede, J. Chong, K. Clémer, U. Friess, M. Gil Ojeda, F. Goutail, R. Graves, A. Griesfeller, K. Grossmann, G. Hemerijckx, F. Hendrick, J. Herman, C. Hermans, H. Irie, P. V. Johnston, Y. Kanaya, K. Kreher, R. Leigh, A. Merlaud, G. H. Mount, M. Navarro, H. Oetjen, A. Pazmino, M. Perez-Camacho, E. Peters, G. Pinardi, O. Puentedura, A. Richter, A. Schönhardt, R. Shaiganfar, E. Spinei, K. Strong, H. Takashima, T. Vlemmix, M. Vrekoussis, T. Wagner, F. Wittrock, M. Yela, S. Yilmaz, F. Boersma, J. Hains, M. Kroon, and A. P. Peters, Intercomparison of slant column measurements of NO₂ and O₄ by MAX-DOAS and zenith-sky UV and visible spectrometers, *Atmospheric Measurement Techniques (AMT)*, 3/1629-1646, 2010. (査読有)
 13. Takashima, H., N. Eguchi, and W. Read A short-duration cooling event around the tropical tropopause and its effect on water vapor, *Geophysical Research Letters (GRL)*, 37/L20804, 2010. (査読有)
 14. Nishi, N., E. Nishimoto, H. Hayashi, M. Shiotani, H. Takaashima, T. Tsuda, Quasi-Stationary Temperature Structure in the Upper Troposphere over the Tropical Indian Ocean Inferred from Radio Occultation Data *Journal of Geophysical Research (JGR) – Atmospheres*, 115/D14112, 2010. (査読有)
 15. 金谷有剛, 竹谷文一, 入江仁士, 駒崎雄一, 高島久洋, 鶴野伊津志九州福江島における通年 PM_{2.5} 質量濃度測定値の大気環境短期基準超過, *大気環境学会誌*, 45/6, 289-292, 2010年. (査読有)

16. 白石浩一, 柴田隆, 林政彦, 藤原玄夫, 岩坂泰信, Roland Neuber, 南極資料, 54, 899-916, 2010.
(査読有)
17. 白石浩一, 林政彦, 藤原玄夫, 柴田隆, 渡辺征春, 岩坂泰信, 山之内恭, Roland Neuber, エアロゾルゾンデによる極成層圏雲観測 -エアロゾルゾンデ内での PSC 粒子の変質の可能性について, 福岡大学理学集報, 40/1, 71-78, 2010.

総説 (査読有)

1. 白石浩一, 極成層圏雲の物理化学と環境変動, エアロゾル研究, 25/3, 219-225, 2010.

最近4年間の学術著書

1. 図説 地球環境の事典 (吉崎正憲・野田彰ほか=編集、項目「成層圏-対流圏交換」分担), 朝倉書店, 2013年10月.

最近4年間の学術国際会議での発表

(主著のみ記載)

Takashima, H., Y. Kanaya, Vertical and horizontal NO₂ transport in urban area associated with land-sea breeze as observed by ground-based MAX-DOAS, American Geophysical Union Fall Meeting 2013, San Francisco, USA, 2013.

Takashima, H., Y. Kanaya, Inhomogeneity of NO₂ over Fukuoka, an urban site in Japan observed by MAX - DOAS, International DOAS Workshop 2013, Colorado, USA, 2013.

Takashima, H. Irie, Y. Kanaya, Ship-borne MAX-DOAS measurements over the western Pacific and Indian Ocean on a Japanese research vessel "Mirai", AGU fall meeting 2012, San Francisco, USA, 2012.

Takashima, H., H. Irie, and Y. Kanaya, NO₂ variations over the remote ocean observed by MAX-DOAS on a Japanese research vessel, AGU fall meeting 2010, San Francisco, USA, 2011.

Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, Aerosol and gas observations by MAX-DOAS on a Japanese research vessel, 5th DOAS workshop, Mainz, Germany, 2011.

Takashima, H., H. Irie, and Y. Kanaya, Inhomogeneity of NO₂ over Yokosuka, an urban site in Japan observed by MAX-DOAS, AGU fall meeting 2010, San Francisco, USA, 2010.

Takashima, H., E. Eguchi, W. Read, A short-duration cooling event around the tropical tropopause and its effect on water vapor observed by Aura MLS, 2010 A-Train Symposium, New Orleans, LA, USA, 2010.

Takashima, H., H. Irie, and Y. Kanaya, Inhomogeneity of NO₂ over Yokosuka, an urban site in Japan observed by ground-based MAX-DOAS ~validation from Aura OMI, 2010 A-Train symposium, New Orleans, LA, USA, 2010.

Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, NO₂ variations over the ocean observed by MAX-DOAS, IGAC, Halifax, Canada, 2010.

<p>Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, Aerosol and gas profile observations by MAX-DOAS on a research vessel, 1st workshop on the MAX-DOAS network observation over East Asia and Russia, Yokohama, Japan, 2010.</p> <p>Takashima, H., H. Irie, Y. Kanaya, H. Akimoto, Atmospheric aerosol and gas variations at Okinawa Island (Hedo) in Japan observed by MAX-DOAS, 1st workshop on the MAX-DOAS network observation over East Asia and Russia, Yokohama, Japan, 2010.</p> <p>Shiraishi, K., H. Nakajima, I. Murata, Y. Tomikawa⁴, K. Saeki, M. Ohya, Solid PSCs detected by Aerosol sonde and lidar above NY-ÅLESUND in the winter of 2009/10, Second International Symposium on the Arctic Research, Tokyo, 2010.</p>
<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p> <p>高島久洋: 科学研究費補助金・若手研究 B「海洋上における半球規模の大気組成の変動要因の解明～衛星観測データの検証」 代表・290万円 (直接経費) 2011年度～2012年度. 白石浩一: 科学研究費補助金・基盤研究 C「北極成層圏エアロゾルの揮発特性と輸送過程に関する研究」 代表・270万円 (直接経費) 2013年度～2015年度.</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p> <p>高島久洋: 2013年度 理学研究科高度化推進事業 (タイプ I -研究科分) 大気微量成分観測のための装置開発と地球規模の物質循環過程に関する研究 高島久洋 (代表): 2013年～2015年、推奨研究プロジェクト、大気エアロゾル観測のための観測装置・解析アルゴリズム高度化</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>高島久洋: 2012年 第18回大気化学討論会, 実行委員 2008年～ オゾン研究連絡会 世話人 白石浩一: 2012年 第18回大気化学討論会 実行委員 2006年2月～現在 レーザレーダ研究会運営委員</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の一般 (非学術) 集会での発表論文</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p> <p>該当なし</p>

研究室名
火山・有機地質学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>火山・有機地質学研究室では、岩石・地層・堆積物に保存された火山砕屑物や炭素質物質、花粉化石などを対象として、1. 火山噴火史の高精度解析、2. 地殻表層における炭素循環システムの構築、3. アジア地域の植生および古環境復元に関する研究をそれぞれ進めている。研究室としてこれらの研究を総合することを目指している。その基礎となるのは精密な野外調査であり、国内は九州から北海道までの火山、洞窟および炭田、海外では米国アリューシャン列島のアダック島、韓国の鬱陵島、中国と北朝鮮の国境に位置する白頭山、フィリピンのピナツボ火山、タール火山、イロシンカルデラなどをフィールドとしている。さらにインドネシアのバリ島や南アメリカのペルーなどでも調査を開始し、対象地域は拡大しつつある。2012年4月に設置された国際火山噴火史情報研究所とも連携して、噴火史研究を防災・減災へ応用することを目的として、調査・研究結果をデータベース化し、火山災害に関する解析を効率的に進める研究にも取り組んでいる。</p> <p>キーワード：火山噴火史・地質年代・石炭地質・洞窟・花粉分析</p>
研究室の構成員
<p>奥野 充（教授）・博士（学術） 鮎澤 潤（助教）・博士（理学） 藤木利之（ポストドクター研究員）・博士（理学）（受入期間：2012年6月～2014年3月）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4年次生：7名</p> <p>熱ルミネッセンス年代測定法による九重火山の扇ヶ鼻、岩井川岳、沓掛山の年代測定 九重火山、三俣山溶岩の熱ルミネッセンス法による年代測定 泉水山における熱ルミネッセンス年代測定と松の台岩層なだれ堆積物の給源推定 熱ルミネッセンス年代測定法による九重火山の星生山の年代測定 千仏洞洞口のトゥファ堆積に寄与する地形・非地形要因の検討 洞窟河川水に含まれる懸濁物質に基づく千仏洞の水理・水文学的検討 平尾台千仏鍾乳洞でみられる火山性堆積物を対象とする熱ルミネッセンス年代適用の試み</p>
教員の担当科目
<p>奥野 充：(学部) 地球物質科学Ⅰ、地球物質科学Ⅱ、地球物質化学、自然科学入門、自然科学と人間、地球物質科学実験Ⅱ、地球科学野外演習、卒業論文、基礎防災学、科学・技術と社会</p> <p>(大学院) 地球変動科学実験、地球変動科学特論Ⅳ、地球変動科学特別研究</p> <p>鮎澤 潤：(学部) 地球科学実験、地球科学野外演習、科学・技術と社会</p>

教員の所属学会

奥野 充： 日本地質学会， 日本地理学会， 日本火山学会， 日本第四紀学会， 東京地学協会， 日本地形学連合， 日本文化財科学会， 日本自然災害学会

鮎澤 潤： 日本地質学会， 日本鉱物科学会， 日本洞窟学会， Mineralogical Society of America

藤木利之： 日本花粉学会， 日本植生史学会， 日本生態学会， 日本第四紀学会， 東京地学協会

最近4年間の学術論文

(すべて査読有)

植原 徹・奥野 充・山下 透・マリア ハナ ミラブエノ・鳥井真之・小林哲夫 (2014) フィリピン共和国，イロシン火砕流堆積物とそれに伴う降下火山灰の岩石記載的特徴. 地学雑誌，**123**, 143–152. doi: 10.5026/jgeography.123.143

Kobayashi, T., Mirabueno, M.H.T., Bornas, M.A.V., Torii, M., Eduardo P. Laguerta, E.P., Daag, A.S., Bariso, E.B., Nakamura, T. and Okuno, M. (2014) Eruptive sequence and characteristics of the Irosin ignimbrite, Southern Luzon, Philippines. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 123–132. doi: 10.5026/jgeography.123.123

Kitagawa, J., Fujiki, T., Yamada, K., Hoshino, Y., Yonenobu, H. and Yasuda, Y. (2013) Human impact on the Kiso-hinoki cypress woodland in Japan: a history of exploitation and regeneration. *Vegetation History and Archaeobotany*, DOI 10.1007/s00334-013-0423-1

椎原美紀・堂満華子・鳥井真之・長橋良隆・奥野 充 (2013) 日本海とその周辺に分布する鬱陵島起源の完新世テフラ. 第四紀研究，**52**, 225–236.

Fujiki, T., Okuno, M., Nakamura, T., Nagaoka, S., Mori, Y., Ueda, K., Konomatsu, M. and Aizawa, J. (2013) AMS Radiocarbon dating and pollen analysis of core KS0412-3 from Kashibaru Marsh in northern Kyushu, southwest Japan. *Radiocarbon*, **55** (2–3), 1693–1701.

Kawamoto, T., Yoshikawa, M., Kumagai, Y., Mirabueno, M.H.T., Okuno, M. and Kobayashi, T. (2013) Mantle wedge infiltrated with saline fluids from dehydration and decarbonation of subducting slab. *Proceedings of National Academy of Science*, **110**, 9663–9668. doi/10.1073/pnas.1302040110

Okuno, M., Nakamura, T., Geshi, N., Kimura, K., Saito-Kokubu, Y. and Kobayashi, T. (2013) AMS radiocarbon dating of wood trunks in the pumiceous deposits of the Kikai-Akahoya eruption in Yakushima Island, SW Japan. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research, Section B*, **294**, 602–605. doi:10.1016/j.nimb.2012.05.015

鮎澤 潤・石田麻里・藤川将之・近藤祐子 (2013) コウモリの活動度指標としての洞窟産リン酸塩鉱物. 日本洞窟学会誌，**37**, 71–79.

吉村和久・片桐千亜紀・藤田祐樹・山崎真治・土肥直美・鮎澤 潤・栗崎弘輔 (2013) 固結堆積物から見た化石骨の堆積環境. 日本洞窟学会誌，**37**, 55–64.

Okuno, M., Torii, M., Naruo, H., Saito-Kokubu, Y. and Kobayashi, T. (2012) AMS radiocarbon dates and major element composition of glass shards of late Pleistocene tephra on Tanegashima Island, southern Japan. *Radiocarbon*, **54** (3–4), 351–358.

奥野 充 (2012) テフラ編年学の多様な役割：フィリピン，中国，韓国，日本，アリューシャン

- 列島の研究例. 第四紀研究, **51**, 275–284.
- Mao, L.M., Batten, D.J., Fujiki, T., Li Z., Dai, L. and Weng, C.Y. (2012) Key to mangrove pollen and spores of southern China: an aid to palynological interpretation of Quaternary deposits in the South China Sea. *Review of Palaeobotany and Palynology*, **176–177**, 41-67.
- Lim, J.S. and Fujiki, T. (2011) Vegetation and climate variability in East Asia driven by low-latitude oceanic forcing during the middle to late Holocene. *Quaternary Science Reviews*, **30**, 2487-2497.
- Nakazawa, F., Miyake, T., Fujita, K., Uetake, J., Fujiki, T., Aizen, V. and Nakawo, M. (2011) Establishing the Timing of Chemical Deposition Events on Belukha Glacier, Altai Mountains, Russia, Using Pollen Analysis. *Arctic, Antarctic, and Alpine Research*, **43(1)**, 66-72.
- 奥野 充 (2011) 地質調査による高分解能なテフラ層序学・年代学の構築. 地質学雑誌, **117**, 654–662. doi:10.5575/geosoc.2011.0003
- Shiihara, M., Torii, M., Okuno, M., Domitsu, H., Nakamura, T., Kim, K-H., Moriwaki, H., Oda, M. (2011) Revised stratigraphy of the Holocene tephra on Ulleung Island, South Korea, and possible correlatives for the U-Oki tephra. *Quaternary International*, **246** (1–2), 222–232. doi:10.1016/j.quaint.2011.08.030
- Nagaoka, S. and Okuno, M. (2011) Tephrochronology and eruptive history of Kirishima volcano in southern Japan. *Quaternary International*, **246** (1–2), 260–269. doi:10.1016/j.quaint.2011.06.007
- Okuno, M., Torii, M., Yamada, K., Shinozuka, Y., Danhara, T., Gotanda, K., Yonenobu, H. and Yasuda, Y. (2011) Widespread tephra in sediments from Lake Ichi-no-Megata in northern Japan: their description, correlation and significance. *Quaternary International*, **246** (1–2), 270–277. doi:10.1016/j.quaint.2011.08.015
- Mirabueno, M.H.T., Okuno, M., Torii, M., Danhara, T., Laguerta, E.P., Newhall, C.G. and Kobayashi, T. (2011) The Irosin co-ignimbrite ash-fall deposit: a widespread tephra marker in the Bicol arc, south Luzon, Philippines. *Quaternary International*, **246** (1–2), 289–295. doi:10.1016/j.quaint.2011.08.043
- Yoshimura, K., Urata, K., Kurisaki, K., Aizawa, J. et al. (2010) Submerged speleothem as a record of the huge volcanic eruptions of Aso Caldera, southwest Japan, and its hydrogeochemical circumstances. *J. Speleol. Soc. Japan*, **35**, 33-45.
- 笠間友博・山下浩之・萬年一剛・奥野 充・中村俊夫 (2010) 複数回の噴火で形成された箱根二子山溶岩ドーム. 地質学雑誌, **116**, 229–232.
- Nakamura, T., Sagawa, S., Yamada, T., Kanehara, M., Tsuchimoto, N., Minami, M., Omori, T., Okuno, M., Ohta, T. (2010) Radiocarbon dating of charred human bone remains preserved in urns excavated from medieval Buddhist cemetery in Japan. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research, Section B*, **268**, 985–989. doi:10.1016/j.nimb.2009.10.080
- Yamada, K., Kamite, M., Saito-Kato, M., Okuno, M., Shinozuka, Y. and Yasuda, Y. (2010) Late Holocene monsoonal-climate change inferred from Lakes Ni-no-Megata and San-no-Megata, northeastern Japan. *Quaternary International*, **220** (1), 122-132. doi:10.1016/j.quaint.2009.09.006
- 上手真基・山田和芳・齋藤めぐみ・奥野 充・安田喜憲 (2010) 男鹿半島, 二ノ目潟・三ノ目潟湖底堆積物の年縞構造と白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)の降灰年代. 地質学雑誌, **116**, 349–359.

Yatsuzuka, S., Okuno, M., Nakamura, T., Kimura, K., Setoma, Y., Miyamoto, T., Kim, K-H., Moriwaki, H., Nagase, T., Jin, X., Jin, B-L., Takahashi, T. and Taniguchi, H. (2010) ^{14}C wiggle-matching of the B-Tm tephra, Baitoushan volcano, China / North Korea. *Radiocarbon*, **52** (3), 933–940.

Okuno, M., Shiihara, M., Torii, M., Nakamura, T., Kim, K-H., Domitsu, H., Moriwaki, H. and Oda, M. (2010) AMS radiocarbon dating of the Holocene tephra layers in the Ulleung Island, South Korea. *Radiocarbon*, **52** (3), 1465–1470.

最近4年間の学術著書

藤木利之 (2014) 古環境変動と人類の対応. 宮本真二・野中健一編『自然と人間の環境史』, ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第1巻, 海青社, 大津, 153-175.

藤木利之 (2013) ワンダーズーム「花粉の正体—電子顕微鏡で花粉を見る—」. 池田 博 監修『ポプラディア大図鑑 植物図鑑』, ポプラ社, 東京, 56-57

Yasuda, Y., Nasu, H., Fujiki, T., Yamada, K., Kitagawa, J., Gotanda, K., Toyama, S., Okuno, M. and Mori, Y. (2013) Climate Deterioration and Angkor's Demise. In: Yasuda, Y. (ed): *Water Civilization: From Yangtze to Khmer Civilizations*, Springer Japan, 331-362.

Fujiki, T. (2013) Vegetation Change in the Area of Angkor Thom Based on Pollen Analysis of Moat Deposits. In: Yasuda, Y. (ed): *Water Civilization: From Yangtze to Khmer Civilizations*, Springer Japan, 363-381.

Li, X., Yasuda, Y., Fujiki, T., Okamura, M., Matsuoka, H., Yamada, K. and Flenlry, J. (2013) Reconstruction of an 8,000-year Environmental History on Pollen Record from Lake Buyan, Central Bali. In: Yasuda, Y. (ed): *Water Civilization: From Yangtze to Khmer Civilizations*, Springer Japan, 407-426.

藤木利之 (2012) 花粉. 谷村好洋・辻 彰洋編『微化石—顕微鏡で見るプランクトン化石の世界』, 国立科学博物館叢書 13, 東海大学出版会, 東京, 106-124.

Gualtieri, L., Sarata, B., Okuno, M. and West, D. (2012) Did Holocene Paleoenvironmental Factors Affect Ancient Occupation and Settlement in the Aleutian Islands? In West, D., Hatfield, V., Wilmerding, E., Lefevre, C. and Gualtieri, L. eds., *The People Before: The Geology, Paleoecology and Archaeology of Adak Island, Alaska*, Archaeopress, Oxford, UK, 47–57.

Okuno, M., Wada, K., Nakamura, T., Gualtieri, L., Sarata, B., West, D. and Torii, M. (2012年3月) Holocene Tephra Layers on the Northern Half of Adak Island In the West-central Aleutian Islands, Alaska. In West, D., Hatfield, V., Wilmerding, E., Lefevre, C. and Gualtieri, L. eds., *The People Before: The Geology, Paleoecology and Archaeology of Adak Island, Alaska*, Archaeopress, Oxford, UK, 59–74

中村俊夫・奥野 充・小田寛貴・南 雅代 (2011) 中国・北朝鮮国境白頭山の10世紀巨大噴火：放射性炭素法による高精度年代測定法. 中條利一郎・酒井英男・石田 肇 編『考古学を科学する』, 臨川書店, 京都, 26–46.

奥野 充・森 勇一・藤木利之・杉山真二・此松昌彦・上田恭子・長岡信治・中村俊夫・鮎澤 潤 (2011) 中世の人間活動と土砂災害：北部九州・檜原湿原のポーリングコア分析. 中條利

一郎・酒井英男・石田 肇 編「考古学を科学する」, 臨川書店, 京都, 79-98.
 三好教夫・藤木利之・木村裕子 (2011) 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 852pp.
 中川光弘・児玉 浩・奥野 充 (2010) 8.2.8 ニセコ火山群. 日本地方地質誌 1, 北海道地方,
 日本地質学会 (編), 朝倉書店, 東京, 301-302.

最近4年間の学術国際会議での発表

Fujiki T., Okuno M., Kawai K. and Moriwaki H. (2012年8月) Vegetation change in Rarotonga, Cook Islands. The 13th International Palynological Congress. Tokyo, Japan.
Okuno M., Fujiki T., Nakamura T., Mori Y., Ueda K., Aizawa J., Konomatsu M. and Nagaoka S. (2012年7月) Radiocarbon chronology of paleoenvironmental changes of the Kashibaru marsh, Northern Kyushu, SW Japan. The 21st International Radiocarbon Conference. Paris, France.
Aizawa J. (2011年8月) Pumpelly's geological survey of Hokkaido in 1862 and Pumpelly (1867) *GEOLOGIC RESEARCHES IN CHINA, MONGOLIA, AND JAPAN, DURING THE YEARS 1862 TO 1865*. International Commission on the History of the Geological Sciences. Toyohashi, Japan.

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

奥野 充：
 日本学術振興会・科研費・基盤研究B「フィリピン共和国における広域テフラ・ネットワークの構築に関する日比共同研究」・1310万円 (直接経費)・2012年度～2014年度・(学内分担者：田口幸洋)
 日本学術振興会・科研費・基盤研究C「テフラと放射性炭素年代によるアリユート遺跡及び火山噴火史に関する日米共同研究」・400万円 (直接経費)・2011年度～2013年度
 日本学術振興会・科研費・基盤研究B「フィリピン共和国, イロシンカルデラの火山・地熱活動史に関する日比共同研究」・1120万円 (直接経費)・2009年度～2011年度・(学内分担者：田口幸洋)
 (株)西日本技術開発・研究助成寄附金・「火山噴火史に関する研究助成」・900万円 (直接経費)・2011年度～2014年度
 (株)いであ・研究助成寄附金・「古環境変遷史に関する研究助成」・27万円 (直接経費)・2011年度
 鮎澤 潤：釧路コールマイン (株)・「堆積岩の炭化水素鉱床ポテンシャル評価の基礎的研究」・70万円 (直接経費)・2013年度～2014年度
 藤木利之：東京地学協会・平成25年度研究・調査助成金「火山噴火の植生への影響とその回復過程の高分解能復元」・50万円 (直接経費)・2013年度

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績

奥野 充：
 産学官連携研究機関 (国際火山噴火史情報研究所)・2012～2016年度・(分担者：田口幸洋, 鮎澤 潤ほか)
 推奨研究プロジェクト (地質情報のデータベース化の基礎研究)・201万円・2012年度～2014年度・(分担者：上野勝美)

最近4年間の学会等学術団体における役職など
<p>鮎澤 潤：長崎県地学会・理事・～2011年、唐津市教育委員会・北波多村史執筆委員・～2011年、日本地球化学会・2012年会実行委員・2012年</p> <p>藤木利之：日本花粉学会・行事（2003年～）、同・編集委員（2009年～）</p>
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
<p>著書</p> <p>奥野 充（2013）「火山噴火史情報学」を確立する．七隈の杜．福岡大学，9，81-87.</p> <p>奥野 充（2012）国際火山噴火史情報研究所の活動内容．福岡大学研究推進部ニュース&レポート「Research」，17（4），36-38.</p> <p>藤木利之（2012）パリ国立自然史博物館を見学して．福岡大学研究推進部ニュース&レポート「Research」，17（3），8-9.</p> <p>日本鉱物科学会ワーキンググループ（鮎澤 潤）（2012）「鉱物-地球と宇宙の宝物」A1判ほかポスター．日本鉱物科学会（文部科学省採択事業）</p> <p>鮎澤 潤（2011）北波多の堆積岩，北波多の自然，唐津市教育委員会，247-253.</p>
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし

研究室名
地球物質研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>地球圏科学科地球物質研究室では、火成活動に伴う地球深部のマントルから地表までの物質移動や特定成分の濃集の過程を対象とした研究を行っている。</p> <p>一つは火山活動の変遷に伴う熱水系の発達と消長に関するもので、主に水を媒体とした循環によって形成される地熱資源や鉱物資源を、地質学的、鉱物学的、地球化学的立場から検討し、資源が形成される環境条件の解明を行っている。過去の浅熱水性金鉱床は削剥や採掘により現在の地熱系の地下に相当する部分を観察できるので、これらの比較研究は相互の資源形成の過程の解明に重要であるので、主に九州の地熱帯や金鉱床を対象とした研究を行っている。</p> <p>また、大陸地殻を特徴づける珪長質深成岩の生成・定置・崩壊過程を、岩石学的、同位体年代学的見地から研究を行っている。研究対象地域は北部九州地域のみならず、タイ、南極も含まれる。さらに、内陸型地震発生のメカニズムの解明のため、断層帯周辺の珪長質深成岩に発達する断裂系の構造解析も行っている。地質体の崩壊過程（風化・削剥）に伴う研究では元素移動過程およびその人間活動との関係を解析するため、川砂を用いた福岡県における地球化学図の作成と地圏環境評価を行っている。</p> <p>キーワード：地熱・金鉱床・水循環・深成岩岩石学・構造解析・地球化学図</p>
研究室の構成員
<p>田口幸洋（教授）・理学博士</p> <p>柚原雅樹（助教）・博士（理学）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>4年次生：7名</p> <p>鹿児島県菱刈鉱山から産出するトラスコタイトの産状と成因</p> <p>熊本県杖立温泉の地球化学的特徴と生成機構</p> <p>熊本県黒川温泉の化学組成変化と生成機構に関する研究</p> <p>大分県由布市湯布院町湯平地区における熱水変質作用</p> <p>日向峠-小笠木峠断層周辺の早良花崗岩中に発達する断裂系の形成史</p> <p>北部九州東部に分布する真崎花崗岩中の苦鉄質岩の産状と化学組成</p> <p>志賀島南西部、南ノ浦岬周辺に分布する苦鉄質岩の産状と岩石記載</p>
教員の担当科目
<p>田口幸洋：(学部) 地球圏科学入門、新しい地球観、地球科学Ⅰ、地球物質循環学Ⅰ、地球物質循環学Ⅱ、地球科学実験、地球物質科学実験Ⅰ、地球物質科学実験Ⅱ、地球科学野外演習、地球科学野外実習、卒業論文</p> <p>(大学院) 地球変動科学特論Ⅰ、地球変動科学実験、地球変動科学講究</p> <p>柚原雅樹：(学部) 地球科学実験、地学実験、地球物質科学実験Ⅰ、地球物質科学実験Ⅱ、地球科学野外演習、地球科学野外実習、卒業論文</p>

教員の所属学会

田口幸洋：資源地質学会，日本地熱学会，日本火山学会， Society of Economic Geologists, Geothermal Resources Council

柚原雅樹：日本地質学会，日本鉱物科学会，日本地球化学会，地学団体研究会

最近4年間の学術論文

Owada, M., Kamei, A., Horie, K., Shimura, T., Yuhara, M., Tsukada, K., Osanai, Y. and Baba, S. (2013) Magmatic history and evolution of continental lithosphere of the Sør Rondane Mountains, eastern Dronning Maud Land, East Antarctica. *Precambrian Res.*, 234, 47-62 (査読有) .

Kamei, A., Horie, K., Owada, M., Yuhara, M., Nakano, N., Osanai, Y., Adachi, T., Hara, Y., Terao, M., Teuchi, S., Shimura, T., Tsukada, K., Hokada, T., Iwata, C., Shiraishi, K., Ishizuka, H. and Takahashi, Y. (2013) Late Proterozoic juvenile arc metatonalite and adakitic intrusions in the Sør Rondane Mountains, eastern Dronning Maud Land, Antarctica. *Precambrian Res.*, 234, 63-84 (査読有) .

Yuhara, M., Ohira, H. and Kawano, Y. (2013) Fission track geochronology of Itoshima Granodiorite and Sawara Granite in the Gokayama area, northern Kyushu: timing of Miocene to Pliocene hydrothermal activity in Cretaceous granitoids. *Earth Science (Chikyu Kagaku)*, 64/5, 161-168.

柚原雅樹・亀井淳志・岡野 修・川野良信・加々美寛雄 (2013) 北部九州東部に分布する添田花崗閃緑岩のRb-Sr全岩-黒雲母アイソクロン年代. 岩石鉱物科学, 42, 185-189 (査読有) .

庄田慎矢・梅崎恵司・池珉周・長井謙治・柚原雅樹 (2013) 청동기시대 마제석축 제작공정의 복원 -서산 신송리유적 출토유물에 대한 분석을 중심으로-. 韓國上古史學報, 79, 145-162 (査読有) .

柚原雅樹・眞崎求一 (2013) 添田花崗閃緑岩中の同時性貫入岩の産状と化学組成. 地球科学, 67/1, 21-36 (査読有) .

Tiepolo, M., Langone, A., Morishita, T. and Yuhara, M. (2012) On the recycling of amphibole-rich ultramafic intrusive rocks in the arc crust: evidence from Shikanoshima Island (Kyushu Japan). *Jour. Petrol.*, 53/6, 1255-1285 (査読有) .

柚原雅樹・加々美寛雄 (2012) 三河地方領家変成帯に分布する苦鉄質岩類の同位体年代. 福岡大学理学集報, 42, 37-55.

Kita, I., Asakawa, Y., Yuri, T., Yasui, M., Shimoike, Y., Yamamoto, M., Hasegawa, H., Taguchi, S. and Sumino, H. (2012) Rifting of Kyushu, Japan, based on fault-controlled concurrent eruption of oceanic island basalt-type and island arc-type lavas. *Bull. Volcanol.*, Vol.74, 1121-1139 (査読有) .

Riogilang, H., Itoi, R. and Taguchi, S (2012) Origin of Hot Spring water in the Kotamobagu geothermal field, Northern Sulawesi, Indonesia. *Jour. Geotherm., Res. Soc. Japan*, 34, 151-159 (査読有) .

Shimura, T., Akai, J., Lazic, B., Armbruster, T., Shimizu, M., Kamei, A., Tsukada, K., Owada, M. and Yuhara, M. (2012) Magnesiohobomite-2N4S, A new polysome from the central Sør Rondane Mountains, East Antarctica. *American Mineralogist*, 97, 268-280 (査読有) .

Yuhara, M., Sano, S. and Takahashi, Y. (2011) Trace and rare earth elements compositions of granitic

- rocks in Awaji Island, Southwest Japan Arc. *Bull. Geological Surv. Japan*, 62, 463-469 (査読有) .
- Wu, F. Y., Yang, Y. H., Li, Q. L., Mitchell, R. H., Dawson, J. B., Brandl, G. and Yuhara, M. (2011) *In situ* determination of U-Pb ages and Sr-Nd-Hf isotopic constrains on the petrogenesis of the Phalaborwa carbonatite Complex, South Africa. *Lithos*, 127, 309-322 (査読有) .
- 柚原雅樹 (2011) 伊那領家変成帯, 高遠花崗岩の微量元素ならびに希土類元素組成. 福岡大学理学集報, 41, 207-215.
- Shimura, T., Akai, J., Lazic, B., Armbruster, T., Shimizu, M., Kamei, A., Tsukada, K., Owada, M. and Yuhara, M. (2011) Magnesiohohobomite-2N4S, IMA 2010-084. *CNMNC Newsletter* No. 9, page 2537; *Mineralogical Magazine*, 75, 2535-2540 (査読有) .
- 柚原雅樹・伊藤吉宏・吉本 紋・宮崎桂輔・眞崎求一 (2011) 福岡県東部, 彦山川～城井川流域の地球化学図. 福岡大学理学集報, 41, 51-76.
- 柚原雅樹 (2011) 伊那領家変成帯に産する変成岩の微量元素ならびに希土類元素組成. 福岡大学理学集報, 41, 39-50.
- 田口幸洋 (2010) 火山活動と地形の違いによる地熱徴候: “地獄”を知る. 福岡大学研究部論集. C: 理工学編, 2, 61-75.
- 柚原雅樹 (2010) 福岡県内の地球化学図. 福岡大学研究部論集C: 理工学編, 2, 91-107.
- 柚原雅樹 (2010) 花崗閃緑岩中の同時性苦鉄質岩の産状: 志賀島花崗閃緑岩と添田花崗閃緑岩の例. 福岡大学研究部論集C: 理工学編, 2, 77-90.
- Owada, M., Shimura, T., Yuhara, M., Kamei, A. and Tsukada, K. (2010) Post-kinematic lamprophyre from the southwestern part of Sør Rondane Mountains, East Antarctica: Constraint on the Pan-African suture event. *Jour. Mineral. Petrol. Sci.*, 105, 262-267 (査読有) .
- 柚原雅樹・松田芳諒・平塚晃大・宮崎桂輔 (2010) 阿蘇-4火砕流堆積物中の火山ガラスと軽石の蛍光X線分析. 福岡大学理学集報, 40, 217-231.
- 柚原雅樹・加々美寛雄 (2010) 黒雲母の緑泥石化のRb-Srアイソクロン年代に与える影響-庵治花崗岩の例-. *MAGMA*, 92, 13-20.
- 柚原雅樹・小路泰之・石原与四郎・宇藤千恵 (2010) 那珂川上流, 五ヶ山地域の地球化学図. 福岡大学理学集報, 40, 45-70.
- 加々美寛雄・川野良信・今岡照喜・大和田正明・田結庄良昭・柚原雅樹 (2010) 花崗岩体のSr同位体比初生値の分布. *MAGMA*, 91, 31-50.

最近4年間の学術著書

- 田口幸洋: 第2章地熱資源の探査, 掘削, 評価, 2.1.2 地質学的手法, 日本地熱学会 地熱エネルギーハンドブック刊行委員会 (編), オーム社, 26～58. 2014年2月.
- 田口幸洋: 第2章(1) 地質的・地形的に見た地熱系と温泉との関係及び地熱徴候の特徴. 報告書 地熱発電と温泉利用との共生を目指して, 日本地熱学会 地熱発電と温泉との共生を検討する委員会, 3～11頁, 2010年5月.
- 田口幸洋: 地熱利用・開発の歴史. 日本地質学会 (編) 日本地方地質誌8, 九州・沖縄地方, 朝倉書店, 499-500. 2010年7月.

田口幸洋：地熱資源（高温地熱系と温泉）. 日本地質学会（編），日本地方地質誌8，九州・沖縄地方，朝倉書店，504-517，2010年7月.
最近4年間の学術国際会議での発表
国際会議ではないが外国の大学での講演 田口幸洋：Characteristics of Geothermal Resources in Japan. Guest Lecture for Studium Generale presentation at Padjadjaran University, Indonesia, 2012年3月
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
柚原雅樹：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「東南極に産する花崗岩類の精密解析による大陸衝突過程における火成活動の変遷解明」・代表・370万円（直接経費）・2013年度～2015年度
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
柚原雅樹：領域別研究チーム「プレート収束域の物質移動研究」・116.6万円・2010年度～2013年度（分担者：田口幸洋・杵山哲男・上野勝美・奥野 充・鮎澤 潤・石原与四郎・田上響）
最近4年間の学会等学術団体における役職など
田口幸洋：日本地熱学会 評議員（2010年～現在に至る）， 資源地質学会 評議員（2010年～現在に至る）
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
田口幸洋：阿蘇山西部地域の地下構造について，南阿蘇村阿蘇山西部地域地熱資源活用協議会，2014年3月17日 田口幸洋：温泉のでき方ー火山地域と非火山地域ー，熊本県温泉協会，2014年3月11日 柚原雅樹：石博士の30年の歩みと南極探検，袈裟丸福聚会ふるさと講演会，飛騨市，2012年8月14日
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
田口幸洋： 福岡県環境審議会委員 副会長，温泉部会長，2011年1月～現在に至る 財団法人 新エネルギー財団 平成23年度新エネルギー等導入促進基礎調査（地熱開発導入基盤整備調査）に係わる委員会 委員，2011年9月～2012年3月 公益財団法人 北九州生活科学センター 評議員選定委員会 委員，2012年6月～現在に至る 熊本県地熱・温泉熱研究会 アドバイザー，副会長，2012年7月～現在に至る 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 地熱資源ポテンシャル調査委員会委員，2012年10月～現在に至る 特定非営利活動法人 湯平温泉場活力創造会議 湯平温泉スマート・ホットスプリング・コミュニティ可能性調査検討委員会 委員，2012年12月～2013年3月 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 新人職員北薩現場研修講師，2013年5月 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 地熱貯留層評価・管理技術推進委員会 委員，2014年1月～2015年3月 熊本県南阿蘇村 南阿蘇村阿蘇山西部地域地熱資源活用協議会 委員，2014年1月～現在に至る

研究室名
環境進化学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>環境進化学研究室では、骨格を持つ造礁生物や脊椎動物を主な対象として、化石と現生生物の双方を扱い、過去から現在に至る生物とその生息環境の進化を研究している。アメリカ、カナダ、中国など、海外の化石標本を扱うとともに、国内では西南日本産の化石を中心に研究を進めている。また、古生物との比較のために、琉球列島のサンゴ礁環境における現生造礁生物や、脊椎動物骨格標本の観察も行っている。</p> <p>造礁生物の研究では、秋吉生物礁における堆積岩に記録された環境変動史の解読を進めており、時代境界の層位学的策定と、その前後での生物相や炭酸塩の同位体化学的変動を解析し、それらが汎世界的な温暖期から寒冷期への環境変化に呼応していることを明らかにした。</p> <p>古脊椎動物の研究は恐竜を主な対象としており、基盤的角竜類に見られる、より効果的かつ効率的な咀嚼器官への進化や、歯交換様式を解明した。また、北九州市の関門層群産の歯化石をこれまで未報告の角竜類のものと同定し、他の同層群産脊椎動物化石の同定を試みている。</p> <p>キーワード：進化・環境変動・造礁生物・石灰岩・古脊椎動物・骨格</p>
研究室の構成員
<p>杵山哲男（教授）・理学博士 田上 響（助教）・Ph.D.</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>修士課程1年次生：1名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北九州市の下部白亜系関門層群産脊椎動物化石の記載 <p>4年次生：8名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山口県秋吉台南台のペンシルバニア亜系下部から産出したサンゴ化石の種構成. ・秋吉台北東部から産出する単体サンゴ <i>Amygdalophyllum</i> 類の系統進化学的位置づけ. ・喜界島湾層から産出する単体六放サンゴ化石の骨格内部構造. ・喜界島で採集した現生セリオイド型群体サンゴの骨格の形態的特徴. ・The fragmentary long bone from the Lower Cretaceous Kanmon Group, northern Kyushu, southwestern Japan ・Fossil Cetacea (Mammalia) from the Ashiya Group, northern Kyushu, southwestern Japan ・Description of theropod teeth from the Upper Cretaceous Judith River Formation in Montana, USA ・Dinosaur long bone from the Lower Cretaceous Kanmon Group, northern Kyushu, southwestern Japan

教員の担当科目
<p>杵山哲男：(学部) 地学実験、地球環境進化学、地学実験「ナノサイエンスコース」、地球圏科学序論、応用地球圏科学、地球科学Ⅱ、地球環境進化学Ⅰ、地球環境進化学Ⅱ、地球科学野外演習、地球物質科学実験Ⅰ、地球物質科学実験Ⅱ、地球圏科学入門、地球圏科学入門「BB」、新しい地球観、博物館実習、卒業論文</p> <p>(大学院) 地球変動科学特論Ⅱ、地球変動科学実験、地球変動科学講究</p> <p>田上 響：(学部) 地学実験、地学実験「ナノサイエンスコース」、地球科学実験</p>
教員の所属学会
<p>杵山哲男：日本古生物学会、日本地質学会、日本サンゴ礁学会、日本洞窟学会、International Association for the study of Fossil Cnidaria and Porifera、The Paleontological Society、SEPM (Society for Sedimentary Geology)</p> <p>田上 響：日本古生物学会、日本地質学会、Society of Vertebrate Paleontology</p>
最近4年間の学術論文
<p>比嘉啓一郎，福山祐貴，関谷聖月，West, R. R., 長井孝一，杵山哲男 (2010) 沖縄県南部米須海岸における生きている化石 <i>Acanthochaetetes</i> (普通海綿綱) の生息状況. 福岡大学理学集報, 40 (2), 233-243. (査読有)</p> <p>Kido, E., and Sugiyama, T. (2011) Silurian rugose corals from the Kurosegawa Terrane, Southwest Japan, and their paleobiogeographic implications. <i>Bulletin of Geosciences</i>, 86 (1), 49-61. (査読有)</p> <p>Tanoue, K., Li, D., You, H. (2012) Tooth replacement pattern in maxillary dentition of basal Neoceratopsia. <i>Bulletin of the Kitakyushu Museum of Natural History and Human History Series A (Natural History)</i>, 10:123-127. (査読有)</p> <p>長谷川薫，武藤ゆう，魚川瞳，野中双葉，阿比留章子，佐藤もも，吉形花月，高司恵梨，宮東照，星木勇作，永石美晴，杵山哲男 (2014) 理系大学生の「書く力」を育成するために一理学部地球圏科学科の「理系こそ作文力」(福岡大学魅力ある学士課程教育支援プログラム) の取り組み例一. 福岡大学日本語日本文学, 第23号, 97-115 (査読なし).</p> <p>杵山哲男，長谷川薫，武藤ゆう，宮東照，魚川瞳，佐藤もも，吉形花月，高司恵梨，星木勇作，永石美晴 (2014) 理系導入科目としての「理系こそ作文力」プログラムの3年間の実践報告：アンケート調査からみた教育目標と教育効果の摺り合わせ. 福岡大学理学集報, 44 (1), 65-76 (査読有).</p>
最近4年間の学術著書
<p>杵山哲男，木戸絵里香, b. シルルーデボン系. 日本地質学会 (編), 日本地方地質誌8, 九州・沖縄地方, 240-243, 朝倉書店, 2010.</p> <p>杵山哲男，口絵6-2. 祇園山層から産出したシルル紀四放サンゴ化石. 日本地質学会 (編), 日本地方地質誌8, 九州・沖縄地方, 口絵6-2, 朝倉書店, 2010.</p> <p>Tanoue, K., You, H., Dodson, P., Mandibular anatomy in basal Ceratopsia. <i>New Perspectives on</i></p>

<p><i>Horned Dinosaurs: The Royal Tyrrell Museum Ceratopsian Symposium</i>. Ryan, M. J., Chinnery-Allgeier, B. J., Eberth, D. A. (eds.), Indiana University Press, pp. 234-250, 2010.</p> <p>Dodson, P., You, H., Tanoue, K., <i>New Perspectives on Horned Dinosaurs: The Royal Tyrrell Museum Ceratopsian Symposium</i>. Ryan, M. J., Chinnery-Allgeier, B. J., Eberth, D. A. (eds.), Indiana University Press, pp. 221-233, 2010.</p> <p>You, H., Tanoue, K., Dodson, P., A new species of <i>Archaeoceratops</i> (Dinosauria: Neoceratopsia) from the Early Cretaceous of the Mazongshan area, northwestern China. <i>New Perspectives on Horned Dinosaurs: The Royal Tyrrell Museum Ceratopsian Symposium</i>. Ryan, M. J., Chinnery-Allgeier, B. J., Eberth, D. A. (eds.), Indiana University Press, pp. 59-67, 2010.</p>
<p>最近4年間の学術国際会議での発表</p> <p>Tanoue, K. Basal neoceratopsian tooth from the Lower Cretaceous Kanmon Group in Kyushu, southwestern Japan and its paleobiogeographical implication. International Symposium on Asian Dinosaurs in Fukui, Fukui, Japan. 2014年3月</p> <p>Tanoue, K., Li, D., You, H. Tooth replacement pattern in maxillary dentition of basal Neoceratopsia (Ornithischia, Dinosauria). 73rd Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology, Los Angeles, California, USA. 2013年10月</p> <p>Konishi, T., Caldwell, M.W., Nishimura, T., Sakurai, K., Tanoue, K. A new halisaurine (Mosasauridae: Halisaurinae) material from northern Japan. 4th Triennial International Mosasaur Meeting, Dallas, Texas, USA. 2013年5月</p> <p>Tanoue, K. Depression of jaw joint in early evolution of ceratopsians. 71st Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology. Las Vegas, Nevada, USA. 2011年11月</p> <p>Higa, K., Sugiyama, T. Murakami, T. Biotic and Environmental change through the Mississippian-Pennsylvanian boundary in Panthalassan oceanic atoll, the Akiyoshi Limestone, SW Japan. International Congress on Carboniferous and Permian Stratigraphy 2011, Perth, Australia, 2011年7月</p> <p>Tanoue, K., Shimada, K., Rigsby, C., Nicholas, A. Jaw mechanics in lamniform sharks and its evolutionary implications. 70th Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology. Pittsburgh, Pennsylvania, USA. 2010年10月</p>
<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p> <p>杵山哲男, 2011年度~2013年度, 福岡大学魅力ある学士課程教育支援プログラム, 理工系学生のための基礎力パワーアッププログラム (代表: 横張文男), プログラムC (「理系こそ作文力」), 2011年度 1,106千円, 2012年度 1,439千円, 2013年度 1,415千円.</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>該当なし</p>

最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
渡辺浩・杵山哲男(2011) 東日本大震災復興支援における遠隔地の大学の災害ボランティア派遣の取り組み. 地域安全学会梗概集, 28号, 1-4. 杵山哲男(2012) ”For myself”から”For the others”へ—福岡大学派遣隊活動報告—. 大学時報, 342号, 54-59.
最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
杵山哲男: 阿蘇火山博物館, 2013年度科学技術振興機構科学技術コミュニケーション推進事業, 地球の歴史をかけぬけろっ!, 講師, 2013年8月10, 11日, 2014年1月26日実施.
その他特筆事項
該当なし

研究室名
地層・古生物研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>地層・古生物研究室では、地層記録に残された地質学的諸現象を層序学、堆積学、古生物学、地盤工学等の手法を用いて時系列的に解析し、その要因や背景を明らかにすることを目的として研究を行っている。このような手法・観点で得られた地質学的情報を基に、堆積盆の発達過程の検討、海水準変動の復元、有孔虫類の系統分類、地域地質や古生物地理を基にした東南アジア地域の中・古生代構造発達史、縞状堆積物に記録された情報解析、重力流堆積物の運搬・堆積様式の検討、ボーリングデータに基づく3次元地質モデルの構築等についての研究を行っている。主に対象としているのは、中・古生代の炭酸塩岩とそこから産する有孔虫類の分類・生層序・古生物地理、深海や湖成層などにみられる縞々の地層とそこから読み取れるリズムや地層の形成過程、および都市圏の地下地質である。本研究室の最近の研究では、南部中国の上部古生界浅海成炭酸塩岩の層序学的解析を行い、不整合や堆積相の変遷を基に南部中国において初めて氷室期型海水準変動により形成されたサイクロセムを報告した。この研究では、さらにフズリナ類による詳細な年代決定を基に、南部中国大陸基盤の構造運動変遷史を明らかにしている。また、ボーリングデータに基づく研究では、都市圏の浅層地下地質構造を明らかにするとともにその活用を検討した。</p> <p>キーワード：中・古生代有孔虫，古生物地理，氷室期型海水準変動，東南アジアの地質構造発達史，重力流堆積物，3次元地質モデル，年縞堆積物</p>
研究室の構成員
<p>上野勝美（教授）・学術博士 石原与四郎（助教）・博士（理学）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>D3：1名 タイ国北部ランパン層群の三疊系有孔虫生層序 D2：1名 南部中国揚子炭酸塩プラットフォームの石炭系堆積盆発達史と有孔虫群集変遷 M2：1名 秋吉石灰岩からのコア試料に基づく前期ペルム紀フズリナ群集および堆積相変遷 4年次生：5名</p> <p>南部北上帯岩井崎石灰岩の有孔虫生層序 ウクライナ，ドネツ炭田における Bashkirian–Moscovian 境界の有孔虫群集変遷 ウクライナ，ドネツ炭田における Moscovian–Kasimovian 境界のフズリナ群集変遷 湖成年縞堆積物に記録された環境変動—層厚の周期性とイベント頻度— 微小侵食地形形成過程における材質の影響の実験的研究</p>

教員の担当科目
<p>上野勝美：(学部) 地球変動科学Ⅰ、地球変動科学Ⅱ、地学A、地学B、地球科学実験、地学実験、地球科学野外演習、地球科学野外実習</p> <p>(大学院) 地球変動科学講究、地球変動科学実験、地球変動科学特論Ⅲ、地球変動科学特別研究</p> <p>石原与四郎：(学部) 地学実験、地球科学野外実習</p>
教員の所属学会
<p>上野勝美：日本地質学会，日本古生物学会，日本洞窟学会，米国古生物学会，米国 Cushman Foundation for Foraminiferal Research</p> <p>石原与四郎：日本地質学会，日本堆積学会，第四紀学会，日本洞窟学会，地盤工学会，情報地質学会，IAS，SEPM，IAMG</p>
最近4年間の学術論文
<p>Kamata, Y., Shirouzu, A., Ueno, K., Sardud, A., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Koike, T. and Hisada, K., in press. Late Permian and Early to Middle Triassic radiolarians from the Hat Yai area, southern peninsular Thailand: Implications for the tectonic setting of the eastern margin of the Sibumasu Continental Block and closure timing of the Paleo-Tethys. <i>Marine Micropaleontology</i>. (査読有)</p> <p>石原与四郎，宮崎友紀，江藤稚佳子，木村克己，2013，東京港湾地域のボーリング情報を用いた浅層3次元地質・地盤モデル．地質学雑誌，119，554-566．(査読有)</p> <p>Uchida, S., Kurisaki, K., Ishihara, Y., Haraguchi, S., Yamanaka, T., Noto, M., Yoshimura, K., 2013, Anthropogenic impact records of nature for past hundred years extracted from stalagmites in caves found in the Nanatsugama Sandstone Formation, Saikai, Southwestern Japan. <i>Chemical Geology</i>, 347, 59-68. (査読有)</p> <p>木村克己，花島裕樹，石原与四郎，西山昭一，2013，埋没地形面の形成過程を考慮したボーリングデータ補間による沖積相基底面モデルの3次元解析：東京低地北部から中川低地南部の沖積相の例．地質学雑誌，119，537-553．(査読有)</p> <p>石原与四郎，2013，地盤の3次元モデル化ー福岡平野を例としてー．地盤工学会誌，61，16-19．(査読有)</p> <p>吉村和久，内田章太，栗崎弘輔，石原与四郎，原口聡，山中寿朗，能登征美，2013，七釜鍾乳洞の石筍から明らかになった長崎県西海市の中浦地区の数百年間の土地利用変遷．月刊地球，35，628-635．(査読無)</p> <p>村上崇史，石原与四郎，藤川将之，無名穴学術調査団，2013，山口県秋吉台無名穴洞部テラスに認められるリムストーン充填層の堆積相．洞窟学雑誌，38，52-60．(査読有)</p> <p>田辺 晋，石原与四郎，2013，東京低地と中川低地における沖積層最上部陸成層の発達様式：“弥生の小海退”への応答．地質学雑誌，119，350-367．2013．(査読有)</p> <p>Wang, X. D., Qie, W. K., Sheng, Q. T., Qi, Y. P., Wang, Y., Liao, Z. T., Shen, S. Z. and K. Ueno., 2013. Carboniferous and Lower Permian sedimentological cycles and biotic events of South China. In, Gąsiewicz, A. and Słowakiewicz, M., eds., <i>Palaeozoic Climate Cycles: Their Evolutionary and</i></p>

- Sedimentological Impact. Geological Society, Special Publication*, vol. 376, 33-46. (査読有)
- Ueno, K., Hayakawa, N., Nakazawa, T., Wang, Y. and Wang, X., 2013. Pennsylvanian–Early Permian cyclothemic succession on the Yangtze Carbonate Platform, South China. In, Gąsiewicz, A. and Slowakiewicz, M., eds., *Palaeozoic Climate Cycles: Their Evolutionary and Sedimentological Impact. Geological Society, Special Publication*, vol. 376, 235-267. (査読有)
- Crippa, G., Angiolini, L., van Waveren, I., Crow, M. J., Hasibuan, F., Stephenson, M. H. and Ueno, K., 2013. Brachiopods, fusulines and palynomorphs of the Mengkarang Formation (Early Permian, Sumatra) and their palaeobiogeographical significance. *Journal of Asian Earth Sciences*, vol. 79, 206-223. (査読有)
- Hara, H., Kon, Y., Usuki, T., Lan, C. Y., Kamata, Y., Hisada, K., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Charusiri, P., 2013. U–Pb ages of detrital zircons within the Inthanon Zone of the Paleo-Tethyan subduction zone, northern Thailand: New constraints on accretionary age and arc activity. *Journal of Asian Earth Sciences*, vol. 74, 50-61. (査読有)
- 上野勝美・石原与四郎. 2013. 堆積盆の発達に関わる海水準変動の評価 (研究科特別経費 (研究科分, タイプ I) 研究成果報告). 福岡大学理学集報, 43 巻, 1 号, 111-124. (査読無)
- Yumi, M., Ishihara, Y. and Komatsubara, J. 2013, Digitalization of scallop-microtopography using soft-X ray images. *Journal of the Speleological Society of Japan*. (査読有)
- Nakazawa, T., Ueno, K. and Fujikawa, M., 2012. Middle Permian sponge–microencruster bioherms in the Akiyoshi Limestone, SW Japan. *Geological Journal*, **47**, 495-508. (査読有)
- Groves, J.R., Wang, Y., Qi, Y.P., Richards, B.C., Ueno, K. and Wang, X.D. 2012. Foraminiferal biostratigraphy of the Viséan-Serpukhovian (Mississippian) boundary interval at slope and platform sections in Southern Guizhou (South China). *Journal of Paleontology*, **86**, 753-774. (査読有)
- Ueno, K., Miyahigashi, A., Kamata, Y., Kato, M., Charoentitirat, T. and Limruk, S., 2012. Geotectonic implications of Permian and Triassic carbonate successions in the Central Plain of Thailand. *Journal of Asian Earth Sciences*, **61**, 33-50. (査読有)
- Hara, H., Kunii, M., Hisada, K., Ueno, K., Kamata, Y., Srichan, W., Charusiri, P., Charoentitirat, T., Watarai, M., Adachi, Y. and Kurihara, T., 2012. Petrography and geochemistry of clastic rocks within the Inthanon zone, northern Thailand: Implications for Paleo-Tethys subduction and convergence. *Journal of Asian Earth Sciences*, **61**, 2-15. (査読有)
- Kamata, Y., Maezawa, A., Hara, H., Ueno, K., Hisada, K., Sardud, A., Charoentitirat, T. and Charusiri, P., 2012. Basaltic activity preserved in an Upper Permian radiolarian chert from the Paleo-Tethys in the Inthanon Zone, northern Thailand. *Journal of Asian Earth Sciences*, **61**, 51-61. (査読有)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Kamata, Y., 2012. Foraminiferal assemblage and depositional environment of the Doi Long Formation (Triassic Lampang Group), Northern Thailand. *Acta Geoscientica Sinica*, **33**(Suppl. 1), 45-49. (査読無)
- 弓真由子・石原与四郎, 2012, 重力流堆積物基底の侵食痕の特徴化: 特にフルートマーク形成に関する流れの持続時間による影響. 堆積学研究, **71**, 173-190. (査読有)
- Ueno, K. and Charoentitirat, T., 2011. Carboniferous and Permian. In, Ridd, M.F., Barber, A.J. and Crow,

- M.J. eds., *Geology of Thailand*. Geological Society, London, pp. 71-136. (査読有)
- Ueno, K., Shintani, T. and Tazawa, J. 2011. A fusuline fauna from the basal part of the Sakamotozawa Formation in the Kamiyasse area, South Kitakami Belt, Northeast Japan. *Science Reports of Niigata University (Geology)*, No. 26, 23-41. (査読無)
- Nakazawa, T., Ueno, K., Kawahata, H. and Fujikawa, M. 2011. Gzhelian-Asselian *Palaeoaplysina*-microencruster reef community in the Taishaku and Akiyoshi limestones, SW Japan: Implications for the Late Paleozoic reef evolution on mid-Panthalassan atolls. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, **310**, 378-392. (査読有)
- 弓真由子・石原与四郎, 2011, 溶食痕の形成実験: 流速と持続時間による形態と分布パターンの変化. *洞窟学雑誌*, **36**, 61-73. (査読有)
- 内野隆之・上野勝美・桑原希世子. 2010. 新潟県蒲原山地の足尾帯海洋性岩石から見出された放射虫・紡錘虫化石. *地質学雑誌*, **116**, 118-123. (査読有)
- Ueno, K., Miyahigashi, A. and Charoentitirat, T. 2010. The Lopingian (Late Permian) of mid-oceanic carbonates in the Eastern Paleotethys: Stratigraphical outline and foraminiferal faunal succession. *Geological Journal*, **45**, 285-307. (査読有)
- Wang, Y., Ueno, K., Zhang, Y.C. and Cao, C.Q. 2010. The Changhsingian Foraminiferal fauna of a Neotethyan seamount: The Gyanyima Limestone along the Yarlung-Zangbo Suture in southern Tibet, China. *Geological Journal*, **45**, 308-318. (査読有)
- Shen, S.Z., Cao, C.Z., Zhang, Y.C., Li, W.Z., Shi, G.R., Wang, Y., Wu, Y.S., Ueno, K., Henderson, C.M., Wang, X.D., Zhang, H., Wang, X.J. and Chen, J. 2009. End-Permian mass extinction and palaeoenvironmental changes across the Permian-Triassic boundary in the oceanic carbonate section in Neotethys. *Global and Planetary Change*, **73**, 3-14. (査読有)
- Ueno, K., Miyahigashi, A., Kamata, Y., Kato, M., Charoentitirat, T. and Limruk, S. 2010. Triassic shallow-marine limestone in the Central Plain of Thailand: Its foraminiferal age and geotectonic implications. In, Lee, C.P., Ng, T.F., Teh, G.H. and Nor Liana Abd. Razak eds., *Proceedings of 6th Symposium of the International Geological Correlation Programme Project 516 (IGCP516): Geological Anatomy of East and South Asia, Kuala Lumpur, Malaysia*, pp. 37-39. (査読無)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T., Sera, Y., Kamata, Y. and Sardud, A. 2010. Late Carboniferous-early Permian foraminiferal assemblages from the Doi Chiang Dao Limestone in the Inthanon Zone, Northern Thailand. In, Lee, C.P., Ng, T.F., Teh, G.H. and Nor Liana Abd. Razak eds., *Proceedings of 6th Symposium of the International Geological Correlation Programme Project 516 (IGCP516): Geological Anatomy of East and South Asia, Kuala Lumpur, Malaysia*, pp. 94-98. (査読無)
- Hoshiki, Y. and Ueno, K. 2010. Middle-Upper Permian foraminiferal faunal succession of Panthalassan mid-oceanic carbonates in the Kamura area, Southwest Japan. In, Lee, C.P., Ng, T.F., Teh, G.H. and Nor Liana Abd. Razak eds., *Proceedings of 6th Symposium of the International Geological Correlation Programme Project 516 (IGCP516): Geological Anatomy of East and South Asia, Kuala Lumpur, Malaysia*, pp. 102-105. (査読無)

- Nemyrovska, T. I., Matsunaga, M. and Ueno, K. 2010. Conodont and fusuline composite biostratigraphy across the Bashkirian-Moscovian boundary in the Donets Basin, Ukraine: The Malo-Nikolaevka section. *Newsletter on Carboniferous Stratigraphy*, **28**, 60-66. (査読無)
- 上野勝美・横山嗣政・中澤努・藤川将之. 2010. 秋吉石灰岩中部ペルム系にみられる大規模干潟堆積物. 福岡大学研究部論集, C: 理工学編, **2**, 1-17. (査読無)
- 石原与四郎・中尾智子・佐々木泰典・弓真由子. 2010. 湖成縞状珪藻土に挟在される重力流堆積物—更新統野上層の例—. 福岡大学研究部論集, C: 理工学編, **2**, 19-33. (査読無)
- 小松原純子・木村克己・福岡詩織・石原与四郎, 2010, 沖積層ポーリングコア GS-SSS-1 (埼玉県さいたま市) の堆積相と堆積物物性. 堆積学研究, **69**, 3-15. (査読有)
- 田辺晋・中西利典・中島礼・石原与四郎・内田昌男・柴田康行, 2010, 埼玉県の中川開析谷における泥質な沖積層の埋積様式. 地質学雑誌, **116**, 252-269. (査読有)
- 田辺晋・石原与四郎・中西利典, 2010, 東京低地から中川低地にかけての沖積層の層序と物性—沖積層の2部層区分について—. 地質学雑誌, **116**, 85-98. (査読有)

最近4年間の学術著書

- 上野勝美: Carboniferous Carbonate Succession from Shallow Marine to Slope in Southern Guizhou (Wang, X.D., Qi, Y., Groves, J., Barrick, J., Nemyrovskaya, T.I., Ueno, K., Wang, Y. eds.), The SCCS Workshop on GSSPs of the Carboniferous System, Guidebook for Field Excursion, Nanjing Institute of Geology and Palaeontology, CAS, Nanjing, 149p., 2010年11月
- 上野勝美: フズリナ類 日本古生物学会編集「古生物学事典(第2版)」 朝倉書店 432-434頁 2010年6月
- 岡村行信, 尾崎正紀, 松本 弾, 西田尚央, 松島紘子, 木村克己, 中村洋介, 加野直巳, 駒澤正夫, 大熊茂雄, 花島裕樹, 水野清秀, 康 義英, 池原 研, 石原与四郎, 山口和雄, 上嶋正人, 中塚 正, 金谷 弘, 2013, 海陸シームレス地質情報集「福岡沿岸域」, 数値地質図, S-3 (DVD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター. (査読無)
- 水野清秀, 風岡 修, 田辺 晋, 宮地良典, 石原与四郎, 安原正也, 小松原純子, 中島善人, 小松原 琢, 石原武志, 稲村明彦, 吉田 剛, 香川 淳, 森崎正昭, 野崎真司, 菅野美穂子, 古野邦雄, 酒井 豊, 木村満男, 古賀千裕, 2013, 地形および地質学的手法による液状化調査, 地質調査総合センター速報「巨大地震による複合的地質災害に関する調査・研究中間報告」, No. 63, 179-231. (査読無)

最近4年間の学術国際会議での発表

- Ueno, K., Hayakawa, N., Nakazawa, T., Wang, Y. and Wang, X. D. Deducing subtle epeiric tectonism from shallow-marine stratigraphic record and fusuline biostratigraphy: A case for the late Paleozoic of the Yangtze craton. 2nd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Boracay, Phillipines (November, 2013)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T., Kamata, Y. and Sardud, A. Foraminiferal fauna and

- depositional environment of the Late Triassic Kang Pla Formation (Song Group), Northern Thailand. 2nd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Boracay, Phillipines (November, 2013)
- Kamata, Y., Kato, M., Ueno, K., Miyahigashi, A., Charoentitirat, T. and Sardud, A. Middle Triassic basalt-chert succession in the Chanthaburi area, Southeast Thailand. 2nd International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Boracay, Phillipines (November, 2013)
- Tanabe, S. and Ishihara, Y. Fluvial response to 3-2 ka sea-level lowering: an example of the latest Pleistocene to Holocene incised-valley fills in the Tokyo Lowland, central Japan. PAGES, Goa, India (February, 2013)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Kamata, Y. Foraminiferal assemblage and depositional environment of the Doi Long Formation (Triassic Lampang Group). 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Kamata, Y., Kato, M., Ueno, K., Miyahigashi, A., Charoentitirat, T. and Sardud, A. Middle to Late Devonian radiolarians from Klaeng of Rayong Province, Southeast Thailand. 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Kamata, Y., Hara, H., Ueno, K., Sardud, A., Charoentitirat, T., Charusiri, P., and Hisada, K. Middle and Late Permian radiolarians from allochthonous chert blocks in the Inthanon Zone, northern Thailand : Toward constraints for the formation age of mélangé fabric related to Paleo-Tethys subduction. 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Hara, H., Kunii, M., Hisada, K., Ueno, K., Kamata, Y., Charusiri, P. and Charoentitirat, T. Petrography and geochemistry of clastic rocks, U-Pb ages of detrital zircon from mélangé within the Inthanon Zone, Northern Thailand: Implications for Paleo-Tethys subduction and convergence. 1st International Symposium of IGCP589 (Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes), Xi'an, China (October, 2012)
- Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T. and Kamata, Y., Yakhtashian fusuline faunas from the Kiu Lom Formation in the Sukhothai Zone, Northern Thailand. International Conference on Tectonics of Northwestern Indochina, Chiang Mai, Thailand (February, 2012)
- Charoentitirat, T., Chanthaprasert, S., Ueno, K. and Chaimongkol, J., Late Paleozoic carbonates in Nan and Phrae provinces, Northern Thailand – Their foraminiferal faunas and geotectonic implications. International Conference on Tectonics of Northwestern Indochina, Chiang Mai, Thailand (February, 2012)
- Ueno, K., The Paleo-Tethyan mid-oceanic Doi Chiang Dao Limestone in the Inthanon Zone and its implication to the geotectonic subdivision of mainland Thailand. International Conference on Tectonics of Northwestern Indochina, Chiang Mai, Thailand (February, 2012) (Keynote)

- Yumi, M. and Ishihara, R., Spatio-temporal changes in distributional pattern of erosional marks on solutional substrate. 2011 PERC Planetary Geology Field Symposium - Kitakyushu, Japan (August, 2012)
- Ueno, K., Carboniferous–Permian biostratigraphic time-scales of Panthalassan and Paleo-Tethyan, mid-oceanic shallow-marine successions. 34th International Geological Congress, Brisbane, Australia (August, 2012) (Invited)
- Nakazawa, T. and Ueno, K., Evolutionary trend and turnovers of reef communities on Carboniferous–Permian Akiyoshi oceanic atolls. 34th International Geological Congress, Brisbane, Australia (August, 2012)
- Ueno, K. and Task Group, The Moscovian–Kasimovian and Kasimovian–Gzhelian boundaries — an overview and progress report. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Qi, Y., Wang, X., Barrick, J., Lambert, L., Richards, B., Groves, J., Ueno, K., Wang, X., Lane R, Wu, X. and Hu, K., Progress on the study of conodonts from candidate GSSPs for the bases of Carboniferous stages in South China. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Wang, Y., Wang, W., Cao, C., Shen, S. and Ueno, K., Recent progresses on the Upper Permian bouldoniids: their biostratigraphy and palaeogeography. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Hoshiki, Y., Ueno, K., Wang, Y., Qi, Y. and Wang, X., Carboniferous foraminiferal faunal succession of upper slope facies in the Yangtze Carbonate Platform: the Dianzishang section in Guizhou Province, South China. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Ueno, K., Hayakawa, N., Nakazawa, T., Wang, Y. and Wang, X., *Carbonoschwagerina* - mimics from the Zongdi section of South China: new relatives or homeomorphic strangers? XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Wang, X., Sheng, Q., Qi, Y., Wang, Y., Shen, S. and Ueno, K., The Carboniferous and Lower Permian of South China: sedimentologic cycles and biotic events. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Nakazawa, T., Ueno, K., Kawahata, H. and Fujikawa, M., Late Pennsylvanian to Middle Permian reef succession on Panthalassan oceanic atolls. XVII International Congress on the Carboniferous–Permian, Perth, Australia (July, 2011)
- Ueno, K., Miyahigashi, M., Kamata, Y., Kato, M., Charoentitirat, T. and Limruk, S., 2011. Geotectonic subdivision of the Central Plain of Thailand: A perspective from Permian and Triassic successions. Japan Geoscience Union Meeting 2011, International Symposium, Makuhari Messe (May, 2011)
- Ueno, K., Miyahigashi, M., Kamata, Y., Kato, M., Charoentitirat, T. and Limruk, S., 2010. Triassic shallow-marine limestone in the Central Plain of Thailand: Its foraminiferal age and geotectonic implications. 6th International Symposium of IGCP516 (Geological Anatomy of East and South Asia: Paleogeography and Paleoenvironment in Eastern Tethys), Kuala Lumpur, Malaysia (November,

2010)

Hoshiki, Y. and Ueno, K., 2010. Middle-Upper Permian foraminiferal faunal succession of Panthalassan mid-oceanic carbonates in the Kamura area, Southwest Japan. 6th International Symposium of IGCP516 (Geological Anatomy of East and South Asia: Paleogeography and Paleoenvironment in Eastern Tethys), Kuala Lumpur, Malaysia (November, 2010)

Miyahigashi, A., Ueno, K., Charoentitirat, T., Sera, Y., Kamata, Y. and Sardud, A., 2010. Late Carboniferous-early Permian foraminiferal assemblages from the Doi Chiang Dao Limestone in the Inthanon Zone, Northern Thailand. 6th International Symposium of IGCP516 (Geological Anatomy of East and South Asia: Paleogeography and Paleoenvironment in Eastern Tethys), Kuala Lumpur, Malaysia (November, 2010)

Ueno, K., Hisada, K., Ueno, K., Kamata, Y., Hara, H., Fujikawa, M., Kawamo, S., Charusiri, P., Charoentitirat, T. and Chutakositkanon, V., 2010. Paleomagnetic evidence for latitudinal change of the Indochina Block during the Late Paleozoic to Mesozoic. 6th International Symposium of IGCP516 (Geological Anatomy of East and South Asia: Paleogeography and Paleoenvironment in Eastern Tethys), Kuala Lumpur, Malaysia (November, 2010)

Hara, H., Kunii, M., Usuki, T., Lan, C.-Y., Kamata, Y., Ueno, K., Watarai, M., Hisada, K., Charoentitirat, T. and Charusiri, P., 2010. Provenance of sandstone related to Paleo-Tethys subduction in the Inthanon Zone of Northern Thailand; A prospect from geochemistry and U-Pb dating of detrital zircon. 6th International Symposium of IGCP516 (Geological Anatomy of East and South Asia: Paleogeography and Paleoenvironment in Eastern Tethys), Kuala Lumpur, Malaysia (November, 2010)

Kamata, Y., Maezawa, A., Ueno, K., Hara, H., Wakita, K., Hisada, K., Sardud, A., Charoentitirat, T. and Charusiri, P., 2010. Conformable lithological relationship between Upper Permian radiolarian chert and basaltic sandstone layers in the Inthanon Zone, Northern Thailand. 6th International Symposium of IGCP516 (Geological Anatomy of East and South Asia: Paleogeography and Paleoenvironment in Eastern Tethys), Kuala Lumpur, Malaysia (November, 2010)

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績

上野勝美：日本学術振興会・科研費・基盤（B）「パレオテチス収束域における島弧－縁海系の発達・崩壊過程に関する地質学的検証」・代表・1050万円（直接経費）・2013年～2015年

石原与四郎：平成24年度国土政策関係研究支援事業「地盤の3次元モデルの構築とその共有に関する研究－地盤・防災情報のユビキタス化－」・代表・125万円（直接経費）・2012年

上野勝美：研究寄付金・株式会社地球科学総合研究所「フズリナ化石による年代層序研究に対する助成」, 145万円, 2012年

上野勝美：研究寄付金・石油資源開発株式会社「古生代有孔虫研究奨励のための助成」, 45万円, 2011年

石原与四郎：受託研究「天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査（洞窟学・地質学・古生物学分野）」, 319万円, 2011年

石原与四郎：受託研究「天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査（洞窟学・地質学・古生物学分野）」, 589万円, 2010年

上野勝美：日本学術振興会・科研費・基盤（C）「上部石炭系年代層序境界モード地策定に向けたフズリナ生層序とサイクロセム対比の統合」・代表・350万円（直接経費）・2009年～2012年
 石原与四郎：日本学術振興会・科研費・基盤（C）「年縞堆積物に挟在される重力流の流動・堆積モデルと規制要因の研究」・代表・330万円（直接経費）・2009年～2011年

最近4年間の代表者としての学内資金導入実績

上野勝美：大学院高度化推進特別経費タイプI（学生分），「揚子炭酸塩プラットフォーム，石炭系堆積盆の発達過程と有孔虫群集変遷」・60万円・2013年（対象学生：星木勇作）
 上野勝美：大学院高度化推進特別経費タイプI（学生分），「タイ国北部ランパン層群に含まれる石灰岩の有孔虫群集と堆積環境の解明」・60万円・2012年（対象学生：宮東照）
 石原与四郎：推奨研究プロジェクト，「地質・言語情報の数値化・統計処理に関する研究」・144万円・2012年～2014年（分担者：乙武北斗）
 上野勝美：大学院高度化推進特別経費タイプI（研究科分），「堆積盆の発達に関わる海水準変動の評価」・402.2万円・2011年（分担者：石原与四郎）
 上野勝美：大学院高度化推進特別経費タイプI（学生分），「パレオテチス海山型石灰岩の石炭-ペルム系有孔虫群集変遷」・60万円・2010年（対象学生：Tin Tin Latt）

最近4年間の学会等学術団体における役職など

上野勝美：
 日本地質学会「地質学雑誌」編集委員，企画委員
 日本学術会議，地球科学惑星委員会 IUGS 分科会 ICS 小委員会委員（2012年12月～）
 日本学術会議，地球科学惑星委員会 IUGS 分科会 IGCP 小委員会委員（2012年11月～）
 Journal of Foraminiferal Research（米国），associate editor
 Research Unit on Earthquake and Tectonic Geology in Mainland Southeast Asia (EATGRU), Chulalongkorn University（タイ王国），海外研究アドバイザー
 Task Group to establish GSSPs at the Moscovian-Kasimovian and Kasimovian-Gzhelian boundaries (I.U.G.S. Subcommission on Carboniferous Stratigraphy), 委員長
 Task Group to establish a GSSP close to the existing Bashkirian-Moscovian boundary (I.U.G.S. Subcommission on Carboniferous Stratigraphy), 委員
 I.U.G.S. Subcommission on Carboniferous Stratigraphy, 投票権保有委員（～2012年8月）
 I.U.G.S. Subcommission on Permian Stratigraphy, 投票権保有委員（2012年8月～）
 IGCP589 “Development of the Asian Tethyan Realm: Genesis, Process and Outcomes” (UNESCO), プロジェクト代表（2012年～）

石原与四郎：
 日本堆積学会運営委員，行事委員長（2010年～2013年）
 地盤工学会九州支部「地盤情報データベースの防災および地盤環境への活用に関する研究委員会」（2010年～2012年）
 地盤工学会「全国電子地盤図の作成と利用に関する研究委員会」（2011年～2013年）
 日本洞窟学会事務局員，編集委員，評議員（2013年8月～）

最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など

平成24年度国土政策関係研究支援事業 研究成果報告書「地盤の3次元モデルの構築とその共有に関する研究―地盤・防災情報のユビキタス化―」。石原与四郎，86p. 2013. 査読なし

石原与四郎，2012，地質学・古生物学分野「七釜鍾乳洞」指定地とその周辺の地形と地質。西海市教育委員会編，西海市文化財調査報告書第1集，天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査報告書，22-60，西海市教育委員会。

石原与四郎，2012，洞窟学分野 七釜砂岩層に形成された洞窟。西海市教育委員会編，西海市文化財調査報告書第1集，天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査報告書，69-164，西海市教育委員会。

最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文

石原与四郎：
福岡県の平野部地下を構成する地盤の特徴，福岡地盤セミナー（2013年11月21日）
防災・減災への地盤情報データベースの応用―都市地盤のハザードの見える化へ―，第3回地盤情報DB講習会（2013年11月15日）

最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など

上野勝美：
大学入試センター試験出題委員（2011年～2012年度）
地学オリンピック日本委員会，福岡県コーディネーター

その他特筆事項

石原与四郎：天然記念物「七釜鍾乳洞」天然記念物緊急調査会議・委員（2009年～2011年度）
石原与四郎：西海市天然記念物七釜鍾乳洞保存管理計画策定委員会・委員（2012年度）
石原与四郎：福岡県「雨量通行規制見直し検討委員会」委員（2012年度～）

研究室名
行動生物学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>行動生物学研究室では、社会性昆虫であるミツバチのコロニー内でのコミュニケーション行動とその基盤となる神経機構について、行動観察および実験、学習実験、神経生理学的手法を使って研究を進めている。主な研究課題は尻振りダンスなどで巣仲間に蜜源情報として伝達される音や匂いの情報や採餌活動の調節に関与する振動情報の伝達過程や中枢での情報処理過程の解明である。音情報に関しては、受容器であるジョンストン器官の構造と中枢投射、および音刺激応答の一次介在ニューロンを同定し応答特性をすでに明らかにしており、匂いや他の機械感覚入力と関わりを含め更に情報処理経路を追跡している。また、匂い情報については、学習した匂いの刺激が受信者に特定の定位歩行パターンを誘発することを見いだしており、この歩行様式の経時変化について行動実験を進めている。振動情報であるパイピングシグナルの伝達に関しては、観察巣箱での終日記録により、既報よりも持続時間の非常に長いパイピングシグナル発信を確認しており、パイピングシグナル全体の発信特性による詳細分類と採餌活動とシグナル発信推移との関係を調べている。</p> <p>キーワード：ミツバチ、コミュニケーション、ダンス、嗅覚、聴覚、パイピング</p>
研究室の構成員
<p>伊東綱男（准教授）・理学博士 藍 浩之（助教）・博士（理学） 甲斐加樹来（博士研究員）・博士（学術）（受入期間：2012年10月～2014年3月）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>M2：1名 ミツバチでの学習した匂いにより誘発される歩行様式の経時変化</p> <p>4年次生：7名 ニホンミツバチの弁別学習率と歩行様式の季節比較 ミツバチの尻振りダンスコミュニケーションの観察：日齢に依存した行動の解析 ミツバチのジョンストン器官由来の中枢投射の定量的解析法の確立 セイヨウミツバチとニホンミツバチの触角葉の構造比較 ミツバチコロニー内でのパイピングシグナル発信推移の日間比較 ミツバチコロニー内でのパイピングシグナル受信個体の行動追跡 ミツバチでの音条件付けに対する先行振動刺激の影響</p>

教員の担当科目
伊東綱男（学部）動物生理学、行動生物学、ミクロの生物科学、マクロの生物科学、生物科学実験Ⅱ、生物学実験、卒業論文 （大学院）適応機能生物学講究、適応機能生物学実験、適応機能生物学特論Ⅰ、修士論文 藍 浩之（学部）生物学実験、生物学実験Ⅱ
教員の所属学会
伊東綱男：日本動物学会，日本比較生理生化学会 藍 浩之：日本動物学会，日本比較生理生化学会 甲斐加樹来：日本動物学会，日本比較生理生化学会
最近4年間の学術論文
（すべて査読有） Ikeno, H., Akamatsu, T., Hasegawa, H., <u>Ai, H.</u> (2014): Effect of the olfactory stimulus on the flight course of honeybee, <i>Apis mellifera</i> , in a wind tunnel. <i>Insects</i> , 5, 92-104; doi:10.3390/insects5010092 Rautenberg, P. L., Kumaraswamy, A., Tejero-Cantero, A., Doblender, C., Norouzzian, M., <u>Kai, K.</u> , Jacobsen, H-A, <u>Ai, H.</u> , Wachtler, T., Ikeno, H. (2014): NeuronDepot – Keeping your colleagues in sync by combining modern cloud storage services, the local system, and simple web applications. <i>Frontiers in Neuroinformatics</i> , 10.3389/fninf.2014.00055 <u>Ai, H.</u> , Hagio, H. (2013): Morphological analysis of the primary center receiving spatial information transferred by the waggle dance of honeybees. <i>J. Comp. Neurol.</i> 521, 2570-2584, doi: 10.1002/cne.23299. <u>Ai, H.</u> (2013): Sensors and sensory processing for airborne vibrations in silk moths and honeybees. <i>Sensors</i> 13, 9344-9363; doi: 10.3390/s130709344. Watanabe, H., <u>Ai, H.</u> , Yokohari, F., (2012): Spatio-temporal activity patterns of odor-induced synchronized potentials revealed by voltage-sensitive dye imaging and intracellular recording in the antennal lobe in the cockroach. <i>Frontiers in System Neuroscience</i> 6, doi: 10.3389/fnsys.2012.00055. <u>甲斐加樹来</u> , 岡田二郎: 自由歩行する昆虫から行動と神経活動を同時計測するための新たな実験システム, 比較生理生化学 29, 1, 18-25 (2012) <u>藍 浩之</u> : 昆虫は振動をどのように行動に利用しているのか? 日本神経回路学会誌 18, No. 2, 73-84, (2011). Sumiyoshi, M. Sato, S. Takagi, Y. Sumida, K. Koga, K. <u>Itoh, T.</u> Nakagawa, H. Shimohigashi, Y. Shimohigashi, M.: A circadian PDF in the honeybee, <i>Apis mellifera</i> : cDNA cloning and expression of mRNA. <i>Zoological Science</i> , 28(12): 879-909(2011) <u>Ai, H.</u> : Vibration processing interneurons in the honeybee brain. <i>Frontiers in Systems Neuroscience</i> , 3, 19, doi: 10.3389/neuro.06.019.2009 (2010) <u>Ai, H.</u> , Yoshida, A. and Yokohari, F.: Vibration receptive sensilla on the wing margins of the silkworm moth <i>Bombyx mori</i> . <i>Journal of Insect Physiology</i> , 56, 236-246 (2010)

最近4年間の学術著書

Ai, H. and Itoh, T., The Auditory System of the Honeybee. In “*Honeybee Neurobiology and Behaviors*. (Eds.: Eisenhardt, D., Galizia, C. G. and Giurfa, M.)” Chapter 4.3, 2nd ed. Springer Verlag, Berlin Heidelberg, Germany (2012)

藍 浩之: 「無脊椎動物の感覚・脳・行動の比較行動生理学 (ミツバチ関連のサイトへのデータ提供、学術記事の記載)」無脊椎動物脳データ、理化学研究所無脊椎動物神経系ニューロプラットフォーム http://invbrain.neuroinf.jp/modules/htmldocs/TVBPF/Bee/Bee_sensory_system.html 他14サイト。2012年12月Upload

岩崎雅行, 伊東綱男: 超音波や震動を感じる-昆虫の機械受容器の構造と機能 (江口英輔他, 編) -いろいろな感覚の世界-超感覚のしくみを探る- (学会出版センター) 第3章 pp45-65 (2010)

伊東綱男: 薬学を学ぶためのやさしい生物学 (高野行夫, 岩崎克典 編) 第4章, 第5章 pp49-74 (2010)

最近4年間の学術国際会議での発表

Ai, H., Kimura Y, Kanzaki R, Itoh, T., Haupt S Shuichi: Neuroethological analysis of vibration and olfactory processing related to in-hive communication of the honeybee. Potential of Insect Neuroscience, The 35th annual meeting of the Japan Neuroscience Society, Nagoya, Sept. 19, 2012.

Ai, H., Haupt SS, Rautenberg P, Stransky M, Wachtler T and Ikeno H Robust automated protocol for extraction and comparison of single neuron morphology. Neuroinformatics 2012 Muenchen, Germany, Sept 10-11, 2012.

Rautenberg P, Stransky M, Haupt SS, Ikeno H, Ai, H. and Wachtler T Morphological properties of neurons in the honeybee auditory system. Bernstein Conference 2012 Muenchen, Germany, Sept 12-14, 2012.

Ai, H., Kimura Y, Haupt SS, Kanzaki R, Ikeno H and Itoh, T. Two types of odor-triggered walking behaviors of honeybees controlled by classical olfactory conditioning. 8th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya, Japan, May 31-June 5, 2011

Kai, K. and Okada J: Locomotor-related spike activity of protocerebral neuron in freely walking crickets. 8th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya, Japan, May 31-June 5, 2011

Ai, H., Ikeno, H., Minemoto, T., Saitoh, A., Isokawa, T. Kamiura, N., Matsui, N. and Itoh, T. Modelling and comparative analysis of an identified vibration-sensitive interneuron of honeybee brain. Japan-Germany Joint Workshop on “Computational Neuroscience”. Onna, Okinawa, March 2-5, 2011.

Ai, H.: The Auditory System of the Honeybee. International Symposium in Honeybee Neuroscience, Berlin, June 10-13, 2010.

Ai, H., Ikeno, H. and Itoh, T.: Parallel processing in the auditory center of the honeybee brain. 9th International Congress of Neuroethology, Salamanca, Spain, 2010.(Supple. P. 391).

Akamatsu, T., Hasegawa, Y., Ai, H. and Ikeno, H.: Analysis of flight trajectory of honeybee (*Apis mellifera*) for the olfactory stimulus in a wind tunnel., 9th International Congress of Neuroethology, Salamanca, Spain, Aug. 2-7, 2010.(Supple. P. 510).

<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p> <p>藍 浩之：科学技術振興機構・戦略的国際科学技術協力推進事業・日本-ドイツ研究交流「ミツバチ聴覚情報処理の神経基盤～振動応答性ニューロンに対する計算神経科学アプローチ～」・代表・1,380万円（直接経費）・2012年度～2014年度</p> <p>藍 浩之：科研基盤（C）：ミツバチの尻振りダンス解読に関わる異種感覚統合機構の解明・代表・360万円（直接経費）・2010年度～2014年度</p> <p>藍 浩之：理化学研究所・プラットフォーム運用委員会・無脊椎動物脳プラットフォーム・分担・90万円（直接経費）・2010年度～2012年度</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p> <p>伊東綱男：福岡大学領域別研究チーム「昆虫適応機構研究」・105万円・2012年度～2014年度（分担者：藍 浩之）</p> <p>藍 浩之：福岡大学研究推進部推奨研究プロジェクト・「理工連携によるロボットを用いた社会性昆虫の通信機構の研究」・78万円・2012年度～2014年度</p> <p>藍 浩之：福岡大学領域別研究チーム「昆虫の社会行動に関わる脳機能の解析」・105万円・2009年度～2011年度（分担者：横張文男・西川道子・伊東綱男）</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>伊東綱男：日本比較生理生化学会評議員・2012年度</p> <p>藍 浩之：ニューロエソロジー談話会・世話人・2012年度～</p> <p>藍 浩之：日本比較生理生化学会・会計幹事・2004年度～2014年度</p> <p>藍 浩之：日本比較生理生化学会・将来計画委員・2007年度</p> <p>藍 浩之：日本比較生理生化学会・高校教科書問題検討委員長・2013年度～2014年度</p> <p>藍 浩之：生物科学学会連合・教科書問題検討委員・2013年度～2014年度</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書，行政報告書など</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p> <p>藍 浩之：福岡県高等学校生物部会 特別研修「新課程 生物において動物の行動をどう教えるか？」で講演（於福岡大学附属大濠高校）（2012年7月27日）</p> <p>藍 浩之：平成25年度福岡県高等学校生物部会・第2回若葉研修会「新課程生物における動物行動単元の展開について」で講演（於福岡リーセントホテル）（2013年5月18・19日）</p> <p>藍 浩之：サイエンス パートナーシップ プログラム（SPP・科学技術振興機構）「サイエンスキャンプ」（兵庫県立伊丹高校）で「動物の行動」の出張講義と実験の指導（2013年8月21日）</p> <p>藍 浩之：インスパイア・ハイスクール事業（兵庫県）で「サイエンスキャンプ：体験！環境科学の世界」（兵庫県立加古川南高校）の自然観察会、生物行動実験の指導（2013年8月22・23日）</p>

研究室名
進化脳科学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>進化脳科学研究室では、昆虫の行動の基盤となる脳機能の基本的設計を明らかにすることを目指して、電気生理学および組織学、解剖学的方法で、触角の嗅覚系の機能と嗅覚の情報処理機構の解明を課題として研究している。また、昆虫と哺乳類の嗅覚の一次中枢は極めてよく似た構造をもつ特徴を活かして、昆虫の嗅覚系の研究によって動物一般の匂い識別機構を解明することも目指している。本研究室の最近の研究では、ワモンゴキブリの嗅覚一次中枢である触角葉の匂い識別の単位である約 200 個の糸球体を形態学的に同定し、その内の一部の糸球体を機能的に同定することにも成功した。現在は、個々の糸球体に樹状突起をもつ二次嗅覚ニューロンの応答特性と高次中枢での投射部域との関係を調べている。また、触角葉では匂い刺激によって特定の糸球体に一定の周期で同期的電位が発生するが、この同期的電位の発生には触角葉局所介在ニューロンが深く関わっていることを明らかにした。社会性昆虫であるクロオオアリの働きアリ（雌）は体表物質の組成比の違いによって巣仲間と非巣仲間を識別しているが、この識別に関わる触角葉糸球体群は雌にだけあり、働きアリの前大脳キノコ体に巣仲間認識に関わる部域があることを発見した。従来はこの体表物質は揮発性物質からなると考えられてきたが、匂いとしても受容されていることを示す行動学的および電気生理学的な結果を得ており、その詳細な解明が今後の課題となっている。この研究に関連して膜翅目昆虫の脳構造の進化過程の解析の研究を始めた。また原始昆虫である無翅目昆虫を材料として嗅覚や湿度感覚の末梢および脳内での処理機構の進化過程の解析も始めた。</p> <p>キーワード：昆虫・脳の基本設計・嗅覚・湿度感覚・機械感覚・社会性昆虫・進化</p>
研究室の構成員
<p>横張文男（教授） 渡邊英博（助教） Thomas Carle（研究員：2011年11月～2012年10月、JSPS 外国人特別研究員：2012年11月～2013年10月、外国人研究員：2014年4月～2015年3月）</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>博士課程前期：2名 ワモンゴキブリ高次嗅覚中枢の標準脳への中大脳投射ニューロンの展開 クロオオアリの巣仲間認識に関わる感覚子の嗅応答の電気生理学的解析</p> <p>卒論生：5名 陸生甲殻類オカダンゴムシの湿度識別に関する行動学的解析 オオカマキリの口器感覚子の分類と分布 クロオオアリにおける下唇部進展反応の条件付けの確立 原始昆虫マダラシミの脳構造の解析 膜翅目昆虫の脳構造の進化過程の解析</p>

教員の担当科目
横張文男：(学部) 神経生物学、生物科学Ⅱ、マクロの生物科学、生物科学実験Ⅱ、生物学実験、卒業論文 (大学院) 適応機能生物学講究、適応機能生物学実験、適応機能生物学特論Ⅰ、修士論文 渡邊英博：(学部) 生物学実験、生物科学実験Ⅱ
教員の所属学会
横張文男：日本動物学会、日本比較生理生化学会 渡邊英博：日本動物学会、日本比較生理生化学会、国際神経行動学会 Thomas Carle：日本比較生理生化学会
最近4年間の学術論文
(すべて査読有) Watanabe H, Shimohigashi M, Yokohari F. (2014) Serotonin-immunoreactive sensory neurons in the antenna of the cockroach <i>Periplaneta americana</i> . <i>Journal of Comparative Neurology</i> 522:414-434. Carle T, Toh Y, Yamawaki Y, Watanabe H, Yokohari F. (2014). The antennal sensilla of the praying mantis <i>Tenodera aridifolia</i> : a new flagellar partition based on the antennal macro-, micro- and ultrastructures. <i>Arthropod Structure and Development</i> . 43: 103-116. Matsumoto, C. S., Kuramochi, T., Matsumoto, Y., Watanabe, H., Nishino, H., Mizunami, M. (2013) Participation of NO signaling in formation of long-term memory in salivary conditioning of the cockroach. <i>Neuroscience Letters</i> . 541: 4-8 Watanabe, H. H., Yokohari, F., (2012) Spatio-temporal activity patterns of odor-induced synchronized potentials revealed by voltage-sensitive dye imaging and intracellular recording in the antennal lobe of the cockroach. <i>Frontiers in System Neuroscience</i> . 6: 55 doi: 10.3389/fnsys.2012.00055 Watanabe, H., Haupt, S., Nishino, H., Nishikawa, M., Yokohari, F. (2012) Sensillum-specific, topographic projection patterns of olfactory receptor neurons in the antennal lobe of the cockroach <i>Periplaneta americana</i> . <i>Journal of Comparative Neurology</i> 520(8):1687-1701 Nishikawa, M., Watanabe, H., Yokohari, F. (2012) Higher brain centers for social tasks in worker ants, <i>Camponotus japonicus</i> . <i>Journal of Comparative Neurology</i> . 520:1584-1598 Nishino, H., Iwasaki, M., Yasuyama, K., Hongo, H., Watanabe, H., Mizunami, M. (2012) Visual and olfactory input segregation in the mushroom body calyces in a basal neopteran, the American cockroach. <i>Arthropod Structure and Development</i> 41(1):3-16. Matsumoto, C., S., Matsumoto, Y., Watanabe, H., Nishino, H., Mizunami, M. (2012) Context-dependent olfactory learning monitored by activities of salivary neurons in cockroaches. <i>Neurobiology of Learning and Memory</i> 97(1):30-36. Sakurai, T., Mitsuno, H., Haupt, S., S., Uchino, K., Yokohari, F., et al.(2011) A Single Sex Pheromone Receptor Determines Chemical Response Specificity of Sexual Behavior in the Silkworm <i>Bombyx mori</i> . <i>PLoS Genet</i> 7(6): 100211doi:10.1371/journal.pgen.1002115.

- Watanabe, H., Matsumoto, C., S., Nishino, H., Mizunami, M. (2011) Critical roles of mecaminylamine-sensitive mushroom body neurons in insect olfactory learning. *Neurobiology of Learning and Memory* 95(1):1-13.
- Watanabe, H., Nishino, H., Nishikawa, M., Mizunami, M., and Yokohari, F. (2010) Complete mapping of glomeruli based on sensory nerve branching pattern in the primary olfactory center of the cockroach *Periplaneta americana*. *Journal of Comparative Neurology*. 518: 3907–3930.
- Nakanishi, A., Nishino, H., Watanabe, H., Yokohari, F., Nishikawa, M. (2010) Sex-specific antennal sensory system in the ant *Camponotus japonicus*: glomerular organizations of antennal lobes. *Journal of Comparative Neurology*. 518:2186–2201.
- Yanagawa, A., Yoshimura, T., Yanagawa, T., Yokohari, F. (2010) Detection of a humidity difference by antennae in the termite *Coptoermes formosanus* (Isoptera: Rhinotermitidae) *Sociobiology*, 56/1,255-269.
- Ai, H., Yokohari, F. (2010) Vibration receptive sensilla on the wing margins of the silkworm moth *Bombyx mori*. *Journal of Insect Physiology*, 56/3, 234–246.

最近 4 年間の学術著書

- Mizunami M., Matsumoto Y., Watanabe H., Nishino H. (2013) *Invertebrate learning and memory*. Elsevier 549-560
- 渡邊英博 (2013) ワモンゴキブリの末梢から高次中枢までの嗅覚情報処理機構 比較生理生化学 30, 89-105.
- 渡邊英博：研究者が教える動物飼育 『第2巻 昆虫とクモの仲間』 59 ワモンゴキブリ 日本比較生理生化学会編集 共立出版 47～47頁 2012年5月
- 渡邊英博:「ワモンゴキブリの嗅覚系」無脊椎動物脳データ、理化学研究所無脊椎動物神経系ニューロプラットフォーム
http://invbrain.neuroinf.jp/modules/htmldocs/IVBPF/Cockroach/Cockroach_antenna.html 2012年12月Upload

最近 4 年間の学術国際会議での発表

- Watanabe, H., Nishikawa, M., Yokohari, F. Higher brain centers for social behaviors in the ant *Camponotus japonicus*. *Evolutionary and Behavioral Neuroscience Workshop*. Hayama. 2012年7月
- Watanabe, H. Neural basis of general odor processing in the cockroach antennal lobe. 8th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya. 2011年6月
- Watanabe, H., Ai, H., Yokohari, F. Odor-induced spatio-temporal activity patterns of synchronized potentials mediated by local interneurons in the cockroach antennal lobe. 8th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya. 2011年6月
- Watanabe, H., Nishino, H., Nishikawa, M., Yokohari, F. Dual pathways to process general odors in the cockroach brain. The 9th Congress of the International Society for Neuroethology. Spain. 2010年8月

<p>最近4年間の代表者としての学外資金導入実績</p> <p>横張文男：日本学術振興会・科研費・戦略的萌芽研究「昆虫における機械感覚器から湿度感覚器への進化に関する神経生物学的研究」・代表・(分担者：渡邊英博)・320万円(直接経費)・2013年～2015年</p> <p>渡邊英博：日本学術振興会・科研費・研究活動スタート支援「社会性昆虫クロオオアリを用いた巣仲間識別機構の神経科学的解析」・代表・240万円(直接経費)・2012年～2013年</p> <p>Thomas Carle：日本学術振興会・外国人特別研究員・「捕食者による忌避学習の神経基盤：異種感覚情報の統合機構」・972,000円・2012年11月～2013年10月</p> <p>横張文男：日本学術振興会・科研費・基盤研究(C)「昆虫の湿度感覚に関する前大脳高次情報処理についての生理学的形態学的研究」・代表・360万円(直接経費)・2010年～2012年</p> <p>渡邊英博：日本学術振興会・科研費・特別研究員奨励費「昆虫の脳内での感覚情報の統合・処理機構の解析」・代表・280万円(直接経費)・2010年～2012年(2011年度で就職による途中辞退)</p> <p>渡邊英博：日本学術振興会・科研費・若手スタートアップ「昆虫の高次脳中枢における温度・湿度情報処理機構の解析」・代表・212万円(直接経費)・2009年～2010年</p>
<p>最近4年間の代表者としての学内資金導入実績</p> <p>横張文男：福岡大学大学院理学研究科高度化推進事業タイプI・「社会性昆虫クロオオアリの体表揮発性物質およびフェロモン等の化学的同定とそれを受容する感覚子の電気生理学的同定」・代表・(分担者：渡邊英博・Thomas Carle)・458.5万円・2012年</p> <p>横張文男：学部長預り金・「昆虫における嗅覚系入力による行動発現とその神経機構の解析」・347,812円・2012年</p> <p>横張文男：学部長預り金・「昆虫の嗅覚系を中心とした触角感覚器の応答スペクトラおよび触角系感覚情報の脳内情報処理神経回路に関する電気生理学的研究」・313,425円・2011年</p>
<p>最近4年間の学会等学術団体における役職など</p> <p>横張文男：日本動物学会九州支部委員、日本比較生理生化学会評議員</p> <p>渡邊英博：日本比較生理生化学会行事委員、同吉田奨励賞審査委員、同若手の会幹事</p>
<p>最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の一般(非学術)集会での発表論文</p> <p>該当なし</p>
<p>最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など</p> <p>該当なし</p>
<p>その他特筆事項</p> <p>渡邊英博：吉田奨励賞受賞「ワモンゴキブリ触角葉における嗅覚情報処理機構の解析」日本比較生理生化学会第34回大会、葉山(神奈川)、2012年7月</p> <p>横張文男：吉田記念賞(学会賞)受賞「On hygro- and thermoreception of insects」日本比較生理生化学会第35回大会、姫路(兵庫)、2013年7月</p>

研究室名
細胞生物学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>動物の体を構成する細胞は、その生理活性に応じて様々な基質に接着し移動します。特に神経細胞は、神経突起を細胞体から標的細胞まで伸長させるため、細胞運動研究の良いモデル系です。私たちはショウジョウバエ神経細胞の分化培養系を新規に確立し、アクチン繊維の動態とその制御機構を解析しています。これまでに、神経突起の伸長に成長円錐構造は必須ではないことを明らかにしました。確立したショウジョウバエ神経細胞の分化培養系を用いて、化学物質が神経突起伸長に与える影響の解析も行っています。その結果、現在の環境排出基準で神経突起伸長に影響を与える物質を明らかにしています。</p> <p>また、神経細胞をもつ最も祖先的な動物であるヒドラを用いて、神経細胞の基本形質を探る研究も開始しました。</p> <p>神経細胞は神経突起を介してネットワークを形成し、情報処理や概日リズムの生成を行います。そのしくみを知るために、昆虫を用いて外部情報を受容する触角や中枢神経ネットワークの構造を解析しています。これまでに、概日リズム生成に関与する神経伝達ペプチドの発現について新たな知見を得ています。</p> <p>キーワード： 神経細胞、細胞骨格、神経回路、アロメトリー</p>
研究室の構成員
<p>中川裕之（教授）・博士（理学）</p> <p>岩崎雅行（助教）・理学博士</p> <p>下東美樹（教育嘱託）・理学博士</p>
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>大学院生（修士課程2名）</p> <p>研究テーマ：ショウジョウバエ株化神経 BG2-c6 の神経分化における <i>singed</i> 遺伝子の発現変動解析、ショウジョウバエ株化神経 BG2-c6 の神経分化における遺伝子発現変動の網羅的解析</p> <p>卒論生5名</p> <p>研究テーマ：単離ヒドラ神経細胞から伸長した神経突起の動態、昆虫の PDF 遺伝子にコードされた PAP ペプチドの機能、キアゲハのキノコ体の構造、ツヤケシオオゴミムシダマシ幼虫の脳の構造、ツヤケシオオゴミムシダマシ幼虫触角の感覚子の微細構造</p>
教員の担当科目
<p>中川裕之：(学部) 生物科学 I、生物学A、生物科学、ミクロの生物科学、マクロの生物科学、構造生物学、生物科学実験 I、生物学実験、卒業論文</p> <p>(大学院) 適応構造生物学講究、適応構造生物学実験、適応構造生物学特論 I、適応構造生物学特別研究 I～VI、修士論文</p> <p>岩崎雅行：(学部) 生物学実験、生物学実験 I</p> <p>下東美樹：(学部) 生物学A、生物学実験、生物学実験 I</p>

<p>教員の所属学会</p> <p>中川裕之：日本細胞生物学会、日本生化学会、生物物理学会 岩崎雅行：日本動物学会、日本比較生理生化学会、日本顕微鏡学会 下東美樹：日本動物学会、日本比較生理生化学会、日本生化学会、日本ペプチド学会、日本環境ホルモン学会</p>
<p>最近4年間の学術論文</p> <p>(すべて査読有)</p> <p>H. Nakagawa, K. Matsushima, M. Iwasaki, M. Shimohigashi, K. Tokuraku, and S. Kotani (2013) Deletion in the Pro-rich Region of Microtubule-associated Protein 4 Influences Its Distribution. <i>Fukuoka University Science Reports</i> 43: 67-72.</p> <p>M. Sumiyoshi, S. Sato, Y. Takeda, K. Sumida, K. Koga, T. Itoh, H. Nakagawa, Y. Shimohigashi, M. and M. Shimohigashi (2011) A Circadian Neuropeptide PDF in the Honeybee, <i>Apis mellifera</i>: cDNA Cloning and Expression of mRNA. <i>Zool. Sci.</i> 28:897-909.</p> <p>Morita H., Ando S., Okuma K., Nagahora N., Aizawa Y., Fukuda M., Nakagawa H. and Shioji K. (2011) Intracellular molecular dynamics of N-terminal motif of myristoylated peptide. <i>Peptide Science</i>: 309-312.</p> <p>M. Tominaga, E. Nishihara, T. Oogami, M. Iwasaki, Y. Takagi, M. Shimohigashi and H. Nakagawa (2010) Neurite elongation from <i>Drosophila</i> neural BG2-c6 cells stimulated by 20-hydroxyecdysone. <i>Neurosci. Lett.</i> 482: 250-254.</p> <p>K. Shioji, Y. Oyama, K. Okuma and H. Nakagawa (2010) Synthesis and properties of fluorescence probe for detection of peroxides in mitochondria. <i>Bioorg. Med. Chem. Lett.</i> 20: 3911-3915.</p>
<p>最近4年間の学術著書</p> <p>K. Tokuraku, K. Matsushima, H. Nakagawa and S. Kotani. (2011) Microtubule-associated protein 4. In: R. A. Nixon, A. Yuan (Eds) <i>Cytoskeleton of the Nervous System, Advances in Neurobiology</i> 3: 151-166.</p>
<p>最近4年間の学術国際会議での発表</p> <p>M Shimohigashi, M Sumiyoshi, A Furukawa, A Matsushima, Y Shimohigashi, H Nakagawa. Effects of Bisphenol A-exposure on the gene expression of culture neuron BG2-c6. International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya May 2011</p> <p>A Matsuo, M Nakamura, K Koga, M Sumiyoshi, A Matsushima, M Shimohigashi, Y Shimohigashi. Bisphenol A-feeding differentiates to breed hyperactive fruit flies having PERIOD isoform with shortened Gly-Thr repeat. International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry. Nagoya May 2011</p> <p>M Sumiyoshi, Y Takeda, S Sato, K Koga, I Tsunao, H Nakagawa, Y Shimohigashi, M Shimohigashi. <i>Apis pdf</i> gene expresses in circadian manner. 5th International Peptide Symposium Kyoto Dec.2010</p> <p>K Koga, M Nakamura, M Sumiyoshi, A Mastumoto, M Shimohigashi, Y Shimohigashi. <i>Drosophila</i> neuropeptide <i>hug</i> γ present in the clock cells important for circadian rhythm oscillation. 5th International Peptide Symposium Kyoto Dec.2010</p>

最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
中川裕之：日本学術振興会・科研費・基盤研究（C）「鉄貯蔵タンパク質フェリチンの集合体形成と細胞内輸送の制御機構」・代表・380万円（直接経費）・2009年度～2011年度
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
該当なし
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

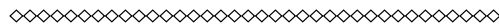
研究室名
発生生物学研究室
最近の研究課題とその取り組みの概要
<p>両生類初期胚のパターン形成、つまり胚の3次元構造がどのように形成されるかを研究しています。胚の細胞の運命は1個1個の細胞が自分勝手に決めるわけではありません。胚全体の中での部分として、それぞれの細胞の運命は決定されます。人間を含めた脊椎動物の体は、背中に神経系と背骨、腹側に内臓とそれらを囲む筋肉という基本設計をもとに作られます。私達は、アフリカツメガエル胚を用いて、この基本設計がどのように出来るかを研究しています。特に背腹軸の“背”の決定に注目しています。カエルの未受精卵には上下軸はありますが、まだ背腹軸はありません。背腹軸は受精直後の卵の表層回転によって、植物極表層細胞質にある背決定因子が将来の背側に移動することで決定されます。この因子の実体や作用は未だ不明のまま残されています。</p> <p>また、蝶の翅の紋様形成について研究を進めています。蝶の翅は肢原基の背側の突起として出現し、進化しました。翅は昆虫に飛翔という革命をもたらしたが、その表面のカラーパターンは配偶行動における雌雄の認識、捕食者に対する警告や隠遁といった新奇な役割を得ました。翅の紋様は多種多様であります。基本のパターンが存在し、その基本から派生するバリエーションとして多種多様なパターンが出来上がると推定されます。実験データをもとに、翅のカラーパターンの形成機構をモデル化したいと考えています。</p> <p>キーワード：アフリカツメガエル・蝶・パターン形成・背腹軸・調節・紋様</p>
研究室の構成員
景浦 宏 (教授)・理学博士 古賀正明 (助教)・理学博士
2013年度の大学院生および卒論生の人数と研究テーマ
<p>大学院生 0名 卒論生数 6名</p> <p>ホソオチョウ蛹における翅原基の焼灼による翅模様変異の作成と斑紋解析 クロアゲハ赤色紋拡大型突然変異の解析 ホソオチョウ蛹へのヘパリン注入による紋様変異の観察 アフリカツメガエル 16細胞期半胚の背側2列目割球子孫の体節内分布 アフリカツメガエル 16細胞期半胚における予定腹側中央割球の運命 ジャコウアゲハ蛹へのデキストラン硫酸注入による紋様変異</p>
教員の担当科目
<p>景浦 宏：(学部) 発生生物学、分化と教育、形態形成制御学、ミクロの生物学、マクロの生物科学、生物学A、地球圏科学序論、生物学実験、生物科学実験Ⅰ、卒業論文</p> <p>(大学院) 適応構造生物学講究、適応構造生物学実験、適応構造生物学特論Ⅱ、修士論文</p> <p>古賀正明：(学部) 生物学実験、生物学実験Ⅰ</p>
教員の所属学会
<p>景浦 宏：日本発生生物学会</p> <p>古賀正明：日本発生生物学会、日本動物学会</p>

最近4年間の学術論文
Koga, M, Nakashima, T., Matsuo, S., Takeya, R., Sumimoto, H., Sakai, M., Kageura, H. (2012). High cell-autonomy of the anterior endomesoderm viewed in blastomere fate shift during regulative development in the isolated right halves of four-cell stage <i>Xenopus</i> embryos. <i>Dev Growth Differ</i> 54, 717-729. (査読有)
最近4年間の学術著書
該当なし
最近4年間の学術国際会議での発表
該当なし
最近4年間の代表者としての学外資金導入実績
該当なし
最近4年間の代表者としての学内資金導入実績
景浦宏：領域別研究 理工学・生命科学研究部 「神経・筋肉系応答における細胞シグナルの研究」・32.7万円・2012年（分担者：古賀正明）
最近4年間の学会等学術団体における役職など
該当なし
最近4年間の一般向け論文と著書、行政報告書など
該当なし
最近4年間の一般（非学術）集会での発表論文
該当なし
最近4年間の学術団体以外の団体での啓蒙活動や社会貢献活動とその役職など
該当なし
その他特筆事項
該当なし

編集後記

『理学部・理学研究科の年報2013』の編集については、編集委員の先生方や事務室長はじめ教員や関係者の皆様方には多大なご協力をいただきました。本年報は理学部ホームページにpdf版で掲載するとともに、ISSN日本センター（国立国会図書館）に登録し、学内のみならず学外の方々も閲覧できるようにしました。本年報が理学部・理学研究科の2013年度の教育・研究活動を俯瞰し、今後の改善・改革に役立ち、また共同研究などの可能性を探る上でも大いに役立つことを願っています。

（2014年10月31日 山口敏男 記）



編集委員

山口 敏男（理学部長）
西田 昭彦（理学研究科長）
田中 勝（応用数学科）
御園 雅俊（物理科学科）
寺田 成之（化学科）
林 政彦（地球圏科学科）
溝口 政光（理学部事務室長）